黙々・恋姫†無双

TAPEt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黙々・恋姫†無双

【Ｎコード】
Ｎ７４０３Ｗ

【作者名】
ＴＡＰＥｔ

【あらすじ】
悲しみを背負った子供、ある管理者に出会ってから、物語は始まった。

一黙

荒野、

そうとしか言えない広い地に、主人公、北郷一刀ちゃん（9）は立っていました。

「…？？」

キョトンとなって首を傾げる一刀ちゃんですが、状況を把握できそうな物はどこにもありません。

今日は学校でせっかく友たちから野球にサッカーに誘われて、ゴールキーパという重要役を任されちゃって、一生懸命ゴール台守っていました。

そしたら、何か真正面に立っている子（サッカー部所属の）がおもいがけなかったダイレクトアタックをかけてきてそのボールが顔面に当たって……

ああ、それ見事なシュートでしたね。

とても小学生のあれとは思いませんでした。

とにかく、

「……」

まだ顔が赤くなっている一刀ちゃん。周りを見回ってみます。

荒野です。

学校のグラウンドも芝生もないし、砂と石しかありませんが、鉄棒やジャングルジムとか後ろにあったはずのゴール台がありません。

そして何より、

学校の建物が見当たりません

…

はい、決して学校ではないですね。

一刀ちゃん、知らないうちに知らない場所に来てしまいました。

大変なことになっちゃいましたねー

「…？」

あ、はいはい、僕ですか？

僕はただの作者です。

これからさっちゃんって呼んでください？

「……」

はい、すみません調子に乗りました。

えぇと…とりあえずお詫びにあめをあげましょう。

ざぁああーーーー

「！！」

あっ！ごめんなさい、雨じゃなくて飴です。

たったったったったっ

「！？！」

いや、飴を雨のように降り注ぐのでもありません！何やってるんですか、一刀ちゃん痛がってるでしょう！？

「……？？」

もうわけが解らなくなっちゃった一刀ちゃんです。本当にごめんなさい。

「……」

あ、飴舐めるんですね。

落ちた飴の中の一つを取って口に入れました。

「…！（ニパーッ）」

あ、開き直りました。気に入ったみたいです。

雨のように降り注ぎましたので、もっと取ってズボンのボケッとが外でみて膨らむほどたくさん入れました。

お欲張りさんで…いえ、子供だから飴が好きなのは当然ですね。

「…」

え？ああ、私もですか？ありがとうございます。解説の邪魔になりますから、食べるのは少し後に…

「……（むっ）」

あ、…は、はい、解りました。食べます。うぅ……甘いです。

ちょっと、食べ終わるまでカットしてくれますか？

＞pf＜

さて、ここはどこかというとですね。

「？？」

知ってるの？って顔ですね。はい、知ってます。だって作者ですからね。何でも知ってますよ？

「（キラキラ）」

あ、いや、そんなキラキラな瞳で見られたら照れちゃいますよぉ……

ここは陳留から十里ぐらい離れているところにある荒野ですね。

「？？？」

あ、良くわからないって顔していらっしゃる。

えぇっとですね…

「おいよ、そこのお前」

うん？この人たちは誰ですｋってうわあっ！大変です！この人たちは…！

「？？」

「子供がこんなところで一人でうろちょろしてよぉ」

「……」

一刀ちゃん、そこから早く逃げるんですよ。その人たちは所謂「三馬鹿」と言われる……

「兄貴、そんなちびはほおっておいて行こうよ」

そこ、チビはあんたでしょう？

「まぁ、待ってみろよ。このガキ、服が何かすげぇじゃねぇか？」

「おお、そういえばそうですね。何かぴかぴかしていて」

一刀ちゃんが着ている服は聖フランチェスカ学園初等部の制服です。

すごく日差しを浴びたら、キラキラします。

あれ？でも何でサッカーをしていたはずなのに制服なんでしょうかね？

「きっとどっかの大金持ちの息子だろ。捕まえて親に金を出せとしたら…」

「なるほどー！さすが兄貴！」

「なすがなんだな」

大変です。このままだと、一刀ちゃんが誘拐されちゃいますよ。一刀ちゃん、早く逃げて。

「……？」

何で沸け解らないって顔って立っているの、この子は？

一刀ちゃんとお母さん？子供の教育ができていません！自分の安全をはかっていません、この子！

「大人しく俺たちと一緒に行くんだな……」

あっ、デブが一刀ちゃんに手を…！

って、あれ？

「！？」

「馬鹿、なにやってるんだ、お前ぇは！」

「おかしいんだな」

デブが捕まえようとした一刀ちゃんは、デブの手がある一足先に立っていました。

「大人しく捕まるんだな」

「…」

「！？」

またです。

デブが捕まろうとしたら、いつの間にかそのちょっとだけ先にたっています。

「おい、どうなってんだ！」

「わ、解らないんだな」

「ええい、退け、俺がやる」

兄貴さんが一刀ちゃんを捕まろうとしますけど、

「……」

一刀ちゃんは口の中で飴を転がしながら、なんともないように立っています。

兄貴さんの目の前に、捕まらずに。

「な、何だこれは」

「兄貴、何かおかしいぜ？」

「怖いんだな」

チビとデブは、まるで一刀ちゃんを化け物や幽霊を見るようにして怯えていました。

「そ、そうだな。ここは…」

兄貴さんもちょっと怖いように逃げようとしましたが、

「まてぃ！」

＞pf＜

「こ、今度はなんだ？」

あ、あの人は、

「子供一人を相手に三人で襲い掛かるとは、言語道断！」

わーい、白い袖をなびきながら現れた女性、その姿まるで一匹の蝶！！変態ですけど

そうです。この人こそ、常山の昇り竜、趙雲さんです！変態ですけど

「ま、待てくれ！俺たちはもう…」

「問答無用！」

すさっ！

「「「うわあああぁぁぁっ！！」」」

わあ、星になっちゃいました。

あんなのができるのって、どこかの服にR文字をしている人たちと猫ちゃんしかできないのだとばかり思っていましたよ！

「……」

「大丈夫か？」

趙雲さん、一刀ちゃんに近づいています。

逃げて、一刀ちゃん、その人は別の意味で危険だよー。

「……」

ってまた何の反応もしないし…もう僕の声聞こえないんでしょうか。

「ふむ、どうやら驚いて言葉が出ないようだな」

まぁ、どの意味あってますけどね。

「大丈夫ですかー」

あ、また一人来ました。

何か眠たそうな顔をしているこの人。名前は程立。

「怪我はないか？」

もう一人の人は眼鏡をした、右腕の骸骨の飾りがとっても似合わない人、名前は郭嘉です。

「……」

二人追加されたものの一刀ちゃんは反応なし。

あ、何かしてます。

ポケットの中から…

「うむ？」

「……」

あ、先ポケットに入れといた飴を一つ趙雲さんに差し出しました。

ありがとうという意味なんですね、解ります。

「……」

「くれるのか？」

「…（こくっ）」

おおっ！何か頷いた！すごい！

「なんですかー？風にもくださいよー」

「あなたはもう大きいの持ってるでしょ？」

後ろで見ていた程立さん物欲しそうな目で見ていますが、程立さんその口についているものがなんでいらっしゃいますでしょうか？

「稟ちゃんは要らないそうですから、風が代わりにとってあげるのですよー」

「子供はあげる気もなさそうなのに勝手なこと…うん？」

「……」

おおっ！後ろでの話を聞いて一刀ちゃん、二人にも一つずつ飴を勧めました。

「ありがとうございますー」

「い、いや、私は…」

「…（むっ）」

とらない郭嘉さんに向かって更に一歩近づく一刀ちゃん。

郭嘉さん、それはとらないとダメですよ。私ももらっちゃいましたから。

「ど、どうも……」

仕方なさそうに飴をもらう郭嘉さんです。

＞ｐｆ＜

「……」

三人が飴をもらって食べてる間、一刀ちゃんはなにもそれをじっと見ているだけでした。

飴はもっと残ってるんですが食べません。

一日に飴は一つずつ。一刀ちゃんとお母さんとの約束です。

それも、食べてから直ぐに歯磨きをするっていう条件ですが、残念ながら今はブラシがありません。

「ふむ、怪我はなさそうだが、精神的が衝撃があるようだな」

「でないと、元から寡黙な子なのかも知れませんね…どっちにしろこのままほおっておくわけには……」

「待ってください、風。あなた、もしかしてこの子を連れて行くとか思ってないですよね？」

程立さんの話を途中で切って郭嘉さんが言いました。

「おいおい、じゃあこんな子供をこんなところにほおっておけというのかい？それはあまり酷すぎだろ」

「！！」

お、一刀ちゃんびっくりしちゃいました。

程立さんの頭の上の人形がしゃべってるように見えます。

「……」

「おおっ！」

触ってみようと程立さんに近づく一刀ちゃん。

「お、おい、やめろ。そんなに触ったら…あぁ…あぁぁぁ」

おい、人形、変な声出すな。

「あのー、おぼっちゃん？そんなことしたら困るんですけどー」

今度は下のが話しますね。あ、いや、すみません。

「……」

困るっていう言葉を聴いて直ぐに触るのをやめる一刀ちゃんです。

いい子ですね。欲望に充実な上に人の話をちゃんと聞いてくれるってなんていい子なんでしょうか。

「この子のことは陳留の刺史殿に任せるとしましょう」

うん？

陳留の刺史って確か……

「……」

「むっ」

あ、一刀ちゃん、話が見えてきたのか、郭嘉さんの裾を掴みます。

こんなところに一人で置いていかないでっていうことですよね。

「えっ!?あ、いや…あの、その…」

「稟ちゃん…??」

「ふむ、確かに子供をこんなところに一人で置くことは喜ばしいことではないな…」

「いや、しかし、私たちにはこんな子の助けをする暇なんてないのですよ?それに、この子はどこかの貴族の息子の様子ですし、我々のようなものがつれていくようなことではないです」

「それもそうではあるが……」

趙雲さん、悩んでいらっしゃいますね。

…あれ?何か悩みの視線の先に、一刀ちゃんが郭嘉さんを捕まえてる手があるのですが?趙雲さん?

だだだだーーーー

うん?

この、なんかこう……

あ、この音は聞いたことがあります。

昔スペインの闘牛祭りで聞いたようなこの声は……

あ、すみません、普通に馬ですね、はい。

牛とか変なこと言ってすみません。

旗に曹と言う字があるのを見れば、あれは陳留の刺史、曹操さんの部隊のようですね。

って、あれ？三人とも行っちゃうんですか？

「それでは私たちはこれで…」

「うむ」

「飴おいしかったですよー」

「……」

一刀ちゃん、慌ててます。

ここでせっかく話ができる人たちに会ったのに、また行っちゃったら自分は一体どうすればいいのか。

てててて

小足で三人を追う一成ちゃんです。

郭嘉さん、鬼！人でなし！全身血液女、全部鼻で噴出して死ね！！

「稟ちゃん、ついてきてますよ？」

「言わないでください！」

「何か…助けてあげたはずだが、すごく悪いことをしてしまったようだな」

「言わないでくださいってば！」

それでも後ろを振り向かずいってしまう三人さんです。

「…、…ぁ…」

ドスン！

ああ！一刀ちゃん！倒れました！

地面は砂。

それほど痛くはないでしょうけど、子供がこんなところでこけてしまったら……」

「……（うぐ……）」

あ、ああ、泣いちゃいそうです。

どうしましょう、どうしましょう。

私はただの作者にすぎないのです！

泣く子を慰める術なんてぇーー！！

「……（うぅぅ……うぅぅ……）」

あああ、ダメです。子供が泣くのを見たら私、胸が千切れそうで死んじゃいますよー

「男が泣いたらダメよ」

「…？？」

「そんな情けないことをすると、男の子として恥というものよ」

「……」

一刀ちゃんがその言葉を聴いて涙と泣き声をぐっと我慢して後ろを振り向いたら……

「…いい子ね」

そこには、
また違う女の人が立っていました。

（続く…の？）

＞ｐｆ＜

一度こんな悪ふざけを満載させた話をしてみたかったもので……
そういえば、北郷一刀を主人公にしたのって、自分これが初めてですね。
たとえ設定は変わっていても、
というわけで一刀ちゃんの設定です。

北郷一刀ちゃん（ちゃんは名前のうちに入りません）（９）
特徴：
寡黙、というか喋らない、というか喋れないというか……
約束をちゃんと守るいい子です。

煩悩に素直な子ですが、人にダメと言われたらやめます。

服：聖フランチェスカ初等部制服（あるの？初等部）

好きなもの：飴（でも一日に一つしか食べません）、抱っこ

嫌いなもの：辛い食べ物、怖い人

背：曹操さんよりより少し低いです。

体重：知ってどうします？子供並みです。

以上でお送りしました。

以上、さっちゃ（…）…作者でした。

一黙（後書き）

＞pf＜

一度こんな悪ふざけを満載させた話をしてみたかったもので……

そういえば、北郷一刀を主人公にしたのって、自分これが初めてですね。

たとえ設定は変わっていても、

というわけで一刀ちゃんの設定です。

北郷一刀ちゃん（ちゃんは名前のうちに入りません）（9）

特徴：

寡黙、というか喋らない、というか喋れないというか……

約束をちゃんと守るいい子です。

煩悩に素直な子ですが、人にダメと言われたらやめます。

服：聖フランチェスカ初等部制服（あるの？初等部）

好きなもの：飴（でも一日に一つしか食べません）、抱っこ

嫌いなもの：辛い食べ物、怖い人

背：曹操さんよりより少し低いです。

体重：知ってどうします？子供並みです。

以上でお送りしました。

以上、さっちゃ（…）…作者でした。

二黙（前書き）

一人になった子供に助けを伸ばす大人は、子供の難しさを分かるはずもなく。。。

二黙

「いい子ね」

そこに立っていた人は……

「……」

小柄、だけどその心の中の野望だけは誰よりも広く、その誇り誰にも及ばぬほど深く、覇道を目指すものが誰よりも警戒すべき人。

曹操孟徳はそこに立っていました。

＞pf＜

「華琳さま、この子は…」

「どうやらあの輩に捕まっていたようね。あなた、あいつらがどこに行ったかわかるかしら」

「??」

あいつらって、もしかして先の馬鹿トリオのことでしょうかね?

「……」

一刀ちゃん、相変わらず何も言わず空を指しました。

「…は?この子何を言ってるんだ?」

「どうやら逃げたようね」

逃げたというか、飛んで言っちゃったんですけどね…まぁ、見てなかった人なら理解できなくて当然ですけどね。

「秋蘭、部隊を再編成して、逃げたやつらを探すように言いなさい。深追いはしないように」

「御意」

そう答えた曹操さんの左の人は夏侯淵。弓の名手、一矢一殺とはまさに彼女のための存在する言葉。

「なっ！ここで追撃を止めるのですか？」

そう残念そうにいる人は、未来の魏の大剣、曹操の右腕、夏侯惇さんです。

「ええ、これ以上我々が追う必要はないわ。それに、この子の親を探さないとダメだしね」

「そんなことこそ！他の兵たちに任せれば良いではないですか！たかが子一人のために、ここで追撃を止めたら…」

「はぁ…姉者、その辺にしておけ」

「なっ、秋蘭」

「…あの子、怯えてるわよ？」

「えっ？」

「……（カタカタブルブル）」

ああ、春蘭さんが大声出すから一刀ちゃん怖がってるし。

「わ、私が何をしたとぉ！」

「（びくっ）」

「春蘭…？」

「うぅぅ……」

小動物のようにふるえている一刀ちゃんを見て、

「大丈夫だぞ。姉者はこう見えて、本性はやさしい。それに、別にお前のことを脅かそうとしたわけでもない」

「……」

夏侯淵さん、一刀ちゃんを慰めようと手を伸ばしますが、

「！？」

ああ、案の定、まるで最初からそこにはいなかったのように、夏侯淵さんの手の一歩後ろに立っている一刀ちゃんです。

「秋蘭、今のは…」

「私も何が何だか……」

もう一度手を伸ばす夏侯淵さん。

けど結果は同じです。一刀ちゃんは夏侯淵さんの手から離れていました。

「華琳さま！離れてください！この者、きっと我々を誑かそうとする妖術使いです！」

「落ち着きなさい、春蘭」

まったくです。もう一叫びで一刀ちゃんの涙腺が千切れそうですから。

一方、一刀ちゃん、怖くてもあの三人から逃げない理由がありますね。

ここで頼りにできそうな人が、この三人しかないのです。

しかも、先あの三人から見捨てられたばかりで、ここでまた見捨てられたら、一刀ちゃん本当にここでどうすればいいか解らなくなっちゃうのです。

でも、近づきたくもない。

何より、

「……（カタカタ」

いえ、いえ、こっちをみながら震えても困りますよ。あの人怖いからなんとかしてとか言いたいみたいですけど、そんなの無理ですから…

「…ぅ……（じー）」

うぅ…僕他には役立ちますから、そんな涙でいっぱいな目でうらむように見るのは勘弁してください。傷つきちゃいますよぉ。

「あなた、何者なの？何か言って見なさい」

曹操さんがそう言ってますけど、無理なんですね。だって一刀ちゃんは喋れないのですから。

「……（あわあわ）」

慌てて一刀ちゃんも何かをしようとしますけど、口を動かしても言葉はでませんし、手は何の意味もなく宙を泳いでいるだけです。

「…どうやら「喋れない」みたいですね」

「（こく、こくっ）」

一刀ちゃんが夏侯淵さんの言葉に頷けば、曹操さんがジド目になって、そのあまり高くもない背で一刀ちゃんを下目線で見ます。

「喋れない、ね……」

「そんなの嘘に決まってます。それに、こいつが着ている服、どう考えてもこの大陸のものではありません」

「うむ…」

「そこは私も気にしていたわ。触れないからちゃんとは解らないけど、私たちが知っている素材ではないようね」

そういいながら、先夏侯淵さんがしたように一刀ちゃんに手を伸ばす曹操さん。

＞pf＜

「（びくっ）」

「あら？」

あれ？曹操さんの手には触れるんですね。

「華琳さま！」

夏侯惇さんが止めようと曹操さんが触れた一刀ちゃんの肩に手を伸ばしたら、

「あ」

「あ」

また曹操さんの手から離れている一刀ちゃん。

「……（カタカタ」

「どうやら、私にしか触れないようね。どういうことかしら」

どういうことかしらね。私にも良くわかりません。私も一刀ちゃんのことを詳しく知っているというわけでもないですので。

少なくとも、一刀ちゃんが普通の子じゃないことは良く解ります。

「あなた、ちょっと、こっちに来て見なさい」

「華琳さま?!」

「……（カタカタ」

「いくらなんでも、華琳さま一人で触れるということは危険です」

「大丈夫よ。何か私たちに何か脅威をしているわけでもないし、単に怯えてるだけでしょうよ」

「怯えてるなどと！私がそんな扱いをされるようなことは…！」

「…ひくっ」

「姉者…もういいから我々は一歩下がっておくとしよう」

「秋蘭?」

まったくだ。もう泣き声が声零れようとしてるではないか。

「うぅぅ……」

仕方なく下がる夏侯姉妹。

「さあ、こっちに来て見なさい」

「……」

…行ったらいいと思いますよ。

「…（こくっ）」

そしててくてくと曹操さんの前に近づく一刀ちゃん。

「大丈夫ですか?華琳さま」

「少し静かに…」

夏侯惇さんの心配の心は曹操さんに届かず。

曹操さんは手を伸ばして、一刀ちゃんの頭に手をのせました。

「……」

「大丈夫よ。私たちは悪い人じゃないからね。…私たちに付いてきてくれるかしら」

「……（こくっ）」

「いい子ね。それじゃあ」

そう言った曹操さん、一刀ちゃんを手を掴みました。

「……」

「華琳さま、大丈夫ですか？」

「ええ、もう大丈夫よ。取り合えず一度城に戻ってこの子について詳しく聞いてみることにしましょう。口は言えなくても、話は通じるみたいだからね」

その時、

ぐー

「む？」

「…おなかが空いたようね」

「……？？？」

いやいや、先お腹から大きい出たばかりなのに、しらんぶりしましてもね……

「先ずは何か食べさせることが先のようね。まぁ、とにかく城に戻りましょう」

「「はっ」」

＞ｐｆ＜

「…ぉ…（キラキラ）」

一刀ちゃんがまた目を輝かせている理由は、他でもないです。

それは、自分の目に広げられてる、はじめてみる豪華な中華料理の存在でした。

「……」

一度曹操さんを見る一刀ちゃん。これ本当に食べていいんでしょうか。

「お食べなさい。空腹なんでしょ？」

「……」

許可も落ちました。遠慮なく食べていいみたいです。

先ずは、目の前の炒飯に手を出す一刀ちゃん。

「華琳さま、この子ですが、陳留の民の子ではないようです」

一刀ちゃんがおいしく食べてる間、夏侯淵さんが心配そうに曹操さんに言いました。

「そう、まぁそうは思っていたけどね」

「え？じゃあ、華琳さまはこいつの正体を知ってここまでつれてきたのですか？」

「そういうわけではないわ。ただ、この子が着ている服といい、それに、先あなたたちには捕まえられなかったことといい、どうやら普通の子供ではないようね」

「やはり五胡の妖術使いとか何かなのです」

「その可能性もあるでしょうよ。だけど、私たちに害を与えそうにない以上、こんな子供を殺すというのも、」

「（びくっ）！」

殺すと言う言葉に反応して蓮華を止める一刀ちゃん。

「あ、大丈夫よ。殺すとかしないから。それより、もういっぱい食べたかしら」

「…（こくっ）」

え？もうなの？小腹だね。まだ子供だからもっと食べないと……

「じゃあ、聞くけど、あなたはどこから来たの？何故そんなところに居たのかしら」

「……」

いや、喋れない子にそんな書術型の質問しましてもねぇ。

……あ、一刀ちゃん。

「？？」

一刀ちゃん、書くのはできる？

「…（こくっ、こくっ）」

まぁね、小3が字書けないというほうが可笑しいし。

でも、やっぱりここって中国だし、書くのは漢文じゃないとダメなんだよね……ちょっと待っててね。私が何とかするから。

「質問の仕方が悪かったわね。……そうね、あなた自分の名前は書けるかしら」

「……（こくっ、こくっ）」

「じゃあ、ここに書いてみなさい」

曹操さん、どこから持ってきたのか竹簡と筆を一刀ちゃんをくれます。

「……」

あ、ここではそれが紙と鉛筆と一緒なんですよ。ちょっと書きづらいかも知れないけど……

『北郷　一刀』

ってちょー達筆!?

「『ほんごう　かずと』ね…不思議名前ね。字は…まだ子供だからないでしょうね」

「……」

あ、字というのはですね。

『知ってる』

あ、そうですか。あ、後、私には書かなくていいですよ。前の人たちに気にしてください。余計なことになるかも知れませんからね。

「あなた、字をかくのが上手ね。もしかして、どこかで学を学んでいたのかしら」

『学校』

「がっこう?何なの、それは」

「……」

学校が何かというとても基本的は質問にどう答えすればいいのかわからない様子です。私にも言いにくいですけどね。

「なら、あなたが住んでるところを言ってくれるかしら」

「東京　浅草」

「……？？」

「とうきょう……あさくさ？」

「そんなところ聞いたことないぞ」

「……」

いや、だからそんなこと言われましても小３の子には付加説明は…
しかも漢字しか書けない状況ですからね……

「どこの州なの？」

「…？」

『しゅうってなに？』

いや、だからその竹簡で平仮名を書いてこっちに向けないでくださ
いってば？！

「うん？ね、それなんと書いたの、ちょっと見せて？」

あ、取られた！

「……これも文字なの？」

「見たことがないですか……やはりこの大陸の出生ではないようで

すね」

「ならやはり五胡の…」

「五胡でこういう文字を使うという話は聞いたことがないわ…あなた、どの国から来たの？」

やっと話がそこに向かいましたね。

一刀ちゃん、竹簡をもらって「日本」とか……

…日本？

「日本（ひのもと）？」

「「！！」」

うわぁ、その発想はなかった。

＞ｐｆ＜

竹簡に作家の力で少し工夫をしてみました。日本語で書いても、相手には漢文のように見えるようにしました。

その後話はもう少し進んで、

「では、話をまとめるが…お前の名前は北郷一刀、日本（ひのもと）というところから来て、ここまでどうやって来たか、どうやってその場所にあ

ったのかは解らないと…」

「…（こくっ）」

「そして、物心がつく頃からもう喋れなくなったと」

「…ぁ…」

「声は少し出てくるけど、言葉にはならないようね」

「信用していいのですか？」

まだ疑ってる夏侯惇さん。

「…嘘をついてるようには見えん。何より、そうやってこんな子供になんの取り得もない」

「うぅむ……」

「でも、何より驚くのはこの国の名前ね」

日本（ひのもと）そう読むと、まるで……。

「天の御使い、ね……」

「……？？」

「…いいことを思いついたわ。この子を私たちが保護することにしましょう」

「華琳さま!?」

「まさか、華琳さま、先見た流星のことを…」

「確信はないけどね。けど、この子の説明や、そこに居た理由が不明だということ、可能性は十分にあるわ」

む?何の話でしょうかね。

「しかし、城の中にこんな子供を入らせるなど……」

「何か問題になるかしら」

「それは…!!その…華琳さまがこんな子供の面倒を見てやる必要は……」

「……」

うん?一刀ちゃん?

タッ

「ん?北郷?」

話から離れていた夏侯淵さんが、一刀ちゃんが椅子から降りることに気づきました。

『ボク、邪魔みたいだから行く』

「あ」

一刀ちゃん？

『御飯、有難う』

すっ

あっ？あれ？一刀ちゃん、どこ行きました？

急に消えて……

「なっ……」

「な？あいつはどこに消えたんだ？」

「急に消えてしまった……自分が邪魔そうだから行くと言って…」

「なっ！」

一刀ちゃんがいたところには、使ってた竹簡と筆に、一刀ちゃんが持っていた飴が全部テーブルの上に乗せられてました。

「……春蘭、秋蘭、」

「「！！」」

！

突然空気が重く……

「今直ぐあの子を探しなさい。街の隅々まで」

「わ、解りました」

「…御意」

「…この曹孟徳から勝手に逃げるなんて、許さないわよ」

あらら…曹操さん怒ってらっしゃいますね。自分に何も言わずに消えてしまって…

これは、私も早く探してみないとダメですね。

＞ｐｆ＜

あ、見つかりました。

人が通らない寄り道の隅っこで俯いています。

一刀ちゃん？

「……」

どうしたんですか？何で急に消えちゃって……

「……」

……はい？お父さんとお母さんと……

……ああ、そうだったんですか。

ご両親が離婚するとき、一刀ちゃんのせいで喧嘩をしてたのですね。

それが先の二人の姿と重ねて見えて……

「……」

けど、こんなところで俯いていても何もいいことはないのですよ？

あの人たちが一刀ちゃんを探してますよ。あそこに戻りましょう？

「……」

迷惑って、そんなに急にいなくなっちゃうのがもっと迷惑ですよ。

皆心配してます。主に曹操さんが。

「……」

ぼたぼた

一刀ちゃん……

…いえ、私には一刀ちゃんをここで安全に守る義務があります。

こんなところに一人にさせるわけにはいきません。

待っててください。

私がなんとかして、曹操さんをここに連れてきま…

ぐいっ

「……」

えっ？え、ちょっと待ってください。

どうやって私を捕まえたのですか？

いや、放してくださ、

【一人にしないで】

あ

「……」

一刀ちゃん……

「一刀」

「（びくっ）」

＞pf＜

「こんなところで何をしているのかしら」

曹操さん。よく見つけましたね。

「…どうして逃げたの」

「……」

一刀ちゃんの口から言葉が出るはずもなく。

「あなたはどうか知らないけどね。私はあなたに用があるわ」

そして一刀ちゃんに手を伸ばす曹操さん。

けど、

「……もう私も拒むというの？」

「……」

もう曹操さんの手にも触れないようになりました。

「あなたが何故私たちを怖がる理由はわからなくもないわ。知らないところに一人に置かれて不安なんでしょうよ」

「……」

「けど、いつまでも現実から見ないで前に進まなければ、そこでおしまいよ。さあ、どうするの？一刀。私に付いてくる？それとも、ここでそのまま俯いているのかしら」

「……」

一刀ちゃんは動きません。

僕は、一刀ちゃんの判断を直接にどうする権利はありません。

選ぶなら、それは一刀自身の考えです。

けど、

僕は、一刀ちゃんがあの人について行って欲しいです。

「……」

「私についてきなさい。私はあなたが必要よ」

「……ぁ…」

―一刀、

―一刀がいないとお母さんは……

「……ぁ」

一刀ちゃんが立ちました。

「うっ！」

そしていつの間にか曹操さんの目の前にいる一刀ちゃん。

「……」

「なっ！ちょっと」

そして、曹操さんの腰に抱きつきました。

「ちょっ、よしなさい」

でもまぁ、子供と言っても男にそこまで接触は拒むことは仕方ないですね。

「？？」

曹操さんが嫌そうにするので一度離れます。

「はぁ……まぁ、とにかくついてきてくれるということに理解するわ」

そして今度は、曹操さんから、一刀の頭をなでてあげます。

「……（きゅー）」

嬉しいのか、うれしくないのかよく解らない表情ですね。

「一刀」

「？？」

「あなたを天の御使いとして、私たちのところに身をゆだねることを許すわ。これから、私たちのためにその力を使わせてもらうわよ」

「……」

その時は、一刀ちゃんはきっと曹操さんの言った言葉の意味が解らなかったと思います。

けど、

「（こくっ）」

その時頷いたことに、悔いはないでしょう。

拠点フェイス1　華琳默

陳留の平和な朝。

まだ露店や店らも開けていないこの朝に……

？？「きゃあああああああああああああああああ！！！！」

何、この嬌声

（嬌声×　悲鳴○）

がたん！

春蘭「華琳さま！！」

春蘭さん、部屋の門を壊さないでください。

秋蘭「華琳さま！」

でも、嬌声、もとい、悲鳴をあげたのは華琳さんみたいですね。

一体なぜ……

へ？

一刀「……すー」

春蘭「な、なななな…！」

秋蘭「なんと！」

華琳「はぁ…はぁ…びっくりしたわ」

悲鳴上げたの、華琳さんだったんですか？

一刀ちゃん？何故華琳さんのベッドで寝てますか？

いや、僕ももうちょっと驚きたいですよ。もっとこう、あああああああ！！僕も悲鳴あげたいです。なにやってるんですか、

一刀「……すー」

起きろ！！

一刀「……」

春蘭「こ、こいつがどうして華琳さまと一緒に寝ているのですか」

華琳「私も解らないわよ……ね、一刀、ちょっとおきてみなさい」

でもまあ、子供にこんな朝早く起きなさいといっても無理なんですよね。

それにしてもよく寝ますね、この騒ぎで。

春蘭「このぉぉ！！」

あ、でも、早く起きないと春蘭の剣に真二つになっちゃいますよ？

華琳「春蘭？私の寝台まで切っちゃうつもりかしら」

春蘭「えっ？あ、いや、それはその……」

華琳「…一刀、…一刀起きてみなさい」

だけど起きない一刀ちゃんです。

華琳「（ピキッ）」

あ

？！

あ！華琳さん、シート飛ばした。一刀ちゃん吹っ飛んだー！！

どかっ！

一刀「！？　！？」

床に落ちてパッと起きた一刀ちゃん。

何事かとあっちこっち見回ってます。

華琳「一刀！！」

一刀「！？（ぴくっ）」

華琳「（ゴゴゴー）どうして私の布団の中にあなたが入っているのかしら？」

一刀「ぁ…ぅ…（あわあわ）」

いや、僕を見ても…私も聞きたいですよ。

一刀「……」

春蘭「ええい、早く吐かんかー！」

秋蘭「姉者、落ち着け。北郷、竹簡をあげるからちゃんと説明するといい」

・・・

・・

・

『悪夢見た』

全員「……」

一刀「…（カタカタ」

正座いたまま、頭を守るようにして開いてある竹簡にはそう書いてありました。

華琳「そう…だから私のところに来たの…私に断りもなく潜んで」

当然まだ怒っていらっしゃる華琳さん。

一刀「…ぅ……」

華琳「……」

城に来て三日目、一刀ちゃんの大ピンチです。

華琳「はぁ……今回だけは許してあげるわ。今度また人の部屋に勝手に潜りこんだ容赦なく首を刎ねるわ」

一刀「……（こくっ）」

春蘭「華琳さま！」

華琳「何？」

春蘭「うぅぅ……」

この前の事件のせいで罰をもらってあまり経ってない春蘭さん。それ以上文句を言えずに下がります。

華琳「あなたの部屋に戻りなさい」

一刀「……」

予想以上に軽い叱りで終わり、一刀ちゃんは華琳さんの部屋から出ていきました。

華琳「二人も、もう行っていいわよ。朝から騒ぎになったわね」

春蘭「華琳さま、どうしてあの子にだけそんなに優しいのですか？」

華琳「子供が悪夢を見て頼りになりそうな人の部屋に来たというのに叱るわけにもいかないでしょう。ただ、私に断りもなく入ってきたのは許せないけど」

春蘭「なら…！」

華琳「…そういえば春蘭、前あなたの部屋に行ったら、私に断りもなく私の等身大人形を作ったみたいね」

春蘭「なっ！どうしてそれを…！！」

華琳「私の人形を作って、一体何をしたのか今夜に詳しく聞かせてもらうわよ」

春蘭「は、はいっ」

秋蘭「……」

華琳「秋蘭、どうかしたのかしら？」

秋蘭「いえ、特に問題は…」

華琳「そう、なら二人とも仕事に移りなさい」

春・秋「御意」

・・・

・・

・

それから一週間後です。

秋蘭「なぁ、姉者、最近北郷の姿を見たことがあるか？」

春蘭「は？…いや、見てないが、それがどうかしたのか？」

秋蘭「実は、私もここ最近、北郷を見かけたことがないのだ」

春蘭「どこかにいるだろう。それに、あいつ急に姿を消して他の場所に行ったり来たりするのだろ？それを使えば中間行動なんて必要

ないじゃないか」

秋蘭「それはそうなんだが…」

春蘭「ええい、あんな奴のことなんてどうでも良い。どこの馬の骨なのかも知れない子供に華琳さまをとられた気がして、あいつを見ると気分が悪くなるのだ。秋蘭はそう思わないのか？」

秋蘭「姉者も言うことはわかるが、北郷が華琳さまに頼ろうとするのは当然のことだ。あんな小さい子供が、突然親を失って一人になれば、他に頼りになるような相手に付いていこうとするのは当然のことだ」

春蘭「うぅぅ……」

秋蘭「それとも、姉者は華琳さまがあんな子供がいるからって、北郷にだけ贔屓するとでも思うのか？」

春蘭「それは……そんなはずはないだろうが…」

秋蘭「なら問題ないだろう。それに、最近は華琳さまも初めてそうだったほど北郷に気を使わないみたいだし。姉者が心配するほどではないと思うのだが」

春蘭「うぅむ……」

そんな風に言う秋蘭さんでしたけど、まぁ、確かに華琳さんは一刀ちゃんが初めて来た頃は、華琳さんほぼずっと一刀ちゃんといましたからね。

まぁ、それも別に華琳さんがそうしたわけじゃなく、どこに行っても何故か一刀ちゃんが近くにいる、という状態で、華琳さんが行くところにはいつも一刀ちゃんがいました。

春蘭さんがイライラするのも無理はないです。

それにしても、あの事件以来には、本当に一刀ちゃんが動きがあまりありませんね。

初めて来た時は城のあっちこっちで現れて、華琳さんたちだけではなく、侍女さんたちや城の文官たちを驚かしたり色々ありましたね。

最近はあまり部屋から出てくることも……

……

一度言って見ましょうかね。一刀ちゃんの部屋。

・・・

・・

・

一刀ちゃん?

一刀「……??」

なっ!

一刀「……」

えっ?ちょっと待って、一刀ちゃん、え?ええ?!

・・・

・・

・

秋蘭「うん?華琳さま」

春蘭「か、華琳さま!休憩ですか?」

華琳「ええ、二人も休み中かしら」

秋蘭「はい…あ、その、華琳さま」

華琳「なにかしら」

秋蘭「最近、北郷の姿の城の中で見当たらないのですが、華琳さまは知りませんか?」

春蘭「またその話なのか？あんな奴のことはどうでもいいだろ」

華琳「そういえば、最近は見てないわね。私のところにも来ないし、侍女にだけ任せていたからね」

秋蘭「……」

華琳「そうね…そう言われてみると少し心配になるわね」

春蘭「華琳さま、そんな奴はほっといて、せっかくだからお茶でもいかがですか？」

華琳「また今度にしましょう。それじゃあ……」

春蘭「ああ…、華琳さま……」

秋蘭「姉者、今回は譲ってやってくれ」

春蘭「秋蘭？」

秋蘭「何だか、嫌な予感がするんだ」

・・・

・・

・

一刀ちゃん、しっかりしてください！一体いつからこうだったんですか？

一刀「……」

一週間！？

一週間も寝てないんですか？

【寝てないわけじゃない。悪夢で眠れない】

一緒ですよ！一週間も魘されてるなんてどういうわけですか？

一刀「……」

あれですか？やっぱり不安なんですか？こんなところにいるのって？

一刀「……（こくっ）」

じゃあ、初めて来て三日ごろは？

一刀「……（こくっ）」

何一人で我慢してるんですか、この子は！！

それで、それで華琳さんの部屋に行ってたのですか？一人で眠れな

いから？

一刀「……（こくっ）」

ああ、…ああ、痛い、頭痛すぎる……

いえ、見てなかった僕も悪いんですけどね。最近ここじゃなくても行くところが色々とありまして……

一刀「……＞＞よろよろ＜＜」

最初から口がいえない子だから、自分が何か辛いことがあっても人にあまり言わなくて一人で唸っているばかり。

でもこのままだと本当に体を壊してしまいます。

取り合えず布団に戻ってください。

僕が華琳さん連れてきます。

タッ

【迷惑かけたくない】

・・・

・・

あなたがこうしてるのがもっと迷惑です！

・

一刀「……」

すー

どすっ

一刀「……すー……すー……

…

……

……

一刀「…ぅ…ぅぅ……ぅ　ぅ」

コンコン

華琳「一刀？私よ」

一刀「……」＜＜魘されてる

華琳「部屋にいないのかしら」

がらり

一刀「……」

華琳「寝てるの？今が何時だと……ん？」

一刀「ぅ……」

華琳「何震えて……？！」

・・・・・・・・・・・・・・

『悪夢見た』

・・・・・・・・・・・・・・

華琳「まさか…一刀、一刀起きなさい」

一刀「……」

華琳「（ピキッ）おきなさい！！」

？！

どかっ！

一刀「！？　　！？（ぐすん）」

『何？　何！？』

華琳「それはこっちの台詞よ。一刀、あなた一体何をしているのかしら」

一刀「……」『何も…寝てただけ』

華琳「……正直に言わないと、切るわよ」

一刀「…ぅ…＞＞もじもじ＜＜」

華琳「言いなさい。あなた、ここ一週間どうしていたの？」

一刀「……」

『悪夢見た』

華琳「……」

一刀「……」

華琳「……誰が！！」

一刀「！？」

華琳「誰が頼りにしちゃダメだと言ったのよ！！」

一刀「……」

華琳「魘されてたならそうだって言いに部屋に来ればいいでしょう？誰があなたに一人で耐えていなさいって言ったの？」

『でも……』

華琳「でもじゃないでしょう？」

一刀「……」

華琳「呆れた。子供がそんなに控え目な性格は良くないわよ？」

一刀「…」『ごめんなさい』

華琳「はぁ…いいわ、今回だけは許してあげるわ。また一人で耐えていたら容赦しないわよ。何かあったら直ぐに私にでも秋蘭にでも言いなさい。いいわね？」

一刀「（こくっ）」

華琳「…じゃあ、私が仕事があるから」

一刀「ぁ……」

ぐいっ

華琳「……何？」

一刀「…」『今』

華琳「今？…先仕事があるって言ったばかりだけど……」

一刀「……」『華琳お姉ちゃん……』

華琳「ううっ……わ、私は眠たくないわよ？」

一刀「……（うるうる）」

華琳「……っ」

・・・

・・

・

夕方

春蘭「華琳さまー！！どこですかー！！」

秋蘭「姉者」

春蘭「秋蘭！華琳さまは」

秋蘭「まだ見つかってない」

春蘭「一体どこに…はっ！もしかしてあいつの部屋に……」

秋蘭「…いや、あそこにも行ってみたが、いらっしゃらなかった」

春蘭「…そうか、なら一体どこに……」

秋蘭「そう慌てることはない。それより姉者、先華琳さまに頼まれたこと、覚えているか？」

春蘭「おおっ？私たち、今日華琳さまに何か頼まれてか？」

秋蘭「忘れたのか？明日お茶会に使うお菓子を注文しておけと言われただろ？」

春蘭「そ、そうだったか？すっかり忘れてた！秋蘭、早く行くぞ！華琳さまを失望させてはいかん！」

秋蘭「ふふっ、了解した」

たったったったっ

うへー、秋蘭さん空気読みましたね。

それにしてもこの城、何かもののけ多いですね。

何かこう…華琳さんに怨望もってる輩って結構多いみたいですし。

こいつらのせいで魘されてたのか…ちょっと気が弱いとよくひっかかるんですね、こういうのって。

まぁ、今は大丈夫でしょう。

ぐっすり寝てなさい。一刀ちゃん、華琳さんも。

さて、二人が寝てる間、私はこいつらを片付けるとしますか？

華琳・一刀「……すー……すー…」

拠点フェイズ1　秋蘭・春蘭黙（前書き）

秋蘭が先に出ているのは仕様です。

拠点フェイズ1　秋蘭・春蘭黙

いつものような平和な朝。

今日の一刀ちゃんは……一刀ちゃん？部屋にいませんか？

トントン

うん？

一刀「……（わーっ）」

うわっ！！

一刀「…（にしっ）」

人の後ろに現れるのやめてください！

一刀「……」

【侍女さんからお菓子もらった】

はい、はい、よかったですね。

お皿一杯もらってきましたね。

【さっちゃんも一緒に食べよう】

僕ですか？……僕より、たまには華琳以外の人たちと一緒に仲良くしませんか？

一刀「……」

まだ春蘭さんと仲悪いでしょ？

まぁ、あの人も色々あるのですよ。いきなり一刀ちゃんが来て華琳さん独占してますし。ここ最近だって、一刀ちゃんばかり華琳さんの部屋に行くから溜まってるんでしょうね。

一刀「……」

ああ、今のは子供に言っちゃダメなことを…口が滑っちゃいました。

一刀「……」

はい、はい、お菓子一緒に食べますよ。

一刀「……（にこっ）」

がたん！

＞ｐｆ＜

春蘭「北郷一刀！！」

その声まさに飛行機のエンジンの音を直前で聞くようなｄＢ！

一刀「！？！」

がちゃん！

ああ、お菓子の皿が……！

秋蘭「姉者、そんなに戸を？抉じ開けないでっていつも……北郷？」

一刀「……（ぐすん）」

ああ、お菓子、食べれなくなりましたね。

春蘭「なっ、ど、どうした？」

一刀「……ぅぅ……」

ああ、春蘭さんまた一刀ちゃん泣かせやがった！

秋蘭「大丈夫か？」

驚いた一刀ちゃんの様子を見る秋蘭さんです。

秋蘭「……危ないから下がっていろ。お菓子なら後で代わりのものをあげよう」

一刀「……ぅ…」

秋蘭「ぅぅむ……」

これは完全に気に障っちゃいましたね。

秋蘭「仕方ない。北郷、私たちと一緒に少し出かけないか？」

一刀「……？？」

春蘭「秋蘭、今日は暇つぶしでなく、華琳さまの……」

秋蘭「少しぐらいなら時間を分けてもいいだろう。それに、私たちが北郷を連れに来なければこうにもならんかったしな」

正確には、戸さえ普通に開けていれば、ですけどね。

一刀「……（しゅん）」

春蘭「うぅ…仕方ないな。少しだけだぞ」

秋蘭「というわけだ、北郷。一緒に街に出かけないか？」

一刀「……（こくっ）」

すっげー間とりましたね。

＞ｐｆ＜

初めての時はあまり詳しく見ていませんでしたけど、陳留の街ってすごくにぎやかですよね。

一刀「…ぉ……（キラキラ）」

秋蘭「特に食べたいものはあるか？」

『何でもいい』

秋蘭さんの手を掴んで歩いてる一刀ちゃんの目は、久しぶりに輝いています。

秋蘭「そうか。なら…こっちも少し時間が惜しいのでな。露店の店のもので勘弁してくれるか？」

一刀「（こくっ）」

その後、露店で買った桃まんを手にして歩いている一刀ちゃん。

春蘭「しゅうらん…」

秋蘭「まぁ、そう焦るな。いつもより早く回っていればすむことだろ？」

春蘭「う、うむ……」

そういえば、今日二人さんは何のために出かけたのでしょうか。

一刀ちゃんが心辺りが……

一刀「…（もぐもぐ）」

桃まんにしか目がない。

逸れちゃいますよ?

秋蘭「北郷、こっちだ」

一刀「?…（こくっ）」

秋蘭さんの呼び声に気づきついていく一刀ちゃんです。

やたらと秋蘭さんの言葉には従順なんですね。

一刀「……（もぐもぐ）」

話したいことがあるのか、食べてる途中の桃まんを口に挟んで竹簡に言葉を書く一刀ちゃん。

『どこに行くの?』

春蘭「何だ、そんなことも知らずに付いてきたのか?」

『連れてこられただけだし』

春蘭「誰もお前に是非にも来いと言っておらん!」

『ボクもそんなこと聞いてないよ』

春蘭「ええい!なら何故お前は私たちに付いてきたのだ!」

『春蘭お姉ちゃんのせいだよ！っていうかお姉ちゃんの馬鹿っぷりに私の書くスピードが追い付かないよ！』

そう書く割には長い文章もよく書きますね。

春蘭「だーれが！脳みそまで筋肉な馬鹿だと！？」

『誰もそこまで言ってないよぉぉ！』

もう泣きたいって顔してますよ、一刀ちゃん。

秋蘭「姉者、時間がないんじゃなかったのか？

春蘭「ああ、そうだったな。良いから黙って付いて来い。来れば解る！」

一刀「……」

結局、どこに行くのかは説明せずに言っちゃう春蘭さんです。

寧ろ忘れたかもしれませんが。

＞ｐｆ＜

一刀ちゃんが連れてこられた場所は……女性専用服屋

『服買うの？』

春蘭「当たり前だろ？それ以外に何がある？」

一刀「……（じー」

春蘭「な、なんだ。何故私をそんな目で……」

一刀「……」

まぁ、女性服屋ですし、一刀ちゃんの服を買いに来たわけではなさそうですね。ならこの面子だとやはり……

秋蘭「これから華琳さまの服を選ぶのでな。北郷も手伝って欲しい」

一刀「……（こくっ）」

春蘭「よし、それじゃあはじめようか」

秋蘭「うむ」

一刀「……」

一刀ちゃん、女の人の服とか選んでみたことあるんですか？

一刀「…（ふるふる）」

ですよね。まぁ、皆さんスタイルいいですからね。素直に考えて、似合いそうな服見つけたらいいと思いますよ？

一刀「……（こくっ）」

そう言って一刀ちゃんは二人と一緒に服を見始めました。

＞pf＜

ぐいぐい

秋蘭「うむ？」

秋蘭さんが裾を引っ張れるのを感じて振り向けば、一刀ちゃんは服を一枚もって立ってます。

『これは？』

秋蘭「ふーむ…華琳さまはこういう派手な服はあまり……」

一刀「……」

服が汚れちゃだめなので何も言わずに先ず服をあった場所戻す一刀ちゃん。

一刀「…？？」

『そういえば、華琳お姉ちゃんの服を選ぶのに、どうしてボクが来たの？』

秋蘭「たまには他の人たちの意見も聞きたいのだ。北郷も華琳さまの最近一緒にいたから解るだろうと思うが、華琳さまは忙しくてこんなに服を選んでいる暇などはない」

『そっか』

春蘭「おい、北郷。これをどう思うか？」

一刀「？？」

春蘭さんが選んだ服は……うわぁ……

一刀「……（ぽかん）『春蘭お姉ちゃん、本気？』

春蘭「どういう意味だ？」

『それ、本当に華琳お姉ちゃんに着させる気なの？』

春蘭「だからなんだ！私が選んだ服が華琳さまに似合わんと言うつもりか？」

『凄くいい。でも、』

春蘭「でもなんだ！何が問題だ！」

『でも華琳お姉ちゃんが着ない』

春蘭「……ふふーん」

一刀「??」

何ですか?あの笑いは?ちょこっと怖いんですけど。

すっ

春蘭「何故秋蘭の後ろに隠れる!!」

移動して秋蘭さんの後ろに隠れる一刀ちゃん。ドン引きです。

秋蘭「実は、華琳さまの身代わりの人形があるのでな。その服で、試してみたりするのだ」

一刀「……」

それって、所謂等身大ドールですか?この前言ってた……

だからその身代わりに人形に、華琳さまにはとても着てくださいと言えない服たちを着させると……

一刀「……」

一刀ちゃん、ドン引きしますn……

一刀「…!(ドン)」

って!もっと凄い服選んできやがったこの子!

春蘭「おお！そ、それは……！」

秋蘭「うむ……確かに華琳さまに着せたい服ではあるが……あんなもの、我々の体が持たんぞ？」

春蘭「ええい、私も負けられん。これはどうだ！」

一刀「！　……（ドン！）」

春蘭「なん……だと？」

秋蘭「はぁ……」

ああ、何かこう、フォローできませんね。

案外、あんなところ似てますね。あの二人。

ちなみに、このノリで選んだ服たちは、後で全部秋蘭さんに没にされました。

＞ｐｆ＜

そうやって三人が買い物を終えた時は、もうすっかり夜でした。

春蘭「イマイチだったな、今日は」

秋蘭「うむ、めぼしい収穫はなかったな」

一刀「……（よろよろ）」

秋蘭「おっと」

一刀ちゃん、遅くまで二人と一緒に服を選んで疲れてるんですね？

秋蘭さん、よろよろと歩く一刀ちゃんをおさえて、服のバックを抱いたまま一刀ちゃんまで抱き上げました。

春蘭「大丈夫か？」

秋蘭「ああ、…少し、これを持ってくれるか？」

春蘭「うぅん」

一刀ちゃんを抱いた秋蘭さんからバッグをいくつが代わりにもっと持った春蘭さん。

春蘭「結局、あいつは特に役に立ってなかったんじゃないか？やはり時間の無駄だった」

秋蘭「ふふっ、いや、そうでもなかったぞ？」

春蘭「どういう意味だ？」

秋蘭「後で説明しよう。私は北郷を部屋に戻すから、姉者は先に行って服を片付けててくれ」

春蘭「うぅむ」

＞ｐｆ＜

春蘭&秋蘭の部屋

春蘭「よいしょっと……えーと、それじゃあ……」

がちゃ

春蘭「この前作った華琳さまの人形は、華琳さまにばれて処分されてたからな。念のため二体も作っておいて良かった」

二体あったんだ……

それにしても、本当にうまく作ってますね。

まるで本物……

……

隠しどころから人形を抱き上げようとする春蘭さん。

春蘭「??…なんか、人形が生暖かいんだが……」

人形が生暖かい……あぁ、春蘭さん、それは……

華琳「春・蘭？」

春蘭「げっ！華琳さま！？」

本物ですｗｗ

えっと、どういうことかとですね……

＞ｐｆ＜

『昨日ね？華琳お姉ちゃんと一緒に寝てたらね……』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

華琳「一刀？明日は私と一緒に寝られないわよ？」

一刀「（ガーン）」

華琳「私はあなただけじゃなく、他の部下たちのことも気を使わないとだめなのよ。だから今回は、あなたが少し私を手伝いなさい」

一刀「？？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『今日春蘭お姉ちゃんと秋蘭お姉ちゃんが絶対買い物に行くから、ボクもそれについて行って、華琳お姉ちゃんの服だけじゃなくて、春蘭お姉ちゃんと秋蘭お姉ちゃんの服も選びなさいって』

秋蘭「何だか選んだ覚えのない服があったのはそういうことだったのか…華琳さまが気づいていらっしゃるだろうとは思っていたが…

…じゃあ北郷も、私たちが来ることを最初から知っていたのか？」

『うん。……お菓子のことはわざとじゃなかったけど……でも桃まん美味しかった』

秋蘭「私たちの服は、何故買ったのだ？」

『できるだけ恥ずかしい服に選びなさいって言われたから…多分……』

＞ｐｆ＜

「また一つあると私が知らなかったと思ったのかしら？今日はあなたが着せ替え人形になってもらうわよ？」

「か、華琳さまーーー！！！！」

悲鳴×　嬌声○

＞ｐｆ＜

秋蘭「……姉者」

一刀「……」『ご冥福』

秋蘭「だが、私は大丈夫なのか？行かなくても」

『秋蘭お姉ちゃんはボクと一緒にいるのがお仕置きだって』

秋蘭「……ふふっ、そうか」

＞ｐｆ＜

すすー

『……あのね、秋蘭お姉ちゃん、ボクと寝るのが嫌だったら、他のところに行って寝てもいいよ？ボク華琳お姉ちゃんに嘘で言うから』

秋蘭「うん？？いや、それは別にかまわないが…どうして私がお前と一緒に寝るのが嫌いだろうと思うんだ？」

『だって、女の人って子供と一緒に寝るの嫌がるでしょ？』

秋蘭「……？？すまん、話がわからないのだが」

一刀「…？？？」

『お母さん、ボクと寝るの嫌がってた』

秋蘭「……」

一刀「……」『華琳お姉ちゃんも最初は怒ってたし、お母さんも男の子はお母さんでも女の人とはいっしょに寝ないんだって言ったかr…』

一刀「！＞＞なでなで＜＜」

秋蘭「……」

一刀「…？？＞＞なでなで＜＜」

秋蘭「嫌がるなんてとんでもないさ。私はかまわんぞ」

一刀「……」

秋蘭「たくさん歩き回って疲れてるんだろ？もう寝るぞ」

一刀「……（こくっ）」

そして、夜遅くまで灯りが付けてあった二つの部屋の中で、一つの部屋の灯りが消えた。

一刀「すーすー」

秋蘭「……」

ちなみにもう一つの部屋の灯りは、次の朝までずっとついてあった。

三黙（前書き）

やさしいお姉ちゃんだと思っていた人が実は人殺しだとすれば、子供は大人の事情に理不尽な理屈に対してどう反応すればいいんだろう。

三黙

城壁から見える風景は、とても広くて、雄雄しくて……

「……」

そして、とても虚しく見えました。

「うん？おい、貴様、こんなところで何をしている」

「……」

一刀ちゃん、後ろに春蘭さんが来てますよ？

「……？」

「どうした？こんなところで」

「……」

『特に何も……見ていただけ』

「暇な奴だな、お前も」

『悪い？』

「悪いだろ。子供なら子供らしくもうちょっと活発に走り回れ」

「……」

「な、何だ、その目は」

いや、春蘭さんがそんなこというと…なんというか…ねえ？

「……（こくっ）」

「何だ！何か私の話に肯定しているというより何か一人で納得しちゃったようなその爽やかな頷き方は！！」

「二人でここで何をしているの？」

あ、華琳さん。そして、後ろには秋蘭さんも立っています。

「か、華琳さま」

「……」

「春蘭、騎馬と機材についての報告を今日のうち提出なさいって言ったはずだけど？」

「ああ、今持っていこうとしていたところです。なのにこいつが……」

一刀ちゃんが何か？

『ごめん、ちょっと遊んでた』

一刀ちゃんェ…そこはかばわなくていいですよ。

「構わないわ……春蘭？」

「はい、ここに……」

春蘭さんが持っていた報告書を華琳さまに渡したら、華琳さまがそれらを凄まじいスピードで読み始めました。

「……春蘭？」

「はい」

「…兵糧調達についての報告がないんだけれど？」

「はいっ？…あ」

「姉者……」

『春蘭お姉ちゃん……』

「う、うぅぅ……今日こそは何も忘れずにできたと自身してたのに」

この人いつも何か一つずつ忘れるんですよね。

「い、今すぐ持ってきます！」

『あ、華琳お姉ちゃん、ボクが行ってもいい？』

「一刀が？」

『ボクが行ったら持ってくるの早いし』

「そうね…それじゃあお願いしようかしら」

「北郷、どこなのかは知っているのか？」

「（こくっ）」

頷いた一刀ちゃんは、直ぐにその場から消えていました。

「相変わらず、どうやるのかわけが解らない術ですね」

「本人にも聞いてみたけど、普通にできるんだそうよ。天の国では普通なのでしょう」

いえ、普通じゃありません。

「本当にあんなやつ、ここに居させていいのでしょうか。あんな…妖術を使うやつを…」

「春蘭…もし一刀の前でそんなことを言ったら、例えあなたでも許さないわよ」

「……」

「妖術のようなものが使えるといっても、本人は何も知らない子供。あの子が誰かに害を与えることを見たことがあるのかしら」

「いえ、そういうわけでは…」

「なら問題ないでしょうよ。……あの子はあんな風にいてくれるだけでいいのよ。それだけで……他のことは期待していないわ」

「……はぁ……」

そういえば、華琳さんは何故一刀ちゃんを城において、

男は近くにもいさせないと言うあの方が、毎晩一人で寝ることを嫌がる子供をまるで自分の子のようにいつも一緒に寝かせ、

仕事一つがちゃんとできるわけでもない子供を、城の中で一緒に歩きながら一緒にすごすのでしょうか。

……解らないことです。

私は人の考えを読めるわけじゃないんです。

あ、一刀ちゃんは例外ですけど……

それじゃあ、私も付いていきます。

＞ｐｆ＜

「……（きょろきょろ）」

あれ？一刀ちゃん、どうしたんですか？もう報告書もらっているだろうと思ったんですけど。

「…」【あの、誰にもらえばいいの、報告書？】

…はい？

【監督の人、誰か知らない】

知らないんですか？

場所もしているし、てっきり知っているだろうと思ったんですけど。

【この前監督の人変えたと秋蘭お姉ちゃんに聞いたんだけど、見てない】

はぁ…しょうがないですね。いいですよ、教えてあげます。

【あ、さっちゃん知ってるんだ】

そりゃまぁ……あ、ほら、あそこの猫耳の頭巾を被っているひとですよ。

「（こくっ）」

ジュンイクさんです。猫耳の頭巾、その中何が入っているのは、魏の人たちの中でも、時々謎にされているほど謎なんですが、私は個人的に角説を追従しますね。

多くの時間、華琳さんのところで華琳さんを助けるようになるでしょう。

ぐいぐい

「うん？」

「……」

あ、一刀ちゃん、その人に接する時は…

「きゃあああ！！」

「！？」

…後ろからいきなり現れたりしたらいけません。

「な、何なのよ！何でこんなところに子供がいるのよ！」

「……（ドキ…ドキ）」【びっくりした】

声大きいですね。春蘭さんと別の意味で。

「……」

『ここの監督官のお姉ちゃん？』

「え？ええ、そうよ。何？道に迷ったのなら他の人に尋ねなさいよ。私は忙しいから」

『華琳お姉ちゃんから「ひょうろうちょうたつ」の報告書もらってくるように頼まれた』

……一刀ちゃん、まさかとは思いますが、兵糧調達が何なのかよく解ってないんじゃあ……

「なっ!?どうしてあんたが曹操さまの真名を使ってるのよ!…はっ!まさか、」

「??」

「いや、…いやありえないわ。華琳さまは男は閨には呼ばないはず。なのに……そうよ、きっと何かの間違いよ!」

キチガイの間違いじゃないですかぁ?主にあなたが。

『ひょうろうちょうたつの報告書……』

「あなた!華琳さまのどういう関係なのよ、正直に言いなさい!」

それはとても無理な要求であります。

『毎晩一緒に寝る関係』

そしてあなたはこんなところでまた状況をややこしくなる言葉を「わざと」書き込むんですね、解ります。たまに一刀ちゃんには、すごく大きい声でつっこみたくなります。

「なん……ですって?」

『そんなことはいいから報告書……』

「良くないわよ！」

「……」

はぁ……うん？一刀ちゃん、報告書って、これじゃないですか？何か、普通にこんなところにありましたけど。

「！」

「あ、待ちなさい、それは……」

華琳さん急いでるでしょうから早くいきましょ？

「（こくっ）」

「なっ！？」

一刀ちゃんを止めようと手を伸ばした先に、一刀ちゃんはあるはずもなく、ジュンイクさんはそうやってきょとんとなって立っているのでした。

＞ｐｆ＜

すっ

「……（にぱっ）」

「ありがとう」

はいっ、って一刀ちゃんが渡した報告書を目に通す華琳さん。

「……」

でも、少しずつ目が怖くなっていきます。

「…？？　　？？？」

いえ、間違っているわけがありませんよ。ちゃんと報告書につく標識があったのですが……

「秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なの？」

あれ？何か話が怖い方向に……

「はっ、先日仕官してきた新人です。仕事の手際が良かったので今回の食料調達を任せていたのですが……何か問題でも？」

「ここに連れてきなさい。大至急よ」

「！！」

「はっ！」

そして、猫耳頭巾さんを連れに、秋蘭さんは向かいました。

『華琳、お姉ちゃん…私、何か間違えた？』（カタカタ

怖い顔になった華琳さんに驚いたのか、そんなことを書いた一刀ちゃんは、秋蘭さんもいないので春蘭さんの後ろに隠れています。

「……大丈夫よ。あなたに怒ってるわけじゃないわ」

それを見た華琳さんはそう一刀ちゃんを安心させましたけど、固まった顔を緩めることはなかったです。

「……」

しばらくしたら、秋蘭さんが猫耳さんを連れてきました。

「おまえが食料の調達を？」

「はい？あ、はい……」

何だか驚いていましたね。まぁ、それ持っていた子が急にいなくなってたりしましたからねぇ。

「……（ひょこっ）」

「！」

春蘭の後ろにまだいた一刀ちゃんを見た猫さんですが、直ぐに華琳さんを見て話を続けました。

「必要十分な量は用意しておいたはずですが…何か問題でもありますでしょうか？」

「必要十分なんて、どういうつもりかしら。指定していた量の半分しか準備できていないじゃない」

「っ！！！」

その言葉をいう華琳さんは、今まで一刀ちゃんが見てきた姿とは、あまりにも違う人に見えてしまったので、一刀ちゃんは自分がしかれてるわけでもないのに、カタカタと震えていました。

「このまま出撃したら、兵糧不足で行き倒れになる所だったわ。そうなったら、あなたはどう責任を取ってくれるのかしら？」

「いえ、そうはならないはずです」

「何？……どういう事」

「はい、理由は三つあります。お聞きいただけるでしょうか？」

「説明なさい。納得できる理由ならば、許してあげましょう」

「ご納得いただけなければ、それは私の不能がいたすところ。この

場で我が首、刎ねていただいても結構にございます」

「……二言はないぞ？」

「……（ブルブル）」

＞pf＜

「…うむ？」

ふと、一刀ちゃんが震えていることに気が付いた秋蘭さんです。

でも、場の空気があまりにも重いために、秋蘭さんにもどうしようもない様子。

いや、もうちょっと……華琳さん？影子ちゃんが怯えてますよ？

というかこの子はそれでもここにいるんですね。

そうしている間でも、話は続いて、

「なっ！馬鹿にしているの！春蘭」

「はっ」

シャキン

「！」

ジュンイクさんの話に激情した華琳さんを見て、春蘭さんはその場で大剣を引きました。

それを見た一刀ちゃんは春蘭の後ろにも立てなくなって、華琳さんたちの群れから何歩か離れた場所に立ちました。

それでも完全に居なくなったりはしません。

「華琳さま、まだそうなさるのは早いかと。また二つの理由がありますから……先ほどのお約束もありますし……」

一刀ちゃんが怯えているからもうよしてくださいとまでは口で言わない秋蘭さんでした。

今更そんなことを言ったって、華琳さんが怒りを隠すとも思えませんが……

「そうだったわね。で、次は何？」

「二つ目は、兵糧が少なくなれば身軽になり、郵送部隊の進軍速度が上がります。よって、討伐全体にかかる時間を、大幅短縮させることができます」

「……」

秋蘭さんは華琳さんとジュンイクさんの話を聞いていながらも、後ろの一刀ちゃんのことがずっと気になるのか、時々後ろを振り向いて、一刀ちゃんがいなくなってないか確認しています。

いっそのことなら近づいて慰めてあげても良いはずなのに……

「…秋蘭……秋蘭」

「うん？あ、どうした、姉者」

そして、そっちの方に気を使っていて、春蘭さんが呼ぶ声も耳に入ってなかったようです。

「行軍速度が速くなっても、移動速度が速くなるだけだよな？討伐全体の時間が半分なるわけでは……ないんだよな」

「…ああ、そうだな。そうはならないぞ」

「良かった…私の頭が悪くなったのかとおもった……秋蘭？」

ふと春蘭さんも秋蘭さんが他のことに気を散らしていることに気がついたようです。

秋蘭さんの目の先を追いかけたらそこには……

「……」

怯えている目で、それながらもこっちを見続けている一刀ちゃんがいました。

早くいつもの華琳お姉ちゃんに戻ってって、そう祈りながら、待っているのでしょう。

けど、一刀ちゃんには解らないのです。

これが、いつもの華琳さんだということを……

一つの軍を預かっている人としての華琳さん、曹孟徳さん。

一刀ちゃんが知っている、やさしいお姉ちゃんとしての顔は、一時のものにすぎないのです。

軍事ごとになれば、華琳さんはまたいつもの華琳さんに戻らなければならない。

そのことに、今の一刀ちゃんは気づいているのでしょうか。

どうか気づかないように祈ります。

気づいてしまったら、あまりにも可哀相ですから。

好きな人の怖い顔を嫌がって離れていながらも、完全には遠ざかれないその子供のジレンマが、あまりにも悲しく見えてしまいますから。

「秋蘭、あいつは……」

「ああ……姉者は、北郷に私たちのことについて詳しく言ったことがあるか？」

「何をだ？」

「…私たちが一つの軍を預かっている将たちで、華琳さまは大陸を轟かす覇王を目指しているお方で、そのために、これからたくさん

の戦争をし、多くの戦場で、大勢の人たちを殺さなければならないという話を…だ」

「そんなこと……知っているわけではなかったのか？」

「…知るわけがないだろ。あの子は何も知らないんだ。知りたくもないだろ。あの子は……ただ私たちと一緒にいるだけでも幸せな、そういう子なのだ」

「……秋蘭？」

よく解らないように、春蘭さんは秋蘭さんに問い質しました。

春蘭さんにはわからないでしょう。

秋蘭さんが言っている言葉は「一刀ちゃんと一緒に寝ていなければ」解らないことですから。

＞ｐｆ＜

「なら、桂花、軍師として働いた経験は？」

こんな風になったから言う話ですけど、華琳さんって以外と空気読みませんね。

「はっ、ここに来る前に、南皮で軍師をしておりました」

ジュンイクさん、華琳さんに自分を軍師に使ってくださいといったようですね。

まぁ、ここまでは皆知っている通りですしね。

違うことがあるとしたら、春蘭さんと秋蘭さんの視線が違うところに向いているということぐらいで。

「春蘭？」

「あ、はっ！」

ふと、春蘭さんも華琳さんの言葉を聞き逃すはめになりそうでしたが、流石春蘭さん。華琳さんの声を聞き逃すわけがありませんね。

そして、いつの間にか大鎌をジュンイクさんの首に付け出している華琳さんが居ます。

「桂花、私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは人に試されることよ……分かっているかしら」

「はっ。そこを、あえてためさせていただきました」

「そう。なら、こうすることも、あなたの手のひらの上だということよね」

そして、大鎌を桂花に向かって大きく振るう華琳さん。

すっ！

「！！華琳さま！」

秋蘭が今叫んだ理由。それは……

「……桂花、その智謀と度胸、私が天下を取るために使わせてもらうわよ」

「はっ！」

「華琳さま！」

「……？どうしたの、秋蘭？」

「北郷が……」

「北郷？……！！」

華琳さんの大鎌が桂花さんの首に振り下がった瞬間、

一刀ちゃんはもうその城壁の上にいませんでした。

三黙（後書き）

上げ間違ってました。どうもすみません

三之奥黙（前書き）

～之奥とは、尺の都合で二話にわかれたが前後編にするには釈然のしない内容に対してさっちゃんが勝手に付けた話の割り方である。

三之奥默

「……」

「ぁ……」

「……」

会議場。

そこにいるのは華琳さんと春蘭さん、桂花さんが居ました。

秋蘭さんは……

タッ

「華琳さま」

只今参りました。

「どうだったの、秋蘭？」

「…部屋におりました。ですが……」

「…会ってないの？」

「はい、私が行っても何も言えませんため、入っては居ません」

「そう…」

一刀ちゃんはその後部屋にいることがわかりました。

けど、部屋に誰か入ったら、姿を消して、戸を閉めればまた部屋の寝台の上で膝を集めて俯いている始末。

秋蘭さんは部屋の戸を開けることすらできず、そのまま帰ってきました。

「華琳さま、私が行ってあいつを引きずってきます」

「姉者、北郷の能力を忘れたのか？」

「む……」

自分が拒む対象には体を触ることを許さない。一刀ちゃんの能力はそれを可能にします。

春蘭さんが言っていることは、不可能でしょう。

「……」

ところで、こんな状況―重い空気が漂う華琳さまの姿―の理由がわからない一人がありました。桂花さんです。

一つや二つの疑問じゃないでしょうね。

あの子は一体何なのか？何故あのようなことができるのか？そもそ

も何故華琳さまはあのような妖術使いを自分の下においているのか。

そして何よりも解らないこと。

何故自分のことよりもあんな子供の問題でこんなに重苦しい空気がこの場を制しているのか。

元なら華琳さんたちは、これから山賊討伐のために向かわなければなりません。

なのに、たった子供一人が驚いて部屋に篭っていることで、全軍が出陣できていない。

「華琳さま」

そして、我慢できなくなった桂花さんが口を開けました。

「華琳さま、華琳さまはこれから、覇道を歩むお方。たかが子供一人にこだわっている必要はありません」

「黙れ、桂花！」

一瞬、平常心を失った秋蘭さんは桂花さんに怒鳴りました！

「お前が北郷の何がわかる！」

「確かに私はあの子については解らないわ。私が知っているのは、私が華琳さまのためにすることが、ここでこうして立っているだけで何もしないことではないということよ！」

「貴様！」

「秋蘭、寄せ」

珍しくきれてしまった秋蘭さんを春蘭さんが止める始末。

「……」

その中華琳さんは黙っていた。

そして、

「やめなさい、秋蘭……桂花のことは尤もよ」

「華琳さま」

「三人はこれから出陣を準備をなさい。私は一度一刀のところに行くわ」

「はっ」

「……御意」

「それと、桂花」

「はっ」

そして、桂花を呼んだ時、華琳さんの目は鋭くなっていました。

「私との約束が守れなかった場合、今の私と、一刀への侮辱、一緒

に払ってもらうわよ」

「……はい」

そして、華琳さんは一刀の部屋に向かいました。

＞ｐｆ＜

一刀ちゃんにとって受け入れられなかったこと。

それは、自分が知らない華琳さんたちの姿があるっていうこと。

それが何だったのか一刀ちゃんには解らなくても、それが嫌だった。

「……」

…一刀ちゃん。

「！」

一刀ちゃんがいた場所は、他のところじゃなくて城の自分の部屋でした。

部屋には特に何もありません。

使うことがあまりにない寝台と、テーブルと椅子が二つ、棚が一つあるくらい。そこにも何もいません。

ここが空いた部屋だといっても信じるほど、ここには一刀ちゃんの匂いがまったくしません。

膝を集めて体育座りになったまま寝台の上でこっちを見ている一刀ちゃんの顔には、涙を流した後が二つありました。

「……」

人の違うところを認めることは、人としては必要な嗜みでありますけど、それができる人間は少ないでしょう。

ましてや、子供にできるはずもありません。

一刀ちゃんが知っていた華琳さんの優しい顔、厳しい顔、それでも自分のことを考えてくれている顔。

今日の華琳さんの顔はどっちでもありませんでした。

新しい顔。知りたくなかった顔。

【……】

何か言ってください……よ。

【……】

せめてあんな華琳さんは嫌だとか、あんな華琳さん見たくないとか、それとも……。

【……】

【ボクがいけないの】

……

＞pf＜

一刀ちゃんのお父さんとお母さんが一刀ちゃんが他の子たちと違う道を歩いたのは、一刀ちゃんが五才の時でした。

その時の一刀ちゃんは、まだ普通な子供でした。

いえ、普通な子供に見えた、というわけでしょうね。

ありふれた話です。

ありふれてたまる話ではないのですが、

公園で遊んでいた一刀ちゃんは、公園の他のおばさんたちを放していたお母さんの目から離れ、道路へと向かいました。

そして、

ギギギィィィーー！！！

そこで車は止まりました。

でもいきなり出てきた一刀ちゃんの寸前で止まるという奇跡はあらず、

誰か勇敢な大学生が自分の身を投げて子供を助けるという奇跡もあらず、

「一刀！かずとおおおお！！！」

一刀ちゃんのお父さんは、母としての責任を疎かにした妻を叱咤しました。

車にぶつかった一刀ちゃんは重患者室で目を覚まさず。

一ヶ月、二ヶ月、半年が経って、子供を入院させることによって家に金銭的問題が起こり始め、夫婦の間では喧嘩がない日がなくなりました。

そして、一刀ちゃんが気を失ったまま一年が経つ頃、お父さんとお母さんは離婚することになりました。いいえ、どっちかと言うとお父さんの一方的は宣告でした。

その後、お母さんだけが一人で一刀ちゃんを看護しました。

一刀ちゃんのお母さんが一人になって一週間過ぎる頃、病院では大変なことが起こっていました。

重患者室の一刀ちゃんがいなくなっていたのです。

徹夜していた看護師急いで担当のお医者さんに、お医者さんは急いで家で寝ていたお母さんに電話しました。

電話を受けているお母さんの顔は驚きに満ちていました。

けど、それは病院から一刀ちゃんがいなくなったからではありませんでした。

そのいなくなった一刀ちゃんが、自分の側に寝ていたからでした。

事故から一年後、一刀ちゃんはようやく起きていました。

でも、一刀ちゃんは何も話しません。

お医者さんの言うとおり、事故によって脳に異常が起きたのか、解るはずもありませんが、

それより大変なことは、

一刀ちゃんが毎晩毎晩病院から消えてお母さんが寝ている寝台に現れるということでした。

次の日病院に戻しても、その夜には家に戻ってくる。

一人で来られる距離ではありませんでした。

バスで一時間、子供が一晩を歩いても辿り着くはずが無い距離。

そんなに遠く離れている家に、一刀ちゃんは毎晩毎晩来てました。

そんな一刀ちゃんを見て、お母さんが先ず思ったことは、不幸にも恐怖でした。

その頃、病院代と生活のために厳しい日々を過ごしていたお母さんに、お母さんとしての慈愛心はもうなくなっていたのでしょうか。

日々が続くほどお母さんは、何も言わずに、ありえないところから自分の側に現れている一刀ちゃんのことが怖くて怖くてしょうがなくなってきました。

最初からそういう人だったのか、厳しい日々と夫との別れという衝撃が彼女をそうさせてしまったのかは解りません。

二つだけ確かだったことは、一刀ちゃんは何も言えなくてもお母さんの言葉をいつも従ったってこと。

そして、そんなお母さんは一刀ちゃんと一緒にいることを拒んでしまったこと。

お母さんの肌の温もりが恋しかった頃の一刀ちゃんは、変な理由で早くもお母さんから距離を取らされてしまいました。

口も言わずとも、気づいたらいつの間にか側に現れる一刀ちゃんの仕草は、一刀ちゃんにとってはお母さんへの愛を求めた行為。

でも、お母さんはそんな一刀ちゃんから恐怖を感じ、やがては一刀ちゃんが自分の息子だということも忘れたのように扱いました。

それでも一刀ちゃんは、お母さんに依存しようとしました。

世界でたった一人、自分を守ってくれる人ですから。

お母さんが新しい家庭を作るまでは、少なくともそうだったかも知れません。

＞pf＜

【……】

最初から、そんな子はいなかったのように、皆もが一刀ちゃんを忘れてしまいました。

お母さんと一刀ちゃんを見捨てたお父さんも、再婚したお母さんも、皆変わってしまいました。

結局、親を失った一刀ちゃんは都立の保育院に任されるようになりました。

急にどこかの優しい人の養子になってもらうという奇跡もあらず、

その後、通った小学校でとてもいい先生に出会って、その後一刀ちゃんの不幸な日々は報われたという奇跡もあらず、

いなくなったお父さんや、それともお母さんが戻ってくるという奇跡もあらず、

一刀ちゃんはそう生きてきました。

「……」

…ところで一刀ちゃん、これ、あなたのですよね？

「！！」

学校でのかばん。私が預かっておきました。

どすっと寝台に落とされた自分のかばんで、一刀ちゃんは急いで開きました。

入っているのは普通の教科書と筆記具と……

一刀ちゃんが、消えてしまったお母さんの部屋から見つけた写真一つ。

他は全部燃やされていました。運良く家具の後ろに入って見つからなかった写真。

お父さんとお母さんと一緒に取った写真。

「……（ぽたぽた）」

皆変わってしまったのに、

お父さんも、お母さんも、

なのに写真だけは変わらずに残っていて、

それがもっと昔を恋しくさせてしまって、

一刀ちゃんは久しぶりに見たその写真を見ながら、ぽたぽたと涙を落としていました。

一体一刀ちゃんの何がいけなかったというのですか？

事故も、あんなことができるようになったのも、一刀ちゃんのせいではありません。

一刀ちゃんが親たちを困らせようとわざと車に飛び込んだわけでも、お母さんを怖がらせようと毎晩家に来たわけでもありません。

なのに、

一体一刀ちゃん、あなたの何がいけないというのですか？

コンコン

！！

＞ｐｆ＜

「一刀、私よ。入ってもいいかしら」

華琳さん、来ましたね。どうしますか？

「……」

写真とかばんを隠して、てててっと歩いて戸を開けるその動作には何の躊躇いも見えませんでした。

けどそれは、全ての状況を自分の悪さとして追い詰めた上にできた行動。

自分の手で自分を苦しめること。決していいことではありません。

がらり

「……」

「ありがとう」

華琳さんは中に入って椅子に座り、一刀ちゃんも反対側の椅子に座りました。

私がお茶を……あ、淹れませんね。黙って聞いていましょう。

「一刀」

「……」

「私は、これから半月ぐらい城を出て行くわ。春蘭と秋蘭も一緒にね」

「！！」

正面で華琳さんを見れずに俯いていた一刀ちゃんが驚いたように華琳さんを見ました。

「少し離れたところに、盗賊たちがいるという報告が入ったわ。私たちはその盗賊たちを討伐するために行くの。朝の時は、それのことで担当の人と話をしていたの」

「……」

「…怖かったのね」

「……（コクッ）」

『いつもと、違った。本気って感じで』

「そうね。…確かにそれは最初は本気で怒っていたけれど……一刀、前にあなたが言ったよね。自分のせいで両親たちが変わってしまったって」

「……（コクッ）」

頷いた一刀に向かって、華琳さんは椅子から立って、座っている一刀の前に立ちました。

「あなたのお父さんとお母さんが変わったことは、あなたのせいではないわ。あなたが関係ないとも言えないけどね」

「……」

「でも、少なくとも私には、あなたのことが必要なの」

「……？？」

「一刀、私はね。これからもたくさんの戦場に立たなければならない。たくさん戦って、たくさんの人を殺すことになるでしょうよ。そうなったら、私の心は少しずつ、荒んでいくでしょう」

「……」

「でも、あなたが私を笑顔のままに見ていてくれれば、私は今のこ

うしてあなたが見ている私で残っていられるわ。秋蘭や春蘭たちもね」

「……」

「……」

そこまで言った華琳さんは、スッと手を伸ばして一刀ちゃんの頭を狙いました。

「…（ぴくっ）」

少しぴくっとした一刀ちゃんでしたが、消える様子はいませんでした。

「私もね。いつもあなたの前では優しいお姉さんであって欲しいわ。けど、状況がそれを許さない。だから、一刀が少しだけ苦労をして頂戴」

「……＞＞なでなで＜＜」

撫でられるままぼんやりと華琳さんを見ていた一刀ちゃんは、

「あっ！」

＞pf＜

一瞬自分のの視野から消えたことに華琳さんはびっくりしましたけど、

スッ

直ぐにまた現れて、華琳さんの側に立っている一刀ちゃんでした。

布団においてあった竹簡をとろうとしただけです。

『一ヶ月もいないの？』

「…ええ」

『ボクは？』

「危ないから、ここに残っていなさい。ずっと歩かないといけないから、疲れるわよ」

『その間は一緒に寝られない？』

「……侍女の誰かに言っておくからそれで我慢なさい」

『……嫌』

「私にわがまま言うつもりなの？」

『一人で寝る』

「っ、そ、そう……」

『それと、』

「何？」

『我儘、言っていい？』

「……今回だけは私が悪かったから、許容範囲のうちならいいでしょう」

「……」

それを言われた一刀ちゃんは竹簡をおいといて、華琳さんに向かって両腕を開きました。

「……な、何？」

「？？」

解らないの？って顔で腕を上下に振る一刀ちゃん。結局また竹簡に何かを書き込むかと思ったら……

「なっ！」

……ぷっ

＞pf＜

『抱っこ』

＞pf＜

「春蘭！秋蘭！」

「「はっ！」」

「準備はできたかしら」

「はっ、全軍準備完了しました」

「そう、なら直ぐに行くわよ。遅れた分もっと強行軍になるから、全員覚悟しておくように」

「華琳さま」

「何かしら、秋蘭」

「その…北郷のことは…」

「もう大丈夫よ。安心なさい」

「そうですか……」

「悪いけどあわせる時間はないわ。帰ってきたからになさい」

「御意」

「全員、出陣！」

「……」

「華琳さま、どこか具合でも悪いのですか??少し顔が赤いのですが……」

「だ、大丈夫よ、桂花」

＞ｐｆ＜

まぁ…そういう華琳さんも新鮮でしたね。

「……」

しかしまぁ、我儘としては随分安かったんじゃありません？『毎晩一緒に寝る関係』としては

【そんなことないよ？一度してもらいたかったから】

まぁ、私が関係することではないですね。

しかし、直ぐに機嫌直しましたね。一刀ちゃん。

【だって嬉しかったんだもん】

華琳さんが必要としてくれるのですか？

「（こくっ）」

利用され易い性格ですね…いや、失礼。

それよりもう寝ましょう。当分間は一人寝ですね。

【さっちゃんは？】

僕ですか？…とまぁ、構いませんけど、一緒に寝るっていう感じはしませんよ？

・・・

・・

拠点フェイズ2　季衣默（前書き）

またしく拠点であります。
短いので今日は2つあげます。

「華琳さま、偵察が戻ってきました」

「そう、報告なさい」

ここは華琳さんたちが進軍している最中の場所です。

華琳さんが治めている土地の境を越えたところで、何かの群れが見えたため偵察を放ったのですが、それが只今戻ってきたそうです。

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、この辺りで暴れている賊の一員だと思われます」

「様子を見るべきかしら」

慎重に考えられる華琳さん。

「もう一度偵察を出しましょう。夏侯惇、あなたが指揮を執って」

「おう」

ふーん、この場面てなんでしたっけ……あ、確かここで許緒さんに……

「…うん？」

「！」

スッ

「春蘭、どうかしたの？」

「あ、いえ、何でも……」

「そう。なら今すぐ行きなさい」

「はっ！」

・・・

「……ぅ」

いや、危なかったですね。バレてしまうところでしたよ。流石春蘭さん、鋭い。まさに獣の感ですね。

「……」

バレちゃったら怒られるでしょうかね。

【来ちゃダメって行ったのに来ちゃったから……】

めっちゃ怒られるでしょうねー

「…ぅぅ〝……」

だった来なけりゃいいのに…

【だって…もう一人で寝るのヤダもん……】

はぁ……我儘な子ですから。

それより、春蘭さんが動き始めましたよ。先ずはあっちにいってみましょう。

「…（こくっ）」

スッ

＞pf＜

あ、こんな高い石山で見ると下に何がいるか全部見えますね。

「……（ブルブル）」

うん？一刀ちゃん、どうしました？

【…高いとこ、怖い】

何故来たし…

【……ねぇ、春蘭お姉ちゃんが行こうとするところって、あそこ？】

どうでしょうね……あれ？あれは……

「はあぁぁっ！！」

ドーン

人飛んだ！？

「！？」

ドーン

うわっ、こっち来る、一刀ちゃん危ないですよ！

スッ

ドン！

「うぅぅ……」

ああ、後ろのデカい岩にぶつかった。痛そう…というか死んでない？

「でえええええい！！」

「ぐおっ！」

「まだまだぁっ！てやあああああああっ！」

「がはっ！」

女の子一人を囲んで大勢の人たちが戦っていますね。

盗賊でしょうか。

「はぁ…はぁ…もう多すぎるんだよ」

今までよく戦いましたが、あの女の子ももう限界っぽいです。

春蘭さんが来るまではまだちょっと距離があるのですが……

「……！」

一刀ちゃん？

「っ」

一刀ちゃん、その棒で何しようとしてるんですか？

ギギーッ

棒を絶壁の端の岩の下に突っ込んで、ってちょっまっ！！

グ、グヴゥーー

っておい、岩！いくら梃使うからって、子供の体重に動くんじゃねぇ！！

一刀ちゃん、やめてください。危ないですよ！

「っ！！」

ブチッ！

「！」

…グググ…

…ドドドドー

って岩！山から落ち始めました！

先にはあの女の子と山賊の群れ！

間もなくぶつかります！

なんてことをしたんですかぁ！

「……」

スッ

ってまたどこに…

＞ｐｆ＜

ドドドドー

「夏侯惇将軍！アレを見てください！」

「あれは…！」

一つの岩で始まっていたものが、落ちながら周囲の石たちまで巻き込み、それは大きな山崩れになっていました。

「危険だ！総員、後退しろ！」

「ははっ！」

一度部隊を引かせる春蘭さん。

じゃあ、許緒さんは……

ドドドドー

「おい！アレ見ろ！」

「なっ！こんな時にぃ！」

「逃げろ！潰れ死ぬぞぉ！」

「あ！」

状況を理解した許緒さん。けど、疲れたせいか途中で足に引っかかって転んでしまいます。

「あっ！」

岩は転んできてます、このままでは間に合え……

スッ

「あ、え？」

「……」

「っ、誰？」

強い日の下なせいか、一刀ちゃんの服が光っていて、許緒さんは一刀ちゃんの姿をちゃんと見ることができませんでした。

転んだ許緒さんの手を掴んだ一刀ちゃんは…

「……っ」

スッ

グググー！！

岩が通った後、その場は砂塵で何も見えませんでした。

＞ｐｆ＜

スッ

「……」

「え？あ、あれ？何、ここは…」

一刀ちゃんと許緒さんがまた現れた場所は、山崩れが及ばなかった、少し離れた場所でした。

「……」

「な、何か良く解らないけど、お前が助けてくれたの？」

「……（フルフル）」

まぁ、そこで頷いたらアレです。自分で事件起こして自分で解決するという……マッドサイアンティストとかがたまにやる悪事の一つになります。

「え？どういうこと？」

「……」

一刀ちゃん、後ろから春蘭さんが来ていますよ？

山崩れが一度止まったところ、偵察に来たようです。

「！」

「あ、あれ、ちょっと」

「……」

慌てる許緒さんを見て、一刀ちゃんは一度手を振ってから、

スッ

消えてしまいました。

「あ……」

「大丈夫か、勇敢な少女よ」

「あ、はい？…あ、はい」

「よかった…良くこんなところに逃げ切ったな」

「え、いやー、それはその……」

「うん？」

「い、いえ、何でもないです……あの、それよりお姉さんは…誰ですか？」

＞ｐｆ＜

「……はぁ…はぁ…」

大丈夫ですか？

【これ…すごく疲れる…】

ああ、自分以外の人まで移動させるとすごく体力入るんですね…ってか誰もやれといってませんよ。

【でも……】

はぁ…まぁほおっておけない気分もわかりますけどね……

でも、

盗賊の全員まで助けるんだったら最初から岩落とさないでください。

【逃げられる程度だろうと思ったのに】

考えてなかったんですか、途中で落石増えること。

【うん】

あぁ……

あ、春蘭さんの部隊が盗賊たちを追い始めましたね。

【疲れた…】

はいはい、今日はもう戻りましょう？

【ヤダー、華琳お姉ちゃんと一緒に寝る】

こんなに大騒ぎにさせてまだ言いますか？今現れたら今回の事故も一刀ちゃんも仕業だとバレますよ？

【…ほんと？】

ほんとほんと

【……じゃぁ……】

スッ

…とまぁ、許緒さん、多分顔見てませんから、大丈夫でしょうね。

バレたらマジ怒られるでしょうし。

＞pf＜

「……あの子、何だったのかな……天使？」

拠点フェイズ２　季衣黙（後書き）

子供の一刀ちゃんが岩を動かせるかの件については、以前ＴＩＮＡＭＩで可能だという計算を受けたので変えてません（というかできないと言っても無理です）

拠点フェイズ2　秋蘭默（前書き）

秋蘭さんって、なんともない顔して結構こういうのに弱そうなんですよねー……自分だけの妄想ですか？

華琳さんたち、今頃だったら戦っているところでしょうかね。

【…大丈夫かな】

まぁ、心配にはなりますけど…きっと大丈夫ですよ。強いですから、華琳さんたちは。

「……（こくっ）」

ところで、

ピカッ！！

「！！（カタカタブルブル）」

陳留はいい加減天気酷すぎですね。

【ここ最近ずっと稲妻走ってるよ?嫌がらせなの?ボクがあんなことして罰当たったのぉ！?】

ピカッ！！！

…そうでないとも言えませんね……

「！！（うるうる）」

もう三日も陳留には夜になったらすごい雨と共に稲妻が走り続けて

います。

一刀ちゃん、ここ最近ずっと部屋の中で布団で体包んでカタブル状態であります。

【うぅ…もう怒られてもいい、華琳お姉ちゃんのところに行く】

まぁ、そう来ましたか。

仕方ないですね。

まだ寝るには早い時間ですし、もうちょっと待ってたほうがいいですよ

「…ぅ…」

ゴロゴロ！！

【もういやー！】

＞pf＜

その頃華琳さんたちなんですが…

ピカッ！

「これじゃあ進軍が遅れてしまうわね…」

案の定、こっちにも雷が…

ちなみにこの現状は中原全体で観測されています。

人工衛ｓ……いや、上から見てみて、なんとなく解りました。

「天気の悪さは予想のうちです。問題ありません」

「そう。まぁ、私もこんな天災によってあなたの首が落ちることをみたくはないけどね」

「……」

華琳さんの言葉を聴きながら、何故か許緒、季衣さんに目が行っている桂花さんでした。

何故でしょうね。

そういう季衣さんはどうしているのかというと、

「あの…春蘭さま」

「うん？どうした、季衣」

「あの…その…今日、春蘭さまと一緒に寝てもいいですか？」

「うん？…別に構わんが、何故だ？」

「いえ、特に理由はないんですけど…なんとなく、そこはかとなく……」

「??」

「…姉者、季衣は最近天気が悪いから一人で寝るのが怖いのだ」

季衣がもじもじしているのを見て、側にいた秋蘭さんが言いました。

「しゅ、秋蘭さまぁ」

「何だー、そういうことだったのか」

「うぅ……」

「しかし、季衣もまだ子供だな。雷など何が怖いというのだ?」

「それは…その……音大きいし、ぴかってするし…木とかに当たったら焦げ焦げになるし……」

「解った。私は構わないよ。どうしてもっと早くいわなかったのだ?」

「うぅぅ…恥ずかしいです」

「まあ、良い。今夜は私のところに来い」

「はい」

何か、この人たちの中でこんな話をすると、すごく不穏な気がするのですが……

「…！あ、あの、華琳さま」

「？何かしら、桂花」

「あの…その…実は、私もその……雷が怖いというか……」

「……」

……

嘘だろ、絶対。

「あははは！！何だお前は。その年になって雷が怖いと言うのか？」

「お、大きいなお世話よ！怖いんだから仕方ないじゃない！」

「解ったわよ。二人とも騒ぐのはやめなさい」

ピカッ！

「キャー」

「き、きゃぁ（棒読み）」

各々春蘭さん、華琳さんの腰を掴まえる季衣さんと桂花さんでしたが……

「「「……」」」

オイ、そこの猫耳、それでも策士か？あぁ？

「…桂花？」

「え、えっと……か、華琳さま…私も…あの…」

「はぁ……まぁ、いいわ。後で私の閨に来なさい」

「は、はい」

「……」

うわ、華琳さん、何か企みがある顔。お仕置き決定ですね、わかります。

「……」

？？

秋蘭さん？

＞ｐｆ＜

ちょっと気になったので秋蘭さんのところに来ました。

「……さて、困ったな」

はい？

ピカッ

「……」

「……」

「……（ブルブル）」

…秋蘭さん？

脚、震えてますけど……ほんのちょっとだけど。

「姉者は季衣に持っていかれたし、華琳さまのところも先に乗っ取られてしまっては……今日も一人で寝るしかないか」

うへぇ、まさかこんなところに隠れた雷怖がりやがいたとは……

って、ちょっと待ってください。

今華琳さんのところに桂花さんがいますね。

ということは……

うお！！一刀ちゃん、そっちに行っちゃダメ！！

＞pf＜

スッ

「……」

「ぁぁんー！華琳さまー！私、もう……」

「こうなろうと嘘をついたのでしょ？いけない子ね……」

「あぁぁ……」

【さっちゃん、何でボクの耳を塞ぐの？】

間に合った……

一刀ちゃん、華琳さんのところは先客があるんだそうです。

【えー？じゃあ、どうするn…】

ピカッ！

「ぁ　ぇ！……」

耳を塞いで座りこみました。

【じゃあ、どうするの？ボクもう一人で寝るのヤダよぉ】

秋蘭さんのところに行きましょう。そこならいいでしょ？

【うぅ…解った】

スッ

＞pf＜

「……」

あれ？秋蘭さん、いませんね……

どこに行ったんでしょうか。

【……ねぇ、さっちゃん】

はい？

【ボク泣いていい？】

何故泣くのに僕の許可が必要なんですか、ってマジで潤わないでください。直ぐに戻ってきます。

ピカッ

ゴロゴロ

「！！」

あまりにも怖くて秋蘭さんの寝台に飛び込む一刀ちゃん。

どすっ！

「うぐぅっ！！」

「？？」

「ぅ…ぅぅ……」

「！！」

あれ？秋蘭さんベッドの中にいたんですか。

布団、何枚も重ねておいてあったから人があるのに見えませんでしたよ。

「ほ、北郷か？お前がどうしてここにいるんだ？」

「……（ぐすん）」

「北郷？」

ピカッ！

「！」

「…ぅ……（カタカタブルブル）」

秋蘭さんの腰を掴まえて絶対放さないかのようにじっとしている一刀ちゃん。

「……雷が怖くてここに来たのか？」

「……ぅぅ…（こくっ）」

腰を掴まえて上目付きで目を潤わせながら一刀ちゃんが頷きました。

「…そうか。だが、ここにお前がいることを華琳さまが知れば、うっ！」

「……！！」

華琳さんのことを言うと、もっと強く抱きついてくる一刀ちゃんでした。

それも嫌なんですね。

というかそっちのほうがもっと嫌じゃないですか？

「わ、解った、華琳さまには内緒にするから先ずは放せ」

「……」

『本当に、言っちゃダメだからね？』

「ああ、解った」

「……（にぱっ）」

「……ふふっ」

笑顔の一刀ちゃんを見て、秋蘭さんも笑いますが、

ピカッ！

ゴロゴロ！！

「ぅ…！！」

「！！」

今度、先に相手を抱きしめたのは秋蘭さんでした。

「…？？？」

「……（ブルブル）」

【…ねぇ、さっちゃん】

はい？

【秋蘭お姉ちゃんって……】

はい、一刀ちゃんの考えている通りかと。

「……」

「……うん？」

震えていた秋蘭さんの頭を撫でる一刀ちゃんでした。

いつもと逆ですね。

あまり似合いません。

「（むっ）」

いや、まぁ…似てるとかそういうの関係ないですね、はい。

＞ｐｆ＜

「それじゃあ、灯りを消すぞ」

『消さないほうがいい』

「…そうだな。それじゃあ、このまま寝よう」

「（こくっ）」

そしてそのまま寝台に戻る秋蘭さん。

「久しぶりだな、北郷と一緒に寝るのも」

『うん、…あ、あのね、あの城壁の上の時ね』

「ああ、解っている。怖かったんだろ？私たちがお前の親みたいに変わってしまうのが」

「……（こくっ）」

「大丈夫さ。華琳さまも私も、決してお前を遠ざかるようなことはしない」

「……ぅ…」

「寧ろ、華琳さまは北郷が私たちを遠ざかることを心配しているだろう」

「？？」

「北郷、私たちはこれからも…この山賊討伐だけではなくて、たくさんの敵と戦わなければならなくなる。それは、今みたいに単に相手が悪者だからだけではなく、華琳さまの道に邪魔者になるとしたら誰でもだ」

「……」

「そんなことになったら、北郷、お前は華琳さまや私たちのことを怖く感じてしまうかも知れない。華琳さまがお前にここに来れないようにいっておいたのも、その理由だろう」

実際のところ、危ないからというのは少し言い訳としては劣ることがなくもないですね。

どっちかというと、猛者たちが集まっているここの方が、陳留の空の城よりは安全と言えるでしょうし。

「……」『嫌いにならない』

「…北郷」

『約束する。秋蘭お姉ちゃんたちのこと、嫌いにならない。これからも、ずっと一緒にいるだから、秋蘭お姉ちゃんも約束して。ボクのこと嫌いにならないって。ボクのこと見捨てないって』

「……ああ、約束するさ」

「……（てへ）」

約束するという秋蘭さんの言葉を聞いた一刀ちゃんは、嬉しそうに秋蘭さんの体にもっとくっつくのでありました。

ピカッ

ゴロゴロ！！

稲妻は続いていましたが、二人ともう気にしていないようです。

「……お休み、北郷」

「……（こくっ）」

二人とも、お休みなさい。

・・・

・・

・

＞pf＜

「アハハハー、跪いて脚をお舐め！」

「あぁぁん、華琳さまー」

うっせぇわ、お前らもう寝ろ！

ゴロゴローーー

拠点フェイズ２　華琳黙（前書き）

ＴＩＮＡＭＩに行くとこれの没だったものがありますが、結構おかしいし、ここにあげると殴られそうなので自重します。

一刀「～～♪」

嬉しそうですね。

一刀「（こくっ）」

あ、そういえば、昨日伝令さん来てましたね。華琳さんたちが今日帰ってくるって。

一刀「（こくっ、こくっ）」

そうですね。早く華琳さんに会いたいですね。

一刀「（こくっ）」【何回かこっそり行ったけど、見てないから】

そうですね。…ああ、今頃なら行ってもいいんじゃありません？

一刀「？？」

ほら、もう半日ぐらい残っているし、今ちょっと早く迎えに行ったからって華琳さんが怒るとは思いませんよ。

【……そうかな……うん、そうだね】

じゃあ、今行きますか？

一刀「（こくっ）」

ラーメン屋さん「へい、御使いのぼっちゃん、ラーメンお待ち」

一刀「…ぁ…」

あ、そういえば昼食食べようとしたところでしたね。

＞pf＜

ここ、進軍中の曹操軍

スッ

一刀「……（きょろきょろ）」

あ、一刀ちゃん、危ないですよ。

一刀「…ぁ…」

一刀ちゃんを側に空いた車たちが通り過ぎました。

一刀「……？」

きっと輸送部隊ですよ。兵糧がなくなったみたいですね。

やっぱり、ちょっと足りなかったみたいです。

一刀「??」

あぁ…つまりここの人たち全員昼食とってないということです。

一刀「!!」【じゃあ、華琳お姉ちゃんたちも?】

さあ、どうでしょうね。将軍たちの分は残っていたか良く解りませんけど…華琳さんの性格を考えれば、兵たちが餓えてるのに自分だけ食べたりはしませんね。

一刀「……」

まぁ、あまり先走ってもよくありません。

とりあえず華琳さんのところへ行って、様子を見てみましょう。

一刀「(こくっ)」

・・・

・・

・

華琳「桂花。最初にした約束、覚えているかしら」

あ、あそこに華琳さんたちがいますね。

【あれ?この前見た春巻のお姉ちゃんも居るよ?】

はるまっ！？…いや、それはよしとして……

華琳「桂花、城を目の前にこんな話を言うのも何だけれど……私、とてもお腹が空いてるの」

あれ？…なんか、空気重くありません？

一刀「……」

あ、一刀ちゃん、今は出る場面じゃないですよぉ…ってもう遅いか。

桂花「ですか、華琳さま。一つだけ言わせていただければ…それはこの季衣が」

季衣「にゃ？」

まぁ…案の定の流れに来ましたね。

別に、一刀ちゃんが行っても行かなくても問題ありませんでしょうね。

てててて

華琳「不可抗力や予想できない状態が起こるのは戦場の常よ。それをいい訳にするのは……」

ぐいぐい

＞ｐｆ＜

華琳「…？？あ、か、一刀？」

桂花「なっ？！」

春蘭「き、貴様が何故ここに…！」

秋蘭「北郷！」

季衣「にゃ？」

一刀「……」

いつもの作法で自分の存在を示す一刀ちゃんです。

が、

華琳「一刀、どうしてここにいるのかしら」

『華琳お姉ちゃん、お腹空いた？』

華琳「私の質問に先に答えなさい」

『お迎えに来た。お腹すいた？』

華琳「一刀、戦場というものはね。無事に帰ってくるまでが戦場なのよ。私が戦場に来るなと言ったのは、それは私が城に着くまで来ちゃダメって言ったのよ」

『お腹空いた？』

華琳「あなた……」

『空いた？』

秋蘭「北郷」

一刀「……（むっ）」

華琳「……っ」

ちりちりっ

あれ？

あれ？何これ？

何で華琳さんと一刀ちゃんの間でスパークが……

桂花「ちょっとあんた、何よ華琳さまにそんな目を…」

『猫耳は黙ってて』

桂花「なっ！」

『お腹空いた？』

華琳「……ええ、空いてるわよ」

一刀「……」

スッ

あ、消えた。

桂花「な、何なのよ一体」

秋蘭「華琳さま、北郷は…」

華琳「ええ…どうやら怒らせてしまったようね…」

え?怒った?何故に?

＞pf＜

一刀「……」

ぐいぐい

一刀ちゃん、何してますか?せっかく華琳さんたち迎えに行ったのに黙って帰ってきちゃったりして…

一刀「……（イラッ）」

ぐいぐい

【何だよ。馬鹿じゃないの?】

はい?

ぐいぐい

【ねぇ、さっちゃん、どっかでノリない？ノリ？】

ノリ？

ええっとちょっと待ってくださいね…

確か前もって来たかばんに糊が……

「……（ジド目）

あ、あれ？この糊じゃないですか？？

【さっちゃん、私の手にいるのは、何？】

え？…ああ、そういえばそれって……

【さっちゃん】

はい？

【今ボク機嫌悪いから戯れこと言ったら容赦しないよ（ゴゴゴー）】

おお、いつの間にか僕って下僕扱い……いや、まぁ、怖いから従いますけどね。

何でこんな目に……

僕なんか悪いことしました?

＞pf＜

春蘭「あ奴が怒ったってどういうことだ?」

華琳「ふぅ……」

秋蘭「……多分、私たちがお腹を空かしていることに怒っているのだろう」

春蘭「はぁ?何だそれは」

秋蘭「…兵糧がこの頃に尽きることは帰ってくるところから知っていたことだった。途中で城に伝令を入れることもできたのだが」

華琳「これは私と桂花の問題だったからね。だから城に伝令を出した時、その話はしないようにいっておいたのよ」

秋蘭「それで、北郷は兵糧が尽きたことを先に言っていないことに怒っているということだ」

春蘭「うぅーん……」

桂花「だからって何よ、華琳さまに対してあの態度は!大体、あの子は一体何者なの?急に現れたと思ったら急に消えたりもして」

秋蘭「桂花、あの子は…」

華琳「秋蘭、今は一刀のことが重要じゃないわ。今重要なのは……」

ぐいぐい

華琳「うん？」

また来ました。

一刀「……（ハイッ）」

華琳「一刀…これは？」

帰ってきた一刀ちゃんが持ってきたのは大量のおにぎりです。

糊はならべくいい物を見つかろうと思いまして、韓国の知り合いさんにお願いしました。

一刀「……」

華琳「御飯に……この黒いのは何なの？」

『ノリ』

春蘭「はぁ？ノリは食えんだろ。しかもあれは白……」

一刀「……（ジド目）」

ああ、今の一刀ちゃんにそんな馬鹿事に付き合ってくれる余裕はなさそうです。

一刀「……」

華琳「何？それを私に食べなさいって言うの？」

一刀「…（こくっ）」

華琳「私だけ食べるわけにはいかないでしょ？こっちには四人の将と千の兵士たちがいるのよ。私だけ腹を満たす気はないわ」

一刀「（ピキッ）」

むしゃむしゃっ

あ！持って来たの食う！

それも凄い勢いで。

華琳「…？？」

皿にはかなりの量のおにぎりがあったのに、一刀ちゃんは皆が見る場でそれらを全部食べちゃいました。

一刀「……」

スッ

あ、また消えた。

春蘭「な、何なんだ一体？」

秋蘭「…もう私にも解らん」

華琳「まぁ、後で城に帰って何とかするわよ。今は……

ドーン！！！

ドーン！！

ドーン！

華琳「！？」

春蘭「何事だ！」

兵士「申し上げます！」

華琳「今のそれは何だ！」

兵士「曹操さま！部隊の行き先に車が！」

華琳「車？」

兵士「はっ！いきなり現れて…上には兵糧が盛ってあって、前に子

供一人が立って……」

華琳「！！？」

秋蘭「まさか…！」

春蘭「な、何だ？どういうことだ？」

＞ｐｆ＜

一刀「……（ぜーぜー）」

馬鹿ですか、あなたは……

人何人を直ぐ側に運ぶのも力使い尽くしたくせに、

普段なら馬二つが運ぶ車を三つも持ってきますか。

【うっさい】

おお、こわいこわい。

一刀「……（ブルブル）」

大丈夫ですか？

【頭がくらくらする】

帰って休みますか？

【ちょっと後で】

華琳「一刀！これは……」

秋蘭「まさか…北郷、こんなこともできたのか？」

一刀「……」

華琳「あなた何てことを……」

『華琳お姉ちゃんが悪いんだよ』

華琳「何を……何でそこまでするの？」

一刀「……」

一刀ちゃん、また何か書くのかと思いきや…

一刀「……」

見せずに他の竹簡に書き直しました。

『で？食べないの？ここまでしたのに、食べないとか無しだからね』

華琳「……」

春蘭「か、華琳さま…」

ぐぅー

秋蘭「……」

華琳「……っ」

季衣「……す、すみません。目の前に食べ物があるから、つい…」

桂花「あんたね……」

何か重い空気だったのが台無しに……

華琳「はぁ…解ったわ。食べるからそう怒らないでよ」

一刀「……（フラッ）」

あ

華琳「一刀！」

倒れそうになった一刀ちゃんでしたが、車を掴んでギリギリ倒れませんでした。

春蘭「まったく！脅かしやがって…」

大丈夫ですか？

【…お腹減った…これもう二度とやらない】

はい、はい。

そういえば、先おにぎり全部食べたのって、気力補充だったんですね。

基本小腹なのに、妙に沢山食べると思ったら…。

華琳「秋蘭、調理部隊に準備させなさい」

秋蘭「はっ」

華琳「一刀、おいで」

一刀「……」

動けないようです。

華琳「仕方ないわね…春蘭」

春蘭「はっ」

春蘭さんが車に近づいて、一刀ちゃんを抱き上げて華琳さんのところに行きました。

華琳「一刀、そういえばあの兵糧。手配したわけじゃなければ、倉から断りもなく持ってきたわね？」

一刀「……」『言って持ってきた、一応』

華琳「一応、ね……まぁ、後で今回のことについてはお仕置きがあるからね。期待してなさい」

一刀「…（こくっ）」

華琳「で、先持ってきたおにぎりとやらだけど、また作ってくれないかしら」

一刀「……」

華琳「疲れてるなら、後でも構わないけど」

一刀「…」『ヤ、もう作ってやんない』

華琳「あら、そう。残念ね」

一刀「……」

＞pf＜

秋蘭「うん？これは…先一刀が書いて捨てた……」

『餓え死に掛けてみたことある？』

秋蘭「……」

桂花「何見てるのよ」

秋蘭「…な、桂花、お前は死にかけるほど餓えてみたことあるか？」

桂花「は？いきなり何よ……まぁ、私の家は豊かだったからね。そんなことは…」

秋蘭「ああ、私もだ」

桂花「それがどうしたの？」

秋蘭「いや、特に何でもない……」

で、一刀ちゃん、何でそんなに怒ってたんですか？

【さっちゃんはね。金払ってやる２４時間飢餓体験とかやってみたことある？】

え？…一度だけありますね。あの時は大変でしたよ、本当。死ぬかと思いました

【……食い過ぎて腹千切れて死ね】

ええ！？

死ねばいいのにでもなくただ死ね!?

＞ｐｆ＜

食事中の華琳さん

華琳「……」

じっと御飯を見ているだけだと思ったら…

華琳「……」

御飯を手に握って（熱くないんですか？）

華琳「……」

中に一緒に出てきたマーボー入れて」

華琳「……」

また握る。

パクッ

華琳「……何やってるの、私？」

さあー。

ちなみにあれ、中身はメンマでした。

拠点フェイズ2　華琳黙（後書き）

普通の会話でも過去の辛さが滲み出る一刀ちゃんです。

桂花「ちょっと、あんた起きなさいよ！」

一刀「……（すー）」

桂花「起きなさいってば！今日朝から会議があるのよ！」

一刀「……（すー）」

桂花「…（ピキッ）」

あ

？！

どかっ！

一刀「！？　！？」

布団から飛ばされて床に頭をぶつけてパッと起きた一刀ちゃん。

何事かとあっちこっち見回ってます。

あれ？これって前にやってない？

桂花「ほら！早く行くわよ！」

一刀「…ぁ！」

桂花さんの腕に引っ張られて、一刀ちゃんは無理矢理引きずられて「桂花さんの部屋」から出ました。

何故一刀が桂花さんと一緒にいるのかというと、

この前、倉から勝手に兵糧を持ってきた罰です。

本人はことわってから持ってきたと言ったんですけどね（倉の担当者は半分脅迫されたそうです。一刀ちゃん何したの？）

それで、桂花さんの罰も一緒に合わせてもらうことになりました。ズバリ、今度一週間、二人で一緒にいることに決められたようです。

二人の腕は長い布で繋がっていて、役３ｍ以上離れないようになっています。

桂花さんは随分嫌な見たいですね。子供でも男は男のようです。

一刀ちゃんの場合……桂花さんのことがあまり好きじゃないみたいです。

何せこの人のせいで華琳さんが御飯食べていなかったのですからね。

寝るのも床に布団だけ敷かれて寝ていますし、多分、ここに来てこんな待遇初めてじゃないですか？。

多分、今起きなかったのもわざとですよ。

＞pf＜

華琳「では、朝の会議を……」

秋蘭「……」

一刀「……くー…くふー」

そうでもないか……

そういえば、この前リミットを明らかに突破して瞬間移動してましたからね。多分それのせいで疲労が溜まっているんじゃないかなって思います。

桂花「こ、こら、おきなさいよ」

華琳「ほおっておきなさい。秋蘭」

秋蘭「はっ、先日の盗賊と戦った地域ですが、州牧が逃げてしまったらしく、朝廷から華琳さまに、そちらの州牧も兼任なさるように申してきました。

華琳「まぁ、当然ね」

春蘭「しかし、自分が治める地を捨てて逃げるなど、外道中の外道ですな」

桂花「まったくだわ。でもま、おかげで華琳さまの覇道のための一

歩になったのだから寧ろ感謝するべきかしら」

華琳「自分の器に過ぎた場所まで上がった未熟者に礼など言う必要はないわ。寧ろその無力のせいで民たちを苦しめたのなら、見たとたんに首をはね……」

いつもの話で急に口を挟む華琳さんの目先には…

桂花「……華琳さま？」

この人じゃなくて、

一刀「……くぅー」

この子がいます。

っていうか一刀ちゃん？そろそろ起きましょうね。

一刀「……ん」

華琳「そういえば一刀？」

一刀「…？？」

華琳さんに呼ばれたことに気づいたのか、ちまちま目を開ける一刀ちゃん。

華琳「昨日町の人たちから陳情書が「いっぱい」届いたんだけど。昨日町に出かけていないの？」

一刀「……ぅ（こくっ）」

桂花さんと一緒にいるようになって三日目ですからね。

桂花さんの仕事を一応優先的にしますから、一刀ちゃんは桂花さんの隣で大人しくしているぐらい何もできませんでした。

といって、一刀が町に出かけなければ決してならないというのならそんなことはないんですけどね。

華琳「そうね……桂花、今日は政務は休んでいいから、一日一刀ちゃんと出かけなさい」

桂花「か、華琳さま？どうして私がこいつの遊びに付き合わなければ、あっ！」

ちょっ！一刀ちゃん！人の脚を蹴っちゃダメですよ！

桂花「何すんのよ！」

『遊びじゃない』

桂花「は？遊びじゃないと何？あんたが町の警邏でもしてるってこと？」

華琳「まぁ、見れば解るわ。桂花、この前言ったわよね。一刀が一体何者なのかって。今回のことでよく見るといいわ」

桂花「は、はぁ……」

華琳「それと一刀？」

一刀「？？」

華琳「人の脚を蹴っちゃダメよ」

一刀「…」『御免なさい』

＞pf＜

というわけで、一刀ちゃんと桂花さん、町に出かけてみました。

桂花「どこに行くのよ」

一刀「……」

桂花「何か言いなさいよ！」

一刀「……」『桂花お姉ちゃん』

桂花「何よ」

『盲人と急にぶつかって「前ちゃんと見て歩け！」と言ったら酷いと思わない？』

桂花「っ、それは……」

まぁ、その通りですね。

『特にどっか行く予定はないよ。桂花お姉ちゃん行きたいところある？』

桂花「あのね…私は遊びに来たんじゃないのよ」

『ボクも別に遊びに来てないよ。遊ぶかもしれないけど』

桂花「……」

何なのよ一体、って顔ですね。

あ、桂花さんはいつもそんな顔ですか。

・・・

・・

・

？？「あ、御使いお兄ちゃん！」

一刀「……（にぱっ）」

桂花「？？」

少女Ａ「御使いお兄ちゃん！」

少年Ｂ「昨日は何で来なかったんだよ」

一刀「…＾＾」

少年C「うん？この布は何？」

少女D「おねえちゃんだれ？？」

桂花「わ、私？…え、ちょっとあんた、何してるのよ！」

少女A「この人帽子が猫っぽい！面白い！」

少女D「ほんと！」

女の子たちが桂花さんの頭巾が気に入ったみたいです。

桂花「えっ？！ちょっと、やめなさい！潰れちゃうじゃない」

少年B「ねぇ、兄さん、今日は一緒に遊ぶんだよね」

一刀「…（フルフル）」

一刀ちゃんは何も言わずに微笑みながら布をさして、女の子たちに囲まれた桂花さんを指しました。

少年B「え？何？遊ばないの？」

少年C「何で縛られてるの？」

一刀「……」

『罰』

少年たち「???」

案の定、文字が読めない男の子たちです。

少女A「あ、それ知ってる！「ばつ」だよね！」

一刀「（びっくり）！！」

少年C「すげえ、お前いつから字読めるようになった？」

少年A「へへーっ、この前お兄ちゃんが買ってくれた絵本に書いて……あ」

一刀「……」

『内緒って言ったのに…』

少年B「ええっ！お前兄さんに本買ってもらったのかよ！」

少年C「ずるいよ！兄さん、俺も買ってよ！俺も勉強して、兄さんと話できるようにするから！」

一刀「…ぁ…（あわあわ）」

本、高いんですよねぇ。

災難ですね、一刀ちゃん。

＞pf＜

少年B「兄さん、ありがとう！」

少年C「またねぇ！」

『今月のお小遣いが……』

わーい、財布が空だー。

ちなみに秋蘭さんからもらいます。

桂花「自業自得でしょ？」

『でも、今度会ってもうちょっと対話できるようになったらそれはそれでいい』

桂花「……」

ぐー

『…私じゃないよ』

桂花「わ、私でもないわよ」

相打ちです。

そろそろお昼ですね。

でも一刀ちゃん、お金なくなりましたし、この人が払ってくれそう

にもないですし、昼ご飯は帰って食べますか？

『御飯食べに行こう』

桂花「あんたお金ないじゃない。私に払わせるつもり？」

『……ちょっとぐらいいいじゃん』

桂花「いやよ。何であんたなんかお金使わなくちゃならないのよ」

『は冗談で。大丈夫。お金なくても食べれるから』

桂花「は？」

・・・

・・

・

ここ、ラーメン屋です。

『おじさん』

ラーメン屋おじさん「…うん？おお、御使いのぼっちゃんじゃねぇか。その後ろのお姉さんは誰だい？」

『桂…荀？さん。曹操お姉ちゃんの新しい軍師』

一瞬真名で書こうとましたね。ダメですよ、一刀ちゃん

おじさん「あっ！こ、これは失礼しました」

桂花「別にいいわ。ていうか、あんた、そこに何を書こうとしたのよ」

『……今日は桂の葉が入ったラーメンが食べたいなって？』

そんなラーメンあるか……

おじさん「桂はないけどよ…どうだ？今度新作に出せようとするもんがあるんだが。試食してくれよ」

一刀「（こくっ）」

おじさん「荀？さまもいかがですか？」

桂花「仕方ないわね……」

＞ｐｆ＜

おじさん「へーい、お待ち！」

桂花「……ぁぁ……」

うわー。

一刀「……」【いただきます】

一刀ちゃん、突っ込まないんですか？

ラーメンが何か上にたくさん乗せられて本体が見えないんですが。

桂花「何なのよ。これは…メンマ？」

おじさん「あいよ。メンマでありますよ！それも荊南のメンマの名人が作った超高級メンマよ！」

一刀「……（すすー）」

桂花「麺よりも多いじゃない。メンマが」

おじさん「それはこの店の特徴ですぞ」

桂花「何なのよそれは…」

一刀「……（すすー）」

桂花「あんたも何か言いなさいよ！」

一刀「……・・・（ぱぁーっ）（☆キラキラ☆）」

桂花「？！」

あ、☆キラキラ☆は効果です。

後、後光とかも……

？？「な、何だ、あの露店！何か光ってるぞ！？」

？？「ああ、あそこは有名だ。またあの御使いの子が来たな」

？？「何、何？」

？？「お父さん、私あそこで食べたい！」

わー。広告効果は抜群です。

これはお金はもらいませんね。

寧ろ広告料もらいましょう。

桂花「あ、あんた、それは何なのよ」

一刀「？？（きょろっ）」

ちなみに本人は知らないようにしております。

本業、お客さんが知らないように助けることを経営モットーとしております。

桂花「……」

『桂花お姉ちゃん、早く食べないと美味しくなくなるよ』

桂花「わ、解ってるわよ……しかし多すぎるのよ。このメンマの量は。ラーメン屋ならもっとラーメンに気にしなさいよ」

おじさん「何をおっしゃるか！メンマはどんな料理にでも合う、究極の食材なのですよ」

桂花「だからってこんなにたくさん要らないでしょ！寧ろこれじゃメンマが主になってるみたいじゃない！」

おじさん「何か問題でも？」

桂花「大アリよ！」

おじさん「…そうかね、ぼっちゃん」

一刀「……？」

桂花「あんたは何なにもしらないみたいに頭傾げているのよ！」

メンマラーメンにあまりに夢中でした故に…

あ、ちなみにこの店の名前ですけど…言わなくても解りますね。

？？「おっさん、あの子が食べてるのくれよ！」

？？「こっちも！」

おじさん「はい、はい！しばしお待ち！」

一刀「…（すーすー）」

桂花「……」

＞pf＜

『美味しかったね』

桂花「…もう当分メンマは見たくもないわ」

『メンマ美味しいよ？』

桂花「美味しいとか美味しくないとかの問題じゃないわよ」

『……好き嫌いはよくないよ？』

桂花「あんた先から私のこと馬鹿にしてるでしょ」

？？「万引きだ！」

一刀「！！」

桂花「えっ？ちょっと、何よ！」

あ、あっちから誰か走ってきてますね。

万引き「退け、退け！！」

万引きがこっちに刃物を振りながら走ってきてます。

一刀「……」

それを見た一刀ちゃんは素早く桂花さんの腰を掴まえて、

桂花「えっ？ちょっとあんたどこ触ってるのよ！」

スッ！

桂花「……えっ？」

万引き「なっ！？」

一度移動したかと思いきや、また現れたのはその直ぐ上。

そして、そこを通りすぎようとしていた地上の万引きさんと桂花さん＆一刀ちゃんはそのまま…

ドン！

桂花「キャッ！」

万引き「ぐえっ！」

あ、万引きが桂花さんのお尻に敷かれました。

桂花さん、ＷＩＮ！

桂花「あいた…何なのよ……」

一刀「……（てゐ）」

一刀ちゃんはぶつかって倒れた万引きさんの手の刃物を遠く蹴りました。

そして、他の腕に抱いている、店から盗んだ高そうな重箱を取り出しました。

店主「おお！御使いさん！ありがとうございます」

遅れて追ってきた店の人が一刀ちゃんを見て言いました。

一刀「……」

店主「本当にありがとうございます！」

『警備に連絡した？』

店主「いえ、まだ……あの人たちに言ったらもう後が遅いですので……」

『そっか…はいっ、これ』

一刀ちゃんは重箱を店主に返してあげました。

そして、まだ万引きさんの上に乗っている桂花さんのところ振り向きました。

『桂花お姉ちゃん、大丈夫？』

桂花「大丈夫なわけないでしょ！何なのよ一体！」

『御免。説明してる暇がなくて…』

桂花「だからって私まで…あいたた……」

『大丈夫？』

桂花「特に悪いところはないわ。…ていうか何なのよ、それは。あんたなんでそんなことできるのよ」

一刀「何かできる」

桂花「説明になってないわよ…」

いや、無理ですから。

『おじさん、この万引き、後はお願い』

店主「あ、はい」

『桂花お姉ちゃん、立てる？』

桂花「ちょっと……って、手掴まえるんじゃないわよ」

一刀「……」

何も言わずに手だけスンと出す一刀ちゃん。

桂花「……」

何も言わずに手を掴む桂花さん。

＞pf＜

そして夜です。

一刀「（すー……すー）」

桂花「結局、ろくなこともなかったじゃない」

秋蘭「本当にそう思うのか？」

桂花「！秋蘭」

秋蘭「華琳さまのご命令だ。今日にて二人の罰を終わらせる」

桂花「あ……」

秋蘭「……桂花、お前、北郷を床で眠らせているのか？」

桂花「それがどうかしたの？男と一緒の部屋で寝るだけでも私は気持ち悪いのよ」

秋蘭「…損ずることをするな…お前は」

桂花「は？どういうことよ」

秋蘭「いや、何でもないさ……それより、今日の北郷はどうだったか」

桂花「別に？子供と遊んでたらお金使われて、お金ないから変な店でただで試食してもらって、後は万引き一人を私を利用して捕まったぐらいかしら」

秋蘭「そうか。…いつもどおりだな」

桂花「いつもこうなの？」

秋蘭「ああ、北郷が町に出るといつもそういう感じさ。子供たちに誘われて一緒に遊んで、店の人たちに誘われて御飯を食べて、たまに警備たちの手に収まらない悪者があっ

たら何とか自分でやっつける。北郷が町に出るだけで、町の治安が上昇して、活発化する」

桂花「……そうなの？」

秋蘭「ああ、町で誰一人でも北郷のことを知らないようにした者があったか？」

桂花「……嫌、なかったわね」

秋蘭「そういうことだ」

桂花「どういうことよ？」

秋蘭「北郷はそこにいるだけでも町で騒ぎの中心となっている。自分は自覚がなくても、実際、一日も北郷が町に現れないと、町の皆が一刀のことを心配して城に陳情書が山

ほど届いてくるほどだ」

桂花「そ、それほどなの？」

秋蘭「ああ、あいつの波及力はそれほどなのさ」

一刀「……ぅ…？？？」

秋蘭「む？北郷、起こしてしまったのか？」

一刀「……（フルフル）」

桂花「ちょうどいいわ。あんたもう帰りなさいよ。もう華琳さまの許可も来たわけだし、私の部屋で寝る必要もないじゃない」

秋蘭「そうだな。…北郷、良かったら私の部屋で一緒に寝るか？」

一刀「……」

『嫌、ここで寝る』

桂花「なっ！」

秋蘭「ふふっ、そうか。それは残念だったな。それじゃあ、私は戻るぞ」

桂花「ちょっと、何勝手に決めてるのよ！私が出て行きなさいと言ってるの！」

一刀「……（すー）」

桂花「ちょっと！起きなさいってばー！！」

拠点フェイズ2　桂花黙（後書き）

割と桂花の事好きな一刀ちゃんです。

四黙

「……」

タンタン

「……（にこっ）」

一刀ちゃん、今から町に出るんですか？

「（こくっ）」

毎日大変ですね…まぁ、遊ぶだけだし別に大変なこともないですか。

「（むっ）」

あ、はい、はい、遊んでませんよ…

あ、そういえば先、春蘭さんと桂花さんが一緒にいるのを見たんですけど…何やら華琳さんと春蘭さんと秋蘭さんで視察に出るとか…

「？？？」

え、聞いてないんですか？おかしいですね……

「……（むっ）」

あ、怒った。

スッ

＞pf＜

「うぅぅん……」

一方、春蘭さんと桂花さんは、約束支点で華琳さんと秋蘭さんを待っている最中です。

「うぅぅん……」

ちょっと、春蘭さん、いい加減…

「もう、いい加減大人しくしていなさい。あんたがそううろちょろしてるから、私まで不安になるじゃない」

「だけど遅いではないか。華琳さまと秋蘭は一体何でこんなに遅いのだ？」

「髪をお直しに行かれたんでしょ？いいから黙って待ってなさいよ」

髪って、あのクルクル…ああ、そういえばそういう話もありましたね。

スッ

「（びくっ）！？」

「きゃああっ！！ちょっと！いきなり現れないでよ！」

移動した場所がちょっと悪くて、桂花さんの前3センチというところに落ちちゃいましたので、桂花さんも一刀ちゃんもびっくりしちゃいました。

「何だ、人に黙っていろって言ったくせに、お前はでっかい声出すじゃないか」

「私のせいじゃないわよ！あんたそのいきなり出てくるのやめなさいよ！」

『ここで何してるの？』

「人の話を…」

「華琳さまを待っているのだ」

あ、スルーした。春蘭さんがスルーした。

『どうして？お出かけするの？』

「人の話を聞き…」

「今日は街を直に回ってみることにしてだな。華琳さまはちょっと髪の調整で遅くなっている」

『何でボク呼ばなかったし？』

「あのね。遊びに行くわけじゃないのよ。ちゃんとした意見も出せないあなたを視察に行かせるわけがないじゃない。大体あんたはい

つも遊びに行っているでしょ？」

まぁ、確かに子供を連れて行ってもしょうがないですね。寧ろ邪魔になりますし。

「……（むっ）」『確認してくる』

「「は？」」

スッ

え？ちょっと…この子どこに行きました。

まさか……

＞ｐｆ＜

スッ

『華琳お姉ちゃん』

「なっ！」

「？？」

「なっ、北郷…」

「？？」

「い、い、いぃぃ……

嫌あああああああああああ！！！！！何入ってくるのよ！出て行きなさい！」

＞pf＜

スッ

あ、戻ってきましたって、あれ？顔色が悪いですね。

「…どうした？」

『何かね？華琳お姉ちゃん悲鳴上げながら近くにいた花瓶や色々投げてきたの…ボク何がいけなかった？』

「どうせいきなり部屋に入ったんでしょ？そりゃ華琳さまだって怒るわよ」

『いや、怒ったというより……ま、いいや。何か今日は変だから出直す』

あれ？帰っちゃうんですか？

【何か華琳お姉ちゃんに罵られたら、やる気失くした。帰って寝よう】

普通に街にも出かける気まで失いましたか。

タッタッタッタッ

あ、あそこから華琳さんが……珍しく走ってきてるんですが。

「はぁ…はぁ…一刀、まだいるわね」

「??」

「はぁ～……間に合ってよかった…」

ああ、目に映ります。

クルクルじゃない髪を見られて、とりあえず無意識的に怒鳴りましたが、ふと気付けばこれって不味くない?って感じになって突っ走ってきたんですね。解ります。

「???」『何か解らないけど、ボク邪魔そうだから今日は部屋で待って』

「いえ!付いてきてもいいわよ。いや、寧ろ付いてきなさい」

「……」

先と今と接触の差がありすぎて混乱してる一刀ちゃんでした。

いやー、あの髪がですね……。

「華琳さま、そう先に走って行かれては……と、北郷」

暫くして秋蘭さんも来ました。

「前から言おうとしたが、そう人の部屋にスッと現れるのは良くないぞ。これからはそんなことは、せめて戸の前にして、入る時は戸を開けて入ってきてくれ」

「……（コクッ）」

何か、そういうのが生活化してましたからね。

確かに一刀ちゃんの悪いくせではあります。

「…はぁ……はぁ…」

「華琳さま、大丈夫ですか？…あんたのせいでしょ？」

『え？何でボクのせいになるの？』

「あんたね……」

「はぁ…いや、もういいわよ。それより桂花、城のことは任せたわよ。もし何かあったら、その時の判断は任せるわ」

「は、はい。そ、それより華琳さま、その髪は…」

「え？髪？……」

あ、そういえば、髪まだ直してる途中、

「嫌あああああああああああああああああああああ」

「？？？！」

もうこの人わけわかんねぇ……

・・・

・・

・

「…ねぇ、私の髪大丈夫かしら」

『大丈夫、大丈夫』

【モウワリトドウデモイイ】

うわ、一刀ちゃんが諦めたよ。華琳さんのこと諦めちゃったよ。

『でも、どうしてボク呼ばれなかったの？』

「呼ばなくても出掛けるから適当に会ってビックリさせようと思ったんだが…何故私たちが今日出掛けると解ったのだ？他の連中にも

言わないようにいっておいたのだが」

「（びくっ）……（じー）」

いや、いや、こっち見ないでください！？

「まぁ、それは良しとしましょう。それより一刀、私たちに付いてくるのことにしたなら、今日はきっちりと働いてもらうわよ。遊びに来たわけ行くじゃないんだからね」

『そのいつもはボクが遊びに回っているように言う言い方は凄く異議を立たせたいんだけど……解った』

今日の一刀ちゃんは何かガチガチしてますね。

「それじゃあ、桂花、後は任せたわよ」

「はい」

そうやって、四人は町向かうのでありました。

＞ｐｆ＜

「随分賑やかになったものね」

一刀ちゃん、あそこに旅芸人さん居ますよ。

「（キラキラ）」

「あ、ちょっ、一刀？」

ああ、仕方ないですよ。一刀ちゃん、ここに来る旅芸人たち大好きなんですから。

歌が好きだそうですよ。

この子が言うと何か意味有りげなのがあれですが…

「はい、それでは次の一曲、聞いていただけましょう」

「（わくわく）」

「こら、北郷、私たちは遊びに来たわけでは…」

「ほおっときなさい」

「う、しかし……」

「姉者、今は黙ってみていてくれ」

「秋蘭まで…」

この二人がこうする理由ですか？

一刀ちゃんの目がすごいキラキラしているからです。

あれが止められる馬鹿は相当居ませんよ。

「ああ、いいな」

「ええ……」

あの、二人とも？

もっとこう…政治的な、君主的意見は…？？

「ありがとうございます」

「それでは、次の一曲行って見ましょう？」

まぁ、仕方なく、私が悪人役をしましょう。

一刀ちゃん、いい加減華琳さんたちが待ってますよ。

「…！」

ふと気付いた一刀ちゃんは、おひねりを入れて、華琳さんたちのところに戻ってきました」

「あら、もう戻ってきたの？もう少し楽しんできてもいいのよ」

『…ごめんなさい』

一刀ちゃん、それ皮肉じゃないです。

「ま、まぁ、それじゃあ、狭い街でもないし、これから手分けして回ることにしましょう」

「では、私は華琳さまと」

「一刀は私に付いてきなさい」

「（こくっ）」

「えー……」

「諦めろ、姉者。我々は自分の身くらい守れるだろ？」

「あいつも自分の身くらい守れるだろ？」

それは確かに。

「仕方ない…北郷」

「？？（きょとん）」

「たまに、お前のその小ささがうらやましくなる。どうしたらそう成長しないのだ？」

「……」『参旬九食って知ってる？』

「何だそりゃ？」

「後で調べてやってみて。縮むかもしれないから」

【市ね】

この一刀ちゃんは、今日本当に機嫌は良くないですね。

【人が気にしてるところを突くじゃない】

まぁ、確かにその年頃並と比べりゃちょっと小さいですよね。

そういうタイプもあるんですよ。後でパッと成長する、

【さっちゃんはどうだったの？】

僕は…ちょうど小学校入る時から伸びましたね。

【…私の背持って行った？】

それ他の漫画のネタですから。古いですから。その作者もう他の作品書いてますから。

＞ｐｆ＜

ま、というわけで、華琳さんと一刀ちゃんは街の中央、秋蘭さんは左手側、春蘭さんは…もうめんどいのでいいや。

「…～♪」

一刀ちゃんは華琳さんと仲良く手繋いで歩いています。

「……ふぅ」

華琳さん、仕事してください。

「はっ！」

あれ？私の話聞いた？

「いけない、いけない…これだから一刀を呼ばなかったのに……」

「？」『呼んだ？』

「だから呼んでないわよ」

「……？」

【さっちゃん、今日の華琳お姉ちゃんって何かおかしくない？】

一刀ちゃんほどではありませんけどね。

「…？？」『華琳お姉ちゃん』

「な、何かしら」

「大通りは見ないの？あっちの方先に見たほうがよくない？」

君主さんより子供のほうが真面目に見える件について。

「大通りは後でも別にいいのよ。あそこは黙っていてもあそこから話をしてくるから」

「？？？」

「つまり、大通りの商人たちは力が強い分、自分たちの不便をもっと積極的にこっちに話してくるの。でもこういうところの人たちは、

詳しく見てないと私たちが下す命がこちらの人たちに逆効果を与える可能性もあるの」

「……」

五秒ぐらい考えた、一刀ちゃん。

『華琳お姉ちゃんは優しいね』

「なっ！」

わー、この子考えるのを諦めて上に、人を討った。

「べ、別に優しいとかじゃないわよ。人の上に立つものとして当然な考えよ」

「……」

「そ、それより一刀、あなたはこの街をいつも見てるでしょ。何か言いたいこととかある？」

「？？」『言いたいことって？』

「何でもいいわ。ここを見て思ったこと。些細なことでも行ってみたさい」

「……」

また五秒ぐらい考えた一刀ちゃん。

『あそこの料理店のおじさんね？この前お父さんになったよ』

「そ、そういうあれじゃなくてね」

『あっちの店はこの前食い逃げが捕まった暴れて店が大変なことになってたし、あっちは、炒飯が美味しい』

「……」

『あの店のおばさんは子供たちのお父さんが亡くなって一人で店開いてるし、こっちの店のお婆さんは、目が良く見えなくて、たまにお釣りをもらった金よりもたくさん返す時があるの』

「……」

『あの隅の店は子供がたくさん居てね。あの辺りに行くと時々一緒に御飯食べられるし、こっちの服屋はこの前ここの女の子が描いた意匠で服を作ったら、子供がいるお母さんたちから大人気だったの』

すごいですね。

街の店のこと、全部覚えていますね。

そうやって暫く話していた一刀ちゃんは、

「……」『役立てなかった？』

「…いいえ、そんなことないわよ。えらいわね、一刀」

「＞＞なでなで＜＜……ぁ」

褒められて顔がちょっと赤くなった一刀ちゃんは視線を華琳さんから他のところに向かおうとしました。

そしたらふと目に入るのが……

「はい、寄ってらっしゃい、見てらっしゃーい」

＞pf＜

露店を開いている女の子。…まぁ、ぶっちゃけて李典さんです。

「…」『始めて見るお店』

「露天商ね。ああいうのはいつも変わるし、地図にもないわ。ああいうのを見てみるのもいいでしょうよ」

近づいてみたら、

「……」

「うん？」

近く来て自分のところを見る一刀ちゃんをじっと見てみる李典さんです。

『何売ってるの？』

「えっ？」

「カゴ屋ね」

後についてきた華琳さんです。

『ねぇ、ねぇ、お姉ちゃん、これ何？』

でも、一刀ちゃんの目に先ず入ったのはそこじゃなく…

こう、…なんだっけ、

「爆発する何か」これだけは絶対違うな。

名前なんだっけ。

「おお、子供が見る目が鋭いな。これ名付けて「全自動カゴ編み装置」や」

『全自動カゴ編み装置？』

ああ、確かにそういう名前でしたね。

爆発するけど。

「せや、この絡繰の底に、こう竹を細ぅきった材料をぐるっと一週突っ込んでやな……なぁ、ちょっとこっちの取っ手持って！」

「（こくっ）」

「大丈夫なの？」

「大丈夫やー、多分」

多分でもない気もしますが。

にも関わらず、ぐるぐると回してみる一刀ちゃん。

「……おぉ…」

「な、すごいやろ？」

「底と枠の部分はどうするの？」

「あ、そこは手動です」

「……そう。まぁ便利といえば、便利ね」

『凄いね、お姉ちゃん天才？』

「嫌だなー。そんな褒められもうたら照れるやんか」

純粋で何よりです、はい。

ぐるぐる

って、それ以上それ回したら、

「ええ、ちょっと、危ない！」

「？？」

ドカーン！

あっちゃ……

「大丈夫、一刀？！」

「……」

あ、びっくりして固まっちゃいました。

「ああ、やっぱダメやったかぁ……」

「やっぱりじゃないわよ。そんなものだったら最初から子供にやらせるんじゃないわよ！」

珍しく怒っていらっしゃる華琳さんです。

「一刀、大丈夫？」

「……！！」

あ、気が戻った。

『ねぇ、ねぇ、今のもう一回やって？』

「「…え？」」

…なんか、気に入ったっぽいです。

「いや…。元々はこう爆発しちゃあかん装置やけどな…」

『そうなの？』

「……ヨヨヨー」

何か泣く方違くないですか？…ま、いっか

「大丈夫、一刀？」

『うん、でも、ボクのせいで装置壊しちゃった』

「ええねん、ええねん。寧ろこっちは悪いわ」

「……ぁ」『ねぇ、これカゴ一つ頂戴』

「何に必要なところでもあるの？」

『そのうちにある』

「はぁ……」

「あい、まいどー」

『ありがとう、お姉ちゃん。ここにずっといるの？』

「いや、ずっとはな…まぁ、もう何日はいるだろうけど」

『そっか、じゃあボク明日も来るね』

「え？」

『華琳お姉ちゃん、行こう』

「ええ」

カゴを持った一刀ちゃんは、華琳さんと一緒に視察の仕事に戻っちゃいました。

『またくるっとな……』

そして、この人は何か悩んでいます。

＞ｐｆ＜

「…で？何で揃い揃って竹カゴなんて抱いてのかしら？」

「こ、これはその…季衣への土産にございます！」

「今朝きたら、部屋で使うカゴの底に穴ができていたことに気付きましたので……」

『お揃いだね。何か面白いね』

何がですか？

「北郷、そのカゴ、お前が持ちには大きくないか？私が持とう」

最初から言おうとしましたが、それ持ってると前良く見えませんね。
途中で部屋に戻っておいとけば良かったものを…

『あ、ありがとう』

【秋蘭お姉ちゃんのカゴ壊したのボクだけど】

…え？

じゃあ、そのカゴの使いどころって……

「ま、いいわ。お買い物のせいで時間をかけすぎて、視察の仕事に怠っていたわけではないでしょうね」

「はっ、問題ありません！」

「無論です！」

それを華琳さんが言うのもあれですがね。

僕が見る限り、この人が一番サボってました。

「そこの、若いの……」

「……誰？

「そこの、お主……」

…あ、これは。

「占い師か？」

「占い師？華琳さまはそういうもの信じにならん。慎め」

「……春蘭、秋蘭、控えなさい」

「は？はぁ……」

「強い強い相じゃのぉ。肴に見えない、強い相じゃ」

「一体何が見えると？」

「兵を従え、地を尊び、その力、国に使えば国が繁栄し、豊かにできる稀代の名臣となるじゃろう…が、」

「今の国ではお主の力を収める器にならぬ。その溢れ出す野心は、国を侵し、野を侵し……いずれこの国の歴史に名を残すほどの稀代の奸雄となるだろう」

「貴様！華琳さまを愚弄する気か…っ！」

「！！（びくっ）」

一瞬に空気が変わったことに気付いた一刀ちゃんはびっくりしましたが、前のように逃げるようにはしませんでした。

【約束したから……】

そうですね。約束しましたもんね。

「乱世の奸雄大いに結構。その程度の覚悟もないようでは、この乱れた世に覇を唱えるなどできはしない。そういうことでしょう？」

「それから、そこの坊主」

「……？？」

「！？」

来た。

「まだ幼いというのに辛い人生を送って来たな……今まではお主の意思に関わらず不幸はお主に宿っていたが、これからはお主の意思でそれを選ぶことができるじゃろう…精々、せっかくの機会をちゃんと掴めるといい」

「……」

「あなた、この子のことも解っているの？」

五秒ぐらい考えた。

「（こくっ）」『ありがとう』

……

「華琳お姉ちゃん、行こう」

「……ええ」

そして、四人は城へ戻ると足を運びました。

さて、僕も帰りましょ…

「そしてお主じゃが…」

…！

僕のことが見えるのですか？

どうして

「その話は良い。お主に言いたいことがある」

…？？

「大局の示すまま、流れに従い、逆らわぬようにしなされ。さもなくば、待ち受けるのは身の破滅……くれぐれも用心なされ」

待て、その予言は…！！

「……」

うん？

…もしもし？

「……」

…僕が、見えない？

じゃあ、先のあれは…？

・・・

・・

・

四黙（後書き）

三羽烏&魏定番のフラグ立ち場です。

萌将伝のネタがあったので一応説明しておきます。

華琳さんは毎日そのクルクル髪をセットするために特殊の機会を使ってますが、自分が気に入る形になるまで、その髪型を人にみられることを非常に嫌います。

萌将伝では礼の機会が壊れて一日部屋から出て来なかって困ったことになるという話がありました（どうでもいいけど麗羽も同じく）

「はいー、寄ってらっしゃい、見てらっしゃいー」

あ、李典さんです。

今日も昨日と同じところで竹のカゴを売っています。

「あぁ……やっぱこんなところじゃあ、イマイチやな……二連敗は流石に避けたいんやけどな」

あ、昨日負けたんですね。誰が一番売るか。

まぁ、仕方ないですよ。

確認してみましたが、楽進さんのところは何かすごいオーラが漂っていて人が寄ってきますし、

于禁さんは服屋が並べている街で、服を選んでいる人たちに対してカゴを売っていたりして、地の利があります。

それに比べて李典さんはそれでもなんか目立っていたあの絡繰も壊れちゃいましたし、先ず負けて入ってるといってもそう間違ってはないはずです。

「あぁ～場所変えようかなぁ～。といっても無理やし。あの子、また来るって言ったしな……」

あ、ちゃんと待っててくれてるんですね。

ところで、一刀ちゃんがそろそろ街に出てくる時間ですね。
約束したのもありますし、出たところ直ちにここに来るだろうと思いますが……
ぐいぐい
「えん？」
「……」『こんにちは』
「うわーっ！」
こら、一般人にそれ使っちゃダメだって華琳さんに言われたでしょう？
「い、いつからいたの？」
「……」『ちょっと前』
「ぜ、全然気付かへんかったけど」
＞pf＜
『そんなことより、お姉ちゃん今日は売れた？』
「いんやー、今日はまだ一つも売れてへんや……これじゃあ、今日も負けちゃうなぁー」

「……？」

「ああ、実はなぁ。ここにうちの友たち二人もカゴ売ってるんやけどな。商売ビリな人が夕飯奢りなんや」

『それは大変だね』

「ああ、昨日も負けたやから……なぁ、坊やや」

『一刀だよ』

「…あ、一刀というんか。ウチは李典や」

『李典お姉ちゃん』

「あー」

『つまり、売れて欲しいんだね？』

「まぁ…せやなー」

「……（こくっ）」

【さっちゃん】

あ、はい、はい、何ですか？

【こう、目立つっぽい何かないかな？】

ええ？そこまでして助ける理由もないでしょう？

【いいからぁー】

あぁ…はい、はい。えっと……こういう立て札でいいですか？

周りがピカピカってしますけど。

【もうちょっとああいうのは？】

ああいうのは流石にまずいでしょ。

というか、正直一刀ちゃんがそこにいるだけでも十分目立つだと思いますが？

街の有名人が一つの露店でずっと立っていると、誰でも一度は振り向きますって。

「……！！」

【さっちゃん頭いい】

へへぇ、でしょ？

「あの…一刀や、先から壁の方みてなにしとるん？」

『もう終わった』

そして一刀ちゃんは、竹簡に大きく字を書きました。

『竹カゴ売りまーす！！！』

＞ｐｆ＜

「うっそやろ……」

昼間がまだ過ぎない頃、露店にはもうカゴが残っていませんでした。

一刀ちゃんの宣伝力、マジパネェッス。

『これで今日は李典お姉ちゃんが一等だね』

「あ、あぁ…せやな。しやし、こんなに早う終わっちまうとは思わんかったわ。何か、一刀ちゃんここで有名な子っぽいしな」

『そんなことないよ。普通のそこらじゅうの子供だよ』

ふざけんなよ、おい。

『そんなことよりね。もう売るものなくなったから、ボクと遊びに行こう』

「え？なんや。ナンパしてくれるん？」

『ふえ？』

この子、本当に単に遊びに行きたいだけです。

そういえば今日は皆城に居ませんね。

最近この辺りで盗賊たちがたくさん動いていちゃって、手に余る状態のようです。

本当に世も末ですね……

「ま、ええわ。どうせもうやることもあらへんし。途中で凪たちに会ったらちーとからかってあげようかな」

「……（にぱーっ）」

「で、どこにいくん？ウチはこの街はようしらへんし、こういうのは男の人が先に行くんやで」

「（こくっ）」

どこに特に行くところがあるようですね。

＞ｐｆ＜

「こ、ここって……」

鍛冶屋ですね。

しかも、ここって城でも注文入れるほど一流の鍛冶屋ですよ。

「おお、これはすごいなぁ……」

「……（きょろきょろ）」

誰かを探しているようにきょろきょろ見る一刀ちゃん。

そして、

「……（ぴかっ）」

「うあぁー、ちょっと、一刀ちゃんや」

李典さんの腕を引いて中に連れて行きます。

そこにいたのは……

「うん？おお、御使いの坊主じゃねぇか」

『こんにちは』

ちょっ！その人この鍛冶屋の親の職人さん！

『このお姉ちゃん、昨日言ってた人』

「え？」

「ほぉー、このお譲ちゃんがなぁ……」

「あ、あのぉ……何の話やら」

「御使いさんから話は聞いた。自動にカゴを作れる絡繰を作ったよ

うじゃねぇか」

「え？ああ、いや、それは…もう壊れてしもうたし」

「俺でよかったら構造を教えてくれれば少し改良できるように一手打ってあげられるがな」

「え？ちょっ、おっさん、それホンマか？」

「聞けば、竹カゴの露店を開いていたようじゃないか。完成したら凄く頼りになるものではないのか？」

「なるさぁ、あれが本当に使えるもんになったらもうウチの村の人たちも苦労せへんで済むしな」

「なら、その物、どういう仕組みなのか少し聞かせてくれ？」

「あぁ、でも、ええのか？そんなことしてくれて」

「なぁに、あの坊主の頼みなら、もうちょっと無茶なことでも問題ない」

「……一刀ちゃんや、お前本当に何者なん？」

「……？？（きょとん）」

いや、何わからないって顔を……

＞ｐｆ＜

最初からこうしようと考えていたんですか？

「（こくっ）」

面白かったから。

別にあの人が誰か知ってやったわけではないんですよね。

「？？」

あの人たち、これから仲間になるんですよ。

【たちって、じゃあ、李典お姉ちゃんの友たちという人たちも？】

はい。

ああ、でも……

「？？？」

あ、いえ、その話はその時になったらしましょう。

「真桜！」

あ、あそこにいるのは……

「うん…？あ」

職人さんと話をしていた李典さんは後ろから聞こえる馴染みな声に振り向きました。

「昼に誘おうときてみたら……露店もサボってここで何をしているんだ？」

「な、凪！」

「？？」

ちょっと離れたところにいた一刀ちゃんは、二人が話しているところに行きました。

「真桜……村の皆が頑張ってくれたのに…お前はこうしてサボって…（ごごごー）」

「いや、ちょっ！な凪、誤解だってー！」

「誤解も何も…」

ぐいぐい

「っ！！」

「！！（びくっ）」

スッ

ああ、楽進さん怖い顔。

助けるつもりで突いてみたら、真桜さんの後ろに隠れてしまいました。

「なっ…今のは……」

「……（ひょこ）」

「な、凪、とりあえず落ち着いてウチの話聞きなって」

「？？？」

＞pf＜

「そうか……この子のおかげで全部……」

「……」

「なぁ、真桜」

「うん？」

「どうしてその子はお前の後ろに隠れて私を怖がる目で見つめてるんだ？」

「そりゃ凪が怖いからじゃあらえへんの？」

「なっ！どうして私を……」

だって、最初見せた顔が気に満ちている、そりゃまあ相手が友たちでなかったら殺していたというような顔をしていたら、肝の小さい一刀ちゃんが驚きもしますよ。

「あんな、一刀ちゃん。凪がああ見えてもええ奴なんよ。だから、ほらな」

「……」

李典さんの話を聞いて、てくてくと楽進さんに近づく一刀ちゃんです。

「……」

「あ、えーと…」

「あ、その子何か言葉はいえないっぽいからそこらへんは解っておきな」

「あ、えーと、その、先は悪かった」

「……（じー）」

「……うぅ…」

「……」『痛くない？』

「え？」

『体、傷たくさんあるから』

あ、先ずはそこに目が移りますね。

「ああ、…大丈夫だ」

「……」『痛そう』

「昔の傷だ。今はなんともない」

『ボクもね。こういう傷あるの』

「え？」

そう言いながら、一刀ちゃんは上着をたくしあげて、腹を見せました。

「なっ！」

「ちょっ、これって……」

一刀ちゃんの腹には、

車にぶつかった時に手術した痕が、きっちりと残っていました。

腹を横に分ける、子供がもちには大きい傷です。

手術とかが広まってないこの時代なら驚くことでしょう。

「…おい、それ大丈夫なん？」

『もう大丈夫。昔の傷だから』

服を戻してから一刀ちゃんは言いました。

『ボクはこれしかないけど、お姉ちゃんはたくさんあるね』

「ぁ……」

楽進さんは驚いて口が閉じれないようです。

「せ、せや！凪、昼ご飯食べに行くって言ったな。早う行かんと時間なくなるでー」

「あ、そ、そうだな」

重い話を流そうとする李典さんとそれに乗る楽進さん。

「一刀ちゃんも一緒にいくんやろ」

「（こくっ）」

「おや、もう行くのか？」

鍛冶屋の職人さんの声でした。

「ああ、おっさん、ありがとう。勉強になったでー」

「ああ、また暇があったら来い。待ってるぜー」

「ありがとう」

そうやって三人は鍛冶屋を後にしたわけですが……

「ひっ！」

「……」

「ぁ……」

「…さーわー」

サボって喫茶店で爪に手当てしていた于禁さんとばったり会っちゃいました。

『李典お姉ちゃんたちの友たち？』

「ああ、于禁っていうんやけど…ちょっと、あっちに行こうな、一刀ちゃんは」

「？？？」

「沙和ー！！！」

「きゃー！！！」

ドッカーン！！！

まぁ、そういう話もあったなぁ、ってお話でした。

＞ｐｆ＜

「あうぅ……真桜ちゃん、凪ちゃんが怖いのー」

「沙和が悪いんやろ。それより、ほら、挨拶しな」

その時、初めて一刀ちゃんを見る于禁さん。

「うん？…わはー！」

そして、

「この服かわいいのー！」

うえっ！？そっち？！

「（びっく）！！」

突然触ってくる于禁さんに驚いた一刀ちゃんでしたが、逃げることはせず。

「ねぇ、ねぇ、この服どこで買ったの？」

「……」

それはとても困る質問ですがね。

「子供がそれ知ってるわけないやろ」

「あぁ、そうなの……」

「……」

「っていうか、何で真桜ちゃん、こんな子供を連れているの？」

「ふふーん、聞いて驚きー。この子のおかげでなんと、ウチは持ってた竹カゴを全部売り上げたんや！」

「えー！？真桜ちゃんずるいのー。子供を利用するなんて反則なの」

「利用とは人聞きが悪いなー。ちゃんと同意を得てやったんやでー。なー、一刀ちゃん」

「（こくっ）」

「うーん…あはっ、じゃあ、真桜ちゃんは今大金持ちだから、昼ご飯は真桜ちゃんが奢るのー」

うわー、この子頭いい。

「なっ！ちょっ、それはないやろー！」

「それがいいな」

「凪までー？！」

【ねぇ、さっちゃん、もしかしてボク、余計なことして、李典おねえちゃんのこと困らせた？】

いいえ、一刀ちゃんは何も悪くないですよー。今日はよく頑張りました、えらいえらい。

「……」

「何でこうなったしー…ヨヨヨ」

＞ｐｆ＜

「あー、美味しかったのー」

「せやなー、美味しいし、値段もよかったしー、一刀ちゃんのおかげで今日はええことばかりや…ウチが奢ったことを省けば」

『ごめんなさい』

「こら、真桜、一刀のせいにするな」

まぁ、とにかくこれでこの人たちとも面識が立ちましたね……

「……！！」

あれ？一刀ちゃん、どうしました？

…あ。

「あら、一刀、こんなところで何をしているのかしら」

華琳さん、戻ってきましたね。

「……（カタブルカタブル）」

「え？一刀ちゃん、どないしたん」

「この人って誰なの？」

「控えろ！このお方は陳留の州牧、曹孟徳さまだ！」

あ、春蘭さんも。

「げっ！州牧さん！？」

「じゃ、じゃあ、ここの一番えらい人さんなのー？」

「ええ、そうよ。そして、…一刀」

「……」

「私たちがいない間、城で桂花と一緒に大人しくしていなさいって言ったはずだよね。何故ここで、こうしているのかしら？」

「……」

スッ

「あ！あいつ、逃げやがってー！」

「まぁ、後で相当のお仕置きね…そして、そこの三人」

「「は、はいっ」」

「はい」

「今日一刀の世話をしてくれてありがとう。感謝するわ」

「あ、いやー、世話というか…世話はウチらの方がもっとされたわけやし……」

「なのー」

「おかげで色々とたすけてもらいました」

「あら、そう……ただ遊んだわけではなさそうね……お仕置きは止してあげましょうか」

ふー、よかったですね。

「それじゃあ、私たちはこれで失礼するわ」

「は、はい」

そして華琳さんと春蘭さんは李典さんたちを通りすぎていきました。

「はぁー、びっくりしちゃったのー」

「一刀ちゃん、ただの子じゃあらへんと思ったんやけど……

まさか、州牧さんの息子さんやったのか」

ちょっ！すごい勘違い！

あ、まぁ、今のを見るとその考えも妥当ではありますが、

本人の前で言うと速攻首を刎ねられそうな発言ですね。

ま、まぁ…これ以上言うと、華琳さんの耳に入るかもしれませんし、

今回はこれで閉めることにしましょう。

この三人とは、またそのうち会えるでしょうしね。

拠点フェイズ3　凪・真桜・紗和黙（後書き）

※全陳留のいる民たちに死亡フラグが立ちました。

拠点フェイズ3　華琳黙（前書き）

一刀ちゃんと寝ることには十分な注意が必要です。
一度一緒に寝てしまうとそれからは周期的に一緒に寝なければ禁断症状が起きます。皆さんも気をつけましょう（笑）

最近なんかですね。

「？？？」

一刀ちゃん、華琳さんと一緒に寝る日数減ってません？

「……」

あ、無視しないでくださいよ。

僕の質問に気付かない振りをしながら食卓に座る一刀ちゃん。

手に持ってるのは単なる卵かけ御飯です。

いや、だからですね。

「……（パチッ）」

頂きますじゃなくてですね……最近秋蘭のところでも寝るし、無理矢理桂花さんのところでも寝てますし、たまに季衣さんの昼寝に付き合う時もあるんですが、華琳さんと一緒に寝るのみたことないんですが、僕。

【さっちゃん、そんなに一々確認してたんだ。変態】

はい、はい。話逸らさないでください？

華琳さんと何かあったんですか？

「……」

……

【何でここには納豆がないのかな】

そろそろ僕怒りますよ？

＞ｐｆ＜

「……」

政務中の華琳さん。

大真面目です。

「……」

がらり

「はっ！」

「華琳さま」

「…あ、桂花だったの」

一瞬、戸が開けるのを見て顔が明るくなってた華琳さんですが、相手を確認していつもの顔に戻ってきました。

「どうしたの？」

「いえ、その…政務中の華琳さまの手を煩わせるほどのことではありませんが、ちょっと、相談事がありまして…」

「相談？珍しいわね。言ってごらんなさい」

桂花さんがこんな不安な顔をするのって、本当に珍しいですね。

何か恐怖に染まってる顔も少し見えますし。

「華琳さま、私が華琳さまの気に障るようなことをしたなら教えてください。もう私、我慢できません」

「…ごめん、話が見えないんだけれど」

「北郷のことです。どうか、あいつを使って私にお仕置きをするのはやめてください」

「……は？」

「最初は、これも華琳さまのお仕置きだと思ったら…と思いましたけど、流石にもう限界です。週にあいつと二、三日も一緒に寝るのだったら、死んだほうがマシです」

桂花さん、何か新しいプレイに目覚めていたんですね。

「…桂花」

「はい」

「あなたの話をまとめると、何？一刀があなたの部屋に寝にいく頻度が増えた、そういうことかしら」

「それはもう増えたという話じゃないです。あいつと寝たのは、華琳さまが罰としてあいつと一緒に居させていた時だったんですよ」

「……そう」

「…あの、華琳さま？」

「何？」

「その…あいつが私の部屋に来たのは…」

「私がさせたわけではないわ。…解ったわ。一刀には私が話してみましょう。それと、そうね…私がそうさせたのだと思い込んでいたわけね…お詫びとして、今夜はたっぷり慰めてあげるわ」

「あ、…はい／／／／／／」

「……」

＞ｐｆ＜

「（パチッ）」

ご馳走様。

「おや？北郷。こんなところで何をしていたのだ」

あれ？秋蘭が来ましたよ。

『お昼ごはん』

「昼ご飯って…北郷、料理ができたのか？」

『御飯と卵あったから』

「ダメだろ。もっとちゃんとしたものを食べないと」

『大丈夫だよ』

「大丈夫なわけがあるか。私が何か栄養のあるものを作ってあげるから待っていろ」

『ふえ？そんな悪いのに…』

「そんなふうに思うことはない。私もちょうど昼食を食べようと思ったところだし、一緒に食べたらいい」

「……（こくっ）」

一刀ちゃん、大丈夫ですか？小腹でしょ？

【だからって断るわけにもいかないじゃない】

ああ、一刀ちゃんも大変ですね。

・・・

・・

・

そして、この頃政務中の華琳さん。

「…そろそろ昼食にしようかしら」

と思いながらも、一緒に行く相手がなければ街に行って食べるのもあれですね。

「たまには自分で作ろうかしら」

いや、普通なら政務の時なら侍女さんが昼食お持ちしてくれるのですけどね。

華琳さん、料理には厳しいからそこのは食べないそうです。

そうやって厨房に着いた華琳さんですが、

「うん？」

案の定、中には一刀ちゃんと秋蘭さんが居ますね。

『秋蘭お姉ちゃん、料理お上手なんだね』

「美味しいか」

「（こくっ）」

「……あの二人も…」

「も」って何ですか？

「ま、私なんて華琳さまに比べたらまだまだだけどな」

「？？」『華琳お姉ちゃんも料理できるの？』

「うむ？見たことないのか？」

「（こくっ）」

「それはおかしいな。私はてっきり、もう華琳さまが北郷に料理を食べさせたことがあるだろうと思ったんだがな」

「……」

【やっぱり】

そしてあなたさんはまた何が「やっぱり」ですか？

＞pf＜

で、何ですか？

「……」

【食べ過ぎて眠い】

ちげぇよ！

何で華琳さんと仲が悪くなったのかそれ聞いてるのですよ。

「……」

【ボクね、気付いたの】

気付いたって、何をですか？

「……」

【華琳お姉ちゃんってさ、女好きなんだよね】

……あ。

…あ、いや、こういう時は逆に強気に…

…で？

【ボク男の子だよね】

それが今更あなたが華琳さんの部屋に潜り込まない理由になるとは思いませんが。

しかもそれ許したの華琳さんですよ？

あの時一刀ちゃんすごく怒られたと覚えてますが（拠点　フェイス1　華琳黙参照）

【あれは、ボクが魘されていたからで…今は華琳お姉ちゃん以外でも秋蘭お姉ちゃんとかもいるし、それに、この前桂花お姉ちゃんが言ってた。華琳お姉ちゃんって、実は男は部屋に入ることも許さないそうだし】

そうか、桂花さん、あなたですか。

あなたが一刀ちゃんに変なことを言ったんですね？

おかげで一刀ちゃんが要らん気遣いを……

【でも実際、ボク自分が華琳お姉ちゃんのところに行ったことはあるけど、華琳お姉ちゃんから誘われたことなんてないよ。春蘭お姉ちゃんや秋蘭お姉ちゃんは時々誘われるの見たもん】

ああ、それは…誘う意味が違うんですがね。

「…？？」

一応聞きますけど、一刀ちゃん。

春蘭、秋蘭さんたちが華琳さんに誘われて何するか知ってますか？

【何って、寝るんでしょ、一緒に？】

他には？

「……？」

まぁ、ですよね…

＞ｐｆ＜

ところでちょっと華琳さんのところに戻ってきてみました。

先厨房でそのまま部屋に戻ってしまった華琳さんですが……

「……」

何かイライラしています。

一刀ちゃんの今日の行動を纏めるとつまり、華琳さんは実は男嫌いだから、自分のこともあまり好きじゃないけど、何となく側に置いている状態という…

その何となくが説明できないんですけどね。

というか、本当に華琳さんが一刀ちゃんのことが実は好きじゃないというと…

「……（ぶるぶる）」

この、禁断症状とまでいえる華琳さんの状態はどう説明しましょうか。

一刀ちゃんの言うとおりだと、ここ半月間、華琳さんと一刀ちゃんは話もほぼ交わってないんですが…

そろそろ一刀分足りなくませんか、この人。

ガタン

と、思ったら華琳さん、立ち上がりました。

どこに行くのかは知っていますが、何をするんでしょうか。

・・・
・・
・
がらり
「（びくっ）」
「……？」
『か、華琳お姉ちゃん、どうしたの？』
「どうしたの…？どうしたのですって…？」
「？？……ぅ！」
あ、ほっぺ抓った。
「この……この……」
「いぁい…いうぁぁ」
両手で一刀ちゃんのほっぺを摘まんであっちこっち伸ばせる華琳さん。
これ、何？新しい苛めですか？

「……ぅ……」

「あなた、最近私のこと無視したよね……いい度胸じゃない」

「……ぅぇ？」

「いつまでやっているかと思えば、私はほっといて桂花と秋蘭とばかり構っているようだし、あなたを拾ってきたのが誰なのかもう一度確実にしてあげようかしら」

「！！」

あ、…灯り消しましょうか？

＞ｐｆ＜

夕方

「華琳さまー！！どちらへいらっしゃいますかー！！」

「どうした、桂花？」

「秋蘭！華琳さまどこにいるか知らない？」

「華琳さま？いや、今日は見ていないが…」

「一体どこに…はっ！もしかしてあいつの部屋に……」

「…いや、それはないだろう。一刀は今は私の部屋で寝ているんだが」

「…そうなの？なら一体どちらへ……」

「そう慌てることはない。城から出掛けたはずもないし、そのうち見つかるさ」

「うぅぅ……」

因果応報ですよ、桂花さん。

というか、こんな場面、前にもいませんでした？

・・・

・・

・

華琳「……うふふん」

一刀「……」

ちなみに一刀ちゃんというと、動けないように縛られて、華琳さんに抱かれて一緒に寝ています。

羨ましいのか、哀れなのか……

まぁ、こっちも因果応報ということで……

華琳「……（ぎゅう）」

一刀「……ぅ」

しかし、この華琳さんは少しヤバいですね。

一刀ちゃん、これからはちゃんと相手してくださいね。さもないともっと酷いことになりますから。

【ねぇ、さっちゃん。これちょっと解いて】

はい？

……いや、うん…

華琳さんは寝てるようですし

バレても知れませんよ。

スッ

一刀「……（ぎゅう）」

華琳「…っ……んん…」

おやおや、溜まってたのは華琳さんだけじゃなかったようで……

まぁ、

僕は桂花さんや春蘭さんがこっちに来ないか監視でもしましょう。

華琳・一刀「……すー……すー」

あ、ちなみに後で変なこと言った桂花さんはお仕置きされました。

めでたし、めでたし。

拠点フェイズ３　季衣黙（闇）（前書き）

ここで闇というのは、闇に落とした話。つまり没ネタです。
没にした理由はネタが面白くなかったとかそういうのではなく、ただ一刀ちゃんが必要以上に苦しまれるような状況が起きると、ＴＩＮＡＭＩではすごぶる石を投げられてましたので没にしたものです。
ここじゃ闇編はあげないつもりだったのですが、季衣の拠点が見たいという要望があったためあげるものです。
石は締め切りました。

拠点フェイズ3　季衣黙（闇）

『季衣お姉ちゃんはたくさん食べるね』

「にゃ？」

朝、城を歩いていたら側にお団子をたくさん置いて食べている季衣さんに出会いました。

「あ、一刀ちゃん。一刀ちゃんも食べる？」

「（こくっ）」

頷いて季衣さんの側に座って団子を一つもらいます。

パクッ

「……ぅ…」

一つパクッと食べた一刀ちゃんは、すごく美味しかったようで、顔が赤くなって緩みました。

「ね？おいしいでしょう？」

「（こくっこくっ）」

「街で一番美味しいところなんだよ」

バクっバクっ

と言いながら、団子を口に入れる季衣さんの食べ速度は尋常じゃありません。

一度食べ始めたら一体そのその喉はどの次元と繋がっているんですかと聞きたくなるぐらい凄まじいスピードで皿の団子がいなくなって行きます。

「……ぁ…」

一刀ちゃんは口ぽかんとあけてそれを見ています。

ほら、一刀ちゃんも食べないと全部なくなりますよ?

「……」

まぁ、元からそこまで食べることに貪欲がないことは解っているんですけどね。

「にゃ?一刀ちゃん食べないの?」

「……」『一つだけでいい』

「ええ、ダメだよ。一刀ちゃんはもっとちゃんと食べないと。ちゃんと食べないと成長しないって、春蘭さまも言ってたもん」

「……」

「にゃ?」

一刀ちゃん、言いたいことはわかりますが、口にはしないでください。

＞pf＜

【季衣お姉ちゃんってよくそんなに食べても太らないよね】

それを言わないでくださいよ。

ええと、やっぱり運動量が違うからじゃないですか？

ほら、季衣さんの武器とかアレですし。

自分よりも重そうな球を投げまくるじゃないですか。

そりゃたくさん食べますよ。

「……」

その一方、季衣さんは……

「春蘭さま」

「うん？どうした、季衣」

「一刀ちゃんって元からそんなに食べないんですか？」

「うん？んまぁ、私が良く解らないけど、秋蘭の話に聞くと、随分食べる量が少ない量だな。炒飯一人分作ってくれるそれも全部食べきれないというからな」

「ええ！？」

その炒飯一人分と言うのは、さて二人の基準の一人分なわけでは…ないんですよね？

「ま、あいつがわざとお腹を空かせておく理由もないし、食べる量というのは人なりに違うのだ。季衣も小柄なのにたくさん食べるだろ？」

「うん……」

＞ｐｆ＜

ここ戻ってきて一刀ちゃん。

【でもやっぱり大食いって良くなくない？】

それは現代の発想ですよ。

現代じゃ体を動かすことってあまりないですけど、

この時代だと常にいつ戦いがあるか知りませんし、それに季衣さんはその年で将軍じゃないですか？

現代人とは運動量が違うのですよ。

【でもほら、季衣お姉ちゃんの食べる量が普通じゃないというのは確かでしょう？この前聞いたらあの時初めて季衣お姉ちゃんが盗賊討伐に行った華琳お姉ちゃんたちにお部隊に入った時、すっごい食べて、そのせいで皆御飯食べてなかったと言う話もあったし】

まぁ、それは確かにそんなこともありましたが…って、その話誰から聞きました？

【桂花お姉ちゃんから？】

あの猫耳はいつも必要ないことはペラペラ吐き出すんですね。

とにかく、そのことは一刀ちゃんが心配することではありませんよ。

別に季衣さんが太ったとかそういう話でもありませんし、体に異常があるという話でもないですから。

「一刀ちゃん！一緒に街に御飯食べに行こう！」

「？？」

ふと一刀ちゃんが振り向けばそこには季衣さんが居ます。

「…？」『あれ？季衣お姉ちゃん先団子食べたでしょ？』

「にゃ？お団子はお団子だよ。お菓子だし、御飯にはならないよ」

「……」

まぁ、確かにちょっと異常かもしれません。

『行く』

＞ｐｆ＜

『どこに行くの？』

「ここに美味しい料理店あるんだ」

「……」

一刀ちゃんは以外と一人で食べると食べるのがしょぼいですから、料理店とかは一人だとあまり入りません。

露店で肉まんか、それともラーメン食べるほどですね。

料理店はあまり入ったことありません。

・・・

・・
・

「おじさん、ここ炒飯大盛二つと、麻婆豆腐と麻婆茄子、」

ちょっ！？

「！」『多すぎない？』

「大丈夫だよ。金はあるから」

『そういう問題じゃないけど…いや、それも確かに問題だけど』

あの料理の量は…確かにさっちゃんが漢字で知ってる中華料理は全部出たのだと思います。っていうかアレで全部ですね。

・・・
・・
・

しばらくしたら料理が一気に到着しました。

「……ぅぁ…」

この中華の並べは、この世界に始めてきた時に華琳さんに買ってもらった時のような中華セットですね。

そういえばあの時もそれほど食べてませんでしたけど…

「ほら、食べて、食べて」

季衣さんが料理勧めてますよ。

【これ、多すぎるよ?】

量に圧倒されず、先ずは食べてください。

季衣さんがそのうち食べますよ。

「…（こくっ）」

僕に頷いて一刀ちゃんは蓮華を持ちあげました。

＞pf＜

「……」

って、ちょっ……あぁ…

「……（ちらっ）」

「……」

馬鹿な。

季衣さんが料理を目の前にしてみてるだけだと!?

「もっと食べる?」

「……」

そして勧められたら流石に断ることが厳しい一刀ちゃんです。

「……（あわあわ）」

『季衣お姉ちゃんは食べないの?』

「私はいいよ。先お団子食べたから」

「……」

【先と話が違うー（涙）】

そうですね。

嵌っちゃいましたね。

【どういうこと?】

ほら、季衣さんから見ると一刀ちゃん、食べなさすぎなんですよ。

だからこうして食べさせようとしてるんですよ。

ある意味的確な策ですね。

こうしたら流石に断れにくいですし。

【ボクこんなに沢山食べるとお腹はちきれちゃうよ】

まあ、それも確かに。

大人何人食べる量ですね。

季衣さんが見るとそれほどおの量でもないでしょうけど。

「…ぅ……」

食べられなかったら言った方がいいですよ。

【でも……ほら、あれ】

え？

「……（にこにこ）」

【何あれ？反則じゃない？ああにこにこ見てる顔にもうお腹一杯で食べられないとか言ってみて】

わー、あの顔は何ですか？

まるで食べるのを見てるだけでもお腹一杯とでも言いたそうな顔。

自分が作ったのでもないくせに。

「……」

【食べるしかないの？】

まぁ、僕としてはいい考えが思いつきませんね。

僕も食べるのを手伝ってあげたいですけど、無理ですし。

何とか一人でやってください。

【鬼ぃ～！】

いやー、断れないって大変ですよね。

＞ｐｆ＜

「……ぅ…」

「はぁ…一体どれだけ食べたのよ」

結局良く頑張ってその昼を全部食べた一刀ちゃんですが、

案の定お腹を壊してしまいまして部屋でうんうん唸っているのを秋蘭さんが発見。

華琳さんは知らないようにしようとしたんですが、途中で医員が城から出るのを見た華琳さんに医員さんが吐いて発覚。

「あなたはもうちょっと断りというものを知りなさい。言うだけ全部聞いて良いものじゃないのよ」

「……」

言う口がない一刀ちゃんです。

あ、一刀ちゃんの場合、書く手がない、ですね。

「でも、季衣はどうして一刀にあんなに食べさせたの？」

「多分、一刀が普段食べるのが貧弱なのだと思ったのでしょう」

「まぁ、実際そうなんだけどね。さすがに季衣が食べる分は無理だけど、季衣まで心配するぐらいだと、少しはちゃんと食べたほうがいいよ、一刀も」

え？

あ、ちなみに普段に一刀ちゃんの献立ですけど。

朝：元から食べない。水。

昼：ラーメンやしゅうまいや肉まん。時々街の人に桃とかもらったらそれで済ませる。

夕：城でくれる御飯（それも余す）

うん、ダメだこりゃ。

もっと一刀ちゃんの食生活に気を使わなかった僕のせいです。

「とにかく、大人しく寝てなさい。まぁ、その様子だと動く力もないでしょうけど」

そして、華琳さんは秋蘭さんと一緒に部屋を出ようとしました。

「……ぁぁ…」

「…解ってるわよ。季衣には何も言わないから」

「……」

それを聞いた一刀ちゃんは静かになりました。

＞ｐｆ＜

後日談

「はぁ…あの子は何故あんなところには要領がないのかしら」

「まだ人の接し方が苦手なのでしょう……あれでも季衣の場合は、最初から怖がることもなく仲良くした場合ですから」

「それはそうだけれど…はぁ、どうすればいいのかしらね」

「それはそうでうが、華琳さまはどうして北郷がお腹を壊したこと

が解ったのですか？」

「……政務をしていたら春蘭が来たのよ」

「姉者が？」

「季衣がお腹を掴んで倒れていたらしくてね」

「……」

「なんとも胃に穴ができたそうよ」

「それは……なんと…まだ北郷の方がマジなのでは」

「…二人とも自業自得でしょう」

・・・

・・

・

没ネタの没ネタ

【こ、こうなったら一か八かで…】

スッ

「うん？」

一刀ちゃんは炒飯を救った蓮華を季衣さんの方へ指しました。

「うえ？いや、一刀ちゃんが食べなよ」

「……」

蓮華をもっと季衣さんの方に近づけて固定。

「…ぅ……あぁー」

パクッ

仕方なく食べる季衣さん。そして、

「美味しいー（☆キラキラ☆）」

あれは私がかけた効果じゃありません。本当に。

『もっと食べる？』

「うん！」

そして、本来の目的を忘れて一刀ちゃんがあげる炒飯、続いて麻婆も全部食べてしまった季衣さん。

これで誰も苦しまずに済みました、めでたし、めでたし。

没になった理由：なんかおいしくなかった。

「北郷？いるか？」

がらり

久しぶりに一人で寝てた一刀ちゃんを呼びに秋蘭さんが部屋に訪れましたが、

「…いないのか？」

はい、いません。

今日は何故か朝から早起きして街に出ました。

「む？」

帰ろうかと思った秋蘭さんの目に入るものがありました。

それは、前にはなかった部屋の隅っこにある、この前街で買った竹のカゴです。

それだけだと別に目が行かなかったでしょうけど、問題はカゴの中に入っている物でした。

鞄です。

この前僕が一刀ちゃんの世界から持ってきたものです。

入ってるのは大した物はありません。教科書とノートと筆箱と……

「これは……」

あ、その手に触れてはいけないものは一刀ちゃんが五才の時にお父さんとお母さんと一緒に遊園地で取った写真です。

僕、手に触れてはいけないものっていいました?

「……」

秋蘭さんがその写真から目を放せず何分か過ぎました。

がらり

「あっ」

＞ｐｆ＜

「……?」

「ほ、北郷、どこに行ってたんだ?」

「……」

一刀ちゃんは胸に紙の封筒を抱いていました。

中身は…お菓子ですか?

「……」

「そ、そうか。そういえば、昨日お茶会をすると、北郷にも言ってたな」

「……（こくっ）」

一刀ちゃんは持っていた紙封筒を秋蘭にあげようとしました。

「いや、そ、それは後で北郷が持ってきてくれないか」

「??……（こくっ）」

「あ、それじゃあ、私はこれで……」

そう言って秋蘭さんは一刀ちゃんに背中が見えないようにして部屋を出て行きました。

「……??」

【さっちゃん、秋蘭お姉ちゃんどうしたの?】

さ、さあ……なんだったんでしょうね…

「……?」

・・・

・・

・

「…はぁ…」

一方、秋蘭さんが背中に隠していた手には、

戻しきれなかった一刀ちゃんの写真が持たれてありました。

＞pf＜

一刀ちゃん朝から出て行くと思ったらお菓子買いに行ってたんですか？

「（こくっ）」【作る量が限られてる限定品で、朝から並べないと買えない】

何のために？

【昼に華琳お姉ちゃんたちとお茶会】

あれ、招待されたんですか？

「（こくっ）」【というかお菓子調達係り】

まぁ、そりゃ一刀ちゃんが街の隅々まで良く知っているからでしょ？

【そうなんだけどね…】「……」

どうしたんですか？じっと持ってきたお菓子の封筒見て、

【こっそり一つ食べてもバレないかな】

えー……ダメですよ。

【やっぱり？】

仕方ないと思いながら、一刀ちゃんは竹のカゴの直ぐ側にある棚にお菓子の封筒を置きました。

「……？」

【あれ？ボクってこれここに置いたっけ？】

＞ｐｆ＜

「……はぁ、つい持ってきてしまったが、これを一体どうすれば…」

一方、部屋で頭を抱いて唸っている秋蘭さんの姿がありました。

「素直に言ってしまったら北郷が私のことをなんと思うか解らないし、だからって間をとっていて北郷あの中にこれがないことを知ったら……」

写真だけ見たらそれが一刀ちゃんのお父さんお母さんなのかどうなのか解らないのですが、その写真の裏には、昔一刀ちゃんが【お父さんとお母さんとの最後の思い出】と大きく書いてあるのでした。

一刀ちゃんの文字には、こっちの世界の人たちでも見えるように工

夫をしています故、秋蘭さんがそれがどういうものがわかるということです。

それに、一刀ちゃんのことについて終始を大体解っている秋蘭さんだからこそ、これは焦らずにはいられない状況だったのです。

がらり

「む？秋蘭、こんなところで何をしているのだ」

「あ、姉者」

そうしていたら、春蘭さんが秋蘭さんを探しに来たようです。

「早く準備しないと、お茶会に間に合わなくなってしまうぞ。お菓子を買うといった北郷はどうしたのだ？」

「ああ、今北郷が持っているはずだ」

「なら、私が行こう。お前は他の支度を…」

「……いや、姉者が行くとまた騒がしくなるかもしれない。北郷のところは私が行こう」

「む、そうか…じゃあ、場所は前決めたところでいいよな」

「ああ」

＞ｐｆ＜

一刀ちゃんの部屋に行くところで、秋蘭さんはどうすれば一刀ちゃんにこの事をばれずスムーズにこの写真を元のところに戻せるか考えていました。

「……」

ふと考えが行き過ぎて、足が止まっていたところで、

桂花さんがこっちに来ます。

「こんなところで何ぼおっとしているの？」

「…あっ、桂花。ちょうど良かった」

「何？私、今日はちょっと急がしいのだけれど。…おかげで華琳さまとのお茶会にも参加できないなんてぇと思ったらさらに不機嫌になるから……」

「ちょっと相談事があるんだが」

「相談？」

「実は……」

そして桂花さんに終始を全部話す秋蘭さんです。

・・・

・・

・

「…素直に謝れば？春蘭や私ならともかく、あなたならそれほどであいつが怒ったりはしないでしょうよ」

知恵を借りようとしたつもりが、まさか軍師さんからこんな正攻法な話が出てくるとは思いませんでした。

「やはりそれしかないのか？」

「それとも、一緒にいるところであいつが他のところを見てる間、そのカゴを見るふりをして初めてその中から出したようにする手もあるけど」

「うむ……そんな手もあるな」

「ま、どっちにせよもうバレているのだったら終わりって話だけどね」

「そうだな…止まらせて済まん。じゃあ、私はこれで」

「早く行きなさい。あなたを見てると仕事をしなきゃいけない私が惨めに思えるから」

「わるい、それでは…」

いつもなら笑いで返す秋蘭さんですが、そのような余裕はなさそうです。

＞pf＜

「ほんご……！！」

部屋の戸を開けた瞬間秋蘭さんは硬直しました。

部屋の中はバラバラでした。

寝台の布団も床に落ちていて、棚は倒れていて、真ん中には棚にあった花瓶の水を浴びて正座になって座っている一刀ちゃんがいました。

「ほん、ごう？」

「……」

背中を見せていた一刀ちゃんの顔を見るため前に回ろうとした秋蘭さんでしたが、

『戸閉めて、入って来ないで！』

「あ」

「……」

いつもは達筆な一刀ちゃんが、今度の文字だけはすごく荒く書いてあって、一刀ちゃんの今の感情が良く解りました。

後ろを向かずに一刀ちゃんは次の文を書きました。

「……」『お菓子、食べられなくなっちゃったし……ボクは部屋片付けるからお姉ちゃんは街に行って他のお菓子で買い直してくれない？』

「……大丈夫か、北郷？」

『大丈夫、水浴びたけど…ここに来てこんな精神的衝撃くらったの初めてだけど、大丈夫』

それは大丈夫じゃないと言いたいんですね。

『いいから早く戸閉めて』

「北郷……私は……わざとではなくてな」

『どうでもいいから！！』

「！！」

秋蘭さんは、そのまま戸を閉じてしまいました。

＞ｐｆ＜

「……すまん…北郷……」

＞ｐｆ＜

「……（ブルブル）」

一刀ちゃん……

【先の見た!?】

ええ、見ました。デッカイGでした!!僕心臓麻痺くるかと思いましたよ!

【ボク飛ぶの初めて見た】

僕だって初めてですよ!

何ですかあれ?やっぱり中国だからですか?中国だからなんでもかんでもデッカイんですか?

【知らないよ。とにかく、先秋蘭お姉ちゃんが戸開いてる間に出て行かなかったね?】

はい、多分…むしろ出て行ってほしかったです。

【そうだと秋蘭お姉ちゃん驚いて気絶しちゃうよ。ボクも驚いて棚

にぶつかってお菓子こうなっちゃったし、大惨事だよ】

ええ……まぁ、他のところも大惨事ですけどね。

【何の話？解らないけど、今は早くあのゴキブ…】

言わないでください！？

・・・

・・

・

五黙

「……」

荒野が見える絶壁の上で、

一刀ちゃんんはいつものように黙々と、下を見ていました。

その下には……

「押せ！押せ！押し切れぇい！」

「春蘭さま！敵、撤退していきます！」

「なに、もうか？」

「はい。見ての通りです」

「ちっ、益体もない」

「追撃はどうしましょう」

「そうだな。必要とも思えんが…まぁ、良い。隊列を整えた後、一応出しておけ、ゆっくりでいいぞ」

「はいっ！」

「相手はただの町人。殺さず追い払うだけにせよ。わかっているのな」

「はい、…今日でももう三度聞きましたから」

「そうか。もう三度目か……」

「……」

一刀ちゃん？

「……」

【皆、疲れてる】

……そうですか？

あの二人だとちょっと同意しかねるのですが……

「姉者、こちらも片付いたぞ」

「ああ、秋蘭。どうだった？」

「桂花の言うとおりだ。これを…」

「やはり黄色い布か」

まぁ、確かにそうかも知れませんね。

黄巾党が発生し始め、

最近は皆さん、ちゃんと休む暇もなくああして騒ぎを起こす若い群れを蹴散らすために東奔西走していますから。

最近は城に全員が集まっていることを見たことがないほどです。

【ねぇ、さっちゃん、ボクずっと考えたんだけどね】

はい

【華琳お姉ちゃんは、ボクのことを必要だと言ってた。こんな戦が続く日々で、皆、我を失って有らされていくって。そんなとき、ボクがいてくれたら、そうならずにいられるって】

でも、解らないんですね。自分がどうすればいいのか。

「……（こくっ）」

笑ってあげたらいいと思いますよ。子供ですから。…子供じゃなくても人の笑顔が嫌いだという人はありませんよ。人が幸せだと、側の人も幸せになれますよ、きっと。

「……」【そうなの？】

少なくとも、子供の笑顔にいらっとする人はいませんよ？

【桂花お姉ちゃんはボクが笑うといつも馬鹿にしてるの？って怒るけどね】

あはは……

「……」【帰ろう】

はい。

スッ

＞ｐｆ＜

スッ

「一刀？」

「（びくっ）！？」

「はぁ……まったく」

あぁ…

部屋に戻ってきていれば華琳さんがベットの上で足を組んで座って、一刀ちゃんのことをお待ちしておりました。

「……」

まぁ、いつかはこんな日も来るだろうと思ってはいましたけどね。

「どこに行ってきたのはちゃんと説明してくれるかしら？」

「……」

一刀ちゃん、華琳さんがこう出る時は、全部知っていながら聞いてるんですから嘘とか言っちゃダメですよ？」

『…お散歩』

「どこへ・お散歩に・行ってきたのかしら」

「……」

一刀ちゃんは何も言わずに華琳さんの手を掴まえました。

「…何？」

「……」『最近、皆城にちゃんといないから』

「……」

『お姉ちゃんたちの体の心配とか、そういう問題以前に、ボクが寂しい』

「一刀…」

『だから……見ていた。危ないことは、しないから、見るのもダメとか言わないで』

長々と続くこの頻繁な出立によって、疲れているのは華琳さんたちだけではないのです。

一刀ちゃんだって、いつも皆と一緒にいたい。

だけどそれは無理だと言うことを承知している上でも、

今の状況はあまりにも酷いものでした。

一緒に行きたいといっても危ないからって許されないから、せめて遠くから見ている。

それが、今までの一刀ちゃんが取った行動なのですが……

「…（フルフル）」『ううん、ごめん』

「え？」

『もうしない。だから……』

そう言いながら、一刀ちゃんは掴んでいた華琳さんの手を放そうとしましたが、

「！」

放した手を、逆に華琳さんの方から握られてしまいました。

「…そうね」

そして、その手を引っ張って一刀ちゃんは自分の元に来るようにした華琳さんは一刀ちゃんを軽く抱きしめてくれました。

「…ぁ……」

「あなたがあまり優しくていい子だから、時々忘れてしまうわ。あなたがまだ子供だということも、あなたがどんな子だったのかもね……」

「……」

「ごめんね、寂しい思いさせてしまって」

「……ぅ…」

一刀ちゃんは何も言えない口からただ漏れる言葉と共に、華琳さんの方でもっとくっつくのでした。

＞pf＜

「あの、ボク、本当に休んじゃっても大丈夫なのですか？」

「ええ、寧ろ季衣の場合、最近働きすぎて強引にでも休ませたいぐらいだわ。あまり無茶をするといざとなった時こっちの方が困ってしまうわよ」

「……ボクそんなに無理していません」

「…あの子が最近皆のことを心配しているわ」

「北郷がですか？」

秋蘭さんが華琳さんの言葉を受けました。

「ええ、最近、皆ちゃんとしろで休んでいる時がないから、あの子も心配しているのよ」

「ふん、あのような子供に心配されるようなものでもありません」

春蘭さんがなんともないように言いますが、

「そう、それでもあの子は皆のことを心配しているわ。だから、ぐれぐれも無理はしないようにね」

「はっ」

「御意」

・・・

・・

・

一方城壁の上。

今日は何だか上機嫌ですね、一刀ちゃん。

「……ん……ん…ぅん♪」

何か、鼻歌とか歌っていますし、何かいいことでもあったのですか？

「…（フルフル）」

何もないのにそういう顔なのですか？

「……？」

いや、キョトンとしましても聞いたこっちが困るんですけど……いや、もう何でもないです。

「……（てへっ）」【実は今日、季衣お姉ちゃんを休ませるって華琳お姉ちゃんが言ってたの。一緒に街にでも出掛けようかなぁと思って】

あ、そうですか…って、僕をからかいましたね？

「……（にしっ）」

まったくもう……

「……ぅん…ん…ぅん…ふぅん♪」

・・・

・・

・

「ふぅ……」

あ、一刀ちゃん、季衣さんが来ましたよ。

「……？」

「…はあ」

何か、元気がないみたいですね。

「……」

どうしましょう。街行くの、やめますか？

「……」

＞pf＜

「……」

暫く季衣さんが来るのを見ていた一刀ちゃんは、

「…ぅん…んん……ふぅん♪」

季衣さんを見てないふりをして、また城壁で鼻歌を歌い始めました。

「……うん？一刀ちゃん」

「…ぅん…ふん♪」

季衣さんが呼んでも、一刀ちゃんは城壁の上に座って足で宙を蹴りながら鼻歌を歌っていました。

「こんなところで何してるの？」

「……」

そしたら、一刀ちゃんは季衣さんの方を振り向いて、

『待ってる』

「待ってるって何を……？」

その時、風が吹いてきました。

一刀ちゃんは風が吹く方に顔を向きました。

「……」

風を浴びた一刀ちゃんは季衣さんの方を振り向きました。

『機嫌を直したい時は、高いところに行って風を浴びるの。そしたら、風が苦しい事も、寂しい事も全部持っていってくれるの』

「……」

『何かあった？』

「あ……いや、その、一刀ちゃんが心配することじゃないよ」

『誰かに話すときっと楽になるよ。口を飾りにしない方がいいよ』

その発言、一刀ちゃんが言ったら凄く痛いですね。

「……実は、ボクも今日出立したかったのに、華琳さまに休みなさいって言われちゃって」

『……休み、ヤなの？』

「いやとかじゃなくて……ボクの村が盗賊たちに苦しんでいた時みたいに、他の村の人たちも苦しんでいるかと思ったら、こうしていたくないのに、華琳さまも春蘭さまも、休みなさいっていうから……」

「……」

それを聞いた一刀ちゃんは、突然手をあげて季衣さんの頭を撫でました。

城壁に座っていたら、丁度高さが合います。

「うん？＞＞なでなで＜＜……なんだよ、もう…一刀ちゃんにまで子供扱いされたくないよ」

「…（てへ）」『ごめん。季衣お姉ちゃん、優しいなって』

「優しいって？」

『自分の事よりも人のことを考えて行動するとか、ボクにはできないから』

嘘おっしゃい…

いつも人の事しか考えないから皆呆れさせるのは誰ですか？

『でも、自分自身の世話もできないまま人を助けようとするのは、それはただの馬鹿だよ。誰も褒めてくれないよ、そういうの』

「一刀ちゃん…」

『休んで、休んでからもっと元気出したら、今日自分の手ですくえなかった分まで明日助けてあげたらいい。今日の分は、秋蘭お姉ちゃんや秋蘭お姉ちゃんたちがしてあげるから』

「……うん」

『……（にこっ）』

「…なんか、一刀ちゃんにそんなこと言われたら、私の方が妹分みたいじゃない」

優しい笑顔になる一刀ちゃんを見て、季衣さんは何だか不満そうに口を尖らせました。

『ボクは別に季衣お姉ちゃんの身体のことなんて気にしないんだからね。ただ、今日季衣お姉ちゃんが休んだら、ボクと遊んでくれるかなぁって』

あ、それツンデレですか？

……あれ？デレしかなくね？

まいっか。

＞ｐｆ＜

「ぅん……ふぅん…ぅん…♪」

街に手を繋いで出てきてからも、一刀ちゃんはずっと鼻歌を歌っていました。

「あ、何、その鼻歌？どこかで聞いた覚えがあるような気がするんだけど」

季衣さんが何だか興味を持ったようです。

「この前この街にいた芸能人のお姉ちゃんたちが歌ってた歌。ボク、歌詞は言えないから鼻歌だけだけど」

「うーん…ボクも聞いたことあるな。確か……～～♪飾りじゃあないのよ、あたしたち♪…そういうあれだったっけ」

「（こくっ）」『歌上手だった。名前、なんだっけ…』

「確かに名前は張角……」

その時、季衣さんは足を止めて、

「？？」

そして、

「あああああああああああああああああああああ！！！！！！」

「（びくっ）！？」

「ねぇ、一刀ちゃん！ごめん、ボク、ちょっと華琳さまのところに行ってくる」

「！？　！？」

何か重要なことを思い出したようですね。急いでるみたいですし。

一刀ちゃん。

【え？ん……でも、季衣お姉ちゃんはちょっと危ないかも…あ、もう知らない】

ぐいっ

一刀ちゃんは走っていこうとする季衣さんの服を掴みました。あまり掴むところもないんですけど、季衣さんの服。

「あぁ、一刀ちゃん、今はちょっと…」

ぐっ

【あ】

え？

・・・

・・

スッ

・

場所を変えて、ここは華琳さんの部屋です。

「……」

スッ

あれ?現れる場所が何故か華琳さんの頭の上……

「……いそいでぐわっ!」

「なぶぐぁっっ!」

「!!」

ガダダタン!!

あっちゃあ……

突然襲って(?)きた季衣さんと一刀ちゃんによって、椅子に座っていた華琳さんは後ろに倒れました。

…って、華琳さん、今「なぶぐぁっ!」って叫びませんでした?

「もうー、何なのよ、一体!一刀ー!!」

『ボクのせいじゃないもん！季衣お姉ちゃんが急に動くから』

「えっ？ボクのせい？ボクのせいなの？」

そうですよ、季衣さん。

瞬間移動というのは停止している状態でするのが基本なのですよ。

急に動いたりしたら、そりゃ的確度下がりますよ。

＞ｐｆ＜

とんだハプニングはおいといて、

季衣さんは華琳さんに張角について説明しました。

「それは本当なの？」

「はい、間違いありません」

「もし、黄巾党の張角と芸能人という張角が同一人物だとしたら、本拠地が解らないことも説明できるわね。あっちこっちを回り旅芸人なのだから」

「……」『でも、あのお姉ちゃんたち、ただ歌っていただけだよ。なのに盗賊の首魁だなんて、何かも間違いだよ』

「さぁ、どうでしょうかね。実際どうなのかはまだ解らないけれど、とにかくその張角という者が、人を惹く能力に優れていることはよく解ったわ」

「……」

他の子たちにも話したほうがよさそうね。本当に同一人物かどうかの確認も必要だし、二人は今日はもう遅いから帰ってもいいわよ。

「あ、はい」

「……」

季衣さんが先に部屋を出て行ってから、一刀ちゃんは暫く華琳さんのことを見詰めていました。

「何？まだ言いたいことがある？」

「……」『殺すの？』

「…張角を？」

「（こくっ）」

「まだ解らないわ。殺すか、それとも、あなたや季衣みたいに私の元に置くか。その者の成り次第よ」

「……」

「殺さないでって言いたいのかしら？」

「……」

一刀ちゃん？

「……（ふるふる）」

「？？」

あれ？以外ですね。僕もそんなことだろうと思いましたけど。

「……」

スッ

そして、一刀ちゃんは振り向いていなくなりました。

＞ｐｆ＜

一刀ちゃんが戻ってきたのはまたまた城壁の上です。

ふぅいぃい～～

風を浴びる一刀ちゃんの顔は、複雑な顔になっていました。

「……」

一刀ちゃん？

【実はね、華琳お姉ちゃんたちが戦うことなんて、見たくない。だから、戦うのはやめてって、いつも言いたくなる】

…そうですね。当たり前のことです。

大切な人がいつも戦場に立つことが、好きであるはずがありませんから。

【だけど、ボクが言ってもきっとそうはならないから……私が華琳お姉ちゃんたちに会うずっと前から、華琳お姉ちゃんたちは戦っていたから】

直接言って断れるのが怖いんですか？

「……（こくっ）」【それもある】

断れると知っていても、一度言ってみたらどうですか？少しは一刀ちゃんの意見を聞いてくれるかも知れませんよ。

【……さっちゃん、ボクのお母さんが再婚した時のこと知ってる？】

突然なんですか。

…いえ、解りませんよ。

【あの時ね、病院にお母さんが来てたの。他の人と会ってるって……】

あ

【あの時、もしボクが行かないでって言ったら、お母さんそのおじさんと行かなかったかもしれない。でも言わなかった】

…どうしてですか？

【…それを言ってるお母さんの表情の裏で、幸せを感じたから】

……

【今日も華琳お姉ちゃんも、なんとなくそんな感じだった】

……

風が…寒いですね。

六黙

有能な才を持つ者を好む華琳さんです。

そして、自分の前に立ち向かえるほどの才を持つ相手なら尚更、華琳さんの心に火を付けます。

そういうのは華琳さんの悪い癖でもあって、

きっと一刀ちゃんが見たという華琳さんの「顔の裏の幸せ」というのはきっとそれでしょう。

華琳さんは黄巾党の党首の正体がわかったことに、少しは黄巾党への興味を深くしたようですね。

その中、一刀の悩みも同じく深くなりつつあるのですが、それに気付くのは今より遥かに後に話になるでしょうね。

一方、黄巾党の活動はどんどん計画的なものになってゆき、

ある日、いくつかの黄巾党の群れが一つの場所に集結しているということが判別されました。

＞ｐｆ＜

「桂花、今動かせる兵はどのぐらい？」

「それが、補給の届きは明日の朝ぐらいになるでしょうです。それに、」

「先の戦いのあと、一度兵たちに休憩を与えてしまったので……」

ついさっき、討伐から戻ってきた春蘭さんが言いました。

「間が悪かったわね…今すぐに動かせる兵は？」

「約三百ぐらいです。それも精鋭部隊ではありません」

「早くしないと奴らがどうするかわからないわ。先ずは先発部隊を編成するよ。大将は…」

「華琳さま、ボクが出ます！」

「……」

「季衣、お前は……」

「そうね、今回は季衣に任せましょう。副将には秋蘭を付けるわ」

「え？秋蘭さまが、副将ですか？」

「ええ、但し、撤退の判断は秋蘭に任せるから、季衣は必ず従うように。いいわね？」

「はい！」

「御意」

「春蘭は今から輸送部隊から補給物資を持ってきなさい。明日まで待っていられないわ。明日日が昇る前に後続部隊を再編成して出立するわ。指揮は私自ら取る」

「はっ！！」

＞ｐｆ＜

一刀ちゃん、季衣さんと秋蘭さんが出立しました。

「……」

行かないんですか？

【行かない。約束したから】

あ、そういえばもうこっそり付いていかないって約束しましたね。

「（こくっ）」

んー、でもあっさりですね。本当に行かなくて大丈夫なんですか？

―正直、僕としては今回ばかりは行ってもらいたいところなんですけどね……―

【正直ボクが行かなくてもどうにかなるわけでもないし、ボクが心配になってみていただけだから…バレちゃったものだしもう行かないことにするよ】

ん、まぁ。そうなんですけどね。

……

……ところで一刀ちゃん。

「？？」

あなたは一体、何をしていらっしゃるのですか？

【知らなくていい】

いや、知らなくていいじゃなくてですね。

普段取り出さないノートと鉛筆まで取り出してなにしてるんですか？

ってかこの外史以来初めてなんですけど？

「……」

カキカキ…

時々、一刀ちゃんと居ると自分の存在が無我になってしまう気がします。

＞pf＜

一方ここは華琳さんの部屋なのですが、

「……うーむ」

華琳さんが休むの久しぶりに見ますね。

…というか、この人何してるんですか？

「……（イライラッ）」

何か、これ前にも見た気が……

「あぁー、もう！」

怒らないでください！？枕をこっちに投げないでください！？

寝られないのは僕のせいじゃないでしょうが！というか当たりませんが

最近一刀ちゃん、皆の疲れを考えて敢えて一緒に寝に行かないみたいですけどね。

一刀ちゃんはすごい勘違いをしています。

あなたと一緒に寝ることで疲れとか溜まりません。

寧ろ一緒に寝てたのに寝ないとあんなように一刀分（？）足りなくなって凶暴化するんですｙ（ぴちゅん）

え？何ですか？今僕どうやってぴちゅったんですか！？

え？え？

「何であの子最近来ないのよ。今日は秋蘭も季衣もいないのに、」

華琳さんの部屋じゃないと他のところに行っているという仮定がまず間違っているんですがね。

あれ？そういえば、華琳さんがこれだということは、他の人たちも…いや、まぁ、いいです。考えないことにします。

コンコン

「誰？」

しーん

「一刀なの？」

コン

答えがなかったら一刀ちゃんですよね。

というか、人の部屋にノックして入ってくる一刀ちゃんなんて初めて診ましたけど。

「…入ってきなさい」

がらり

「……」

入ってきた一刀ちゃんの手には、先部屋で持っていたノートが握られています。

「ど、どうしたの？」

「……」

そしたら一刀ちゃんは華琳さんがいるベットに近づいて、手に持っていたノートのあるページを開いて見せました。

「え？何これ……」

開いた両ページには各々服のデザインが描かれていました。

え、一刀ちゃん。先これ描いてたのですか？

文字も凄く達筆ですし、一刀ちゃん昔なにしてたんですか？

二つの服のデザインの中で、左のは凄く綺麗なナイトドレス、もう一つの右のは、軍服スタイルの服です。

そして、その上には、『どっちが良い？』

「一刀、あなたこんなこともできたの？すごいわね」

ああ、先ずはそこですね。

『それはどうでもいいから好きなの選ぶ』

そう書いている一刀ちゃんの顔に、少しは嬉しい表情があったことは軽くスルー。

「ふむ……」

そしたら、華琳さんは長考に入ります。

考えの行き先は大体思いつきますけどね。

あれ、きっと選んだ方作ってあげるんですよね。

だったら、華琳さんとしてはナイトドレスを選ぶわけはないっしょ。

あんな恥ずかしいし。

一部の変態な読者の皆さんは、軍服の方がもっと恥ずかしいだろというかも知れませんが、そんな考え方の自分を恥らってください。

あ、それと知ってますか。囲碁にこういう金言があるんですよ。

「こっちの、右の服の方がいいんじゃないかしら」

ええ、『長考の末に悪手を打つ』って。

『その裏の方を見てみて』

「裏？」

そういわれてページの裏を見る華琳さんの目に入る文字は…

『明日一刀ちゃんを連れて行く』

＞ｐｆ＜

「急げ、もっと急げー！！」

「春蘭、そんなに兵たちを急がせたら、秋蘭たちと合流する頃には兵たちが力尽きて戦えなくなるわよ」

「ですが、華琳さまー」

「はぁ…あまり兵たちに腹いせしないで頂戴」

「うぅ……」

「……？」

キョトンとしているのは、華琳さんと同じ馬に乗って後ろで華琳さんの腰に抱きついている一刀ちゃんです。

いや、何天然な顔していらっしゃいますか、一刀ちゃん。

昨日、一緒に行かせなかったら、あのドレスを着た華琳さんの絵を描いて桂花さんに渡してしまうと言ったのはどこの小悪魔ですか？

桂花さんがそれをもらって一体なにをするだろうか想像した華琳さんの肌に電気が走ったように鳥肌が立つ時は僕が笑い死ぬかと思いましたよ。

「華琳さま！何故あいつが華琳さまと一緒に行くのですか？戦場は子供の遊び場ではありません」

「……」

「ど、どうしたんですか、華琳さま？」

「桂花」

「はい」

「後で覚えておきなさい」

「はい？」

訳もわからず恨みを得た桂花さん。まさに外道。

「……」

「はぁ…一刀。何度も言うけど、私から離れたらダメよ。絶対に」

「（こくっ）」

・・・

・・

・

「曹操さま！曹操さまはいらっしゃいますか！」

「どうした！」

その時、兵士一人がこちらに走ってきました。

「貴様は確か、秋蘭の部隊に居た…」

「はいっ！夏侯淵さまの命令で、状況を報告するため参りました！夏侯淵将軍と許緒将軍の部隊が黄巾党の本隊と接続！暫し交戦しましたが、数の差が明らかすぎましたので、近くにいた村に後退して防御をしている最中です！」

「！！」

「華琳さま！」

「ええ、全軍速度上げ。囲まれている秋蘭たちを助けに行くわよ！」

「はっ！全軍駆け足！全力尽きるまで走れ！」

「馬鹿！それじゃダメでしょう！」

「うるさい！秋蘭と季衣がどうなってもいいのか？」

「それは解ってるから少し落ち着きを……」

春蘭さんと桂花さんがそういうやりとりをしてるどころ、

「一刀、もっとしっかり掴まえなさい。これから早く移動するから」

「……」

「ダメよ」

動かせる手がなくて話はできない一刀ちゃんでしたが、華琳さんは一刀ちゃんが言いたいことがわかるかのように釘をつけました。

「今あなたが秋蘭たちがいるところに行っても何も変わらないわ。邪魔になるだけよ」

「……」

「大丈夫よ。秋蘭も季衣もきっと無事よ。あの子たちを信じなさい」

「……（こくっ）」

納得したように、一刀ちゃんは華琳さんの腰にもっとぎゅって抱きつきました。

一刀ちゃん、僕が先に行って様子を見てきましょう。

「……」

はい、それじゃあ、

＞pf＜

「夏侯淵さま！西側の第三防御線が破られました！」

「ふーむ、防柵は後二つか。どのぐらい保ちそうだ、李典」

「マズイな……後二つか。そうだな…結構応急に作ったもんやし、後一刻持つどうかってところやな」

「微妙なところだな。姉者たちが早く来てくれれば良いのだが…」

これはー…ひどい、としか話す言葉が見つかりませんね。

村の町は完全にぼろぼろになってしまって、火災とかもあったように建物のそこそこには煙も見えています。

秋蘭さんたちの部隊と、楽進たちが率いている義勇兵が共に防御線を建てていますが、本当真桜さんの言う通りこれからどれだけ持つものか……

「しかし、夏侯淵さまがいなければ、我々がここまで耐えることはできませんでした。ありがとうございます」

「それは我々も同じ事。貴公ら義勇兵がいなければ、連中の数に押されて敗走しているところだ」

「いえ、私たちこそ、夏侯淵さまたちがいなければ、既にあの場で全滅していたでしょう。ここまで防御できたのも夏侯淵さまの指揮があってこそです」

「お互い助けてもらっているのだ。もう少し耐えよう。直ぐに姉者たちが援軍を連れてこっちに来る」

「はい」

「凪ちゃーん！東側の防柵が破られました！東側の防柵の残りは後一つしかないの！」

「あかん！東のありゃー、材料が足りひんかったから結構もろいでー。破れるのも時間の問題や」

「仕方ない。残りの兵は全て東側に回す。楽進」

「解りました。真桜、沙和、こっちは頼んだぞ」

「あぁ、無理せんでな」

「気をつけるの」

「ああ……」

「秋蘭さま、ボクたちも行きましょう」

「ああ、皆、ここが正念場だ！力を尽くし、何としても生き残るぞ！」

「わかったの！」

「おお、死んでたまるかいな！」

ガーンガーンガーーン！！

「何だ？」

「報告です！街の外から大きな砂煙！大部隊の行軍です！」

「敵の援軍なん？」

「えー？またくるのー！？」

「敵か？それとも…」

「それが…」

ひょこっ

「……（にしっ）」

「！北郷！」

「一刀ちゃん！？」

「へ？」

一刀ちゃん？

「一刀ちゃんやんか」

ああ、そうですか。

もう来ましたか、早かったですね、流石に。

「……」

黙々としながら一刀ちゃんが開いた竹簡の中にはこう書いてありました。

『援軍到来』

＞ｐｆ＜

「北郷を先に行かせて大丈夫なんですか？」

「あら、桂花が一刀の心配をするの？」

「なっ！そ、そういうわけではありません！」

「まぁー。大丈夫よ。中はなかなか苦戦しているっようだから、一刀が早く行って先に援軍が来たことを伝えたら兵たちの士気もあがるわ」

「はぁー」

「…ええ、そうよ。きっと大丈夫よ。中には秋蘭と季衣もいるし…（ブル」

「…華琳さま？」

華琳さん？

「彼女たちなら何事もないでしょうよ。でも状況が状況だから少し目を離してしまうかも知れないじゃない。もしかして知らない人にでも連れて行かれたら、いや、いざとなってもあの子は知らない人が触れようとすると逃げられるわよね。そうよ、あの子なら大丈夫だわ。あの子なら何万の敵の中にいても傷一つないまま戻って来られるじゃない。あの子ならきっと平気よ。それでなければ私があの盗賊のグズどもをただで殺すわけがないでしょ？あの子に傷一つでも与えた奴は殺さず城の拷問室に連れて行って寧ろ自分の口から殺してくださいと嗚咽しながら叫ばせてその上に半分以上死んだら手足を切って塩付けて漬けにして街の人たちに広げて……（ブルブル」

華琳さん?華琳さーん?漏れてる、言葉が漏れてますよ!周囲の兵士たちが何かわからない覇気に包まれて嘔吐症状を見せていますよ!

「銅鑼を鳴らせー!!中の秋蘭と季衣たちに!私たちが来たことを伝えるのだー!!」

春蘭の命によって大きく銅鑼が鳴り、曹と夏侯の旗が揚がり、

「敵の数が把握しました。役三千、我々本隊の敵ではありません」

「いいわ。総員、突撃!苦戦している仲間たちを救うのだ!」

曹操軍の大反撃が始まりました。

＞pf＜

「一刀ちゃんがどうしてこんなところにいるねん?」

「一刀ちゃん、久しぶりなのー!」

「!!」

急に抱きつこうとする沙和さんですが、

スッ

「…ぁ」

「あ」

「あ、あれ？」

「……」

いつもみたいに急な動きには苦手な一刀ちゃんです。

「……ふえーん、真桜ちゃん、一刀ちゃんが沙和のこと見て逃げたのー」

「沙和、そんなことをしてる場合か」

「せやで、沙和。一刀ちゃんが困ってるじゃねぇか」

「……（あわあわ）」

【これって意識して動くんじゃないの。無意識なのー】

あれ？そうだったんですか？

道理でそんなに反応時間が早いものだと……

「それより北郷、お前一人で来て大丈夫なのか？」

「……」『大丈夫なんじゃない？秋蘭お姉ちゃんが守ってくれるんだし』

華琳さん、怖かったんですけどね。

「……ふふっ、頼りにしてくれてるのは嬉しいんだがな」

でもほら、無意識だとあまり危険な目に会いそうではなくないですか、一刀ちゃんって？

「一刀ちゃーん」

って于禁さんまだ開き直っていませんか。

一刀ちゃん、あの人なんとかしてください。

「……」

振り向いた一刀ちゃんはしくしくとしている（多分嘘泣きの）沙和さんに近づきました。

「……」

ぐいぐい

「…うん？」

泣いてた（うそ泣き）沙和さんがスカートを引っ張る一刀ちゃんを見下ろしました。

ぎゅー

「……＞＞ぎゅー＜＜」

今の一刀ちゃんにこう……ぼ○ぼの汗が飛ぶ効果のアレが欲しいです。

「…はあ？、一刀ちゃーん？」

「ああ、一刀ちゃん、それウチもやってー」

「こら！」

まったく戦争には向いてない二人さんです。

「あ、ボクもして！」

……おまえもか

「季衣…まだ戦争は終わってないぞ」

「！！」【あ、そうだった】

「ああん、もっとー」

「沙和もいい加減にしろ」

「とかいって、凪も一刀ちゃんにぎゅってされてみたいやろ」

「なっ！何を馬鹿なことを……はっ」

「……（しゅん）」【そっか、うん、そうだね、この前一度会っただけなのに抱きつくとかおかしいよね。無礼だよね。そーだねー】

「いや、あの、別にいやとかじゃなくて、今は戦いの途中だし、そんなことする暇はないというか」

「あーあ、凪が一刀ちゃん落ち込ませたで」

「せっかく援軍が来たって教えに来てくれたのにひどいのー」

「ううう……」

ああ、落ち込んだ楽進さんはかわいいですねー

「皆遊ぶのはそれぐらいにしておけ。北郷、私の後ろにいろ」

「（こくっ）」

「楽進と季衣は前に出て東側に火力を集中してくれ」

「はい」「解りました」

さあ、これで一安心できますね。

「（こくっ）」【あ、さっちゃん】

はい

【僕行ってから華琳お姉ちゃん、どうだった?】

ええ、まぁ。それは表では平然としようとはしていましたけど、不安な感情だだ漏れでしたよ。

【そっか……】「…（てへ）」

あ、照れちゃって……

まぁ、なんだかんだでこの戦争も終わりそうです。

六黙（後書き）

＞ｐｆ＜

没ネタ

秋蘭さんたちの状況を兵から聞いたところで、

「一刀、もっとしっかり掴まえなさい。これから早く移動するか……」

しーん

……せんせー！一刀ちゃんがいませーん！

「……（ブルブル）」

あ、華琳さん怒った。

「かーずとーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

その余波で、その周りにいた兵士十数人が即座に倒れましたが、戦況にはまったく支障ありません。はい。

没にした理由：後が怖かったです（華琳さん、怖いです）

七默

「かずとーー！」

「＞＜ぎゅーＶＶ！？」

「大丈夫だった？怪我はないの？」

「大丈夫、大丈夫だから放して、華琳お姉ちゃん、苦しい」

「えっ？…一刀、あなた…」

「うん？…あれ？ボク、喋れる。華琳お姉ちゃんボク喋れるよ」

「よかったね。一刀」

「あのね、華琳お姉ちゃん。ボク喋れるようになったら、一番最初に華琳お姉ちゃんに言ってあげたいことがあったの」

「何？」

「だーいすき」

＞ｐｆ＜

「……Ｚｚｚ…（えへへー）」

「こんな修羅場の中でよく寝てるわね」

「華琳さま！だからどうしてあんな奴を膝の上に乗せて…」

「姉者、少し静かにしろ。北郷を起こしてしまうだろ」

「しゅーらん」

……え？いや、覗いてませんよ？人の夢を覗くとか、そんなことくらさっちゃんでもしませんよ？

……しませんよ？

とにかく、この街にいた黄巾党の連中は全部蹴散らしたところで、一刀ちゃんはなんだかんだで色々緊張が溜まっていたのかそのまま寝てしまいました。

今は色々あった後華琳さんの膝の上で寝ている最中です。

「羨ましいのー」

「あんなうれしそうな顔で寝ちゃっててなー。ああ、一刀ちゃんやったらかわいいよなー」

「……」

そして、仲間になった（一刀ちゃんは寝てますのでまだ知りませんが、別にどっちでもいいでしょう）大梁義勇軍の三人さんです。

ちなみに凪さんは遠くから一刀ちゃんの寝顔をみながら物欲しそうな顔をなさっています。自分もしたいのですね。膝枕。

「…そう、凪といったわね」

「あ、はっ！」

華琳さんが呼んだら、凪さんはパッときがついて答えました。

「…前に陳留で会った時も結構一刀と仲がよかったみたいだけど、この子もあなたたちのことはそれほど警戒していなかったようね」

「あ、はい。この前陳留で出会って、色々助けてもらいました」

「そう…」

華琳さんは暫く考えこむように真剣な顔になりました。

「な、凪。どないしたん？」

真桜が他の人たちに聞こえないように凪の耳にささやきました。

「解らん。もしかすると、我々のことを一刀様が親しく思っていることがお気に召さないのかもしれない」

「え？どうしてー？」

沙和も対話に混ざってますね。

「まー、こっちはただの義勇軍の兵たちやからな。州牧の息子さんが私たちみたいな奴らと一緒にいるのがあまり好ましくないと思ったのかもしれへんな」

「そんなー」

「あまり悲観的に思うこともよくないが、とりあえずは一刀様のことについてはあまり深く関わらないほうが良いかもしれない」

そんな自分たちの話をしている三人ですが…まだ華琳さんが一刀ちゃんのお母さんだと思っていますね、あの人たち。

「…一刀」

考え続けていた華琳さんがふと一刀ちゃんを揺らしました。

「……？？（パチッ）」

きょろきょろ…

「…ぁ……ぁぁ」

「目が覚めたかしら」

「……はぁ……」【夢か】

一刀ちゃん、一応忘れているようですからいっときますけど、ここって戦場なんですよ。

「！！」

僕の言葉にパッて気が付いたように一刀ちゃんは華琳さんの膝の上から頭を起こしました。

『どうなったの？』

「もう終わったわ。今は村に補給品を配っているところよ」

「……」

「疲れたの？」

「（フルフル）」『もう大丈夫』

「そう、無理せずに疲れたら休みなさい」

「（こくっ）」

その後一刀ちゃんの目に入ったのは、

「……ぁ」

三人集まってひそひそ何かを話している凪さんたちでした。

「あの子たちもこれから私たちと一緒に行動するようになったわ」

『あのお姉ちゃんたちも？』

「ええ、ここで義勇軍を集めて、黄巾党に対抗していたそうよ」

「……」『凄いね』

「まぁ、それなりの武があるのは間違いないようね。それはそうと一刀」

「？？」

「しばらくあの子たちと行動を一緒になさい」

「……？」『どういうこと？』

「あの子たちは入ってきてあまり経ってないけど、状況をちゃんと説明している暇がないのよ。これから暫くはあの子たちの面倒を見てあげなさい」

え、一刀ちゃんが面倒を見る方なのですか？おかしいでしょ、それ。

「……（こくっ）」

返事だけはあっさりですね。一刀ちゃん。

「いいわ。凪、沙和、真桜」

「「「あ、はい！」」」

あそこで話をしていた際に華琳さんが呼ぶのを聞いて返事する三人。

「しばらくあなたたちのことは一刀に任せます。何かわからないことがあったら一刀に聞きなさい」

「…（ぺこっ）」

一刀ちゃんは三人にむかってぺこっと挨拶しました。

「…よろしいのですか？」

「何がかしら？」

「我々が一刀様と一緒にいることが気に召さないのでは……」

「何故私が一刀の友たちのことまで手を出さなければならないのよ。
そんなの一刀がいいなら私は全然かまわないわよ」

「はぁ……」

だから、凪さんが心配していることには根本的なところから間違いがあります。

「よろしゅー頼むで」

「一刀ちゃん、よろしくなの」

「…（にこっ）」

「あーん？かわいいのー」

「＞＞ぎゅー＜＜……（あわあわ）」

沙和さん、自重してくださいｗ

＞pf＜

一刀ちゃんがわからないような難しい軍議とかは飛ばします。僕も良く解りませんから。

えっと、要は黄巾党の補給拠点を探索し、早急に落とす、とのことです。

そういうわけで、将の皆さんが偵察に回ってる最中ですが、

「一刀ちゃん、沙和と一緒に行こう」

「ウチと一緒にいくやろ？」

「（あわあわ）」

この人たち、一刀と一緒に偵察任務に行こうと争っています。

その中ですごく困っている一刀ちゃんの顔がたまりません（じゅるっ）

「二人とも、そろそろ出発しないと他の方たちの足を引っ張ってしまうぞ」

「沙和は連れていくのー」

「沙和は先一刀ちゃんのこと驚かせたやろ。だから今度はうちに譲りや」

「そんなの理不尽なの。寧ろこの機会で、一刀ちゃんとの仲を縮む

のー」

【ボクの意見は…？（あわあわ）】

一刀ちゃんの意見なんてどうせ華琳さんと一緒に残っていたいに決まってるからそういうのは却下されるでしょ。

【あうぅ……】

ひょい

「？？」【うん？】

あれ？

「「……え？」」

凪さん、悩んでる一刀ちゃんをさりげなく抱き上げて

テテテテテー

凪さん、凪なーん、どこいきますか？

「ちょ、ちょっ、凪！」

「ああ、凪ちゃんが一刀ちゃんのこと乗っ取っちゃったのー」

「っ！！」

ああ、凪さん、逃げた！

凪さん、すげー。

何も気にしてない顔して二人が争っている間に一刀ちゃんを持って逃げた！

【だからボクの意見は？？】

＞ｐｆ＜

結局二人を追い払って一刀ちゃんと一緒に偵察に行った凪さんですが…

「……」

「……」

「……」

「……」

これはどれが誰の枠なのか僕にもわかりませんね。

凪さん、何でもいいから喋ってください。

一刀ちゃんと仲良くしようと持ってきたんじゃないんですか？

「か、一刀様」

「？？」

「その…一刀様はどうしてここに来られたのですか？危険だというのに」

「……」

まぁ、皆心配することは一緒ですね。

確かに子供が歩き回って安全なところではありませんからね。

『皆のこと心配になるから』

「心配ですか？」

『ボクが行っても何も助けにならないし、寧ろ邪魔なことは知ってるけど、それでも見ていないと心配になる。だから来たの』

「……」

『ダメだよね。ボクが居ると皆に迷惑になるから。でも……』

「……一刀様？」

そこまで言った一刀ちゃんはちょっと苦笑しました。

＞ｐｆ＜

「あの子が私たちに付いて来ようとするのはただの心配じゃないよ」

「どういう、ことですか？」

こちらは本陣に残っていらっしゃる華琳さんと桂花さんです。

「桂花はあの子と最近良く寝ていたら解るでしょうね」

「……」

「あの子と寝ると変な夢見たことあるでしょ？」

「はい…あの子は走ってくる何かとぶつかって倒れる…でもどうして」

「理由は私解らないけれど、それはあの子が昔実際に経験したことよ。昔あの子がご両親から見捨てられるまでのことが夢に見えるの」

「！」

「だからあの子はどんな形ででもまた自分の面倒を見てくれる私たちを失いたくないと思っているの。だからいつも自分が知らないところで何があったらどうしようと心配になって付いて来たわけだわ」

「ですが、いくらなんでもあんな子供を戦場に近づけるのは」

「だからってあの子が大人しく城で待ってるわけではないわ。連れていかなかったら一人で、私たちにばれないように来るだけよ。私たちと一緒にいるのとあの子一人で戦場にいるの、どっちの方が安全だと思うかしら？」

「……」

＞pf＜

子供の頃に両親に見捨てられてました。

会いに行く術がある一刀ちゃんでしたけど、一度も会いに行ったことがありません。

もう、「あの人たち」の人生に迷惑かけたくありませんでしたから。

それから何年も過ぎて会った、心から頼ってもいい人たちでした。

なのにその人たちは、いつ死んでもおかしくないほど戦場を駆けてる。

これが心配ができないわけがないですね。

『凪お姉ちゃんは強いの？』

「強いというほどではありません。ただ、この身一つと、親友を守られるほどの武は持っているつもりです」

「……」『羨ましいね』

【ボクも皆を守られたら…】

一刀ちゃん……

『ところで凪お姉ちゃんどうしてボクに敬語なの？ボク凪お姉ちゃんにそんなこと言われるほど偉い人じゃないよ』

「いえ、しかし、華琳さまの「ご息」になるお方に、私たちのような平民が親しく呼ぶわけには…」

……

「…ぅぇ？」

あ……

【さっちゃん、このお姉ちゃん何言ってるの？】

はい、どうやらこの前会った時、華琳さんが一刀ちゃんにお母さんみたいな台詞を投げたのがあの三人に誤解を招いたようです。

【……華琳お姉ちゃんがお母さん】

……

……

「（かああ）」

「一刀様？」

まぁ、変なムードになっているのも僕としては一向構いませんけどね、あそこに見えるのって黄巾党の連中じゃありませんか？

「！！」

「一刀様？……！あれは……」

＞ｐｆ＜

「場所はここから半日ぐらいの距離にある砦です。黄巾党の連中が一時的に拠点として使っているようで、今すぐに攻撃しないとまた他の場所に移動してしまうかと思います」

「でかしたわね。凪、一刀も」

「ありがとうございます」

「……（じー）」

「どうしたの？」

ふと自分のことをいつもよりもじっと見ている一刀ちゃんに華琳さんは言いました。

「（はっ）（ふるふる）」

「そう。疲れたでしょうけど今はちょっと我慢しなさい。今すぐ出立するわ！」

「「「「はいっ！」」」」

・・・
・・
・

そういうわけで、また華琳さんと一緒の馬の上に乗っている一刀ちゃんですが、

「一刀、もっとしっかりつかまえていないと落ちるわよ」

「……（こくっ）」

いや、本当に一刀ちゃん。

そんなに曖昧に掴まえてると馬から落ちますよ。

しっかり華琳さんの腰に捕まえていないと。

ヒヒイィー

「!?」

「一刀!」

ほら、だから言ったのに…。

「大丈夫か、北郷」

隣の秋蘭さんが捕まえてくれなかったら大変なことになってましたからね。

「はぁ……驚いたじゃない」

「……（しゅん）」

「疲れているのか？」

「（フルフル）」

華琳さんは厳しい顔をして一刀ちゃんを睨みつきました。

「今はあなたの気まぐれにかまってあげてる暇がないわ。馬から落ちそうなら縄で縛ってあげてもいいんだけど」

「……（じーっ）」

「……」

「……（ぷいっ）」

暫く華琳さんを見ていた一刀ちゃんはそっぽを向いて他のところへ歩いていっちゃいました。

「…華琳さま」

「ほっておきなさい。それよりも今は早く砦に着くことが先よ」

「はぁ……」

＞pf＜

華琳さんたら、もうちょっと気にしてくれてもいいでしょうに…

【さっちゃん】

はい？

【ちょっと黙ってて】

あうぅ……一刀ちゃんが固いです。

「……」

凪さんたちが言ったことがそれほどショックだったでしょうか。

まぁ、でも華琳さんは確かにお母さんみたいに一刀ちゃんのこと気にしてくれますし、

【違う】

え？

【……ボクのお母さんはお母さんしかない。他の人は……】

「っ！」

あ、一刀ちゃん。

【ついてくるな】

スッ

あ、どこに……

一刀ちゃん……

七之奥默

はぁー……

朝の空気ウマス

べしっ！

うわっ！石！次元越えで投げないでください。

僕もいい加減疲れたんですよ。

僕だって一日二十四時間一刀ちゃんと一緒に居られるわけじゃありませんよ。

特に今回は。

ちなみに今一刀ちゃんの部屋に入るとこんな感じです。

【$%#（&%（@！（@#@）$&^*&%！@^%$^！#*@&%）@*&！^（

＃＊％＆ａｍｐ；＾＠（＄＆ａｍｐ；＊＾＠（＄％＃＆ａｍｐ；】

考えが早すぎて読めませんので１／１００倍速にしてみました。

【いや、でもお母さんはお母さんだし、華琳お姉ちゃんは確かにいい人だと思うし優しいし感謝はしてるけどだからってお母さんとかそういうのはないでしょうというか死ぬそんなこと言ったら殺されるそんなこと華琳お姉ちゃんの耳に入ったらその場で大鎌で首飛ぶ。大体ボクはお母さんいるじゃない華琳お姉ちゃんは息子か養子という問題以前に結婚もしてないでしょうが何を凪お姉ちゃんは馬鹿のことといったのよというかここでこうしている行動自体が皆に迷惑その上いないじゃない。今頃ボクのことでいい加減皆心配する頃だしそろそろ心を決めていつもどおりに戻らないと不味いでしょうに。…でももし華琳お姉ちゃんがお母さんだったらぁいやいやいや落ち着け気を確かに持ちなさいよ、ボク。お前のお母さんは最初から一人しかいないよ他の世界であんなことになってるけどボクのお母さんは……】

ここだけが先の文で【＄％＃（＆ａｍｐ；％】のパートです。

とりあえずめちゃくちゃ正気じゃないことだけは解りますね。

その後もこれだけで「華琳お姉ちゃんがお母さんでも良いではないか」という題目の論文を出してもいいくらいの量の展開がありますが、これ以上書くとは面倒くさすぎるので勘弁してください。

というかあれ直に聞いてると頭が痛いです。

１８０００Ｈｚの音を耳元から囁いてるみたいです。

というわけで今暫くは一刀ちゃんのことはほっといてあげましょう。

＞pf＜

「それで、その後一刀の様子はずっと？」

「はい、そのまま部屋に篭っているようで、誰かが入ろうとしても開けてくれないようです」

その後、秋蘭さんが言った通り、一刀ちゃんはそのまま部屋に篭って、華琳さんたちが戦いを終えて戻ってくる際に向かいにも来ず、その後もずっと部屋の中にいました。

ああ、食事とかは外においていくと食べます。ご都合主義です。

「まったく、あ奴は本当にわけがわからん。戦場で急にいなくなったかと思ったら、城に帰ってきては部屋から顔も出さないではないか」

特に春蘭さんがそれで困ることがあるとも思いはしませんが…

「華琳さま、何かあったのですか？」

「別に思いつくことはないわね。私が知っていた時はもうどこか変だったし、それ以前に何かあったとしか」

「その前でしたら……」

「確か凪と一緒に偵察に行ってたわね。その以前には寝ていただけ

だから特に何もなかったでしょうし」

凪さんたちは現在、警邏の仕事を任されて、そちらの任務を務めています。

「秋蘭、ちょっと凪を連れてきてくれないかしら」

「……」

「秋蘭？」

「あ、はい」

何かを悩んでいるようだった秋蘭さんは、華琳さんが二度目呼んでからやっと返事をしました。

「凪に行って、何か心当たりがあるか聞いて見なさい。凪たちはまだ一刀のことを良く知らないから、何か不味いことを言ったのかも知らないわ」

「御意」

＞ｐｆ＜

「……」

そして、凪を探しに街に向かう秋蘭さんでしたが、

不味いとことと言えば、確か秋蘭さんにも心当たりがありますね。

「…もしかしてあれのせいで……」

確かにその後、返していませんね？というかそんな機会もなかったし。

僕もあの時はGのせいでちょっと頭が回ってなかったので良く思考できなかったんですが、後でよく考えたらあの時、結構不味かったんじゃないでしょうか。

一刀ちゃんはGがあるから早く戸を閉めてっていう意味で言ったのですが、秋蘭さんからすると、写真がいなくなったことに気付いた一刀ちゃんが部屋の中を散かしてまで探して、その上にも見つかるはずもない写真をなくしたことに元気を失っているように見えたでしょう。

そして、その原因が自分の一瞬の間違いから生まれたと思えば…

これはすごい重圧感です。

いや、勘違いなんですけどね、はい。

「むっ、あそこにいるのは……」

おろ？凪さんがあんなところに……

子供たちに囲まれて……

え？あれ？

「こ、こらぁ、放してくれ。私は今任務中……」

「ねぇ、ねぇ、お姉ちゃん、ボクたちとあそぼ」

ぐい

「なっ！引っ張るな」

なにあれ、ちょー面白いんですけど。

子供たちに囲まれて困っている凪さん。かわいいです。

「あーそーぶー」

そして、この街の子たちは、僕が知ってる限りすごく我儘です。しかも数の暴力、怖いです。

「わかった、わかった。遊んであげるから髪を引っ張るのはやめいだだだだ」

ああ、それにしてもかわいいです、いじめられる凪さん、げふんげふん。

えっと、普段ならあんな風に人を襲ったり（？）はしないんですけ

ど、最近一刀ちゃんもいませんからね、遊ぶ相手に餓えているのではないかと思います。

「あああああああ、何でこう仕事がおおいねーん！」

ちなみに今のは街からの陳情書を整っている真桜さんの叫び声です。

八割以上は、一刀ちゃん最近なんで来ないのですか？という内容です。

一刀ちゃんがいないと街の警備システムが麻痺します。

え？沙和さんですか？

あの人は仕事があってもなくてもサボるでしょ。

「凪、ちょっと良いか」

「あ、秋蘭さま？」

「夏侯淵さまー」

「夏侯淵さまだー」

新しい遊び相手を見つけた餓えた子オオカミたちが秋蘭さんに集まってきます。

「夏侯淵さまー、一刀お兄ちゃんは？」

「一刀お兄ちゃん、何で最近遊びに来てくれないの？痛いの？」

「え？一刀お兄ちゃんいたい？」

「えー！？」

「陳留オワタ」

「お見舞い行こう」

「ぼくお母さんに言って美味しいもの持っていく」

「あ、じゃああたしも」

誰も一刀ちゃんが病気だと言ってないがな。何と落ち着きのない子たちだ。

「……」

そんな姿を暫く見ていた秋蘭さんは、

「大丈夫だ。北郷は痛くない。ただ、最近城が忙しくてな、もうちょっとあったら皆と遊ぶに来るだろう」

「ほんと？」

「ああ」

「秋蘭さま、どうかなさいましたか」

子供たちを一旦落ち着かせて帰らせてから、凪さんは秋蘭に声をかけました。

「ああ、実は、北郷のことでな」

「…一刀様は、まだ部屋の中に」

「ああ、それでだが、何か心辺りはあるか？」

「心辺り、ですか？」

「ああ、何か、あの時一刀と偵察に行った時に、一刀に何か話したこととかはないか？」

「あ……」

それを聞いた凪さんは少し恐縮な顔。

「いや、別にお前に原因があるという話ではないのだが、ただ、あ

れで北郷は、色々と事情が深い子でな」

「事情、ですか？」

「ああ、話すと長くなるが……いや、その話は今はいい。あの時、一刀と何の話をしたか教えてくれ」

「特にこれといって話と言えるものをしたことは……自分はあまり話す口ではありませんので」

「そうか……」

それではやはり…とか考えているんでしょうね、秋蘭さん。

「わかった。すまんな、仕事の邪魔をしてしまって」

「いいえ、私も、まだ右も左も解らなくて迷ってばかりいるところでしたから…それにしても、すごいですね、一刀様は。こんな街を毎日回っていらっしゃったなんて」

あの子の場合回ってるだけでも警邏になるのがすごいんですよ。

「すごいですね、一刀様は」

「…そうだな」

大事なことなので二回言う凪さんを見て、秋蘭さんは微笑みました。

いや、あるいは苦笑だったのでしょうか。

＞pf＜

その後秋蘭さんは華琳さんの部屋に行って報告をしました。

「そう、凪にも心当たりがないのね。…だとしたら、どういうことかしら。もっと前のことが原因なのかしら」

「……」

「…秋蘭」

一瞬でも曇りを見せた秋蘭さんの顔を、華琳さんが見逃すはずがありません。

「はい」

「何か、心当たりがあるのだったら言いなさい」

「……」

「言ってくれなかったら解らないじゃない。……それとも、原因はあなたにいると思ってるのかしら」

「…はい、実は」

「言わなくていいわ」

「はい？」

自分の考えを言おうとする秋蘭さんを、華琳さんは止めました。

「あなたが何を考えているかは解らないけど、一刀が篭っていることはあなたのせいじゃないわ。あの子はそんなことでこんな行動をする子じゃないわ」

「それはそうですが…しかし」

「それでも気になるなら、悶々としてないであの子に堂々と言いなさい。私は手伝ってあげないわよ」

「……」

「もういいわ。下がりなさい」

「…御意」

ある意味、原因に直接関わってる人がそんなこと言ったらちょっとあれですね。自覚はありませんが。

とにかく、秋蘭さんはそのまま華琳さんの部屋から下がりました。

それにしても案外華琳さんが冷たいですね。

何かあったのでしょうか……。

「……」

…？

・・・

・・

・

「……」

その後秋蘭さんが向かった場所は当然一刀ちゃんの部屋です。

ところで僕はここ三日ぐらいは一刀ちゃんに会ったことがないのですが、中では一体何が起きているのやら……

ドタタタダッタッタン

！？

この崩れる物音はまさか……

「北郷！」

がらっ

「！！」

「……ぅ…」

一刀ちゃん、いつかのように棚につぶされています。
だからあの棚片付けたほうがいいって言ったのに。
無駄にでかいし良く崩れるし。
「北郷、大丈夫か？」
秋蘭さんが急いで本棚を上げて一刀ちゃんを救いました。
ところで、一刀ちゃん今度は何でこうなったんですか？
「……っ」
一刀ちゃんどうしました？焦っているようですけど。
【さっちゃん、写真なくしたの！】
写真？ご両親の写真ですか？
「（こくっ）」
今更何でそんなものを……
【それはどうでもいいじゃない。あれがなかったらボク…ボク今本当にどうかなっちゃいそうなのに、なのに、ちゃんと鞄の中にいれといたのに、いないどうしようどうしよう】
人として壊れ寸前ですね、こりゃ。

まぁ、まぁ、取りあえず落ち着いてくださいよ。

「ぁぅ……」

「怪我はないみたいだな……あの棚は片付いておいたほうがよさそうだな。大体の部屋にはあるものなのだが……そのままおいておくのも危なさそうだ」

大体棚に何もおいていないことが原因なんですけどね。

「それにしても北郷」

「！」

その時になって一刀ちゃんは自分が秋蘭さんにくっついていることに気付いたのか直ぐに後ずさりで距離を取りました。

うん？後ずさり？

いつもみたいに瞬間移動じゃなくて？

「どうしたんだ、北郷」

「……」

とにかく自分から離れようとする一刀ちゃんを見て秋蘭さんは取りあえずそのまま床に座ったまま話を続けました。

「華琳さまは皆も心配しているぞ」

「……」【わかってる】

話は聞いては居ますが、視線は避けています。

ここ数日、一刀ちゃんは華琳さんと実のお母さんの中から右往左往していました。

これ以上自分の感情が紛らわしくなるのがいやなのでしょうけど、

いや、それ何も解決していませんからね、一刀ちゃん。

でもまあ、こちらとしては断然こっちの方に慣れてもらったほうがいいのですが。

お母さんだと言ってももはや他人よりも疎い関係ですし、こちらの人たちはもうすっかり北郷のことを可愛がって居ますし。

前にあったあの占い師も言ってたじゃないですか。これからは自分の幸せは自分で掴まえられるって。

一刀ちゃんは、今までの出来事が楽しくなかったんですか？

幸せじゃないんですか？

「……」

＞ｐｆ＜

「それと、……これ、北郷のだろ」

「！！」

秋蘭さんが持ってきたものは一刀ちゃんがご両親と一緒に取った写真です。

おそおそそれに手を伸ばしてその写真を持っていきました。

「……」

そして写真をもらってから視線を秋蘭さんに移しました。

言ってはないですが「どうして秋蘭お姉ちゃんが持っていたの？」って顔です。

「別に持っていこうとしたつもりではないのだがな……返そうと思ったらこの前北郷が大声で私に出ていけと言って、私はあの時もう知っていたのだと思ったのだが、どうやら私の勘違いだったようだ」

「……」

また視線は秋蘭さんに固定。

「申し訳ない」

秋蘭さんが頭を下げて謝罪しました。

「……」

そしたら、一刀ちゃんは目を写真へと移して、しばらくその写真をじっと見ていました。

何せ、家族との思い出を思い出させるものはあれしかありませんからね。

あの写真は一刀ちゃんと、一刀ちゃんのお母さんを繋げる唯一の絆。

そして……

じーっとその写真を見ていた一刀ちゃんは、

すーっ

持っていた写真を両手で持って秋蘭さんに見えるようにしました。

「……？」

秋蘭さんは一瞬それがどういう意味かわからずキョトンとしていましたが、

チイイィー

次の瞬間、写真は一刀ちゃんの手で二つになっていました。

「…北郷？」

「……」『もう要らない』

そう言った一刀ちゃんは立ち上がりました。

そして秋蘭さんの方へ行って、

秋蘭さんの手を掴みました。

「……北郷」

「……」

一刀ちゃんは暫く秋蘭の手を揉んでいました。

「……」【さっちゃん】

はい？

【写真は…暖かいとかないよね】

…そうですね。

【…ボク、今までは辛いことがあるとあの写真見ながら元気出していたのにね。……もう、見ていても何も収まらない。胸がもって苦しくなるだけ】

そうだったんですか。

辛いですか？今。

……

【……ううん、ほっとする】

…ならいいですよ、それで。

【そうなの？】

はい、ああ、でもこれからは大変なことになりますね。皆さんに謝らなくてはなりませんし…先ずは目の前の秋蘭さんがいい加減手を揉まれすぎて頭に血が上りすぎているのでやめてください。

【え？】

「…ほ、北郷、そろそろ、やめて、もらえ、ないか？やめて、もら、え、な、いか」

ほら、何か言葉とか変になってますし。

【秋蘭お姉ちゃんが壊れてる】

誰のせいですか。

【何か面白いからもうちょっとだけ】

オイ

結局それからも三十分ぐらいそのままでした。

＞ｐｆ＜

その後秋蘭さんに凪さんとあったことを説明しました。

事情が大体解ってる秋蘭さんなので、直ぐに理解しました。

「…そうだったのか」

『おかしいよね』

「確かに、ちょっとおかしいかもしれないな。そういうことで北郷が悩んでいても何も変わらないだろ」

『そうだけど、でも気分の問題は大事だよ。あぁ、華琳お姉ちゃんにはナイショで済むかな』

「さあ、そのことを知ったら華琳さまも北郷以上に混乱なさると思うんだが…とりあえずは私がなんとかしてみよう」

ちなみにこの会話が進んでる場所がベットの中だということを敢えて説明する必要はありませんね。一刀ちゃんの部屋ですが。

多分一刀ちゃんの部屋で誰が寝るのってこれが初めて？

…あ、違うか。この前華琳さんも来てたな。

残念でしたね、秋蘭さん。

『あ、後ね。実は……』

「うん？」

『ボク、スッてするのできなくなった』

え？

「……なに？」

拠点フェイズ４　秋蘭默（前書き）

溜め分がかなり多めなのでもうちょっと更新速度あげようかなぁと思ってます……正直編集する時間も結構惜しいほどの別のことをやってますけどね。

まぁ、なんとかなります（笑）

理論的にはこういう話です。

瞬間移動の能力ができたのは、元々一刀ちゃんが病院から遠くに住んでいたお母さんのところに行くためにできた能力だったわけですが、

そういうお母さんへの感情が華琳さんと皆のせいで薄くなってしまって、それで能力を失った、

という説です、はい。

あくまでそういう推測なので僕が詳しくしったこっちゃありません。

本人ができないというのに、僕はどうすることもできませんよ。

とにかく、次の日一刀ちゃんは華琳さんのところへ行きました。

「そう、じゃあ、もうその能力は使えなくなったの？」

「（こくっ）」

「まぁ、少なくとも、もう私の目の前から急に消えることはなさそうね」

「……」

暫く一刀ちゃんは華琳さんをじっと見て。

『華琳お姉ちゃん』

「何？」

『怒らない？』

「怒ってほしいの？」

「……」

・・・

「（こくっ）」

それはとても珍しいというか、理解するに少し時間がかかる行動でした。

「？？」

『何日も心配掛けたとか、罰とか、ないの？』

「……」

華琳さんも驚いたようにしばらく一刀ちゃんを見つめてから、口を開けました。

「……いいわ。それじゃあ、望む通り罰を与えましょう」

＞pf＜

「それで、それを持って回ってるのか？」

「（こくっ）」

華琳さんの罰の内容は、大したことはなく、ただ皆に心配をさせたのを謝って、許してくれるという証で皆の名前を書いた竹簡に皆の承認をもらってきなさいというものでした。

『ごめんなさい、許してください』

それで、先ず秋蘭さんのところに来たわけです。

今回の事件の終始を知っている唯一の人ですからね。

「わざわざこんなことまでして…私や凪たちはまだしも、姉者や桂花はそう易く許してくれないぞ」

「……ぁ…」『なんとかする』

「…姉者ぐらいなら私がなんとかしてあげれるが」

「……（フルフル）」『罰だから、手伝ってもらっちゃダメ』

「…そうか」

そもそも何で自分で罰もらうって言い出したのですか？僕はそこから解らないのですが。

「……」

一刀ちゃんは皆の名前が書いてある竹簡を秋蘭さんに出しました。

「…ふーむ、とは言っても、華琳さまの意図を考えるに、ここで私がただで許してあげたらダメな気がするな。罰だしな」

「…っ……」

苦笑する一刀ちゃん。秋蘭さんならただですむと思っていたのにそうはいかないようです。

『じゃあ、どうしたら許してくれる？』

「そうだな……」

秋蘭さんは暫く考えるように目をつぶっていました。

そして、

「……ふふっ」

「!?」【さっちゃん】

はい

【ボク、初めて秋蘭お姉ちゃんの笑い方が不気味だと思ったよ】

はい、僕もそう思いました。

「北郷、この前姉者と一緒に華琳さまの服を買いに行ってたこと覚えているか?」

「…（こくっ）」

「……」

「……ぇ?」

＞pf＜

秋蘭さんの部屋には、その……かわいい服とかがたくさんありました。

大体は華琳さんの服ですね、はい。

でもこれが……結構幼いころに華琳さんが着ていた服も残っていましてですね。

例えば……

今一刀ちゃんが着ている袖なしの夏物ドレスがそれです

「……／／／／／」

「ふーむ、こういうのもなかなか……」

秋蘭さん、こういう趣味もあったんですね。

というか一刀ちゃんのせいですかねこれは……

「／／／／／／」

まぁ、顔が真っ赤になってる一刀ちゃんを見たら、気持ちがわからなくもありませんけど。

よくもこんな服を捨てずに持っているのですね。一体何のためにおいておいたのでしょうか。

「それじゃあ、次はこれで」

【またあるの!?】

服に墨がついたらダメですので竹簡は没収されています。

ちなみに一時間ぐらいやってます。一人ファッションショーです。

部屋のどこからそんなにたくさんの服がおいてあるとかそういう質問は勘弁です。あの寝台の下の秘密空間は僕が仕掛けたわけではありません。

「！？」

次に秋蘭さんが持ってきたものは……おお、これどこかで見た覚えがあります。

……この前一刀ちゃんが華琳さんを脅迫する時に使ったナイトドレスにそっくりですね。

【罰当たった！？】

まぁ、そうでないともいえませんねー。なにより元々そういう罰ですし。

というか、よくもまあそこまで女の服がお似合いなのですね。

【言わないでー（涙）】

ああ、一刀ちゃん、それいいです。その泣きそうな顔がいいのですよ、ゲフンゲフン。

まあ、ポジティブに考えましょうよ。

これが現代だったら写真とかも取られただろうし、それとも偽の髪とかつけられて一緒に街一周とかも、

【ボク知ってる！それフラグだよね！さっちゃん今フラグ立ててるよね】

あ、バレた。

「うむ？これは……昔華琳さまが間違って髪を切りすぎた時に使った鬘［かつら］……」

【ピィーー！】

あはは、

いや、わざとじゃありませんよ？

【…もうさっちゃんと話しない】

あうぁぅ…ちょっとやりすぎたようですぅ……

「北郷、ちょっとこれ付けてみないか？」

＞pf＜

僕は絵とかはできませんので…脳内で考えてください。

黒いドレス（プリル多め）に華琳さんの鬘を被った一刀ちゃんは、まるで小さい頃の華琳さんです。

【死ぬ…もう死ぬしかない。最初からスッてできないボクなんてただの子供だっていわれたし…存在価値ないし、別にボクじゃなくて他の子供でもいいし、寧ろ他の子供だったら喋れるからもっといいし……】

……そこの皆さん、アレ言った人の口塞いでください。

一刀ちゃん、かわいいですよ。いい意味で。

【いい意味でも嫌！】

「ああ、かわいいなー／／／」

秋蘭さんの顔が偉いことに……なんか、一刀ちゃん素顔だったよりもっと紅潮しているようにも見えます。

ぐいぐい

「！？」

「……（ぐすん）」【もう、やめて……お願いだから……もうやめて…】

「！？　わ、私は一体何を……」

一刀ちゃんの涙に満ちた顔を見て正気に戻った秋蘭さんです。今までここまで一刀ちゃんを泣かせたのは僕以外にいませんでしたのに…これは強力なライバルが登場しｍ

「今すぐ姉者にもこの姿を見せないと」

負けたー！！！！

「……ぁぁぁーー」

・・・

・・

・

「こ、これはー！！」

「中々いいだろ」

「／／／／／／」【さっちゃん、舌噛み千切ったら痛い？】

やめてください、死にますから。

それにしても秋蘭さんすごいですね。まるで一刀ちゃんのことをもの扱いしています。

華琳さんの鬘を被ったとたん脳が壊れたようです。

「と、ところで秋蘭、こんなことして大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

【大丈夫じゃない、問題！】

大丈夫です、問題ありません。

２：１で問題ないということで。

「か、華琳さまの幼いときのお姿がこうしてまた見れるとは思わなかった」

「ああ、まったくだ」

一刀ちゃん、この状況だと、意外と春蘭さんの方が話が通じるかも知れませんよ。

「……ぁ…」

ぐいぐい

「うん？」

「……（うるうる）」【助けて、お願いだから助けて】

「うっ……」

まぁ、正直な話、春蘭さんとって正気だとは思いませんが。

「…しゅ、しゅうらん、流石に、これ以上は不味いんじゃないか」

お？意外と助け舟をしてくれるようでｓ。

「これ以上すると、精神が保ちそうにないのだが」

ですよねー。

一刀ちゃんの恥かしさとかどうでもいいですね。良かったですね、

一刀ちゃん。

【今以上にスッてしたかったことはなかった】

現実から逃げられないということは辛いですよね、わかります。

【…いや、寧ろこれは現実じゃないと思う】

その逃げ道は人をダメにしますので通らないでください。

もうこれ以上すると流石に危険な気がしますから、僕が手を出しましょう。

「（パァーっ）」【助けてくれるの！？】

あ、一刀ちゃん、今そんな顔すると、

「ぐはっ！」

バタン

春蘭さんが鼻血出して倒れちゃいました。

元々それは別の人の仕事ですが、今いませんからよしとしましょう。

「……」

そして以外としぶとい秋蘭さんは……

「…」【秋蘭お姉ちゃん？】

ぐいぐい

「……」

返事がない。ただの気絶した変質者のようだ。

【秋蘭お姉ちゃんそんな変態じゃないもん！】

いや、変態ですよ。どうみても。

＞ｐｆ＜

・・・

＞ｐｆ＜

……

「……む？」

「？！」『あ、起きた？』

「…ほん、ごう？」

やっと目が覚めたようですね。

立ったまま気絶した秋蘭さんをベットに運んで、春蘭さんも侍女さんたちに頼んで部屋に運んでもらいました。

この状況は他の皆さんには内密とされていますが、侍女さんが見ました故に、この事件が城内に広まる可能性が非常に高いです。

何せ女児ようのドレスを着ている一刀ちゃんを見たのですから。噂にされないわけがありません。

「私は…いったいなにを……っ、何も思い出せない」

「!?」【これって…もしかして】

そして、暴走した本人の脳内からはすっかりメモリーが飛んでいます。

一刀ちゃんは今は制服姿です。

「北郷、私は一体何をしていたのだ?」

『何か、部屋に来ていたら倒れていて……』

「……そうか。ずっと見ていてくれたのか?」

「……（こくっ）」

「そうか……ありがとな、北郷」

【覚えていなくてよかった】

捏造すごいですね、一刀ちゃん。まぁ、気持ちは解りますが。

【さっちゃんの脳内からも消えてくれたら尚更いいんだけど】

無理ですね、あんな刺激的な姿を忘れるなんてとんでもないです。

「そういえば北郷。華琳さまとの話はうまくいったのか？」

『うん…あのね、皆に謝って署名もらってきなさいって』

「そうか…私は大丈夫だが、姉者や桂花相手では相当むずかしいのではないのか？」

「……（にしっ）」『なんとかなるよ』

「そうか……それじゃあ先ず私が」

そう起きようとした秋蘭さんですが、

一刀ちゃんが両手で止めます。

『まだもうちょっと横になっていて』

「いや、もう大丈夫なんだが…」

『いきなり倒れていたのに大丈夫なわけないでしょ？もうちょっと休んでおいて。ボクのことはいつやっても大丈夫だから』

「……そうか」

ここでまた起きたら同じことになりかねないですね。流石です。

一刀ちゃんが心配するのを見て、秋蘭さんは素直にまたベットに戻りました。

「……」『秋蘭お姉ちゃん』

「どうした、北郷」

「……」『華琳お姉ちゃんのこと好き』

「……ああ、好きさ」

『じゃあ、ボクは？』

「北郷？……ふーむ……華琳さまと、…姉者の次にぐらいだろうかな」

「……（にしっ）」『そうなんだ』

・・・

・・

・

拠点フェイズ４　秋蘭獣（後書き）

前回の秋蘭がどうしてこうなったのやら・・・

拠点フェイズ４　桂花獣

翌日、桂花さんの部屋です。

『というわけで参りました』

「どんなわけよ」

本当にどんなわけですか？

何故に次の狙い相手が桂花さんなのですか？

『ボクね、給食の時には嫌いなものから食べる派なんだ』

「だから何の話よ」

ああ、それはとてもわかりやすいですね。

『実はね、ボク華琳お姉ちゃんに……』

少年説明中・・・

「ああ、何の話かと思えば、それだったの」

「（こくっ、こくっ）」

どうやら一日過ぎたところで全将の皆さんに話が広まったようです。

『ごめんなさい、許してください』

「別にあなたに怒ってなんていないわよ。寧ろ、私の場合あなたがいない間静かで良かったのだけれど」

『じゃあ』

「だからといって、許してあげるとは言ってないわよ」

ですよねー

『えー、どうして？』

「当たり前じゃない。あなたのせいで華琳さまがどれだけ心配になさっていたと思うのよ。それを考えたら夜に寝ても寝た気がしないわよ。そんな原因を与えたあなたを許してあげるわけないでしょ？」

「……ぅ」

一刀ちゃんも後ろめたいのか肩をすくめました。

『ボクも華琳お姉ちゃんのこと好きだし、心配かけたくもないよ』

「ふん」

一刀ちゃんはそういいましたけど、流石の桂花さん、そっぽを向いて聞いたふり（この場合見たふり）もしません。

一刀ちゃんここは一度引いて他の人たちから攻略したほうが良くありませんか？

【別に今じゃなければできるというわけでもないじゃない。寧ろ今引くと後の方が難しい】

それもそうですけど、今の桂花さんをどうやって口説くつもりですか。

【口説くって何？】

＞ｐｆ＜

ふらふら

「……」

その後桂花さんは政務に戻りましたが、一刀ちゃんはこれといった行動をせず、寝台で足をふらふらとしながら桂花さんの背中を見つめていました。

「……」

「……（かきかき）」

しかしすごい集中力ですね。

こうして後ろでうろちょろしてるだけでも、桂花さんなら結構気になって今頃怒鳴っていたところだろうと思ったのですが…

【うん、ボクいつも桂花お姉ちゃんの部屋でこううろちょろしてたけど……初めての時は結構怒られたけど、怒られては逃げてその後直ぐ戻ってまたうろちょろしたりしたら挙句に、桂花お姉ちゃん、ボクのこと無視しながら政務できる境地に上がっちゃったみたい】

それはいらないところを鍛えてしまいましたね。

しかも、僕は全然見てませんけどね、そんな場面。おかげで皆さんにもお見せしたことありませんし。

それにしても何で桂花さんのところでうろちょろしていたのですか？直ぐ怒るし嫌じゃないですか？

「……」

はい？

「……」

黙秘権とは…心で何も思わない「無」の境地に既に上がっていらっ

しゃるのですか、あなたは。

「……」

それで、一刀ちゃんは桂花さんを見てるだけです。あくまで見てるだけ。

「あ、墨切れた。買いに……」

「！」

桂花さんが椅子から立とうとしたら、

「……」

「え？何よ」

一刀ちゃんが立とうとする桂花さんを止めて椅子に座らせます。

てててて

そして、自分が部屋を出ていってしまう一刀ちゃん。

「……また」

またって・・・

十分後、

「……」

墨、買って来ました。

「……（ふん）」

いやいや、何をよくやったでしょ的な顔しているんですか？

何で自分で行ったのですか？

しかも桂花さん、先「また」って言いましたよ。

一刀ちゃん、普段も桂花さんのところにいるとずっとこうなのですか？

「…あ、ありがとう」

「……」

とにかく墨をもらって仕事を再開なさる桂花さんです。

「……」

てててて

そして、一刀ちゃんはまた寝台に戻って待機。

ああ、もうついていけないんですけど……

＞pf＜

その後、一刀ちゃんは桂花さんが行くところはどこでも付いて行って、

寝るときは一緒に寝て（床ですけど）、政務中で桂花さんが肩を叩くと代わりに叩いてあげたり、代わりに台所から食事持ってきてくれたり、

とにかく周りにくっついて桂花さんが何かをしようとしたら側で代わりにしてくれるのでした。

これじゃまるで、桂花さん専用の執事か何かみたいです。

一体何をしているのでしょうか、一刀ちゃんは……

あれ以来は僕が話をかけても聞いてくれないですし、そろそろ心が折れそうなのですけど。

「……」

いつもどおりに政務中の桂花さん。

「……＞＞ふらふら＜＜」

そしてそれを見つめている一刀ちゃん。いつもの景色です。はい。

これをいつもの景色という僕に驚きです。慣れるって恐ろしいです。

「……あ」

「！」

桂花さんの動きに直ぐ反応する一刀ちゃん。

戸を開けようとする桂花さんの前になってその瞳を見上げています。

「…ちょっと気分転換に散歩に行こうと思っただけよ」

「……（こくっ）」

もっとすごいのはですね。

一刀ちゃんがここまでしているのに、桂花さんは一刀ちゃんに最小限に必要な言葉しか言わないということです。

ここまできたら桂花さんなら「いい加減についてきなさいよ！目障りなのよ、あなた！」くらいは言いそうなキャラでしょ？

・・・

・・

・

中庭です。

桂花さんは静かに庭を歩いていて、一刀ちゃんはその後を追っています。

「……」

「……」

二人とも無言のまま。

一人はともかくとして、もう一人はわざとだとしか思えない無視っぷりです。

「ちょっと、あんた、ここでお茶にするから二人分持ってきて頂戴」

中庭にある東屋＞あずまや＜に着いた桂花さんは、ちょうどそこを通っていた侍女さんに、お茶を持ってくるように言いました。

侍女さんが頷いて消え去って、桂花さんは東屋に座りました。

「何してるの、あなたも座りなさいよ」

桂花さんは立ったまま桂花さんをじっと見ている一刀ちゃんにいい

ました。

「……」

でも、一刀ちゃんは聞いていないかのようにそのまま桂花さんの側に立っています。

「…好きになさい」

桂花さんはあきらめたのがそれ以上言わずに前を見て黙り込みました。

＞ｐｆ＜

暫くして、先の侍女さんがお茶のセットを持ってきました。

「！」

それを見た一刀ちゃんはこっちに来ている侍女さんの方に言って、

「…？」

「え、北郷さま？」

一刀ちゃんは、侍女さんが持っているお盆を持って行こうとしました。

「……＞＞ぐいぐい＜＜」

「い、いえ、そうするわけには……」

慌てながらお盆を渡さないようとする侍女さんでしたが、お盆を掴まえた一刀ちゃんの手は放れません。

「あの子にあげなさい。あなたはもう行っていいわよ」

「で、ですが……わかりました」

桂花さんの言葉を聴いて、ちょっと迷った侍女さんは結局一刀ちゃんにお盆をあげて、下がってしまいました。

「……♪」

お盆をもらった一刀ちゃんはそのまま気をつけて桂花さんがいるところまで戻ってきて、

「……」

桂花さんの杯にお茶を入れて、

「……あなたも座りなさい」

一刀ちゃん？何故そこでまた後ろに下がりますか？本当に執事設定ですか？

「……」

しかもここで何も言わないからこの人はキツいのですよ。

『ごゆっくりどうぞ』

「……っ」

あ、ついに初めて桂花さんが顔を崩しました。

「ねえ、あんたちょっとこっち来なさい」

「？」

て・て・て

『なにっ！？』

「あんたはね！いつもそうやって私に嫌がらせするのが楽しいわけ？普通こんなに長く人の世話しないでしょ？」

「うぇ…ぇう……あぅ…！」

人のほへを摘まんでいじらないでください。

気持ちは解らなくもないですけど、今までやめていなかった桂花さんも桂花さんですよ。

「はぁ…負けたわよ。もう許してあげるから私にくっついているのやめなさい」

桂花さんは一刀ちゃんを放して言いました。

「…！☆」

ぎゅー

「って、ちょっと、放れなさいって言っているのよ！何もっとくっつくのよ！」

「……♪」

「だから、

放れなさいよ！！！！！」

＞ｐｆ＜

で、何だったのですか？

ここ数日あった茶番は？

いや、茶番といったらなんですけど、僕にはそう見えましたので。

【その後付がもっと失礼だと思うけど……】

で、一体何だったのですか？

【えっと……北風と太陽、みたいな？】

……ああ、つまりあれですか？

わざと相手が困るように世話をして、寧ろ嫌がらせになるぐらい繰り返したら、相手が服を脱いでくる（デレる）という……

【ほら、ボクこの前桂花お姉ちゃんと一緒にいた時あるでしょ？】

はい。

【あの時ね。桂花お姉ちゃんはボクのことが嫌いなわけじゃなくて、単に男だったら全部嫌いだって解った】

まあ、そうですね。

【だから、思った。そんな理由だったらボクにどうしようもないと】

じゃああきらめたのですか？

【ううん、つまり】

【お姉ちゃんのほうが嫌いとか関係ない、ボクが好き】＞＞エコー＜＜

【で、行こうと思った。桂花お姉ちゃんには】

……

今一刀ちゃんの後ろから宇宙が見えましたよ。

でも、一刀ちゃんは桂花さんのどこがそんなに好きなんですか？

「……？」【桂花お姉ちゃん、いい人だよ】

いや、あの人が悪い人とかじゃなくてですね。

桂花さんのどこが好きなのか、って問題ですよ。

「……？」【さっちゃん、何言ってるのかわかんない】

え、僕ですか？僕の方がおかしいのですか？

だってケフィアさんですよ？

つんとでれの比率１０：０と呼ばれるあの人のどこが……

「……」

ね、ちょっと、一刀ちゃん、

一人で行かないで説明してくださいよ。

何ですか？

何で桂花さんにはあそこまでするんですか？

ねえー

一刀ちゃん？

・・・

・・

・

拠点フェイズ４　桂花獏（後書き）

没になったネタ

「…うん…肩が…」

トントン

政務中でもう何度も肩を叩いてますね。

まぁ、肩が凝るのは軍師には職業病なものなのですが……

「…！」

一刀ちゃん？

ギギギィー

一刀ちゃんは桂花さんが座っている椅子の後ろに他の椅子を持ってきて、

【よいしょっと】

「ちょっと、あんた何してるのよ。変なことしたら……ひっ！？」

一歩遅かったですね、桂花さん。

一刀ちゃんの両手は、既に桂花さんの肩の上にいます。

「……」

ぐいっ

「ちょっ…んああ？」

桂花さん、変な声が出てます。

「や、やめなさい。いきなりそんなに激しく触ったら……ああん」

「……＞＞熱心＜＜」

熱心になってぐいぐいと桂花さんの肩をマッサージしている一刀ちゃんです。

誰もやれといっていないのにしてあげるところ、

「ああー……あぁ……」

あなたは天使ですか？（笑）

かなり凝っていたのですね、桂花さん。

「ちょ、やめっ、もう許してあげるから、

やめてぇぇーー」

没になった理由：一刀ちゃんにさせていいことがあってわるいこと
があるときづいた。

「…何？」

『一緒に御飯食べに行こう？』

「……」

「……」『ヤなの？』

「いや、嫌とかそういうのではなくてな……秋蘭や季衣と食べに行ったらいいだろ？どうしてわざわざここまで来て……」

『今日は春蘭お姉ちゃんと食べたくて来ただけ……ヤだったら別に付き合ってくれなくてもいい』

「いや、うん……まあ、たまにはそういうのも悪くないかもしれんな」

「……♪（にぱぁ）」

＞ｐｆ＜

珍しいではないですか、春蘭さんとお昼だなんて。

というか初めてですね。二人きりで行くのは。

まぁ、確かに春蘭さんと二人で食事に行くことはあまりいい考えではない気もします。

何せ先ずどこで食べるかを決めるのがめんどくさいですし、食事中で話でもしていたら何わけわからないことになって怒りだすかもしれませんし、その上にその人は一緒に何を食べたのかも覚えていないでしょうから。

正直、あまり一緒にお食事をしたい人ではありません。

「……（むっ）」【人が聞かないからってそんなこと言うの失礼だよ】

9才の子に礼儀正しくないって叱られました。サーセン。

「……（じー）」

そんな顔しないでくださいよ……それより、どこへ行くんですか？

『春蘭お姉ちゃん、何食べる？』

一刀ちゃんは春蘭さんにお昼のメニューを聞きました。

「何でもいい」

そして恒例の返事が返ってきました。

『じゃあ、春蘭お姉ちゃんが行きたいところに行こう』

おお、投げた！まさか春蘭さんに献立を投げっぱなしにするとは。

「うーん……」

今日お昼を食べる気がないのですね、わかります。

この人にそんな「難しい」ことを聞くと何も思い出せないくせにその場に足止まって思考止まって誰か１００Ｊ以上の攻撃を与えないと再起動しなくなりますよ！（適当に言っています）

「うーむ……」

「……＾＾」

半時間後

「うーむ」

「……＾＾」

春蘭さん、いつまで考えてるのですか。何も思い出せないならもうやめてください。

一刀ちゃんはそろそろ微笑んでいるのはやめて場面をなんとかしてください。笑っていれば何もかも円やかに解決できる人ではないのですよ、この人は。

そして二人とも、それを街の真ん中でやっているという点で凄く周りに迷惑かけちゃっています。主に後ろの牛馬車が通れないようです。

もう突っ込む所多すぎて一々突っ込んでいられません。

ぐぅー

・・・

今お腹が鳴ったのはどちらさまで？

「うーむ……＞ぐー＜」

「……＾＾＞ぐぅー＜」

両方かよ。

もういい加減決めましょうよ。献立。

「…」

「うーん、そ、そう。貴様は何が食べたいんだ？」

３０分考えて出てくる答えがそれですか。

人に話を振ってきただけマシなのですけどね。

『春蘭お姉ちゃんが食べたいもの食べたい』

一刀ちゃん、今はキャッチボールをしている場合ではないのですよ。本当にそろそろ決めないと昼時すぎてしまいますから。

「い、いや、ほら、私は……何を食べるとかはあまり気にしないからな」

正直な話、自分が食ったものが何なのかも解らない人には相当難しいです。こんなことって。

「……」『春蘭お姉ちゃんが食べたいもの』

「うぅ……」

難しい判断を子供に任せようとした春蘭さんはこういう反応にまた唸りながら長考に入りました。

一刀ちゃんもこんな時には容赦ないんですね。自分もダメージ入りますけど。

＞ｐｆ＜

それからまた一時間経って、結局蟹炒飯を食べることにしました。

あれだけ考えておいて頭がから出てくるのが蟹炒飯かい！って叫びたかったんですけどね。

まあ、あの人の頭から考えの結論というものができただけでも奇跡といえるでしょうよ。

今まで誰も彼女にここまで時間を与えたことはないだろうと思います。

ぐーぐーぐーーー

「……＾＾♪」

一刀ちゃんの腹はそろそろ鳴くときが過ぎちゃってもいい頃でしょうに、まだああして凄い勢いで鳴っています。

それでも一刀ちゃんの顔がパァッとしているところ、僕は今果てしなく恐ろしいです。

『行こっ？』

「あ、ああ」

一刀ちゃんが春蘭さんの片手を抱いて引っ張ったら、春蘭さんもすべこべ言わずに一刀ちゃんが行くまま連れて行かれちゃいます。

春蘭さん、今きっと心の中から「こ奴、どうしたのだ？何か悪いものでも食べたのではないだろうな」とか思ってるでしょうね。

実は僕がそう思ってます。

・・・

・・
・

定食屋に入って、春蘭さんは先ず蟹炒飯注文して、また他に色々注文しました。

でもメインは蟹炒飯です。

何せ一刀ちゃんは、三つ以上の料理を同時に食べることができない小腹なんですので…

「……☆（キラキラ）」

「うーん……」

でも何か、春蘭さん困った顔していますね。

「？」

『どうしたの、春蘭お姉ちゃん？』

「いや、ほら…あれだ。貴様、どうして今日は私と食べようと思ったのかって……先からずっと考えていたのだが」

先からまさかあれを考えていて献立を決めるに時間がかかったとかではないですよね？

でなければ私が一刀ちゃんの腹を空かせておいた罰としてこの故郷

から持ってきた?陽唐辛子を……

『ボクは前から春蘭お姉ちゃんと御飯食べたかったけど、機会なかったし、それに春蘭お姉ちゃんボクのことあまり好きじゃないし?』

「そう、そこだ!私は貴様のこと嫌いなのに、どうして私が貴様のお昼を奢ってやらなければならないのだ!」

「……」『お金の問題?それだったらボクの分はボクが払うよ?』

「いや…そういう問題ではなくてだな……あぁー、なんといえばいいんだ?」

この微妙に似合わない組み合わせに本当どういいえばいいのか。

＞pf＜

「……♪」

「しっかし、お前は本当に美味しそうに食うよな」

「?」『食べるって楽しいじゃない?』

「それはまあ、確かにうまいものを食うと嬉しくはなるが……貴様の場合は、ちょっと変だぞ?」

「…」『そうなの?』

はい、なんというか……見ていると自分も同じものを食べたくなるようなアレです。

そんなにおいしいものなのかって……

実際、今一刀ちゃんの周りのテーブルにかに玉も追加注文が入っています。

後は……

「…何か、他のも食うか？」

『うぅん……春蘭お姉ちゃんはこれじゃ物足りないよね』

「いや、私は…今日は何かもういい」

『え、どうして？』

「なんとなくだ…それより、何かもっと食べろ」

『え、いや、ボク小腹だからあまり』

「ああ、買ってあげる人が買ってあげるというのに断るな。さっさと食わんか！」

『うぅ…そんなに怒られても……』

見ているだけでもお腹一杯ですね。解ります。

『じ、じゃあ…なんでもいい？』

「ああ、何でも良いぞ」

『じゃあ、じゃあ…これ食べてみてもいい？』

何か高いものでもお願いするのかと思えば…

「うん？」

メニューで一刀ちゃんが指したのは、

え？子供定食？

こんなのもあるんですか。

ってか、頼むのがそれですか？

「……ぷはははははーー！」

「！？」『そんなに笑わなくてもいいでしょ！』

「いやー、しかしお前も本当子供だな」

『……駄目だの？』

「いやー、そうは言ってないだろ。店主、ここに子供定食一つ頼む！」

「……うぅ」

何頼んでおいて恥かしがってるのですか？

【だって……】

最近一刀ちゃんの感情表現については、あまり突っ込まないほうがいいかなぁと思ってきましたよ。

【…おいしいよ?】

そういう話ではありません。

＞pf＜

「……！！（ガツガツ）」

ええ、僕がちゃんと表現したのかどうかわかりませんが、

今一刀ちゃん、がつがつって食べてます。はい。

あんなに食べる一刀ちゃんは初めて見ます。

本当においしいようですね、あの子供定食。

・・・

え、ちょっと、そのテーブルのおじさん?子供定食は十二歳以下の子専用ですよ。

「……?」

「そ、そんなにおいしいのか？」

「？」

食べるに夢中だった一刀ちゃんは（こんなになる一刀ちゃんもまた新鮮ですね）ふと春蘭さんの顔を見て、

「…」『食べる？』

「…は？」

そして一刀ちゃんは、…あれって何ですか？チキンライス？とにかく掬って、春蘭さんに出しました。

「い、いや、私は……」

「……」

あぁー、春蘭、一度一刀ちゃんがこうなったら食べてあげないと駄目ですから。

「うぅ……、おい、北郷……」

「……（むーっ）」

まぁ、季衣さんと一緒に食べてると思ってがぶっと言ってください。聞こえないでしょうが。

「うー……」

がぶっ

「……」

『おいしい？』

「……ん。まあまあだな」

『ええ？おいしいよ』

「ふん、子供の口にはそうかも知らんがな。私にはまあまあなのだ」

この場合、食事後三秒過ぎたら献立忘れるあなたがそれを言っていいのかは少し考えてみる価値がありそうです。

＞ｐｆ＜

『美味しかったね』

「うん、まぁな」

今日の春蘭さんは、完全に一刀ちゃんとペースに流されっぱなしでしたね。

『また二人で食べに来ようね？』

「は？また？」

「……」『ヤなの？』

「いや……うん、まあ……いいだろう。今度は季衣と秋蘭と皆で一緒に食べに行こう」

「？」

「あ、一刀ちゃーん」

あれ？あそこで三羽烏の皆さんが……

「春蘭さま、こんにちは」

「ああ、お前らか。どうだ？警邏の仕事は」

「どんどん慣れてきています。……お二方はもうお昼は済ませたところですか？」

「（こくっ）」『凪お姉ちゃんたちはまだなの？』

「はい」

「ウチらはお昼時が一番忙しい時っちゅうかな……昼酒した連中や食い逃げや色々あるしなぁ」

『そうなんだ…』

「それで、それで、一刀ちゃんは何食べたの？」

「うん？ボク？」

「せやな。そういや一刀ちゃんはここで長くいたからおいしいところ知ってるやんか。何食べたん？ウチらも同じもん食べようかなって思って」

『うーんとね……』【いや、子供定食食べたんだけど】

・
・
・

『美味しかった』

「「え？」」

『美味しかった＞＞ドーン＜＜』

ドーンはエフェクトです。

「えー、何それー？」

「ウチには教えてあげへんてことか……くー、じゃあ、春蘭さま！」

「は？」

「そうなの！春蘭さま！何食べたの？」

「……」

・　・　・

「美味しかった＞＞ドーン＜＜」

ドーンはエフェクトです。

「ええー？」

「なんや、なんや、二人して。おいしゅうとかそんなんじゃなくて、何おいしゅう食べたんや？」

「美味しかった」『美味しかったっていっているだろ』＞＞ドドーン＜＜

「「ええー？？」」

「……」

ドドーンは（ｒｙ

・・・

・・

・

「うっちゃあ…はぁ、やっと帰ってきた」

一刀ちゃんが部屋から出てくる前に長距離遠征に出て最近居なかった季衣さんが、只今お帰りになりました。
一刀ちゃんの話は伝令によって既にしっておられるだろうと思いますが…うん？

「季衣、戻ってきたのか」
「あ、春蘭さま」
「早かったな。先に行ってくれたら迎えにいったのにな…」
「あ、…ごめんなさい、ちょっと忘れちゃってました…ああ、春蘭さま、ボクちょっと一刀ちゃんのところへ行きます」
「うん？ああ、そうか。そういえばお前は見てなかったな」
「はい、一刀ちゃん、大丈夫ですか？」
「ああ、なんというか……大丈夫そうで寧ろ困る？」
「……んえ？」
「い、いやー、何でもない。早く行ってみろ」
「あ、はい」

そして、季衣さんはそのまま一刀ちゃんの部屋へと直線に走って行きました。

＞ｐｆ＜

がらっ！

「一刀ちゃん！」

「!?（びっくり）」

あ、一刀ちゃん、季衣さん帰ってきました。
と、今更言って見ます。

「♪」

本を読んでいた一刀ちゃんは思わぬところで帰ってきた季衣さんですが、嬉しいようにお迎えしました。

ぎゅー

「あはっ、もう大丈夫なの?」
「（コクッ）」『いつ帰ってきた?』
「ちょっと前だよ。先に来るって言ってもよかったけど、一刀ちゃん驚かせてあげようと思って」
『そうなんだ。お帰りなさい』
「うん」

何か、二人ともいつも以上にテンションが高いです。
季衣さんはともかくとして、何で一刀ちゃんは…うん?

『あ、うんとね、季衣お姉ちゃん、ご飯食べた?』
「うん?ううん、今から一刀ちゃんと一緒に行って食べようかなぁって思って」
「♪」

その話を聞いた一刀ちゃんはそのまま季衣さんの手を掴んで我に続けと歩きだしました。

「ああっ、ちょっ、一刀ちゃん?!」
「♪」
がらり
何かすごいテンションで部屋出て行っちゃいましたね、一刀ちゃん。
何かあるんでしょうかね……
＞pf＜
一方ここは秋蘭さんの部屋なのですが…
「そうか。季衣が帰ってきたのだが。忙しくて迎えにいけなかった」
「うーん……」
話しにきた春蘭さんの顔はなんかしゃんとしませんね。
「?どうした、姉者」
「いや、なんというか…季衣が帰ってきて直ぐに私じゃなくて北郷の奴のところに行くからな……なんというか…」
「…嫉妬してるのか?」
「だ、誰が嫉妬など。ただ子供同士で遊びたいだけなのだろ?」
「なら問題ないな」
「うぅ……」
春蘭さんは口を尖らせました。
「ふふっ、姉者はかわいいな」
「か、からかうな、秋蘭」
「悪い。ところで、他に何かあるのか?」

「ああ。実はこの前…
＞ｐｆ＜
そして、ここは一刀ちゃんと季衣さんです。場所は、城から出て少し離れたところにある森です。
…うん？

「ねえ、一刀ちゃん、そこに何はいってるの？」
「？」『ナイショ』
「ええー、教えてよー」
「……」『うん、後の楽しみにしようとしたのに……じゃあ、ここで見せたげる』

おしえておしえて五月蠅い季衣さんに、仕方ないと一刀ちゃんは持っていたバスケットを開けました。
その中にあるのは、

「わー、何これ、おいしそう」
「……」『サンドイッチ』
「さんどいっちー？初めてみるね。一刀ちゃんのところの料理なの？」
「…（こくっ）」
「おいしいの？」
「……」『味は保証できないよ。色々入ってるから』
「色々？」
「…」『色々』

ああ、そういえば昨日それ作りましたね。季衣さんが来ると思って作ったわけではなく、暇だったら今日皆で食べようと思ったものな

のですが…ちょっと遊びみたいにしよ

うと思っていたものなので、ちょっと「変な」のも入れています。
外れとったら（僕が）美味しいかなぁって思ってですね。二人で考
えて入れました。

大丈夫です。死にません。

「…」『もうちょっと入ったところで食べよう』

「うん、そうしよう」

まあ、いざとなったら僕は「はずれ」ものは取っておきます。
せっかくの楽しく遊んでるのに「アレ」食べたら不味いですし…
それにしてもこの森……結構木が生えてますね。
昼なのに、道に木がたくさんあって光があまり入ってきません。
ここまでだといっそ道近くの木たちは切っておいたほうが良いので
はないかと思いますが……まあ、僕が考えても何もできませんね。

・・・

・・

・

「で、どこに行くの？」

「……」

「…一刀ちゃん？」

「…ぁぇ」【あれ？】

…え、一刀ちゃん？
まさか…

「……（カタカタ」
「一刀ちゃん？」
「……（カタカタ）」

カタブルしながら季衣さんの方に振り向く一刀ちゃん。

…えっと？

『道忘れた』
「ええ！？」

ごめんなさい！僕が悪いです！なんとなく僕が悪いです！

『前はこう、スッて来てたから…足で歩いていたら道に迷っちゃって……』
「ええ？じゃあ、ここどこ？」
『…わかんない』

先までは道だったはずなのに…道に光はあまり注いでいませんので道を忘れやすいんですね。僕もつい気を抜いてしまいました。

『どうしよう、ボクのせいで』
「だ、大丈夫だよ。一刀ちゃん、ここはそんなに深い森でもないから。直ぐに道があるところまで……」

ガァー！

「「！！」」

！？

何が……

＞ｐｆ＜

『な、何？』

「これって……そんな、この森は人が良く通るところなのに熊なんて…」

『熊！？』

今のが熊の鳴き声なのですか？

なんで熊の鳴き声なのにガォーなのですか？

※作者が熊の鳴き声を聞いたことがないからです。後知ってもそれを日本語で表現できないからです。

ガァーオ！！（※熊の鳴き声）

わけはわかりませんが凄く機嫌斜めなのは良く解りますね。

熊って穏やかな奴だと思ったのですが、実際はそうでもないようですね。

「……（カタカタブルブル」

また大きく鳴く熊の鳴き声に一刀ちゃんは季衣さんの体を掴んで震えています。

……穏やかになるはずでしたのに…せっかくの遠足を熊如きのせいで台無しにするわけにはいきませんね。
ここは僕が何とかしてみせましょう。

「一刀ちゃん大丈夫？」
「……（カタブル」
「だ、大丈夫だよ。まだ見えないし、このまま森から出るときっと何もない」

季衣さんがそう安心させようとしますが、一刀ちゃんは益々季衣さんに抱きつくだけです。

「…一人だったら退治に行くけど、一刀ちゃんもいるから今は早く森を抜けたほうがいいよね」

お願いします、季衣さん。
…というか一人だったら狩るんですね、熊。

ガァーーーオオ！！（※熊の鳴き声）

というか、先から泣き声がどんどん大きく聞こえるんですけど…まさか、

ガァーーーオオ！！※熊の鳴（ｒｙ

！？

熊がいつの間にか季衣さんたちのところまで走って来ｍ、
ってデカ！！

「！！一刀ちゃん！」
「ぁ！」

季衣さんが一刀ちゃんをあっちに押して自分は後ろへ下がったのとほぼ同時に、熊がそこを通りました。

ガァァーー！！！※（ｒｙ

「……っ」

季衣さんの腰に抱きついて震えていて、前を見ていなかった一刀ちゃんは、突然季衣さんが押したせいで……
…いや、訂正します。押したんじゃありません。
押したのだったらその場から十メートルは離れているところで倒れているはずがありませんね。
あれは「押した」のじゃなくて、「飛ばした」のですね。はい。

「……ぁ」

あーあ、せっかくのサンドイッチが……
バスケットを落としてしまって食べられなくなってしまいましたね。

「……うぅー」
「大丈夫？一刀ちゃ…あ」
「……」『大丈夫』

明らかに大丈夫じゃないですが、一応大丈夫だって言っておく一刀ちゃん。

「…さんどいっちが…」

「……」『ごめん、ボクがちゃんと持ってなかったから』
「いや、そんな…ボクのせいだし…」

というか熊のせい……
ってか何ですか今の熊は。

＞pf＜

「季衣！！」
「？」

うん、この声は…

「っ！季衣、どうしてお前がここに……って北郷もか？」
「春蘭さま！？」
「大丈夫か？先こっちに熊が…」
「はい、先一匹通ってました。何か……大きさが今まで見たことないほど大きかったのですが……」
大きかったで済む話じゃないですよ。立って普通の人の二倍も越えそうな大きさってどんな妖物なんですか？

「ああ、実はだな、ここに…」

あ、そういえば、先…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・

「ああ。実はこの前、商人たちが通り森で熊が出てくるって話が上がってきてただろ？」
「そうだったな。それがどうしたのだ？あれは兵たちを退治に向かわせたはずだが…」
「それが……今日やつらが帰ってきたのだが、どうやら逆に熊にやられたらしい」
「何？それはどういうことだ？」
「どうやら、あの熊がただの熊ではなさそうでな。どうやら化け物みたいにデカい奴だとか…」
「ふーむ、それなら益々そのまま置いておくわけには行かないな。それで、姉者と私で行ってみようてか？」
「ああ、大勢で行って下手に怪我させるよりは、お前と二人で行ったほうがよさそうだと思ってな」
「そうか…解った。直ぐに行こう」
「ああ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・

あれってこの森のことだったのですか？
ここって結構城から近いでしょう？
何でこんなところにあんな何十年も住んで猫だったら必ず化けていそうな怪物熊が…
いや、それは良しとしましょう。
そうえば、秋蘭さんはどちらに…

サシュッ！

がーーーーー！

「！」

あれは、秋蘭さんの弓の音……

ガキン！

「不味い。早く助けに行かないと秋蘭が…」

「春蘭さま、ボクも行きます」

「ああ、頼む。あいつ、思った以上に手強くてな…北郷はここで待っていろ」

「…（コクッ）」『気をつけて』

「うん、春蘭さま」

「ああ」

そして、春蘭さんと季衣さんは熊を追っていきました。

「……」

一刀ちゃん、大丈夫ですか？

「…」【ボクは大丈夫だけど…せっかく作ったのが台無しだね】

また作ったらいいですよ。…と言っても、結構大変だったんですけどね。材料集めるのとか……僕が

ここにはパンがないですから、作るにも随分苦労しましたのに……

僕が

【なんか、ごめん！ごめんなさい！ボクがしっかり持っていなくて】

いいえ、一刀ちゃんのせいじゃありません。
ただ…なんか無性に腹が立ちますね。
あのサンドイッチを作るために、ここでは言いませんが僕がどれだけ苦労をしたのに…
でかしてくれたじゃありませんかこの馬鹿でかい熊野郎が……＞＞
ゴゴゴーー＜＜

【さっちゃん、落ち着いて。何か滲み出てる。怒った時の華琳お姉ちゃんみたいに何か出てるから……】

…ちょっと熊狩りに加勢してきますんで、一刀ちゃんはここで待っていてください。
【さっちゃん？さっちゃん落ち着いて！】

＞pf＜

はい、僕が来ましたよ。熊さん。

サンドイッチノ恨ミヲ…

「さんどいっちの恨みー！！！」

グォオオオオーー！！

…え？

「これは一刀ちゃんの涙の分ーー！！」

グォオオーー！！

季衣さんが……

「そしてこれは、食べ物を粗末にした貴様への怒りだぁーー！！」

グオオオオオオオォォォオオオ！！！！！！

…季衣さんの鉄球が火を噴いています。

「ボクが、ボクがどれだけ楽しみにしていたと思ってー！！」

グオオォォォオオ！！

「一刀ちゃんがせっかくボクのために作ってくれたさんどいっちなのにっ！」

グオオオォォオオオオ！！！

「一刀ちゃんと一緒に食べるのわくわくしていたのにーっ！！」

グオォォォオオオォォオ！！

ちょっ、季衣さん、オーバーキル！オーバーキルだから！熊のライフもうゼロだから！先から倒れて血を流しながら放送不可能な姿になってるからもうやめたけてー！

「お、おい、季衣。もう大丈夫なんじゃないか？」

「いや、まだですよ、春蘭さま。ボクと一刀ちゃんがもらった被害を償うにはまだ足りません！」

「いやぁ、そういう問題じゃなくてだな。そろそろもう死んでるようだし、それ以上鉄球を当てるのは、流石に化け物熊でもちょっとかわいそうというかなんていうか」
「かわいそうなのは寧ろこっちなんですよ！分からなかったら黙っていてください！」
「しゅ、秋蘭、季衣がおかしいぞ」
「……いったい何があったというのだ…？」

いつもと違う季衣さんを見て春蘭さんは泣き顔。
秋蘭さんも引いてます。
僕もちょっとだけ冷静になりました。

「せー、せー、おらあああああぁぁ！！」

もうやめたけてーーー！

・・・
・・
・

サァアッ

「！！？」

一刀ちゃん、どうしました？

「……（カタカタ）」【な、なんか、今ちょっと寒気がしたんだけど】

風邪ですか？じゃあ、今日は凪さんたちのところに行くのやめましょうか？

「…（フルフル）」【随分長く会ってないし…ボクは凪お姉ちゃんたちは許してもらい易いと思ったからあまり待たせちゃって、今日行かなかったらそろそろ不味いかも】

ああ、まあ、確かにそういう問題もありますね。

でも、きっと前だったとしてもそんなことする機会なんてありませんでしたよ。

【え？】

だってほらぁ、あの三人、ここに来て警備隊の仕事を任されたのですが……最初は緊張しまくって泥棒一人捕まえるに街を大変なことにしたり、、仕事サボってて春蘭さんや桂花さんに見つかって大変なことになったりしましたので…最近になってやっと落ち着いた感じですよ？

【何でボクは知らなかったの？】

それはもちろん僕が一刀ちゃんを危険に晒さないように敢えてその辺りには行かないように先に調整をしておいたから。

証拠でほら、最近街でばったり会ったこともあまりないでしょ？

「……」【そういえば…】

一刀ちゃんが他の人たちの攻略を済ませる前に、先に他の人たちに邪魔されないように、僕が手を打っておいたのですよ。

【…それって要らなくない？】

あまりたくさんいると一刀ちゃんの手に負えませんよ？

【うぅん……】

まあ、僕としても一刀ちゃんが皆と一緒に楽しむ場面は是非にもみたいところですが、今回ばかりはそういうところではないのですよ。

それに、特に今の彼女たちに対しては気をつけなくてはならないことがあります。

「？？」

あの人たち、一刀ちゃんが華琳さんの息子だと思ってますからね。

もし、あれは華琳さんの耳に入ったら、三人ともただではすまないですよ。

「…ぁ」

分かりましたよね。だから今回のたびに、あの誤解もきっちりと解かなくちゃならないのです。

「……」

一刀ちゃん？

「……」【分かった】

……

＞ｐｆ＜

コンコン

がらり

「…＞＞ひょこ＜＜」

「む？御使いさま！」

「！？」

警備隊舎に残って待機している兵士さんですよ。あまり驚かないでくださいね。

といっても、昔の一刀ちゃんでしたら、もう逃げていたところですけどね。瞬間移動で……

「どうかなさいましたか？」

子供にちゃんと敬語ができる兵士なんて、よく訓練されているなぁって思います。

『凪お姉ちゃんたちここにいる？』

「いえ、三人とも今は見回り中であります。もうしばらくで休憩ですので、皆さまも帰ってこられると思います」

「……」【どうする？一度帰る？】

待ちましょう。

【え、でもお姉ちゃんたちもいないのにここにいたら何かアレだし…】

何言ってますか。いつも街ふらふら歩いているあなたが……気まずくて居られないとかありえないでしょう？

「……」【ボクそこまで時と場面考えずに動かないもん】

あ、はい、はい。わかりましたよ。でもほら、もう直ぐ帰ってくるといいますし、奥で待っていた方がいいんじゃないですか？

「……」

「お待ちになられるのなら奥で待っていてください。皆さまが帰ってくる次第お知らせします」

「…（コクッ）」

いや、この兵士さん本当すごいんですけど。

・・・

・・

・

で、執務のための机に上がって四半刻ほど待ってたでしょうかね。

がちゃっ！

「一刀ちゃんキターーー！！」

「キターー！」

なんかキターーー！！

「一刀ちゃーん、何で今ごろ来るのー。お姉ちゃん寂しかったのー＞＞ぎゅー＜＜」

「！！」

いつもなら逃げるのに、逃げられないですね。わかります。

「おい、沙和。独り占めする気かいな。ウチにも抱かせーな」

そして、側で順番待ち（？）していらっしゃる真桜さん。

「こら、二人とも、一刀様に何をする！」

そして最後、二人に遅れて部屋に入ってくる凪さん。

この三人で、街の警備隊を担当しています。

＞ｐｆ＜

「えー、じゃあ、アレってもう使えないの？」
「…（コクッ）」
「まあ、どっちかというとできるのが変なんやけどな」
「変とは、何だ。その言い方だと一刀様がまるで変だと言っているようではないか」

まあ、変と言えば変ですが……さすがに変だ変だ言われて好きな人はいませんね。

「まあ、せやけど…というか、それってどないして使ってたん？」
「……」

それを言われて一刀ちゃんは眉をひそめました。

「ああ、言いたくなかったらいわへんでええよ。ウチが悪かったから」
「……」『いや、別に…他の皆も知ってる人は知ってるし、お姉ちゃんたちには話してもいい』

おや、言っちゃうんですか？あまり穏やかな話じゃないのですから言わない方がいいのでは？
他の皆さんにも別に口で言ったわけではないのでしょう？

【そうだけど……うーん…でも確かにどう説明すればいいのかも良く分からないかも】

言わない方がいいですよ。後で一緒に寝たら自然に分かりますし…というか寝るの前提ですね。

「あの、一刀様、あまり口にしたくなかったのでしたら仰らなくて

も良いですが…」
「ぅ…？」
うん？

なんか凪さんが助け舟をしてくれますね。

「なんや、自分。そんなこと言ったらウチらが聞きたくてしゃあなくて一刀ちゃん困らせたみたいやんか」
「そうなのー。一人だけいい子するなんてずるいのー」
「お前らも馬鹿なこと言うな。一刀様が嫌うのならそれで話は終わりだろ」

場面を終わらせようと励む凪さん。

ぐいぐい

「うん？」

突然一刀ちゃんが凪さんの服を引っ張りました。

「ぁ…」『あ、あのね、凪お姉ちゃん。前から言いたかったんだけど、その「一刀様」っていうのやめて。敬語でいうのもいらない』
「え？しかし…」
「せや、自分だけ敬語つかっちゃって一人で浮いてるやろ。一刀ちゃんも不便そうにしてるし」
「一刀ちゃんが嫌ったらそれで話終わりなのー」
「うぅ……」

いつもみたいに二人に逆襲されますね。

『これからね、真桜お姉ちゃんや沙和お姉ちゃんみたいに、一刀ちゃんって呼んで』
「？！／／／」

そのことを聞いて顔に直ぐに赤くなってゆく凪さんです。
どのあたりがそんなに恥かしいので？

＞ｐｆ＜

『言って？』
「え、あ、あの……ですが、その…まだ心の準備が…」
「……（じー）」
「うぅ……」

そして一刀ちゃんの「言うまでじっと見る」攻撃です。

「凪ちゃん、顔真っ赤なの」
「まあ、でも分かるわ。あの目にずっと見られていたらな。自分の心の隅にある汚いところが見られる気がしてちゃんと見ていられないんや」

あなたたちの場合それはどうかなぁって思うのは果たして失礼なのでしょうか。凪さんを見てニヤニヤしてて、酒でもあったら肴にしてしそうな顔をしているあなたたちに。別の意味で顔が赤くなってるあなたたちに。

「か、かかかずと……さ、うぶっ」

さまの「さ」が出ようとする口を手で塞ぐ一刀ちゃん。机の上なのでちょうど手が届きます。

「うぶぶぶっ！」
「……（むっ）」
「あ、ちょっと怒った？」
「怒った顔もかわいいのー」

塞いだ手を話してもう一回。

「か、一刀……ちゃん」
「♪（にぱぁ）」
「っ…／／／／／」
「ね、ね、凪ちゃん。今ちょっと一刀ちゃん借りて行ってもいい？今の表情の一刀ちゃんを思いっきり抱きしめたいの」
「ちょっ、今度はウチの番やで」
「っ！」
「！？」

沙和さんと真桜さんが一刀ちゃんを取ろうと手を伸ばしましたが、はっと気がついた凪さんが素早く一刀ちゃんを抱きしめました。

「こらっ、一刀さ…一刀ちゃんはお前らの玩具じゃないぞ」
「えー、ぶーぶー」
「そういう凪だって、今一刀ちゃんのこと奪われたくないと思ったやろ」
「ば、馬鹿申すな！私はそんな考えは微塵も…」
「……」
「……」
「…微塵ぐらいは考えたかも知れん」

正直者ですね。

というか、その胸に挟まれているのをなんとかしてください。
多分、この世界に来て初めて会うシチューですから。

「／／／／／」
「凪さんや。拳だけじゃなく胸でまで人を殺そうとしてるな」
「何？…はっ！」

強く抱きしめすぎて息をしていない一刀ちゃんです。

「ぷはぁ……！」【死ぬかと思った】

これを見てる皆さんの中では、きっとそれが本望な方もいらっしゃるだろうと思いますけどね。

「凪はああ見えても結構着痩せするんやからな。以外と大きいやろ」
「……（コクッ）」
「ああー、一刀ちゃんの顔も赤いのー」
『い、息が詰ってたせだよ』

はい、はい。

＞ｐｆ＜

茶番が終わったところで本題に入ります。

『ああ、それとね。お姉ちゃんたちにちょっと聞きたいことがあるんだけど』
「何、何？？」
「何でも聞いていいぜ。あ、でも胸の大きさとかはヒミツな」
「こら」

『皆って、もしかして、ボクが華琳お姉ちゃんの子だと思ってる？』

「「「……え？」」」

・・・

・・

・

「えー？じゃあ、違ったの？」

「なんや、ウチはてっきりあの時大将が一刀ちゃんにいい口がお母さんっぽいからついそう考えてやのに」

「私もそう思ってました。もうしわけありません」

『いや、ボクは別にいいんだけど…というか嬉しいけど、でも、もしそんなこと華琳お姉ちゃんに言ったら……』

「言ったら？」

『……（ボクが）死☆ぬ』

「うわー…」

何、他に何も起きません。

ただ、死ぬ。それだけです。

「……」

そ・し・て、

「……ぅぅーぅ」

ここに、顔が真っ青になっているひとりさんが居ます。
『凪お姉ちゃんどうしたの？』
「い、いえ、べ、べべべ別に何でもございません」
言葉遣いが戻っているほど平常心を失っているのにですか？
「…なぎ、まさかとは思うんやけど…まさかお前…」
「う、嘘、だよね」
「……すまん。先、警邏途中で華琳さまに会って…」

・・・

「あっ、華琳さま！」
「あら、凪。どうかしら、警備の仕事は？」
「そろそろ慣れてきたところです。まだまだ手に負えないところもありますが」
「そう…何かわからないことがあったら秋蘭か一刀に聞いて見なさい」
「一刀様…そういえば、最近一刀様を見かけたことがないのですが…」
「あら、まだ会ってないの？前私が皆に謝っておきなさいっていったはずなんだけど…」
「他の方といるところでばったり会ったことはありますが…」
「そう。まあ、そのうち行くでしょうよ。その時はただで許してあげるとおいしくないから何かでもやらかして頂戴」
「いえ、流石に…一刀様にそんなことは…」
「そういえば、凪あなたはどうしてあの子に様付けなのかしら。他

の二人はもっと仲良くしていたようだけど」
「自分は…でもやはり、一刀様は華琳さまのご息ですから、いくら幼くてもそれほどの礼儀は保ったほうがいいだろうと思っ……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そういえば…その瞬間、側にあった露店屋が売っていた壷が急に割れてしまったり、鼠たちが大移動を始めて、猫たちがそれを追って動いて小道から大騒ぎになったりしましたけど…」
「マジかいな…」
「それって、つまり……」
【まさか1pで感じた寒気って……】「（カタカタブルブル）」

皆さん、今までありがとうございました。
黙々・恋姫無双、残念ながらここで幕を下ろすことになりました。
今度は死亡フラグが少ない外史になることを祈りながらここまで……

【一人で逃げちゃらめぇ！！今から華琳お姉ちゃんのところに行くよ！】

やーですー。僕死にたくないですー！あの死神の大鎌で霊状態の僕まで斬らせるつもりですか？！

【いいから行くぅー！】
「ど、どうしよう、一刀ちゃん」
「死ぬなん？ウチらって首刎ねられるん？」
「…もう御しまいだ」

・　・　・
・　・　・

つづ……けるのでしょうか？

拠点フェイズ４　華琳黙（前書き）

やっぱこの外史の主人公は一刀と華琳さまですね。

その後、華琳さんが部屋に篭って三日が経ちました。

一刀ちゃんと凪さんたち以外には華琳さんが部屋に篭っているわけを知らずに、華琳さまに一体何が起きたのかと騒ぎました。

一度部屋に突撃しようとした春蘭さんは、部屋に入った瞬間華琳さんの凄まじい覇気（という名の毒気）に圧され、華琳さんの「閉じなさい」という氷のような言葉に、最後の力を振り絞って華琳さんの部屋の戸を閉じてからその場に倒れました。

春蘭さんはそのように倒れてしまって、次の日の昼頃に起きて、皆の肝を冷やしました。

特に一刀ちゃんの場合、最初凪さんたちに華琳さんが三人の誤解事を知った日、直ちに華琳さんの部屋に向いましたが、戸を開けることができず帰ってしまったので、自分があの時部屋を開けたらどんな目にあっただろうか考えるだけでも心臓が止まるような感覚に攫われるのでした。

一刀ちゃん、どうしますか？

「……」

こういう話言うのもなんですけど、今の華琳さんをなんとかできるのは、この城に一刀ちゃんしかいませんよ。

しかも、一刀ちゃんの場合と違って、華琳さんは食事もさっぱりほぼとっていないのですよ。このまま行くと命すら危険です。

「……」

そもそも、華琳さんが部屋に篭るほど悩んでいることは何なのでしょうか。

凪さんたちが一刀ちゃんを華琳さんの息子だと思ったことに何の問題が？ただの誤解で済ませることではないのでしょうか。そういうことをただで流せることは、華琳さん覇王としてのクォリティだったはずです。

というと、やはり一刀ちゃんが本当に自分の養子だったら、って考えているのでしょうか。それは流石にないと思いますがね。そこんところに関してはきっちりとしている人です。

あの頑丈な華琳さんが、今こんなところに母心に目を覚まして一刀ちゃんみたいに一刀ちゃんの本人がどう思うかに頭を悩ませている？考え難い話です。

寧ろ「自分があんな年の子がいるように見えるのか」って悩んでいるかと言うと寧ろのそのほうがありな気がするくらいです。

…もしくは、もっと根本的なことに葛藤している……？

…うん？一刀ちゃん？

一刀ちゃんどこにいったんですか？

しまった。悩んでいるうちに一刀ちゃんが動き始めてしまいました。

早く追わなければ面白いことが起きた場合解説できなくなゲフンゲフン……

……

＞ｐｆ＜

向き先は秋蘭さんの部屋でした。

がらり

「？誰だ」

が、立っていた秋蘭さん、ふと見て戸の側に誰もいないことに頭を傾けます。
失礼ですよね。

ぐいぐい

一刀ちゃんが裾を引っ張ってやっと下に気がつく秋蘭さんでした。

「……あ、北郷か」
「……」『その自分の目線並を見てボクのことを認識できないふりをするのが、ボクをどれだけ傷つけるか４００字以内で述べる？』
「いや…うん、すまん、北郷」

一刀ちゃん、案外気にしてるんですね。その辺り
正直今のは秋蘭さんがわざとやったのかと思いますが……

・・・
・・
・

「どうしたんだ？と…聞くだけ野暮だな。華琳さまのことなんだろ？」

「…（コクッ）」

秋蘭さんの部屋の椅子に座ってお茶をもらいながら二人は話を始めました。

今のところ、頼りにできるのは秋蘭さんぐらいしかいませんからね。ちなみに桂花さんも春蘭さん並に心配していますが、春蘭さんがあの様になるのを見て、今には華琳さまがああなったのは自分のせいだとわけわからない自虐をしながら同じく部屋に篭っています。あ、仕事はちゃんとしていますので問題ありません。というか仕事さえしてくれればいつもとそう変わりません。

「華琳さまが何故あのようになったのは、おそらくこの前お前が悩んだことと同じ理由だろうな」

「…（コクッ）」『この前、凪お姉ちゃんが言った見たい』

何かこう見ると、凪さんマジで口軽いように聞こえますね。

秋蘭さんは黙りこみました。何かを考えるように見えましたが……

「言いたいことはわかった。だからつまり、華琳さまが前に北郷がしていたような悩みと同じようなことをしていると思っているのだな」

「……」『あえてそこに限るつもりはないけど、とにかくボクが華琳お姉ちゃんの息子だという誤解をされるような状況に問題があるというのは確かでしょう？』

「…今のところじゃ、そう考えるのが妥当だな」

「…秋蘭お姉ちゃんも確信できないの？華琳お姉ちゃんがどんな考えしているのか」

「今回ばかりはな。…正直、お前に関してのことは皆知識の量が皆違っている」

あ、そういやそうですね。
一刀ちゃんは普通自分の昔のことを言ったことがありません。
でも、一刀ちゃんと一緒に寝ていた華琳さんと秋蘭さん、そして桂花さんは、何故か夢に一刀ちゃんの昔のことを見ることがありました。まるで睡眠学習ですね。
そういうわけで、ぶっちゃけて言うと、寝た回数が多いと知識がもっと濃くなります。
そして、僕が知ってる限り一番一刀ちゃんと寝た回数が多いのは華琳さんです。
だから、秋蘭さんが知らないことでも、華琳さんは知っているかもしれませんね。

「……」『…そういえば、一度も聞いたことなかったよ。お姉ちゃんたち、ボクと一緒に寝るとボクの夢見るって言ったけど、それってどういう夢？』
「……それは…」
「…？」
「……たぶん、お前の周りにあった出来事の全般。時間はお前が事故にあった手先の時から孤児院に入る寸前までの中で、お前の周りにあったことだ。具体的なことは数が多すぎて分からん」
「……」

…その中には、一刀ちゃんが実は知らない場面とかもあります。
一刀ちゃんが知らないところであった医者さんとお母さんとの会話とか、お父さんとお母さんが喧嘩したこととか。一刀ちゃんを病院に帰らせた後一人で呟いたお母さんの独り言とか……そういうさまざまな記憶の欠片……

……っ

「？」【さっちゃん？】

あ、はい、どうしました？

【…大丈夫なの？】

大丈夫ですよ。ほら、秋蘭さんと話している途中だったじゃないですか。急に宙に見たらへんな目で見られますよ。

「……（コクッ）」

＞ｐｆ＜

取りあえず、一刀ちゃんが華琳さんの部屋にお粥も持っていってみることにしました。

流石に一刀ちゃんが入ったのに覇気出してこないでしょうね。

「……」

両手でおそおそお粥をもらって、一刀ちゃんが秋蘭さんを一度見つめました。

「大丈夫か？」

「…（コクッ）」

「私が華琳さまの部屋の前まで一緒に行くか？」

「…（フルフル）」

頭を左右に振って、一刀ちゃんは華琳さんの部屋で向おうとしまし

た。

「…北郷」

そしたら、秋蘭さんがもう一度こっちを呼んで、一刀ちゃんがまた秋蘭さんのところを振り向きました。

「あの時、お前は結局どう結論をつけたのだ？華琳さまか？それとも元のお母さんか？」

秋蘭さん、そんなことを一刀ちゃんに聞くと…！！

「……（にしっ」

一刀ちゃんは苦笑いだけして、秋蘭さんを後にしました。

「……」

・・・

・・

・

華琳さんの部屋の前に止まった一刀ちゃんは、

「……すぅ」

先ず深呼吸をして、

「……（コクッ）」

心を決めたらしく片手で部屋の戸を開けました。

「!?」

……いや、覚悟決めたんじゃないですか?何目閉じてるんですか。しかも、何も起こっていませんよ。

「……?」

「……」

どうやら華琳さんは寝ているみたいですね。

ベットの上で服を着たまま、一刀ちゃんが入ってきたことにも気付かずに寝ていました。

「……」

一刀ちゃんはお粥をテーブルにおいて、椅子をひきずって華琳さんが寝ているベットの前で座りました。

「……」

…そういえばですね。一刀ちゃん、結局あの時部屋から出てきた後からでも華琳さんと一緒に寝たことありませんね。

【…だって罰途中なのに来るとおかしいじゃない】

まあ、そこんところはきっと華琳さんも後悔しただろうと思います

けどね。
そういえば、その皆の署名もらった巻物持ってます？

【ある】

一刀ちゃん、人が話してるうちはちょっとこっち向いてください。

【うるさい黙れ】

うわぁ……そんな見とれてるように華琳さんの寝顔見ていなくても……
……
一刀ちゃん、もしかして、我慢してます？

「……」【別に……？】

今添い寝しても、きっと気付きませんよ、華琳さん。

【…そんなことして華琳お姉ちゃんが先に起きたらどうするの】

その時は僕が起こしてあげたらいいじゃないですか。
というか、やっぱり今添い寝したいという欲望はあるんですね。

【……っ】

ああ、そういえば、先は物騒なこと聞くと思ったのですけど、実は僕も気になりますね。
結局、どうなのですか？華琳さんがお母さんでも、一刀ちゃんが構わないのですか？

【……】

僕の話聞いた一刀ちゃんが、また辛いように苦笑しました。

【…華琳お姉ちゃんは、いい人だよ。この世界に来て、初めてボクのこと必要だって言ってくれたし、心配してくれたし、正直、お母さんにもこんなに愛されたこと、なかったと思う】

じゃあ…

【でも、華琳お姉ちゃんはこれから魏の王様になるんだよね】

…はい、そうですね。

【じゃあ…ボクだけじゃなくて、この世にいる皆のことを心配してもらわないとダメ。だから……】

一刀ちゃん、あの時占い師が言ったことを忘れたのですか？幸せも不幸も、これからは一刀ちゃんがつかまえるのですよ。

【……華琳お姉ちゃんも、…皆も、いい人たちだよ。皆優しいし、ボク、幸せ。だけど、お母さんは……それは別の話だよ】

どういう意味ですか？

【華琳お姉ちゃんは、他のお姉ちゃんたちのことも、街の皆のこともいつも考えている。そうじゃないとダメ。だけど……ボク欲張りだから、お母さんはボクだけのお母さんであって欲しい。誰のことも構わないで、ボクのことだけ見ていて欲しい。でも、華琳お姉ちゃんにはそんなお願いできない】

……

……

……自分のことだけを思ってくれる人、ですか……？

【……今考えたら、きっとお母さんはきっといいお母さんじゃなかったよ。でも、お母さんは…少なくてもあの時だけは、…ボクのことしか考えていなかった。ボクもお母さんのことしか考えてなかった。なのに今は、華琳お姉ちゃんがいて、秋蘭お姉ちゃんや桂花お姉ちゃん、春蘭お姉ちゃん、季衣お姉ちゃん、凪お姉ちゃんたちがいる。でも、お母さんは……】

一刀ちゃん

【お母さんは、別の話】

……

……

……

……

……

……

一刀ちゃん、

僕は、

僕は、今、

あなたをここまで連れてきたことを猛烈に後悔しています。

【…さっちゃん?】

＞pf＜

……ぅぅ…

「ここは…?」

真っ暗。

何も見えない。

私は……確かあの時凪の話を聞いてそのまま部屋に戻って……

そしてそらからずっと悩んでいて…

――何をですか??

一刀ちゃんの事。

あの子が、あの子は私のことをどう思っているかって、

物事に厳しい人?

自分のことをただ守ってくれてる人？？
頼れるお姉ちゃん？
……
それとも

――お母さん？

っ……
あの子はそんな風にお母さんと別れても、お母さんのことを一度も嫌うとか恥かしく思ったことはなかった。
どれだけダメな人間だとしても、一刀がそう思っている以上、私がその代わりになるとか、そういう考えは何の意味もないわ。

――その物言いは、あなたが彼のお母さんになりたい気持ちはあるのですね？

それは……
あの子のことを知って、守ってあげたいと思わない人はいないでしょうよ。

――あなたなんかが彼のお母さんになれると思っているのですか？その体に血を浴びているあなたが？これから数えきらない戦争の中で、覇道の唱えながらその声で何万、何十万の人の命を奪わなければならないあなたが？妄想もそれほどだと重症ですよ？

っっ！！

――あなたは一刀ちゃんのお母さんにはなれない。

何ですって？

――あなたは選ばなければなりません。一刀ちゃんか、それとも天か。大事な時、選ばなければならない時に、あなたはきっと自分が選ぶべきことを選ぶでしょう。

何故？何故そんなことになるのよ？

何故あの子にそんなことをさせなければならない？

――あなたが覇王を目指すものだから…あなたがあの子を天の御使いとして選んだから…あの時、あなたがあの子を拾ったから……

そんな……どうしてそうなるのよ

――……それとも、「僕」があの子をここにおいたから、か！？

「誰！あなたは一体誰よ！」

――僕はただ、あの子が真の幸せを与えてあげたかった。それだけだった。これが一番いい道だと思った。けど……結局あなたじゃ…

「何を言っているの？あなたは誰？答えなさい！」

――…外史を彷徨う傀儡などに話す名前などありません

「何ですって？」

――あなたにお願いするのではありませんでした。あなたなら…あなたならできると思ったのに……結局、僕には何もできなかった。

「あなた、一刀についてどこまで知っているの？」

――……曹魏に王、いや、大陸の覇王になる者よ。どうか、これだけは約束してください。彼の、一刀ちゃんの目から涙が落ちないようにしてください。あの子が悲しむことがないようにしてください。僕の手であの子の幸せを掴まえてあげられないのなら、せめてその子がこれ以上不幸になりませんように……

＞ｐｆ＜

「待ちなさいー！！」

……

華琳さんが起きた時は、魘されたかのように体中に汗が一杯でした。

「……一体…なんだったの？」

「……すぅー、すぅー」

「うん？」

ふと温もりを感じて振り向いた場所には、一刀ちゃんが華琳さんの側で軽い息を吐きながら寝ていました。

「……」

テーブルにあるさめたお粥を見て、華琳さんは大体なことを思いつ

きました。

「…そうね…あまり心配をかけてしまったわ」

華琳さんは寝ている一刀ちゃんの顔に手を乗せてみました。

「……（にぱぁ）」

その感覚が気持ちよかったのか、夢の中の一刀ちゃんの顔は一層気楽そうになりました。

「……」

華琳さんは暫くその顔を見ていて、

「……いいえ、そんなはずがないわ」

何事が独り言で否定しました。

「私は曹孟徳よ。必ず、あなたも、天も手に入れるわ。あなたの幸せも、天下の民たちの幸せも、この手で掴まえてみせる」

その顔は、まるでこれから魔王を倒しに行く長い道を必ず乗り越えてみせると心を正す勇者のような顔でした。

「…いやな汗かいちゃったわね。今日風呂って空いてあったかしら」

＞ｐｆ＜

「……ぅ…」

「……うん？」【ボク、どれだけ…】

「あら、起きちゃったの？」

「…？？！」

「何驚いてるのよ、あなたが勝手に寝ていたのでしょう？」

「……（あわあわ）」【さっちゃん！華琳お姉ちゃん起きる前に起こしてくれると言ったじゃない！】

え？はい？

ああ、そうですね。そういえばそんなこと言いましたね。

あはは、サーセン（笑）。

「……ぅ…」

困ったような顔をした一刀ちゃんは、自分をじっと見ていた華琳さんのことを振り向きました。

ベット中でくっついている華琳さんは、いつの間にか寝巻きの姿になっていました。

実は、今すっかり夜です。

「……」『ごめんなさい』

「あら、別に怒っていないわよ？それより、こんな時間なのに起きちゃって、また寝れるのかしら。せっかくだし、このままあなたのことを枕代用に使おうと思ってたんだけど」

「……？」

「？どうしたの？」

「……＞＞クンクン＜＜」『華琳お姉ちゃん、いいにおいする』

「汗かいてたからね。お風呂浴びてきたのよ」

「……＞＞クンクン＜＜」

いや、別にクンクンって匂い嗅いでいるわけではありません。ただの擬態語です、はい。

「どう？寝られそう？」

「……」『努力してみる』

「ゆっくりしていなさい。あなたが寝るまで、私が見ていてあげるから」

「……？」『華琳お姉ちゃん？』

「どうしたのかしら、一刀」

「……ううん、なんでもない」

「変な子ね＞＞なでなで＜＜」

「……＞＞なでなで＜＜」

華琳さんの行動に何かの違和感を感じる一刀ちゃんでしたが、華琳さんからするいい匂いと、頭がなでられる感覚があまりにも気持ちよくて、それ以上思考を保てず、瞼を閉じてしまうのでした。

・・・

・・

・

拠点フェイズ４　華琳黙（続）（前書き）

（続）とは、まんまの意味である。

瞬間移動する能力をなくした一刀ちゃんですが……
この間は特に問題ないように話をしていたものの、

「あ、御使いお兄ちゃん!!球飛んでいくよー!」
「？」

どすん!

「ぁ!」
「一刀様!大丈夫ですか?」
「……ぁ〝…」

何かに飛んできて当たるのって、今日で三度目ですね。

普段なら本能的に避けるのに、一刀ちゃんはあれのせいで素の運動神経は随分と下のようです。

「大丈夫ですか?」
『大丈夫』【…体は大丈夫だけど、そろそろ心が折れてしまいそうだよ】

というか、凪さん、護衛（もとい警邏）ちゃんとしてあげてください。

『使えたものが使えないようになるって大変だね』
「はぁ……」

護衛で凪さんがついたわけですが……あまり役に立っていません。
一刀ちゃんとあまり距離がありすぎて。
凪さん、デレはいいですから護衛仕事ちゃんとしてください。
一刀ちゃんの体が持ちませんから。

＞ｐｆ＜

動きが鈍くなった一刀ちゃんのためにいくつか案を持ってきました。
先ずは自転車です。
あ、まさか二輪は乗れないとか言いませんよね？

「……」

…え？

【いや、あのね？そういうの乗ることなかったから…】

ああ、そういえばそうでしたね。これは気な利きませんでした。

【ううん、これから練習したらいいし……】

いいえ、よく考えてみたら、自転車はどこから持ってきたのかと聞かれたら色々面倒なので没にしましょう。
次はこれローラブレードなんですけど、輪の部分は靴に隠せるようになってる形で、普通に歩いている時、急に早く走らなければならない時に使えると思います。靴が結構高

さがあるので背が高くなる効果もあります。

【その辺に触れるとたとえさっちゃんでも許さないよ】「（にこっ）」

あ、はい、サーセン。マジでごめんなさい

【他には？】

はい、最後は自身物です！
なんと！ドラ○もんさんから借りてきた、

【言わさないよ！】

あ

・・・

・・

・

・

・・

・・・

しばらくお待ちください。

せっかく準備したのに……（。。）ぷんぷん

【最後のはどう考えても問題起こすでしょ？】

まあ、確かにやりすぎた感もしなくもないですね。自重しますw。

【笑うな】

それで？そうしますか？って、ローラーブレードしか選択地ありませんね。どっちにせよ街で使ったら余計に見物にされかねないですが、

【…うん、やっぱローラーブレードで】

乗れます？

【練習したらいけると思う】

はー…それじゃあ、問題ないでしょうね。
でもこの世界は舗装道路が少ないですから、とりあえず城内でゆっくり練習しましょう。

「…（こくっ）」

＞ｐｆ＜

すぃー

「……」

取りあえず城の中を回りながらちょっと慣れる練習をしています。
城内には舗装されたところが多いですから転ぶ心配も減りますし。

あ、でも曲がり角とかでは注意してくださいね。
巻物を山ほどもっている桂花さんとかとぶつかったら大変なことになりますから

【ちょっと待って！それってフラグ！】

いえ、フラグじゃありませんよ。僕が先に角曲がって一々確認していますから、曲がり角から誰か急に出てくることはありません。

【…ほんと？】

はい。

「……」

すぃー

僕のことを信じてまた速度を上げる一刀ちゃん。結構走るんですね。
まあ、いつもの一刀ちゃんの動きを考えたら足で移動するという感覚自体遅いし、不便だと思っても仕方がないことなんですけどね。
ほんと、できたものができないって厄介なものです。

「……」【うん、このぐらいなら大丈夫かな】

大丈夫ですか？

【うん、今度は街に出て…】

って、余裕だからってこっち見ながら喋ったら…

がらり

「！？」

「え？」

ちょうど華琳さんの部屋の前を通っていたのですが、華琳さんが運悪く本を何本か持って出てきてしまって一刀ちゃんの移動線上に立ってしまいました。

一刀ちゃん、ブレーキ

【無理、無理！】

「！！」

ドスン！！

「っ！」

「……？？」

あら？

「危ないじゃない。こんなところで走ったら」

ぶつかって大惨事、ってことになるだろうと思ったのが、華琳さん

は両手で一刀ちゃんを抱いてぶつかって倒れるのを止めました。
両手というのはもちろん、持っていた本は手にないというわけで、
本たちは地面に落ちてます。
華琳さんが本を落として一刀ちゃんから守ったのです。

「……」『ごめん』
「怪我は…ないようね。…て、珍しいものを履いているわね」
「……！」

華琳さんを見ていた一刀ちゃんは、ふと本たちが落ちてるのを見て、
ローラーブレードを元に戻して、落ちた本を広い始めました。

「あら、ありがとう」

それを見た華琳さんも一緒に座って本を集めました。
というか、華琳さんが何で自ら本運びなんかを?普段は桂花さんや
侍女に任せるはずなんですか…

全部集めてから、一刀ちゃんは拾った本を持って、華琳さんをじっ
と見ました。

「……」
「うん?…そう、持ってくれるのね」
「…（こくっ）」
「ありがとう。では、手伝ってもらおうかしら」

そう言った華琳さんは自分の分を本を持って先に歩いて、一刀ちゃ
んもその後について行きました。

…って

あれ？
書庫はそっちじゃないはずですが……？？
＞ｐｆ＜
たっ
ある部屋の前で華琳さんは止まりました。
「……？？」
がらり
「！？」
部屋を開ける華琳さんをみて、一刀ちゃんは慌ててその後について
「自分の部屋」に入りました。
「これらは全部、あなたの本なのよ」
「！」
びっくりした一刀ちゃんは本の中で一冊を開いてみました。
これは…絵本ですか？
「前に聞いたわよ。あなた、絵本とか結構読んでるみたいじゃない」
「……」
ええ、一刀ちゃん本読むの結構好きですよね。やっぱそういう趣味
になるしかなかった状況だったのですから。
でも、こっちの本を買うには小遣いではとても無理だったので、本

屋さんに貸与金と保証金をあげて借りる形で？そんな風に見てました。道理でいくら本を読んでも一刀ちゃんの部屋の本棚はいつも空なわけです。

「先ずは何冊か用意して来たから、後また読みたい本ができたら私に言いなさい。買ってあげるから」

「！（あわあわ）」

一刀ちゃんは慌てました。手が宙を舞っています。

いや、ほんと高いんですよ。本とか？買ってあげると言っても絵本だからって戦略や政治に関しての本とかと価格の差あまりありませんよ？

でも一刀ちゃん、この場合、相手は州牧なのですが、大丈夫じゃないんですか？

「何？遠慮することはないわ」

「……」

それでもちょっと不安気味な一刀ちゃん。

「そうね。今度休んで一緒に川にでも出ようかしら？」

「！！」【さっちゃん！この華琳お姉ちゃん偽者だよ！】

そこまで即決な判断をしなくても…いや、正直僕も思いましたのが否定しませんが…

「何？私と一緒に行くのが気に食わないのかしら」

「！（フルフル）」『そんな事ない！いい！嬉しい！すっごく嬉しいよ！』

「そ、そう？」

そんな一刀ちゃんの反応を見た華琳さんは少し驚いた顔をしました。
ちょっと嬉しそうです。
規則破ってまで仕掛けた甲斐はあったという、ゲフンゲフン。

さて、華琳さんと一刀ちゃんが持ってきた絵本を本棚に差し込んだら一行が全部詰りました。
これで当分は沢山本を読めますね。

「それじゃあ、私は仕事に戻るからね。遊ぶのはいいけど、先みたいに走り回って『怪我したら大変だから』ほどほどにして頂戴」
「……（コクッ）」
「じゃあ」

がらり

華琳さんは一刀ちゃんを残して部屋を出て仕事に戻りました。

「……＞＞ぽかーん＜＜」

確かにちょっとぽかんってなりますね。
僕も流石ここまで効果があるだろうとは思いませんでした。
しかも、怪我したら大変って…言うのが完全にお母さんふりです。

……偽者ですね、アレ

「……！」

一刀ちゃんはふと正気に戻って一度本棚を見てから、また華琳さんが出た引き戸を見てから、一度自分の頬を抓ってみました。

「！！（涙目）」

いや、普通自分で涙出るまで抓りませんよ？

「……（パァーッ）」

そして、一刀ちゃんは痛いように手で抓った頬を触りながら、今まで見せたことない明るい笑顔になるのでした。

……なんですか…まったく…

・・・

・・

・

八獣（前書き）

この時からですよね。アンナコト考え始めたのって……

八獣

「……♪」

一刀ちゃん、今日はいつになく笑顔満開ですね。

【だって嬉しいんだもん】

まあ、気持ちは分かりますね。
そんなに待ちに待っていた、華琳さんとのお出かけですし。
口だけで言うのだと思ったのですけど、本当にあのワーカーホリックの華琳さんが休暇を使うとは思いませんでしたよ。

「～♪」

まあ、一刀ちゃんが華琳さんと一緒に出掛けるのを楽しみにしているのも無理はないですね。
最近は華琳さんと一緒に寝るどころか、話し合う事もできないぐらい華琳さんが忙しかったのですから。
黄巾党の動きは結構治まってきたのですけど、それでも忙しいことには変わりません。
そんな中で、華琳さんが休んで一緒に遠足に行くというのはとても破格な提案なんですよ。

「……」【よし】

またサンドイッチも用意しちゃいましたしね。きっと華琳さんからも何か作ってくるとは思うのですが、こっちにはこっちなりに準備をしていたというわけです。

ちなみに僕が外からあれをとってくるのにどれだけ苦労をしたのかと言いますと…

【さっちゃん、早く行こ?】

ああ、一刀ちゃん一人で行かないでください。
…とほほ、華琳さんだけじゃなくて、僕のこともうちょっとやさしくしてくださいよぅ～。

＞pf＜

コンコン

しーん

「……」

部屋にいないのでしょうか。

【そうかも……】

特に付き合い場所は決めていませんよね。

【準備できたら部屋に来なさいって言ってた】

じゃあ、一応ここで待ちましょう。
……あ、もしかしたら

【何?】

いや、……ううん、待っていたら分かりますよ。

「……？」

・・・

・・

・

暫く華琳さんの部屋の前に座って待っていたら、あそこから華琳さんが来る様子を見かけました。

「あら、待っていたの？」

「（こくっこくっ）」

大きく頭を上下に振る一刀ちゃん。本当に楽しみにしてたのですね。

華琳さんは片手にカゴを一つ持っていました。

「……」『それは何？』

「後で行けば分かるわ…あなたこそ、その大きい荷物は何かしら」

「……」『ボクも行ったらわかる、かな？』

「そう。じゃあ行きましょうか」

「…ぅ」

出ない声でも口で答えてみるのは、一刀ちゃんの嬉しさの表現です。

「華琳さまーー！！！」

城から出ようとする時でした。

あそこから桂花さんが走ってきています。何だか嫌な予感がします。

「どうしたの、桂花？そんなに慌てて」

「せー…せー…」

ほら、そんな丈夫でもない体で走るからでしょ？虫の息じゃないですか。

『桂花お姉ちゃん大丈夫？』

「か、華琳さま、今すぐ報告することが…」

「私は今日休むつもりだったんだけど…あなたがここまでするのを見ると、よほど大変なことのようね」

「はぁ…はぁ…」

一度息を正してから桂花さんは話を続けました。

「黄巾党の本拠地が判りました」

「…！！」

その話を聞いた華琳さんの顔は真剣になりました。

「それは本当でしょうね」

「はい、凪が黄巾党討伐から戻ってくる途中で黄巾党の連絡兵を捕まえたらしく、そいつが持っていた書簡に、黄巾党の集合地点が書かれてありました」

「そう、それが本当なら……」

華琳さんはふと一刀ちゃんを見ました。

「……はぁ」

一刀ちゃんは苦笑しながら華琳さんを見上げました。

「…ごめんね、一刀」

「……（ふるふる）」

一刀ちゃんは頭を左右に振りましたが、それでも残念なのは事実です。

「桂花、直ぐに皆に集まるように伝えなさい。秋蘭と真桜には例の場所に偵察に向かえて頂戴」

「御意」

桂花はそう言ってまた走っていきました。大丈夫かな。

「…ごめんね、一刀」

華琳さんはまた同じことを言いました。

「……」

一刀ちゃんは何も言わずに、一度城の外を見てから内側に足を運びました。

＞ｐｆ＜

大丈夫ですか、一刀ちゃん？

【何が？】

一刀ちゃんは自分のベットに横たわって天頂を見ながら問い返しました。

せっかくのピクニックお出かけだったのに、無駄になってしあったじゃないですか。

【華琳お姉ちゃんはこれから王になる人。ボクはただの居候の、天の御使いって名前だけの子供。どっちの方が優先されるかは決まってることじゃない】

それは…否定する術もありませんが…

「……」

はぁ…なんでよりにもよって今日そんな大手柄をしてくれたのですか、凪さん……。

【別に凪お姉ちゃんがボクを邪魔しようと態としたわけじゃないじゃない。寧ろ褒められるべきだよ】

でも……

【大体ボクのために華琳お姉ちゃんが仕事をサボって出掛けるとしたらその方がもっと問題だよ】

……僕が心配するのが何か分かりますか？

「……」

僕が一番一刀ちゃんに心配しているのはですね。あなたがこんなことを重ねた挙句に、自分のことが皆に邪魔でしかならない、とか考え込んでしまっちゃうことが一番心配なのですよ。

その他に、華琳さんが黄巾党をやっつけられなかったり、他の民たちが苦労したりとか、知った事じゃありません。

【さっちゃん、そんなこと言ったら……！】

一刀ちゃんはこんな仕打ちになってもいい立場じゃないんです。だって天の御使いですよ？もっと丁寧に扱われるべきですよ？何ですか、適当にテンションだけ合わせてくれたらいいってものですか？

一刀ちゃんはそれでいいんですか？

「……」

……もういいです。一刀ちゃんに言っても無駄です。

僕が僕のやり方でやってみせます。

「…」【さっちゃん？】

華琳さん何かの手など貸さなくてもいいようにするのです。

最初から、最初からそんなことにしたら一刀ちゃんは空回りするのを心配しなくても済んだのに……！

【さっちゃん？さっちゃんどこ行ったの？ねえ？】

【さっちゃん？】

＞ｐｆ＜

「秋蘭、どうだったかしら？」
「はっ、情報通り、周りの盗賊や黄巾党の連中が次々と集まっていました。これで、華琳さまが予想なさっていた状態になれたかと」
「そう…、霧のように掴めなかった奴らももはや露の一滴になったってわけね」

玉座な間では、華琳さんと皆が集まって会議中です。

「む？どういう意味ですか？」

春蘭さんが華琳さんの言葉の意味が分からないように聞きました。

「春蘭には言ってもわからないと思うけどね」
「なんだと？！」

桂花さんのもっともが言葉にむっとする春蘭さん。

「とにかく、これは千載一遇の機会と言えるでしょう。全員、出撃の準備になさい。今から黄巾党の本拠地に総攻撃に移るわ」
「「「御意！！」」」

華琳さんの命令に、全武将は各々の出撃の準備のため散りました。

「華琳さま、大丈夫ですか？」

華琳さんと桂花さんだけが残った玉座の間で、桂花さんが華琳さんの陰が見える顔を見て言いました。

「…大丈夫よ。あなたも出撃準備にかかりなさい」

「…申し訳ございません、華琳さま。だけど、今回は北郷のことで遅れを取るわけにはいかな……」

けど桂花さんは言葉を全部終わらせることができませんでした。

一刀ちゃんの名前が出た瞬間、華琳さんの「絶」が桂花さんの首筋を狙っていたからです。

「……桂花、あなたがとった行動に間違いはないわ。けれど、あまりグダグダ言っていると、私がほんの一瞬だけ、理不尽な行動をするかも…知れないのよ」

「……」

「…昼には出立できるように準備なさい」

「は、…はい」

華琳さんが絶を控えて、桂花さんは冷や汗をかきながら玉座の間を去りました。

「……ふぅ…」

桂花さんが視界から消えるのを見て、華琳さんは玉座に座って天頂を見ながら手を頭につけてため息をつくのでした。

……

……

＞ｐｆ＜

どんなに仲が良くても、どんだけ可愛らしくて愛されたって、所詮は他人。私を公より優先することができないこの時代、華琳さんに一刀ちゃんを任せることにはやはり無理があったのです。
このままでは、結局現代にいた頃と同じ過ちの繰り返しにしかなりません。ほどほどな優しさは、結局一刀ちゃんの傷を抉るだけ。
そうなるからには僕が出て……

「少しでしゃばり過ぎねーん」

！！

あなた……いつからそこに。

「つい先よ…それより、これ以上の無茶な行動は許さないわーよ」

ちっ、

……あなたたちも所詮はあれです。
権力を握った瞬間に昔のその心を忘れてまた自分たちが戦ってきた奴らがやったことと同じことを繰り返す。
「外史の意義」など、結局あなたたちにはどうでもいいことではなかったので？

「失礼なこと言っちゃうわ。私たちはただ、この外史が滅びることなく続くのを願っているだけよ」

ふん……大のために小を犠牲にしますか。
もやはあなたたちにとって、「北郷一刀」という存在は囲碁の石一つと変わらないのでしょう。

けど、僕には違う。僕に北郷一刀という存在は、あの子しかいない。
だから、守ってみせる。幸せにして見せる。
たとえこの身が滅びようとも……たとえこの外史が滅ぶとしても！

キ――ン

「腕をあげたねーん。けど、まだまだだわーん」

ちっ……何の用でここまで来たのですか？

「警告よ」

警告？ふん。いつから管理者が管理者のことに警告などを与えることができたので？この外史の管理は僕に負かされたはずです。

「管路ちゃんからのお告げよ」

ふん…あの女の命令なんて聞くものですか。

「まあ、どちらにせよ、このままあなたが外史に衝撃を与え続けるというのなら、私たちとしても他に方法はーない」

僕を排除するとでも？

「そうならなければいいんだけどねーん」

ふん……あなたは、最初に北郷一刀を救った時を覚えていますか？

「忘れるわけがないでしょ。私とご主人さまの初めてのあの運命的出会いを……」

で、知ってます？あなたが守ってあげた北郷一刀が、あなたのことを愛してくれないということを……

「……」

僕は今、その感覚を骨に痺れるほど感じているんですけどね。

「……あなた、一体どうするつもり？」

管理者がやることなんて一つしかないでしょう。

……外史が赴くまま見守ってあげるだけです。

＞ｐｆ＜

一刀ちゃん、まだ部屋にいるんですか？

【さっちゃん、どこ行ってきたんだよ！】

ええ、まぁ、ちょっと……

…あ、え？一刀ちゃん、

「……（じー）」

あれ？もしかして、怒ってます？

【当たり前じゃない！何だよ、何で急に居なくなるんだよ！】

あ、ちょっ、そんなに怒ることないじゃないですか。僕が急にいなくなるのはいつものことですし。

【そういう問題じゃない！】

え？

【さっちゃんはいなくなる時はいつもボクにいつも声掛けてから行くじゃない。なのに今回は急に熱くなって一人で言っちゃうし、ボクそんな急にさっちゃんいなくなったりしたら不安なの！】

一刀ちゃん？

「……（うるうる）」

……あの変態が言ったことも間違ってはいないかも知れませんね。少しでしゃばりすぎたようです。

ごめんなさい、一刀ちゃん。これからは急に消えたりしませんから。

「……」【ほんと？】

はい、もちろんですよ。

それより、華琳さんたちがそろそろ出陣する準備をしています。僕たちも行きましょう。

【でも、今回はこっそり行くこともできないし、華琳お姉ちゃんが許してくれそうもないし】

うーん、正直前からぶつかっても今回は許してくれそうですけどね。
華琳さん、一刀ちゃんに申し分ないと思ってますから。
でも、流石にそれだとちょっと面白みがないですから……
ちょっとびっくりさせる作戦で行きましょう。

「？？」

まあ、僕に全部任せて一刀ちゃんは御輿に乗った気分にしていたらいいのですよ。

・・・
・・
・

八之奥獣

黄巾党の集合地点となっている例の城は、曹操さんの治める地の中でも一番辺境に位置しているところでした。
軍を率いて行くに丸一日ほどかかってそれに、今回向う兵の数はおよそ2万。
要は、補給物が結構あったという話です。

「ねー、真桜ちゃん、これ、何入ってるの？」
「うん？武装とかそうじゃないと兵糧とかじゃあらへんの？」
「それが、ちょっとおかしいの？」
「おかしいって何や？」
「これ、箱、何か軽くて、何も入ってないみたいなの」
「うん？そんなわきゃ…ちゃんと行く前に確認しといたのに？」

「二人とも何騒いでるんだ？」
「あ、凪ちゃん。この箱、ちょっとおかしいの」
「おかしいって？」
「なんやら中が空みたいに軽いみたいやで」
「中が空…？中身は確認したのか？」
「ううん、まだ」
「まあ、一応開けてみたら分かる話やろ」
「そうだね」
「あ、ちょっと待て、二人とも。何が入ってるかも知らずに開けるのは危険……」
「ご開帳ー！」

そういうわけで、
一刀ちゃんは槍を入れていた箱の中に入っていてもらってました。

「……」
「「え？」」
「……＞＞ウィンク☆＜＜」
……何のネタなのかは敢えて言わない。
古い。

＞pf＜

うーん、華琳さんの前で現れたらもっとおいしかったんですけど、流石にそうはいきませんでしたね。

「一刀ちゃん？」
「一刀様、どうしてこんなところにいらっしゃ…」
「……（むっ）」

凪さんが敬語で言おうとすると一刀ちゃんは直ぐに反応しました。びしっ凪さんの口に自分の指を指し伸ばして厳しい顔をします。

「あ、……なんでここにいるんだ？」
「まぁ、来るのは分かっていたけどなぁ…してもこんな風にくるとはな」
「知っていた！？」
「そんなんあたりまえやろ。一刀ちゃんが一人で城で大人しく待ってるはずがないやんか。なぁ、一刀ちゃん？」
「（にこっ）」
「あーん、やっぱ一刀ちゃんかわいいのー？」

肯定の意味でふった笑顔がまた沙和さんのスイッチを入れさせたのが一刀ちゃんに思いっきり抱きつきます。

「……」『今どの辺なの？』

「半分ぐらいってところやな。ウチはこれからちーと偵察に行く予定なんやけど」

『あ、ほんと？じゃあ、これあげる』

そう言って一刀ちゃんは真桜さんに持っていた鞄を渡しました。

「なんや、これ……」

え、一刀ちゃんアレって、この前作ったサンドイッチじゃないですか。

「何、何？アハーっおいしそーなの」

「これ、もらってええの？」

『いいよ、いいよ。どうせ一人で食べれないし、ほっとくといっちゃうし』

「ねぇ、ねぇ、真桜ちゃん、私も食べていいよね」

「ああ、まぁ、一刀ちゃん、ええよな」

『うん、いいよ』

「ありがとー」

「じゃ、じゃあ、私も……」

『凪お姉ちゃんはダメ』

「えっ！？」

『ダメ＞＞にこっ＜＜』

「ど、どうして私だけ…」

『ダメ＞＞にこっ＜＜』

うわー……恨まれてる。地味に恨まれてます。ってか地味じゃない。
凪さんもう戻れないほど嫌悪フラグ立ったよ。
話が見えない人は前の話をよーく見るといいですよ。

＞pf＜

ところで一刀ちゃん、今回どんな理由の出陣か分かってますか？

「？」【黄巾党の本拠地でしょ？】

んまあ、そうなんですけど、それより華琳さんが自ら出陣するのは、
ここに張三姉妹があるっていう確信があるからなんですよ。

【張三姉妹って、あの歌をしていたお姉ちゃんたち？】

はいです。

【もし、本当にあのお姉ちゃんたちが居たら？】

うーん、まあ、逆賊の党魁なわけですからね。
けど、華琳さんは才がある人は自分の元に置く主義ですからね。
多分、そんなに質が悪いのでだければ殺したりはしません。

【そっか……よかった】

好きなんですね、あの人たちのこと。
前に何回か歌を聞いたくらいでしょう？

【…さっちゃん】

はい

【歌が歌えるって神の恵みだよ】

……ごめんなさい

何かごめんなさい。

そうですね。歌が歌えるのは天の祝福ですね。天使ですね、はい。

とりあえず、華琳さんのところに行きましょう。

【え、素で行くの？】

まさかここまで来たのに戻すとかないでしょう。

それに、そろそろ行かないとなくなっちゃいますよ。

「……？」

・・・

・・

・

で、ここは皆さんが集まっている会議場です。

「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」

「あ、あの…華琳さま」
「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」
「うぅ……」
「ボクも食べたい」
「季衣、今は黙っていなさい……危ないわ」

状況を簡単に説明します。
華琳さんが食べてます。食べてます。すっごく食べてます。
何かすごく食べ物並べて、一人で食べてます。

「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」

この食べ物がどこから来たのか、言うと野暮なんですが……
はい、もちろん一刀ちゃんと一緒に今日川に行って食べようとしたものです。
それを、周りで見てる春蘭さんや季衣さん、桂花さんに上げることもなく一人でぱくぱくっと食べてます。

えっと、あれですね。そんなにストレスを食べるので解くのはよくないですよ。太りますよ？
まあ、他の人たちにあげない気持ちは分かりますけどね。

秋蘭も偵察に行っていないのに、春蘭さんや桂花さんはこの不味い空気をどうすればいいのか分からず、特に桂花さんは本当にあの以来華琳さんに一言も言えてません。
軍師なのに。敵陣が後半日なのに。
季衣さんは別の意味で苦しんでます。

「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」

大将がこれだと士気にかかわりますけどね。すごく……

「……＞＞ひょこ＜＜」【何、華琳お姉ちゃんどうしたの？】

一刀ちゃん、早く行ってください。

【何か、空気が不味いけど？ボク行っても大丈夫なの？】

いつからそんなの気にするようになったんですか。ほら、早く。

「…（コクッ）」

＞pf＜

「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」

「なあ、桂花、華琳さまはどうしてあんなに機嫌が悪くなられたのだ？」

「…あなたは知らないほうがいいわよ」

「なんだt」

「しーっ！静かにしなさい」

「む……」

「……＞＞パクッ、パクッ＜＜」

聞こえてない華琳さんではないのでしょうが、今のところ黙っていないと頭にきてしまいそうだから黙って食べてばかりいます。

頭では分かっていますね。どっちが先なのかは明らかな話です。

だけど、せっかく自分が思い切って一刀のために準備したのに無駄になってしまったのです。

こんな風になってしまってみると、あの夢の中で言われたまま結局自分は一刀ちゃんを見捨てるようになったような気がして気が気ではないのでしょう。
何より、一刀ちゃんはあの時苦笑しながらも、何も言わずに、せめて『大丈夫』だって一言でも言ってくれたら華琳さんもここまで気まずくなってはいなかったでしょうけど、ほんと一刀ちゃんの失望はそれほどのものだったのです。

そんなこんな話してるうちにも華琳さんの箸は動いてるわけですが……

「＞＞パクッ＜＜」

酢豚をとって口に運ぶ箸と華琳さんの口の間に邪魔が入りました。

「！？」
「＞＞モグモグ＜＜」
「一刀！？」
「なっ！」
「どうして貴様がここに」
「一刀ちゃん」

「……＞＞キラキラ＜＜」【おいしい】

この子は美味しいものを食べると直ぐ顔に出るのがチャーミングポイントです。

「…どうしてあなたがここにいるのかしら」

驚いたのは幕の中の人全員驚きましたが、とりあえず冷静な反応を

お見せする華琳さんです。

『補給物詰めた箱に乗ってきた』

「またそんなことしてまで…危ないから来たらダメって何度言えば分かるのよ、あなたは」

『そんなことよりもっと頂戴』

「え？」

『美味しいから、もっと食べたい』

「そ、そんなの自分で食べればいいじゃない」

『だって箸一つしかないし…下品に手で掴んで食べなさいなんて言わないよね？』

「じ、じゃあ、この箸あげるから、あなたが全部食べなさい」

『ボク箸使えない』

「嘘でしょ…」

『うん、嘘』

嘘だったんですか…

『ほら、あー』

そう書いたかずとちゃんは目を閉じて口だけバーって開けました。

作品名：母鳥に食べ物を強請る巣の中の小鳥

「……」

華琳さんは一度一刀ちゃんのその顔を見てから、桂花さんのところを見ました。

「桂花、凪たちのところに行って補給物資のことを再確認して頂戴。

一刀ちゃんが潜り込んだせいで空いたところがないか調べてきなさい」
「は、はい……」
「春蘭と季衣はそろそろ秋蘭たちが戻ってくる時間だから迎えに行って頂戴」
「ん？華琳さま、特にお出迎えする必要は……」
「何？私の命令が聞けないっていうの？」
「い、いいえ、そういうことでは…季衣、行くぞ」
「は、はい」

そして三人が全部部屋を出たのを確認した華琳さんは、まだ口をあけてる一刀ちゃんを見て……

「……」
「……＞＞あー＜＜」

何かを箸で取って一刀ちゃんの口に入れてあげました。

「……！！！！」【！！！】

口に入ったものをモグモグと食べていた一刀ちゃんは、急に目をパッと開けて口のものを吐こうとしましたが、

「えいっ」
「！！！」

華琳さんの口にふさがれて望みは叶えず。
華琳さんが一刀ちゃんにあげたのは、ラー油をありったけ漬けた麻婆豆腐でした。
なんで辛いもの嫌いなのにそういうのをおいてあったのかは不明で

す。

「何がもっと頂戴よ。人の言うことを聞かない子はこうよ」

「！！！！」【辛い！辛いぃ！！】

涙目の一刀ちゃんですが、絶対許してあげない華琳さんです。

この場面をもうちょっと引っ張っちゃってもいいのですけど、僕一人で楽しみたいのでカットしていただきますよ。

【さっちゃん助けてー】

ええー、無理ですよー。

＞ｐｆ＜

「……ぅ……ぅ……」

「…はっ！」

何がはっ！ですか。

反応は面白くてついついやりすぎちゃったって顔しても過去は戻ってこないのですよ。

「……（しくしく）」【汚されちゃった】

まだ冗談を言える口はあるみたいですね。

もうちょっとやってても大丈夫だったのかもしれません。

「だ、大丈夫なの？」

「……＞＞ぷいっ＜＜」

遅く一刀ちゃんの様子を伺う華琳さん。
でも一刀ちゃんは拗ねたふりをしてそっぽを向きます。

「あなたが悪いのよ。私がどれだけあなたのこと心配したのに、そんなになんともない顔で現れるから…」
「……」『なんともなくないよ』
「あ……」
『ボク楽しみにしてたから、残念だと思ってるし、華琳お姉ちゃんのことウソツキとも思ってる』
「っ…」

ウソツキって言葉にちょっとショックだったのか、華琳さんは顔をしかめました。

『…でもほら、ボクだって鬼じゃないから?』
「へ?」
『後でもっとすごいとこに行かせてくれたら、許してあげなくもないよ?』
「……」
『ボクがあの時華琳お姉ちゃんにそれでも一緒に行こうって意地張ったら、一緒に行った?』
「それは…」
「…」『じゃあ、あの時のことはどうしようもなかったってことでいい。でも、後で利付きでもらうから』
「一刀……」

一刀ちゃんは華琳さんを見て笑ってから座っていた椅子から降りてきて華琳さんの膝に上がって座りました。

「か、一刀？」
「……＞＞あー＜＜」

一刀ちゃんはまた先みたいに餌を待っている小鳥みたいに目を閉じて口を開けました。

「……」

それをしばらく見ていた華琳さんは、

「…あなたは、本当にそれでいいの？もっと意地を張ったり、泣いたりしなくてもいいの？」
「……」『どうせ大人が子供に言うことの半分は嘘だから』
「っ！」

うっ！痛い……痛すぎる…ここで精神的ダメージ子供補正（２倍）にクリティカル（２倍）来た……

【遊園地行くって、約束してたのにな……】

…え？

「……＞＞あー＜＜」

一刀ちゃんは先のあの姿勢のまま。
華琳はそれを見ていて、

箸に『ラー油たっぷり漬けた麻婆』を一刀ちゃんの口に入れてあげました。

「！！！」
「させないわ」
「ぅー！！　ぅぅー！！！！」
「何よ！一刀のくせに生意気よ！」

一刀ちゃんの口を両手で塞ぐ華琳さんの顔は半分笑ってました。
一刀ちゃんが思ったよりも強い子なのが安心だったのか、自分のことを嫌ってなくて嬉しかったのか、どっちにしても華琳さんの顔は、お母さんというよりは弟にいたずらをするお姉ちゃんでした。

「！！！！！（涙目）」
「ええ、期待してなさいよ。大人の本気を見せてあげるから！利付きにお釣りまで全部あげるから期待してなさいよ」
「！！」【それはいいから普通に食べたらダメなの！？】

これが未来の王さまと大陸を救う天の御使いなんですからね。
後が心配ったら心配で仕方ないんですけどね…ハハハッ。

・・・
・・
・

九獣（前書き）

この外史は基本的に張三姉妹の出番がありません。
何言ってるの、こいつ？とか、
表出ろとか、
というのはやめてください。作者は気の弱い人です。

九獣

そんな風に一刀で暫く遊んだ華琳さんは、すっかり機嫌がよくなっていて、春蘭さんたちが秋蘭さんと真桜さんと一緒に戻ってくる頃には、一刀ちゃんを膝の上で抱いて寛いでいました。

＞ｐｆ＜

「城に篭っている敵の数は二十万ぐらいです」
「に、二十万!?」
「そんなにたくさんいるのー？」

秋蘭さんの報告に、季衣さんと沙和さんがびっくりします。
いや、多いですね、どっからあんな湧いたのやら…

「まぁ、最後まで聞いてくれ。数だけじゃあ二十万やけど、その中で実際戦えそうなやつらはまぁ３万ってところかな」
「？？？」

ああ、一刀は知らなくてもいい話ですよ。
略すると、今回戦う黄巾党が見た目はすごそうだけど、実際はすっごく弱いって話です。

「……」【やっぱり、戦争はするんだね】

はい…これればかりは、私たちでなんとかできることではないのですよ。

「……」

「……凪、一刀と外に居てもらえるかしら。重要なことは後で言ってあげるから」

「は、はい」

難しい顔になっている一刀ちゃんを見て、華琳さんも気がついたのか凪さんに一刀ちゃんのことを委ねました。

って、よりにもよって凪さんですか？

そうでなくても凪さんのせいで（もちろん凪さんが悪いわけではないのですが）遠足がバーになって先凪さんにだけ意地悪した一刀ちゃんですのに……

いや、もしくはそれを承知の上の人選なのでしょうか。

「一刀様、どうぞこちらへ」

「……（じー）」

「……か、かずと」

「……」

二回目の呼びに反応して、一刀ちゃんは凪さんの手を掴んで会議場の外に出ました。

＞ｐｆ＜

外に出た凪さんと一刀ちゃんですが……

「……」
「……」

二人とも無言。
うわ……
一刀ちゃん、何か言ってください。
場面の空気的にも、尺的にも不味いですから。

「……」【え？何？】

え？何？じゃなくて……

【さっちゃん、こんな時はうるさくしないんだよ。ちょっと静かにしてて】

えぇぇ……

「……」
「……♪」
「……／／／／／」

は？
凪さん、手繋いでるだけで頬赤くしないでください。そうしてると凄く変質者に見えます。

「…あ、あの、一刀様。やっぱり、自分は、呼び捨てにするのは…」
「……（むっ）」
「うぅっ……」

どうしても呼び捨てが慣れていないような凪さんが色んな意味で泣き顔になっていますけど。

どうでしょうね。

他の外史なら、凪の北郷一刀への呼び方は隊長。

でも、ここの一刀ちゃんはそんな位置でもなければ凪さんにそんなに呼ばわれる筋合いもないのですからね。

そんなに考えると、やっぱり凪さんが呼びやすいのは一刀様なんでしょうけどね。

一刀ちゃんとしては様付けだと何か上下関係があるみたいで嫌いな気持ちも分かりますけど、そこまで呼び方に拘ると、逆によくないと思うのは私だけですか？

一刀ちゃんはため息をついて、繋いでた手を放して竹簡と筆を手にしました。

『そんなこと言うと、ボクも凪お姉ちゃんのこと凪お姉ちゃんじゃなくて楽進さんって呼ぶよ？』

「ひぃっ！」

いや、そこまで嫌なんですか！？（両方に）

「そ、そんな……」

『ボクは凪お姉ちゃんにそんなに呼ばれたくもないし、呼ばれる理由もないよ。街の人たちはボクのこと御使い様や御使いのぼっちゃんや散々呼んでるけど、一刀様だと御使い様とそんなかわらないじゃない。凪お姉ちゃんとボクの関係はそんな疎いの？』

「そういうわけでは断じて！！」

一刀ちゃんのあまりない長い話に、凪さんは全力で否定しました。
少しだけ、「気」とか漏れてそうです。ってか漏れてる！凪さん！
闘気とか漏れてます！ほぼ戦闘中並の緊張状態です！

『それにね、ボク、一刀って呼ばれるの好きなの』
「え？」
『ここでボクのこと「かずと」って呼んでくれるのは、華琳お姉ちゃんしかいないから』

まあ、そうですね。
春蘭、秋蘭、桂花さんは北郷ですし（春蘭さんは、大体貴様、こ奴とかですが）
季衣、沙和、真桜さんは一刀ちゃんですし。

呼び捨てなのは華琳さんだけですね。

『凪お姉ちゃんが初めてかずとって呼んでくれた時、なんかすごく新鮮な感じ？嬉しかった。だから、ずっと「かずと」って呼んでくれたら、嬉しい』
「……／／／／／／」
「♪」
「あ、あの…それじゃあ、これからも……かずとって呼んだら…いいのですか？」
『だったら嬉しい』
「じゃ、じゃあ……そうします」
『じゃあ、今呼んでみて』
「い、今からですか？」
「……（コクッ）」
「その……か、かずと…」
「？」

「っ！！」

かずとって言われた直後、思いっきり一刀ちゃんに抱きつかれた凪さんは温泉でのぼせてるように顔が赤くなって、手も足も出せないまま立っていました。

僕は一刀ちゃん以外の人の心は読めないのですが、今の凪さんの感情はあまり見たくありません。きっとすごくうるさくて、誰かに聞かれたら社会的に終わってしまうようなこと考えていそうです。

え？僕ですか？あはは、まさかそんな……じゅるっ

＞ｐｆ＜

はい、それじゃあ、一刀ちゃんにも分かるように今回華琳さんたちの黄巾党本拠地攻めの作戦を説明します。

先ず、中にいる黄巾党の何人かを金で買収、こっちの命令を聞くようにします。

そしたら、買収された黄巾党の人たちが、密かに城のあっちこっちで火事を起こします。

となると、指揮系通がちゃんと決められていない黄巾党たちは、きっと右往左往して火事は広がり、城内は混乱の渦になります。

その中を華琳さんたちが攻めて、城を落とし、党魁の張角と他二人さんを捕獲する。

これが、この作戦の簡単なまとめです。

何か質問はありますか？

「……」【火事って、中に人がたくさんいるのに、火を消すのはあっという間じゃない？】

うーん、それはですね。
この時代は消防車がいるわけじゃないし、人力で消化しないといけないのですが、指揮がちゃんとできないと多角的に発生した火を効果的に消すことができずに、広がっちゃうというわけです。
それに、城の中には現在飲む水もろくにない状態でしょうから、消化するために使う水を探すのも一苦労するでしょうよ。そしたら既に火は広がるまで広がっちゃってますよ。

【じゃあ、何で早くその指揮系通ってのを決めなかったの？】

それは、まず集まるのが早すぎたのがあります。ちゃんとした基盤が無かった状態で、急に何の繋がりもない人たちが集まっても誰が出て「私がお前らの指揮を執る」と言っても、皆聞いたふりもしないのです。
へたをすると、逆に内で喧嘩を始めることになりかねないですしね。だから張角さんたちも簡単に指揮を纏められなかったのでしょうよ。

【といっても、あのお姉ちゃんたちはただの芸人じゃない】

まあ、そうなねすけどね。でもここまで人たちを集めたのはあくまで彼女たちです。
意図がなんだったのかは後の問題として、ここまで仕事を大きくしておいて手に負えなくてただ見てるだけ、といったらこっちとしては迷惑でしかないのですよ。
確かにただの芸人ですからちゃんと統率できなくてこんな風になってしまったのもありますが、だからといってかわいそうとか言う暇はありません。
あの人たちのせいで、たくさんの人たちが傷ついて、死にましたから。

【……】

華琳さんとは話をしたのですよね？
何と言ったんですか？

【相手がどんな者が自分の目で確かめてから決めるって】

まあ、そうでしょうね。
でも、一刀ちゃんが言った通り、あの人たちの素が悪いわけではありませんし、あの場に一刀ちゃんがいたら華琳さんもあの人たちを殺すとかはしないと思います。

【そ、そうだよね？】

心配することはありません。ただ、僕が心配になるのは、この戦争の途中で誰が一刀ちゃんを守ってくれるかっていう話ですけどね。

【僕のことは……華琳お姉ちゃんと一緒にいたら大丈夫だよ】

だったらいいのですけどね……

【それに、さっちゃんも居るから】

あら、期待されちゃってますか？
でも、ごめんなさい。さっちゃんは今回は一刀ちゃんと一緒に居られません。

【！！何で？！】

ちょっと、戦いの中に入ってやるべきことがあるのですよ……こういったら何ですけど、これも一刀ちゃんのためです。
だから、一刀ちゃんはどうか華琳さんの側から離れないでください。

「……」

なんですか？その心配そう顔？
僕ですよ？さっちゃんですよ？戦場で死ぬ体もないですよ。一刀ちゃんが心配するようなこと起きませんって。

「……」【危険なことしちゃダメだからね】

それこっちの話。
ああ、これは念のためです。一刀ちゃんにあげます。

そう言いながら、僕は一刀ちゃんに短弓を一つあげました。

「……」【何これ？】

短弓ですよ？

「？？？」

まあ、一刀ちゃんが理解不能って顔をするのも無理はありません。
だって、矢もなければ弦もない弓なんて、単にちょっと曲がった棒ですからね。

まあ、それが弓だと考えて元弦があるところを引っ張るって感じにしてください。

「……」

一刀ちゃんが素直に片手で弓を掴んで、もう片手で弦があるところを掴んだら、

「！」

そこに無かったはずの光る弦があって、弦には同じく光る矢が一つがあります。

うーん、先ずは使う方法を説明します。目に迫ってくる敵を撃つと思ってその弦を引っ張って放したら、一刀ちゃんがどんなに馬鹿な方向で撃っても矢はその相手に飛んで当たります。

どんなに遠くにあっても、最後まで狙う相手をちゃんと心に決めていたら、矢は一刀ちゃんが狙った相手に当たります。

【…じゃあ、死ぬの？】

はい、死にます。必ず。

【…じゃあ、要らない】

……持っていてください。ここは戦場です。一刀ちゃんにどんな危険が迫るか、僕にも分かりません。しかも今回は僕が余儀なく一刀ちゃんから離れなければなりません。

だから、本当に死ぬ。このままだと死ぬ、とした時に、その弦を掴んでください。そしたら、その光る矢が、必ず一刀ちゃんを守ってくれます。

撃つ機械は一回だけですけどね。

「……」

一刀ちゃんがこっちを見ています。嫌なのでしょうね。
だけど、……僕だって一刀ちゃんにそんなことをさせたくはないです。でも……
こっちも命賭けてるのに…

ああ、じゃあ分かりました。矢の強度を調整します。

これで、相手がその場で気絶するだけで済みます。怪我とかもないでしょう。

「……」

持っていてください。今の僕に出来る、数少ないことの一つですから。

「……」【わかった。持っている。でも、やっぱり撃たないかもしれない】

わかりました。僕も、一刀ちゃんがその矢を撃つようなことが起きないように祈ります。

その時が、僕の最後ですから。

＞pf＜

「一刀？一刀どこにいるの？」

「！」

あそこから華琳さんが呼んでいますね。

その矢は一応他の人たちの目に見えないようにしておきます。絶対手近に持っていてください。

「（こくっ）」【さっちゃんも気をつけて】

もうそれ以上言わないでくださいよ。

子供は自分のことだけ心配していればいいのです。

他の人のことまで心配していると、後で自分が損ずることになりますよ。

「（にしっ）」【そんなこというさっちゃんは、いつも僕の心配してくれるくせに】

……早く行ってください。気をつけてくださいね。

「（こくっ）」

一刀ちゃんはそう言って、華琳さんのところへ向いました。

凪さんたちは今回左翼で黄巾党を攻めて、張三姉妹を捕まえることまでしなければなりません。一刀ちゃんの護衛までは無理でしょう。

となると、一刀ちゃんが一番安全にいられる場所は中央本隊。つま

り華琳さんがいるところです。
僕はまだ華琳さんをそこまで深く信頼しているつもりはないのですけど、まあ、今回は仕方ありません。

……華琳さんの姿を見て、一刀ちゃんの言葉を聴いて、決めたのです。
ちょっと激しい方法ですが、やってみせましょう。

・・・
・・
・

ガーンガーンガーン！！！

城内から煙が上がり、銅鑼が鳴かれます。

戦争が始まります。

＞ｐｆ＜

「いい、一刀？ちゃんと私の近くにいなさい。絶対私の側から離れたらダメだからね」
『分かってるって。華琳お姉ちゃんったら心配しすぎだよ』

馬鹿、今あなたのことを心配しないといつやれって言うのよ。
戦争は子供の遊び場じゃないんだから……
身を動かずに移動できる術を持っていたときはまだマシだったけど、
今の一刀はただの子供。
こんなところに置くこと自体が危ないし、それに、こんなところ見
せたくもないわよ。

「華琳さま。左翼と右翼、号令に従って突撃を開始しました。私た
ちも…」
「ええ…皆聞け！天下を怪我した獣どもが今目の前にある！神出鬼
没に動きながら、地を、人を蹂躙した奴らも、もはやただの烏合の
衆！ここで、我らの手でこの乱を終わらせるのだ！」
「おおおおおお！！！！！！！」
「！！」

雄叫びに驚いたのか、一刀ちゃんが私のところにもっと近くくっつ
いてくる。

「大丈夫、一刀？これからは馬で移動するから、ちゃんと掴まえて
いなさい」
「……（こくっ）」

見てなさい、一刀。
これはこれから私がやろうとすることの始まりにすぎないわ。
これから私は、もっともっとたくさんの人を殺さなければならない。
たくさんのものを犠牲にしなければならない。
私が望むものはそれたちを犠牲にする価値があるものよ。

だけど、約束するわ。
あなただけは忘れない。

あなたのことだけは犠牲しない。
そして、いつかあなたにも見せてあげる。
これが私が望んでいたものだって。
あなたにも見せてあげるわ。
そして、……

「……（ふるふる）」

今は、今のことだけに集中しよう。

「全軍、突撃せよ！！」

＞pf＜

「ふっ、これであの人たちの役目も終わりですね。おかげで、太平妖術書にも随分と妖力が溜まりました。それではこれを持って私はこれで……」

あ、あ、あー、どこにいくんですか？

「！お前は……」

アハハ、久しぶりですよ、干吉。

「どうしてあなたがここに…この外史の北郷一刀の監督をしていたはずでは？」

まあ、色々あったのですよ。ところで干吉。悪いですけどその太平

妖術書は、まだこの外史に居なければなりません。正確には、僕の手に。

「なっ！……ふん、何を言い出すのかと思ったら、あなたも北郷一刀に狂ってしまったのですか？」

狂ったのはあなたでしょう？貂蝉よりもあなたの方がキモいですよ。ホモ市ね。

「ふん、何と言おうとも、これはやりませんよ。それに、あなたにこれを扱う術もないはずです」

僕を侮ったら困りますよ？それに、あなたはそれを僕にわたさなければならないのです。

これを見よ！！

「……！！それは！」

いかにも！

これぞ、その太平妖術書の本当の主、南華老仙（南ちゃん）からもらった太平妖術書を使ってもいいとの許可書なのです！！

ざまぁみろなのです！

「くっ…！あの爺…気まぐれなことをしてくれましたね」

老いた人たちの気分なんてそんなもんでしょ

「ふん、一体どんな話で口説いたのですか？」

……そ、そんなことはどうでもいいです！とにかく、太平妖術書はこっちがもらっていきます！

「……まあ、詳しい話は、帰って爺に聞けば分かるでしょう。だけど、もしその許可書とやらが嘘だった場合…分かっていますね？」

あなたにそんなこと言われても怖くもないです。さあ、早く。

「ちっ……仕方ないですね」

そう言いながら干吉は、太平妖術書を僕に投げました。

おっとと……

本は大事に扱いましょうよ。

って、もういないのですか。

まあ、いいでしょう。
こっちは必要なものをもらいましたし、
あっちが気付くのも時間の問題。

となれば、早く探さなければなりませんね……

幸い、干吉の言うとおり妖力はたくさん溜まっていますから。

・・・

・　・・

その後、一刀ちゃんが矢を使うこともなく、戦争は安全簡単に終わりました。

張三姉妹も華琳さんのスポンサー付きで、今後魏の徴兵仕事に手を貸してくれるようになりますが、

この後の話は、いつもの拠点話でしようかと思います。

九獣（後書き）

自分が覚えてる限り、張三姉妹の出番はこの次の拠点フェイズで最初で最後です。
要望があったら増やしますが、基本作者は魏で稟、霞、紗和、張三姉妹は苦手です。
特にこの外史だと紗和の唯一な特徴と言える罵倒ができないのが辛いです。

拠点フェイズ５　張三姉妹黙（前書き）

大変遅れてしまいました。
最後のはただのフラグです。そっとしてあげてください。

※お気に入り人の数が１００を越えました。ありがとうございます。

拠点フェイズ5　張三姉妹黙

私の名前は張梁。真名は人和。
私たちの歌を聞きながら集まった人たちが、大陸を轟かす大きな集団となって数ヶ月。
あまりの大きさで、下手して動くこともできずに、城一つに篭っていたところで、食料や飲む水もない状態でありました。
そんな中で私たちを攻めてきた曹操の部隊。私は前から考えていた通り、姉さんたちと一緒にここから逃げて最初からやり直そうと思っていました。
だけど…

「私は曹操さまの武将、楽進。大人しく付いて来たら悪いようにはしません」

どうやら私たちが犯した罪は、それほど軽いものではなかったみたいです。

＞ｐｆ＜

「あなたたちが張三姉妹？」

私たちが楽進という武将に捕まって連れて行かれた先には、この軍の大将らしき者がいました。
この人が、曹操……

「そ、そうよ！悪い？」

姉さん、今はそんなに偉そうにしてもいいところじゃないの。
下手したら、この場で私たちの口は胴体から離れるのよ！

「貴様！華琳さまに何と言う無礼な……」
「やめなさい、春蘭」

早速武将の中の一人が出てきようとしたが、曹操さんが止めたので
そのまま下がりました。
でも、どの道このままだと……

「あなたたちの……うん」

？

そこに、曹操の手を引っ張る一人の男の子がいた。

「……分かったわ。分かったからもうしつこく言わないの」

一瞬だけ、曹操さんがあの子に優しい声でそう言っていた。
……息子？

「ああ、あの子！」
「？ちーちゃん、どうしたの？」
「お姉ちゃん、あの子覚えてないの？ほら、私たちがまだただの芸人やってた時に」
「うーん…？……ああ、あの時、毎日私たちの歌を聞きに来てくれた子だね」
「♪！」『覚えててくれたの？』
「当たり前じゃない。あの時毎日私たちの歌を聞いてくれたのはあ

なただけだから」

ああ、そういえば、確かに陳留に居た時、子供一人が毎日私たちのところに来て歌を聞いてたっけ。
まさか曹操の息子さんだったとはね。

「秋蘭、一刀を連れて行って頂戴」
「御意、北郷」
「……」『じゃねぇ＞＞ノシ＜＜』

あの子は（一刀という名前のような）私たちに手を振って、他の武将と一緒に去ってしまいました。

「バイバーイ」

天和姉さんが暢気に手を振っていましたけど、といっても状況が変わるはずは……

「さて、一刀の追究もあったところだし、先ず明らかにしておくけれど、私たちは別にあなたたちを殺すつもりはないわ」

……え？

＞ｐｆ＜

その後、曹操さまが私たちに提案したのはこういう話でした。
私ちの歌を自分の治める地で自由に歌えるようにしてあげる。その代わり、私たちに自分たちの兵を集めることに使わせてもらるとの

こと。
金銭的なところはできるだけ保証するという話だったので、こちらとしては断ることもできなかったからそのまま条件を受け入れてしまいました。

そういうわけで、私たちは陳留に事務所を作って、そこを拠点として活動することになりましたけど、

これはまだそんな具体的なことが決まる前の話です。

・・・
・・
・

「ねー、れんほーちゃん、お姉ちゃんお腹空いた」
「そうよ。そろそろどっかで点心食べよう」
「はい、はい」

こんなお姉さんたちだから、いつも私がしっかりしなければならない、と思っています。
実際、私が財布を握っているわけですから、仕方ないといったら仕方ないのですけど。

とにかく、あまり贅沢もできない状況なので、どっか易そうなところに行きたいところですけど、ここは一度通り過ぎたぐらいだし、そんなに詳しくは知らないわけで……

「……＞＞ふらふら＜＜」
「うん？ねえ、ねえ、ちーちゃん、あそこにいるのって」
「ああ、一刀ちゃんじゃない。やっほー、一刀ちゃん」
「……！」

先に天和姉さんが一刀のことを見つけてちぃ姉さんが呼ぶ声を聞いて一刀ちゃんはこっちに来ました。

て、て、て

「……」『おはよう』
「おはよー、一刀。元気だった？」
「（こくっ）」『どこ行くの？』
「ちぃたちは今から点心。そうだ。ねえ、人和ちゃん、一刀ちゃんにいい店教えてもらおうよ」

そうね…一刀ならここのことは詳しいでしょうから。

「そうね。一刀君。よかったら一緒に食べない？」
「……（こくっ）」

何だか、すごく間を空いて肯定の意思を示して、一刀君は私たちの先に立って店に案内するのでした。

＞ｐｆ＜

『おばさん、おはよう』
「うん？ああ、御使い様じゃないかい、いらっしゃい」

「みつかい？何それ」
「彼は曹操軍で乱世を静めるという神託を得た天の御使いって名で通っているのよ」
「へー」

天和姉さんはあまり興味なさそうな返事をして、卓を一つ選んで座りました。

『シュウマイ二つと、麻婆豆腐と……』『お姉ちゃんたち特に食べないものある？』
「ちぃは杏仁豆腐にして」
「お姉ちゃんは、麻婆茄子」
『人和姉ちゃんは？』
「適当に決めて頂戴」

皆の返事を聞いて、一刀はまた振り向いて注文を続けました。
注文を終わらせた後、一刀ちゃんが私たちのところに来て座ったところ、天和姉さんが一刀に近づいては、

「ねぇ、一刀ってね、どうして言葉で言わないで文字で書いて話すの？」
「天和姉さん？！」

突然の失礼な質問に、一刀ちゃんの顔は一瞬固まったように見えましたけど、直ぐにいつもの顔になってちょっと苦笑しながら、

『昔ちょっと事故にあっちゃって、あの時の傷で喋れないんだって』
「そっか…」
「天和姉さん、あまり失礼になるようなことは言わないで頂戴。仮にもこの子は天の御使いだし、曹操さまも可愛がっている子だから

私たち……」
「私たち…？」
「こうよ」

私は手で首をサッと斬るようにしました。
それを見たちぃ姉さんの顔から血が去っていきます。

「……」『大丈夫、華琳お姉ちゃんそんなことしないって言ったから』
「いや、そういう問題じゃなくてね…」
「？？」

一刀がキョトンとした顔でこっちをみます。
……いや、こっちもあまり深く話さないようにしましょう。
あの時、曹操さまは私に言ったのです。

・・・
・・
・

「ああ、それと、さっきの子、一刀のことだけど、今回のあなたたちへの処遇はあの子の意見は別に関係はないわ。だけど……」
「？？」
「もしあの子に何一つでも害をなすことをしたら……」
「！！」

すごい威圧……

「あなたたちのその首、この場で落ちなかったことを後悔させてあげましょう」

気絶しちゃいそうに頭の中がくらくらする中で、私はやっと頷きました。

・

・・

・・・

その時分かったのです。

この子は、

この子を敵に回すことは、曹操さま本人を敵に回すこと。

いや、それよりももっと恐ろしいことだって。

「はぁ？、このしゅうまい美味しい！」

「♪」『ここのおばさんのシュウマイ美味しいよ。季衣お姉ちゃんもそう言ってた』

「ほんと？お姉ちゃんも食べさせて」

『はい、』

「あ～」

「って、お姉ちゃんずる～い。一刀ちゃん、ちぃにも食べさせてー」

「……」

はぁぁ……

＞pf＜

そんなこんなで、天和姉さんとちぃ姉さんはすっかり一刀君に馴染んで一緒にキャーキャーしながら点心を食べました。

「あー、美味しかった」
「うん、うん、すっごくおいしかったよ」

天和姉さんとちぃ姉さんは満足げな顔。

「……（じー）」

でも、姉さんたちの顔だけに集中していたら、ふと一刀君が私のことをじっと見ていることに気づきました。

「？どうしたの？」
「……」『ここの料理、口に合わなかった？』
「……え？」
『ずっと顔色がすぐれないから…あまり料理が気に入らなかったとかって』
「い、いえ、そんなことは……」
「……」『じゃあ、やっぱりボクがここにいるのが良くなかったのかな』

何でそうなるのよ。

「えー、そんなことないよ。お姉ちゃんは一刀のこと大好きだよー？」

「そうよ。一刀ちゃんのこと嫌いなわけないじゃない」
「……」
そして、三人の視線が皆私に向います。
え？何？悪いのって私？
「そんなことはないわ。あなたには感謝してるつもりだし、あなたに不満を表せるような立場でもない」
「……」
「もう、人和ちゃんったらそんなに固くいわなくてもいいじゃない」
「姉さんたちがあまり親しすぎるのよ。いい？この子は曹操さまに一番寵愛をうけてる子なんだか、下手なことするとどんな目にあうか分からないのよ」
「うーん……そーなの？」
「……？？」『何が？』
「……」
……
話が噛み合わないわね…
・・・
・・
・
＞ｐｆ＜
『お姉ちゃんたちって羨ましい』

「うん？どういうこと？」
『だって歌上手だから』
「あ…」

この子が私たちにこう近づくのってもしかして……

そうね。私たちには当たり前のような歌も、この子にとってはとても羨ましく見えるでしょうね。

「一刀は歌好き？」
『好き、お姉ちゃんたちの歌大好き』
「ほんと？」
「ふふーん、けど、一刀ちゃんが聞いてた昔の私たちの歌と今の私たちの歌じゃ段違いよ。あれから私たちも鍛えたんだから」
「……おぉ」
「聞きたい？聞きたい？」
「（こくっこくっ）」
「よーし、じゃあ、一刀のために頑張っちゃおうかな」

そうやって、お姉ちゃんたちは一刀の手を引っ張って先に走っていっちゃいました。

「ちょっと、どこに行くの？」
「ほーら、人和も早く！」

何をするつもりなのよ。

・・・
・・

・

「歌う？こんなところで…？」

天和姉さんとちぃ姉さんが来た場所は、私たちが陳留に居た時、毎日歌っていたあの場所でした。

「ほら、人和ちゃんも」

「あぁ……」

天和姉さんに手を引っ張られて、私はお姉ちゃんたちの側に立ちました。

私たちの前には一刀君が居て、すごくわくわくしてるような目でこちらを見ていました。

「それじゃあ、いくわよ」

「ほんとに、こんなところでするの？」

聞く人もないし、ちゃんとした舞台でもないのに？

「何言ってるのよ。昔はいつもこうだったじゃない」

「ちぃ姉さんは、こんなところで歌うの、嫌がってたじゃない」

「場所は…まあ嫌だけど、でも、一刀ちゃんが聞きたいのだったらいいかなぁって」

「そう、そう、どんなところでも、『たった一人でも』私たちの歌を楽しく聞いてくれる人がいたら、場所とかそんなの関係ないの」

「……」

「それじゃあ、いくよ」

「…ふぅ、しかたないわね」

私はため息をついて、位置に立ちました。

「一刀ちゃん、私たちの歌を聞いて」

そして、私たちの、観客一人の公演が始まりました。

♪

♪♪

♪♪♪

＞pf＜

「「「♪舞い上がれ夢、蝶ひらり～♪」」」

……

沈黙。

そして、

パチ

パチパチ

パチ

気がついていたら、周りの街の全員が私たちに向って拍手をしていました。

「すごーい！すごい！」
「大した歌だね。どこの人たちだろう」
「新しく来た芸人か？すごいじゃないか。旅してないでここで毎日歌を聞かせてほしいくらいだよ」

こうしてみると、私たちが本当にあの時より成長したって実感するわね。

「御使いお兄ちゃん！あの人たち誰？」
「兄さん、兄さん、あの人の揮毫（サイン）もらって？」

一刀君の周りには、いつの間にか街の子供たちが集まって私たちについて聞いていました。

『本当にすごくなったね』
「だから言ったじゃない、前の私たちとは段違いだって」
「こんな路上で歌ったら大変なことになりかねないけどね」

下手したらまた黄巾党の時みたいに変なファンたちが絡まって……

「張角さまぁー！！」
「！！？」
「まさか、張角さまがこんなところに……」

あれは、黄巾党で残った人？

「誰？」

「良かったです。これで、これでまた天下を目指すことができます。まだあなた様たちを従う人は山ほど残っています。さあ、どうか俺たちと一緒に……」
「いい加減にしなさいよ！ちぃたちはもうそんなことしないんだから！」
地和姉さんが叫びましたけど、相手はまったくわからないといいたそうな顔で、
「何を言っているのですか。さあ、俺と一緒に……っ！！」
その時、小石一つがあの男の頭に当たりました。
「っ！誰だ！」
「……」
「一刀君！？」
小石を投げたのは一刀でした。
「なんだ、お前は！子供はおうちに帰りな！」
『帰るのはお前だ！天和お姉ちゃんたちはもうお前らみたいな盗賊たちの手に乗らない。お前たちのためにお姉ちゃんたちを犠牲にするな！』
一刀君、危ない！
「あぁー、子供が知った口を言うんじゃない！俺たちは、純粋に我々の歌姫たちに、天下を捧げたいだけだ！」
『全部言い訳じゃない。実は自分たちが暴れたいだけなくせに！』
「なんだとー？」

『お前らみたいな暴力を振り回す奴らがいなくても、お姉ちゃんたちは天下を取れる。歌で、歌だけで世界の皆を感動させる歌を歌えるんだよ！』

「っっ！！子供の分際で知った口ぶりを……！」

「ちょっと、やめなさい！」

私たちが聞くのも聞かずに、黄巾党の残党の男は一刀君に近づいた。

「ガキは黙ってろ！」

「……！！」

「はあああああああっ！！！！」

その時、

「ふぐぉっ！」

ドガーン！！

凄い勢いで飛ばされて私たちの後ろにあった壁を穴を作ったのはあの男のほうだった。

「一刀になんという真似を……！」

「！！」

それは、前には私たちを曹操さまに連れてきた楽進、凪だった。

「一刀、大丈夫か？」

『凪お姉ちゃん！うん、大丈夫』

「よかった……なんか、この辺りが騒がしくなったから何か起きた

のかと思ってきてみれば……」
「あ……」
「…あの、お姉さん、やっぱり、ちぃたちがこんなところで歌ったのがまずかったかな……」
「うーん……」

そう、もう私たちは、こんなところで平気に歌を歌っていていい身じゃなかった。
仮にもあの大陸を恐怖に陥った黄巾党の党魁だったのだから。

「はぁ、はぁ……凪ちゃん、早すぎるの」
「って、ああ、また派手に壁壊しちゃったじゃねぇか。直すの誰やと思ってんや」
「あ、……ごめん、真桜」

後に他の警備隊の人たちも来たけど、先に凪にぶっ飛ばされた男は、もう再起不能になっていました。

＞ｐｆ＜

「ごめんね、一刀ちゃん、ちぃたちのせいでひどい目にあっちゃって」
「？？」

後で、地和姉さんが謝ったら、一刀君はわけわからないといいたそうな顔で私たちを見ました。

「……」『歌、楽しかったよ』
「でも、私たちの歌のせいで一刀ちゃんが……」
『歌うことに罪はないよ。間違ってるのは歌を聞いて馬鹿騒ぎする

人たちの方。だから、地和お姉ちゃんがボクに謝る理由なんてない』
「一刀ちゃん……」
歌うことに罪はない……か。
私たちの歌のせいであんなことにまでなってたのに、
あれは、私たちのせいじゃない？
……ううん、そんなことはない。あれは、確かに私たちのせいだった。
私たちがあんなことしてなければ、あんな悲惨なことにはならなかった。
「ねえ、人和ちゃん、どうしたの？今日は何かいつもよりも難しい顔」
「天和お姉さん……」
そしていたら、天和姉さんが私に声をかけました。
「ほら、笑って笑って。人和ちゃんも地和ちゃんも。楽しく歌ったじゃない。一刀ちゃんも皆も喜んでくれたんだし。なーんにも問題ないよ」
『そうだよ。皆楽しくお姉ちゃんたちの歌聞いたんだから』
「……」
…ああ、分かった。
この子、天和姉さんみたいに暢気な性格ね。
『それよりね、先歌聞いた子供たちが、今度も歌聞かせてってお願いしてたんだけど…良かったらまた』

「ダメよ」

私は一言で断りました。

「えー、どうしてダメなの？」

「天和姉さんはあんな騒ぎを起こしても分からないの？あんなところでまた歌って、また黄巾党の残党たちが暴れたら、その時は今回みたいにただでは終わらないわ。その時は、曹操さまも仕方なく私たちの討伐することになるの」

「えー、つまんなーい」

「……」

うっ、何か、一刀君はすごく残念そうにこっちを見てるのだけど。

「まあ、後でちゃんとした舞台で歌うようになったら一番前の切符を残して置くぐらいならできるんだけど」

「（パァーッ）」『本当？』

「そうよ、後でこーんなに大きい舞台で、たくさんの人たちがいるところで歌うのが、ちぃたちも目標だから」

「そう、そう。そうなったら、一刀ちゃんや街の子たちの皆は私たちが一番良く見えるところで、私たちのこと応援してね」

「（こくっこくっ）」

一刀君が勢いよく頷いたら、何か地和姉さんと天和姉さんはみなぎってきたみたいです。

「よーし、目指せ！歌で天下統一！おー！」

「おー！」

「……」『おー！』

「「「……」」」

え、何？私もやるの？

「お、おー」
「声小さい！もう一度、おー！」
「おー！」
『おー！！』
「おー！！！」

＞pf＜

それと、これは後で一刀君を城に戻したた時に曹操さまから聞いた話です。

「凪たちから聞いたわ。随分と大変なことになっていたようね」
「…はい、申し訳ありません」
「何あなたが謝っているのよ」
「……え？」

そして、ふと気付けば、華琳さんはすごい言葉私に言ってました。

「ごめんなさい」
「……え？」

なんで、どうしてそっちから謝りを…？

「あの子、…一刀の母親はどっかの無名な歌い手だったようよ」

「…一刀のお母さんが？」
「ええ、一刀を産んでからは舞台に出ることができなくなって一刀の面倒ばかりみていたけれど、その時、一刀のお母さんは良く歌を歌ってあげたみたい」
「……だから、そんなに私たちの歌を…」
「多分、あなたたちの歌からお母さんとの昔の思い出を考えていたのでしょうよ」

それであんなに私たちの歌が好きって言ってたんだ。

「でも、今回はあまり出すぎた真似だった。…あの黄巾党の残党を突き詰めて、後で残党たちがいる場所を攻めるつもりよ」
「……」
「これからはあの子が無茶なことを言っても断って頂戴。思い出もいいけれど、あの子をまたあんな危険に晒せたくはないから……」
「…はい」

・・・
・・
・

拠点フェイズ5　張三姉妹黙（後書き）

＞pf＜

裏話

一方、五丈原、長安

はぁ…

はぁ……

はぁ……

こんなところに……（はぁ）……いたなんて……

まさかこんな……

ああ、どうしてこうなってしまったのですか……

ごめんなさい、もう動けなくなったその体、僕に貸してください……

あの子のために……

・・・
・・
・

拠点フェイズ5　華琳・春蘭・秋蘭黙（闇）（前書き）

今回は……なんともひでえ話です。
恐らく、これを書いてた時作者本人が酔っていたのではないかと思われます。

拠点フェイズ5　華琳・春蘭・秋蘭黙（闇）

私の名前は夏侯淵、字は妙才、真名は秋蘭。

今私の前に繰り広げられている場面を簡潔に説明すると……

「ふふーん、さあ、一刀、早くこっちへ来なさい」
「！！……！！」『秋蘭お姉ちゃん助けてー』
「……ぁぁ…」
『秋蘭おねえちゃーん！』

……いや、簡潔に説明するのは無理がある。

話は張三姉妹を捕獲して陳留に帰ってきた頃に遡る

＞ｐｆ＜

「もう直ぐで到着するわね」
「……」

帰ってくる道で、北郷はずっと焦って周りを見回していた。
まるで他の人には見えない何かを探しているように。
華琳さまの話に反応せず、一刀ちゃんはずっとそうしていた。

「…北郷」
「！」

私は北郷の肩に手をつけた時、北郷はやっと私たちの方をみた。

「どうしたのだ、北郷？」

「……（にぱっ）」『何でもない。ちょっと疲れちゃっただけ』

最初は反応に迷った北郷は、直ぐにいつもの笑顔になってそう答えた。

「大丈夫なの？」

『大丈夫だよ。華琳お姉ちゃんは？』

「そう、今日は祝い事もあるし、私は春蘭と秋蘭と一緒に寝るつもりよ」

「…」『そ、そうなんだ。じゃあ、ボクは先に寝る』

ところで今更の話だが、北郷は華琳さまが私や姉者と「一緒に寝る」という言葉の意味を理解しているのだろうか。

「凪たちに行ったらどうかしら。あの子たちには賞金もあげたし、行ったら一緒に楽しめるでしょうよ」

「……（こくっ）」

ここまでは何の問題もなかったのだが……

・・・

・・

・

「それじゃあ、話は以上だ。との仰いなのです」
「…お腹空いた」

「……」

朝廷から（呼んでもないのに）官位を与えに来た何進の名代の連中のせいで、奴らが御殿から消えた後でも、華琳さまは無言のまま重い空気が続いた。
誰が見てもご立腹なお顔で…誰が髪一本触っただけ、いや近づいただけでも爆発しそうなご様子であった。

「……」
「……」
「……」
「……」
「「「……」」」

その中、全員の目が北郷に向ったことは、ある意味必然でもあったが、
子供にはあまりにもひどい思いだったかもしれない。

そして

「話し掛けないで！」
「ひぅっ！！」
「悪いけど、今声掛けられたらそのまま斬り殺してしまいそうなのよ……すこし黙っていて」

「華琳さま……」

うまいことを言うつもりはないですが、北郷が話をかけたことはありません。
それと、震えています。脚から力が抜けてしりもちついています。

「春蘭、秋蘭！閨に戻るわよ！気分がわるいったらありはしない！
今日は朝まで呑み直すわよ！」
「はっ！」
「……はっ」

やれやれ……
後は凪たちに任せるしかないか。

＞ｐｆ＜

「……（こく、こく…）あぁっ！！あの肉屋……！」
「か、華琳さま、そんなにかぶかぶって呑まれると今朝……」
「今朝のことなんて考えてたらつぶれるほど呑めないわよ」

その後華琳さまは、それはもうすごい勢いで酒の樽を干していった。
酒に弱いというわけではないものの、あんなに呑み干しなさるほど強くもない。
あんな調子では春蘭さまでなければ心配になる。

が、今の私にもっと心配なのは……

「華琳さま」

「何、秋蘭。あなたも呑みなさい」
「あ、は……」
いや……私も少し呑んでからでなければ言えそうにない。
・・・
・・
・
酒の樽が二つ目までなくなってたところだった。
「…華琳さま」
「何かしら、秋蘭。先から言いたいことがあったようだけれど……酔わなければいえない話だったのかしら？」
「そんにゃはぁ……われわりぇたちが、華琳しゃまにいえないことがあるはじゅがありましぇーへん」
姉者は既につぶれていた。
ああ、ああなってしまった姉者はかわいいな……
っと、今はそういうところではなかったな……
「実は、先の一刀のことですが……あれは少しやりすぎたのではありませんか」
カーン
その時、華琳さまが持っていた杯が床に落ちて散り散りになってし

まった。

「……しゅう、らん？」

「はっ」

「わたし……あまりくわしく覚えてないのだけど……あのとき一刀って」

「泣いていました」

カーン！

「か、かりんしゃま！？」

今回の音は、華琳さまが自分の頭を卓にぶつける音だった。

「そ、その後は…？」

「私はそのまま華琳さまの後を付いた故に詳しいことは……」

「……」

恐らく、華琳さまは今己のことを責められているのだろう。

だけど、実のことを言うとあの場で一刀を促した我々も同じほどの罪人だ。

……今夜はもっと酒が要りそうだ。

＞ｐｆ＜

「なんでーあの時私に触れるのよー！いくら一刀だといってもそれほどの空気の読めさ加減はあるでしょ！？」

自ら一刀にどれほどの衝撃を与えたか自覚なさった華琳さまは、その後ずっとそんなことを言いながら先よりも遥かに早い速度で酒を飲み干しておられた。
それが自分への罰だったのか、それともただ酒につぶれて忘れてしまいたかっただけだったのか、同じく呑む速度を上げた私には分かるほどの理性が残っていなかった。

だけど、これだけは言えた。
この場に北郷がいなくて本当によかった。
もし、北郷がここにいたら、華琳さまも私も、きっと暴走する。
何をどうするかって？
ふふっ、酔っ払った人に聞いても何の意味もないというものだ。

がらり

その時、突然戸を引く音がした。

「！誰だ！」

「……／／／／／／」
「ほ、北郷？！」
「一刀？」

ほんと、この子は私の字＜妙才＞に向いてる。

「……／／／／／／」
「か……かず、と？」

先言ったと思うが、もしここに北郷がいたら華琳さまは暴走なさる

だろう。
ここに北郷がいなくて本当によかった。

……

あ、そういえば、今ここには北郷がいる。
ということは……

「かずとーー！！」

華琳さまが暴走し始めた。

＞ｐｆ＜

「かずとー！」

華琳さまはいっぺんに北郷に駆け抜き、抱きついた。
いつもなら突然の行動に慌てる北郷だが何故か今は静かだ。

「ごめんね、ごめんね、一刀。おねえちゃんが悪かったよー」
「ぶーっ！！」

今の音は、姉者が華琳さまが自分のことを「おねえちゃん」と言いながら北郷の顔に自分の頬をすりすりさせるのを見て、鼻血を出して気絶したのである。
あのまま朝まで起きないだろう。というか起きるな、まぎらわしい。

でも、そこで予想以上のことが起きた。

「……／／／／／＞＞ぎゅー＜＜」
「！！」

そしたら、北郷もまた華琳さまの首に両手を絡まって抱きつくのであった。

「ぅぅん……／／／／／／」

その時、私は気付いた。

ああ、北郷、この子も酔っ払っている。どっかで誰に酒を呑まれたのかは知らないけど酔っ払っている。

こんな光景はそう簡単に見れる場面ではなかった。

あの厳格な華琳さまが酔っている。酒を飲むはずがない北郷が酔っている。

滅多にあるはずがないこの二つの事件が同時に起こっていた。こんな場面をまたいつ見れるか、いや、もしかすると、これが最初で最後になるかもしれない。

と思っているところでも、北郷は華琳さまの膝に乗って、首を絡んで子動物のように首筋に頬を擦り付けていた。

「ちょっ、一刀、そこは……」

「……＞＞ちゅー＜＜」

「はぅん！？」

吸っていた。

首筋にただすりすりしているかと思ったら、いつの間にか首筋に口を付けてちゅーちゅーって、まるで吸血鬼かのように、華琳さまの首筋を吸っていた。

先華琳さまを抜けて先に北郷を抱いていなかった自分を憎みたいほど羨ましかった。

「か、華琳さま、大丈夫ですか？不便でしたら私が代わりに……」
「い、いえ……だいじょ、ぶ…よ……」

さらりと言ってみたがダメだった。
北郷の方を見たが、ちっともこっちを向いてくれない。
どうやら酒のせいで退行しているようだ。華琳さまに抱きついたまま離れることもなく頬を擦り付けたり首や肩をすったりしている。

「＞＞ちゅーーーーー＜＜」
「はうん！」

こういったらなんだかいやらしく聞こえるかも知れないが、
華琳さまは完全に北郷に弄ばれていた。

「かずと、もう、それ、やめて、ゆるしてー」
「＞＞チューーーーー＜＜」
「あはーん？」

そして、（ピーーーーーー）

（※ＴＩＮＡＭＩだとここにニコニコ動画の削除動画のサムネに入る『視聴できません』の絵が立ちます）

どうも、さっちゃんです。
本日は黙々・恋姫無双をご覧になってくださって、ありがとうございます。

大変申し訳ありませんがこの先の秋蘭さんの解説は、この外史の趣旨を考えて大変不適切な表現を多量含めていたため、管理者の権限をもって削除しました。
これからも黙々・恋姫無双は一刀の純粋なかわいさを見せることを目標として頑張りたいと思いますので、どうか温かい目で見守ってください。

音楽　ＦＵＵさん

＞ｐｆ＜

そして、本日の朝
現在に至る。

『秋蘭お姉ちゃん助けてー』
「……ぁぁ…」

まだ二日酔いが……

『お姉ちゃーん』
「おねえちゃんならここにいるわよ、かずとー？」

華琳さまは、まだ二日酔いとかそういう以前の問題であった。

「……ふがふが」

とにかく、姉者は可愛かった。

拠点フェイズ5　華琳・春蘭・秋蘭黙（闇）（後書き）

この外史はとても健全な外史の進み方を目指してます（キリッ

拠点フェイズ5　桂花黙（前書き）

ひたすら攻めるのが基本です。

荀?、字は文若、真名は桂花。
……こっち見てるんじゃないわよ、妊娠するでしょ?
息もしないで聞きなさいよ。まったく……

皆が寝てる頃、私の部屋の部屋にはまだ灯りがついてあったわ。

カキカキカキ

「……」
「……」

カキカキカキ

「……」
「……」

カキカキカキ

「……」
「……」
「一応は聞いてあげるわ。あんた、何故ここにいるの?」
「……」『寝かせてください』
「私は今日仕事がありすぎて徹夜するって言ったよね」
『一緒に徹夜させてください』
「あんた…何考えてるのよ。馬鹿なこと言ってないで華琳さまか秋

蘭にでも行きなさいよ」
「……（うるうる）」『どっちもヤー』
「いや、泣いて言われても…」

一体何があったのよ。

「…だ、だったら自分の部屋で寝なさいよ。最近はよくそうしたでしょう？」
『……部屋に行っても襲われる＞＞カタカタブルブル＜＜』

何に！？何で！？

＞ｐｆ＜

「はあ…わかったわよ。私は今日徹夜するのだから灯りは消さないけど、それでもここで寝るのだったら私の布団で寝なさい」
「……（ｃｋ…）！」
「な、何よ」
「……」『ボク桂花お姉ちゃんの布団で寝るのって初めて』

それを言う北郷の顔は赤くなっていたわ。
って、何赤くしてるのよ！

「だ、だから何よ？私だってあなたを私のベットに入らせたくないわよ！後で布団と枕丸っきり交換しておくから」
『もうだったら床で寝なさい！とか言わないんだね』
「なっ！」
「……（にぱぁ）」

何なのよこの子は！

「もう、そんなに床がよかったら床で寝たらいいじゃない！」

そしたら北郷はは逃げるように私の布団に潜り込んでしまいました。

どうして私がこんな目にあわなきゃならないのよ……

＞ｐｆ＜

文句言っていても仕事は進まないし、もう無視しましょう。

今日は机の前で寝るので決定ね。

もぞもぞ

「……」

もぞもぞ

「……っ」

もぞもぞ

ああ、もう！

「先からもぞもぞうるっさいわよ！何やってるのよ！」

私がキレて布団の方を見たら布団を体に丸く巻いたあいつと目があった。

「……何してるのよ」

「……」

そう言われたあいつは巻いていた布団を解いて大人しく寝る「ふり」をしたわ。

「私忙しいんだから、邪魔しないで頂戴」

「……」

返事はなく、ただわざとらしい寝息が聞こえるだけ。

まったく、中に入らせるんじゃなかったわよ。余計に気になるだけじゃない。

何が襲われるよ。

……

……

で、あの子本当に先何やってたのよ。

私は行って奴が寝ている布団を開いてみたわ。

そしたら、

「……？」

「…あんた、なんで寝る姿勢はそうなのよ。寝起きわるいわよ」

「……」

あいつは広い布団の中なのにまるで狭いところに自分をくちゃくちゃにして詰め込むように両膝を抱いて頭を伏せたかっこをしていた。

「……」

「いいから体ちゃんとして寝なさい。あとで肩凝るわよ？」

「……」

そういわれてちゃんと姿勢を直して横になったけど、何か視線は私に向いてる。

無視して仕事続けよう。

＞pf＜

カキカキ

「……」

カキカキ

「……」

「……っ」

見てる。絶対見てる。視線を感じる。

後ろ向いたらあいつ絶対こっち見てる。

何これ、いじめなの？私にどうしろっていうのよ。

静かに寝ていれば済む話でしょう？

「あんた、灯りあると眠れないの？」

仕方なく振り向いて聞く。

「（ふるふる）」

「じゃあ、早く寝なさいよ」
「……」
ちょっと、寝なさいって言ったのに何でおきてこっち来るのよ。
布団引きずって来るんじゃないわよ。
「なっ！ちょっとあんた何やってるのよ！」
「……」
何をするのかって思ったら、布団を引きずって私が座っている椅子に頭をもたれて、布団はまるで山で遭難した人みたいにくるくる巻いて目を閉じようとした。
「ちょっと、何で私が布団譲ったと思うのよ！しかもこっちくるんじゃないわよ。仕事に邪魔よ！邪魔！」
「……」
そしたら、北郷は分かったかのように布団を持って帰るのかと思ったら、布団だけおいといてまた来て同じ姿勢に……
「誰が布団が邪魔だと言ってるの！？あんたがそこで寝るのが邪魔だって言ってるのよ！しかもそんなに寝たら風邪引くじゃないの！ばかなの？死ぬの？」
「……」『仕事いつ終わる？』
「あんたが邪魔しなければもうとっくに終わってるわよ！」
「……」『じゃあ、邪魔しないから終わったら一緒に寝て』
「っ……何なのよあんた」
実は、後一刻はしないとならないのに、この子、それまで待つとでも言うの？

「……」『横に誰かいないと不安なの』
「何が不安なのよ。あんた最近は一人でも寝るでしょう？」
『それは……』

北郷はそこで何が話しにくいのかしばらく何も書かずに黙ってこっちを見ていた。
そしてしばらく何もしないのかと思ったら……

「ぅ……ぅぇ」
「ええ！？」

ちょっと、何泣いてるんだよ！

「ちょっと、泣かないでよ！泣きたいのはこっちの方なのよ！」
「ふぇぇ……」
「ああ、もう！」

私にどうしろって言うのよ！

・・・
・・
・

＞pf＜

「……落ち着いた？」
「……（こくっ）」
「…じゃあ、私仕事に戻るわよ」
「…！（ふるふる）＞＞ぎゅーー＜＜」

布団から出ようとしたら、あいつは絶対ダメっていいたそうに私の腕を抱いて放してくれなかった。

「あなた、華琳さまや秋蘭のところでもいつもこんなに我儘言うの？」
「……（ふるふる）」
「じゃあ、何で私にだけこうするのよ」
「……（うるうる）＞＞ぎゅう＜＜」

何なのよ、もう……

仕事は諦めて明日やるしかなさそうね。急ぎのものだけど、華琳さまにはこいつを盾に出せばなんとかなるでしょうし。

「わかったわよ。灯り消してくるからちょっと放しなさい」
「……（ふるふる）」

どうしろっていうのよ。

「使いもしない灯りなんとついておくほど私は贅沢じゃないんだけど？」
「……」

そしたら、もぞもぞとしながら、私の腕は掴んだまま一緒に布団から出てくる北郷。

絶対腕だけは放さないつもりらしい。

・・・

・・

・

「ちょっと、あまり近づかないでよ」

「…」

布団の中でちょっと近づきるんじゃないかって思うぐらいこっちに向いてくるから一言言った。

そしたら少し放れる。手は掴んだまま。

「……」

両手で私の手を掴んで顔に近づける。

ああして犬みたいにがぶっとするんじゃないかってちょっと怖い。

「……すー」

だけど、そんなことはなく、北郷は私の手をぎゅって掴んだまま眠ってしまった。

こっそり手を放そうなんてできそうもない。諦めて側で寝るしかない。

「……ねえ、あんたは何で私にだけはこう無理矢理してくるのよ」

「……すー……すー」

「…ああ、もう知らないわよ、私も」

もう寝ちゃおう。仕事もパーになっちゃったし、こんな夜に起きてるなんて損しかないわ。

・・・

・・

・

拠点フェイズ5　桂花黙（後書き）

＞pf＜

……あぁ……

…はぁ……

かずと……ちゃん……だいじょうぶかな

僕のことといなくて…心配してるかな……

…あ〝あ〝ぁぁ……

痛い……いたい……イタイよ……

かずとちゃん……僕も頑張るから、一刀ちゃんも……待っていて

……

――あら、あら、お困りのようで。

！！

あなたは……！

……あぁ！！

――うふふっ、いけませんわよ。入魂死者之体の術を使っている時には雑な考えは禁物です。

……はぁ……僕を、どうするつもり？

――いやですわ。わたくしめがあなたにわるいことをしたことがありましたか？

それは……あなたのほうがよくしってるで、くはぁぁ！

――あらあら、だからいけないと言っていますのに……相変わらずいけない子ですわね。

……はぁぁ〝ぁ〝……勝手にほざけてろ…僕は……あなたが嫌い。

――それは残念、わたくしはあなたのことをこんなに愛してますのに……ずいぶんと美しい体になりましたこと

ふざけるな。あなたに見えないはずがない。この体の主の苦しさが、悲しみが……僕は今骨にしびれるほど感じてるけど、あなたの目はそれを見抜く。あなたが好きでも嫌でも…

――かわいそうな人ですこと。そうですわ。あなたがいない間、私が「あの子」の面倒を見てあげましょうか？

あの子に何をするつもりだ……！

――そう警戒なさらなくてもよろしいですのに…わたくしめは悲しいですわ。

……（ぶるぶる）さっさと消えろ……

――……よろしいでしょう。あなたのお望み通り、ここは大人しく退いてあげますわ。だけど、本当にそれがあの子のためだと思いますか？

何を……

――泣いていますわ

！？

――わたくしめには見えます。あなたから見捨てられたと思い、心の中から泣いているあの子の姿が……ああ、なんと残酷な人ですこと。

……かずとちゃん……

――だけど、わたくしめはそんなあなたこそ好きですわ。残酷で、冷酷な姿ことはあなたの真のすがた……

失せろおおお！！！！！！！！！

――うふふふっ……

一刀ちゃん……今泣いてる？

僕が……僕のせいなの？

僕が間違っているの……？

……いたい……いたい……

体が…心が……痛くて……死にたいぐらい痛い……

これが……生きてるってこと？

あなたも……いつもこんな感覚を感じながら…それでもあんなに笑っているの？

……かずと…ちゃん……

拠点フェイズ5　流琉黙（前書き）

この辺りから拠点がなくなってきたので、あげる際に少しずつ追加して行くつもりでいます。

今回の拠点はこれで最後ですが…この後凄いのが待っていたはず…

拠点フェイズ5　流琉黙

こんにちは。
私は典韋って言います。真名は、流琉。

今私は、陳留にいるという友たちの手紙をもらって、その友たちを会いに陳留に来ました。
でも居る場所が分からなくて……とにかく、あるお店で働きながら友たちが来るのを待っています。
料理が得意でして、料理店でお料理を作っています。
私の料理が気に入ってくれて、毎日ここに点心を食べに来てくれてる方々も多いです。

それにしても、陳留は本当にすごいところですね。都から近いこともありますけれど、こんなに人が沢山歩いているだなんて……
まあ、私も黄巾党が討伐された後、この辺りが安全になったとしてまた商売を始めた大商団と一緒にここに来たわけですけど、ここのにぎやかさはすごいです。まるで戦乱なんてまるでなかったのような活発さです。
聞く話だと、ここの州牧の曹操さんが黄巾党の党魁がある本拠地を壊滅させたそうです。曹操さんってすごいですね。

カラーン

「いらっしゃーい！」
「……」

「はい、はい、典韋ちゃん、いつもの子供炒飯一つお願い」
「あ、はい！」

最近ここによく来る子供です。
子供炒飯という献立は実はありません。
でも、あの子はどうやら小腹のようでして、それでも最初は私が作った炒飯を全部食べたそうです。
それから三日ぐらい後にまた現れて、どこに行ってたのかと店のおじさんが聞いたらあの時食べたのが過食してずっと倒れていたそうです。

その後からは、あの子がここにお昼を食べに来ると、いつも他のより少なめに作っています。
謂わば、あの子専用の献立です。

＞ｐｆ＜

「子供炒飯できましたー！」
「あー、典韋ちゃん今ちょっと手がないから典韋ちゃんが持って行ってくれるか？」
「はい」

どうやら外がお忙しいみたいで、私が炒飯の皿を持って厨房の外に出ました。

「はい、子供炒飯できたよ」
「……（にこっ）」『ありがとう、お姉ちゃん』

この子はどうやら言葉は言えないみたいで、話す時はいつも字を書いてします。

字を書くのが凄くキレイで、服とかもすごくキラキラしていたなんか神秘感がある服です。
どう考えてもこんなところでご飯食べるようには見えない子なのに、どうしていつも一人でここに来るのでしょうか。

「……＞＞もぐもぐ＜＜（ぱぁー）」

後、本人に言うと失礼かも知れませんが、食べてる時にすごくかわいいです。

「おいしい？」
「（こくっこくっ）」

精一杯に頭を頷いてくれるのがまたかわいいです。

でも、やっぱり気になります。
お客さんにあまりあれこれ聞くのはよくないと思いつつも、今日はせっかく顔を会わせましたし、聞いてみようと思います。

「あのね、あなたは何でいつも一人で来るの？お母さんは一緒にじゃないの？」
「……」

あ、いけなかったみたいです。
それを聞いたその子は、直ぐに蓮華を下ろして顔を俯いて黙り込んでしまいました。

「ご、ごめんね！変なこと聞いちゃって。今のは聞かなかったことに……」

『お母さんはもういない』
「あ……」
「……」『でも大丈夫だよ、代わりに…といったらおかしいけど、お姉ちゃんたちがたくさんできたから』
「……」

本人はそう答えましたけど、私は本当に聞いちゃいけないことを聞いてしまった気がして仕方ありませんでした。

＞pf＜

その翌日、あの子はいつもの来る時間に来ませんでした。

「今日はあの子、来ませんね」
「まあな、あんなに長く来る方が大変よ。あまり長いと何が起こるか分からないし」
「え？何が起こるってどういうことですか？」
「うん？ああ、そういえば典韋ちゃんは知らなかったね。その子は天の御使いって言ってね。この辺りでは有名な子だよ」
「天の御使いって……じゃあ、すごく偉い人なんじゃ…」
「まあ、そうなんだけどね。いつもみたいに街にあっちこっちに歩いているのよ。一日街であの子が見当たらないと、心配した街の人たちの陳情書でお城の業務が麻痺するまで言うからね」

いくら天の御使いだとしても、一日街に出なかったせいで城が麻痺？！

「まさか……流石にそこまでは」
「いや、警備隊の人に聞いた話だから本当だろう」
「……」

私…なんだかとんでもないことしたんじゃないかって思ってきました。

「あの、天の御使いってことは、お城の奥の方に住んでいるんですか？」
「そうだな。曹操さまや他の武将たちと一緒に歩く時もたまたまあるし」
「曹操さまとですか？」
「ああ、曹操さまは男は側におかないことで有名だったのにな。その子にだけは側ですごく可愛がってるらしいな」
「そうなんですか……」

カラーン

「あ、お客さんが来たな。準備だ」
「あ、はい」

新しいお客さんが来て、おじさんとの雑談は終わらせて厨房に戻りました。

「いらっしゃいま……！！」
「ここが一刀が勧める店なの？」
「北郷、不味かったら容赦しないからな」
「まあ、そういうな姉者。せっかく北郷が奢るとまでしてきたのだから」
「どうせあんたは食っても何かも覚えてないでしょう」

「誰が言われたら三秒後に忘れる金魚脳みそだとー！！」
「春蘭さま、そこまで誰も言ってませんよ…」
「一刀、我々はまだ仕事が…」
「まあ、そういうなって凪」
「そーなの、こんな機会なんて滅多にいないのー」

何か、大勢でお客さんがきたみたいです。

「こ、これは……」
「この子がどうしてもここで皆で食べに来たいと言ってね。大勢に悪いけど、今日はここで点心を食べさせてもらうわ」
「は、はい！はい！光栄です！」

???

「炒飯大盛五つと麻婆豆腐五つにシュウマイ二つ、酢豚三つと青椒牛肉絲」
「はい！」

種類が多いですね。

「あ、後子供炒飯とな」
「はい！…はい？」

何で…？もしかして、あの大勢な人数って、あの子が連れてきたのかな。
とりあえず今は、料理に集中集中……

・・・

・・
・
＞pf＜
「典韋ちゃん」
たくさん来た注文の料理を出して、他の注文のものを作っていたら、おじさんが私を呼びました。
「はい」
「ちょっとこっちに来てくれるか。早く」
「はい……」
行ってみるとおじさんは何だかすごく緊張しているように見えました。
「どうしたんですか？」
「さ、先来たお客さま、いや、曹操さまが料理を作ったものに会いたいと言ってな」
「え？！曹操さま？！」
あの子が連れて来た人たちって、曹操さまたちだったんですか？！
「曹操さまはすごい美食家でな……普段はこんなところでお昼を食べるなどありえない話なんだけど……ああ、典韋ちゃん、頼むよ。俺もこの店を開けてまだ一ヶ月も経ってないんだ……」
「だ、大丈夫ですよ、おじさん……とりあえず、私が行ってきますから…ね？」

おじさんは頭を抱いて悲鳴をあげる寸前って感じになっていました。
実際、曹操さんがばったり料理店に入って、その後その店がつぶれたとかはそんなに珍しい話ではないらしいです。
評判とかが悪くなるわけではないのですが、どうやら料理師の心が折れてもう二度と料理ができなくなるとか……。

とにかく、行って見ましょう。

・・・
・・
・

「あ、あの……お呼びになさったと聞いて……」
「！（にこっ）」

外に出てみたら、大勢な人たちが三つの卓に分けて座っていて、その中で食べ終わっている二人用の卓がありました。一人はあの天の御使いという子と、その反対側にはクルクルな髪をしたすごく優しげな雰囲気を漂ってる人がいました。あの人が曹操さまのようです。

「ええ、あなたがこの料理を作ったの？」
「は、はい……その、何かお気に召さなかったところでもありましたか？」

先のおじさんの態度もあって、おそるおそる聞いてみます。

「そんなことはないわ。寧ろ礼を言っておきたくて呼んだのよ。すごく美味しかったわ」
「あ…」
え？
私、曹操さまに料理で褒められた？
「あ、ありがとうございます！！」
「一刀が私を連れてくるだけはあったわ。この子普段は私と一緒にお昼食べに外に行こうとなんて絶対言わないもの」
「……」『自信あったから。ここのお姉ちゃんの料理、とてもおいしいって』
「そうね、あなたがいきなり政務中の私の手を引き出した時は何があったのかと思ったけれど」
そこまで……
「……」『実はね、見せたかったんだ』
その子（天の御使いさまにその子っていっていいのかはこの際考えずに）はそう書いた竹簡を私に見えるように向けてました。
「え？」
『お姉ちゃんたち、たくさんいるって…だからボク、大丈夫』
「あ……」
あの時……
私が心配しそうだったから？

「それはそうと、せっかくだわ。美味しい料理を食べさせてくれたお礼代わりに、何か欲しいものがあったら言って見なさい」
「え？そんな……私なんかが」
あ、もしかしたら…
「遠慮することはないわ。有能な才を持つ者なら、それほどの自分の才に誇りをもってありがたく褒美をもらってもいいのよ」
「で、でしたら……実は私、ここにいる友たちの手紙をもらってきたのですけれど、その友たちの居場所が分からなくて、今しばらくここでずっといたんです」
「あら、そうなの。じゃあ、私がその子を探してあげようかしら」
「ありがとうございます！」
「それで？その子の名前は？」
「はい！名前は、許緒といいます！」
「……」
「……」
「背は私と同じぐらいで、凄く強くてえと……」
私が続けて季衣の特徴とかを説明していたら、
「え？」
「……（ふるふる）」
御使いさまが私の手首を掴んで首を左右にふりました。
「へっ？」

「もうそれ以上説明する必要がないってことよ」

曹操さまが頭に手をつけながらいいました。

「どういうことですか？」

「……季衣？」

その時、先まだ隣の席でずっと器を顔に被るようにして炒飯大盛を食べていて顔が見えなかった人の顔が見えました。

「にゃ？」

「……へ？」

・・・・・・

「「あああああああ！！！！！！」」

「はぁ……」

「……ぁぅ…」

「何よ！何でこんなところに居るのよ！！」

「何で怒るんだよ。ちゃんと城に来なさいって書いてたじゃない！！」

季衣の、

季衣の馬鹿ーーー！！！

ドーン！！

・・・

・・

・

＞pf＜

『華琳お姉ちゃん、あれ止めなくていい？』

ドーン！

「放っておきましょう。久しぶりに会ったのだし、ちょっと騒いだところで問題はないわ」

ドーン！

『……でも、食堂が大変なことになっちゅうよ』

ドーン！

「ああ、それは考えてなかったわね。今日の奢りは一刀だから、そこのところはよろしくね」

ドーン！

『……もしかして、修理費も全部？』

ドーン！

「当たり前でしょう？原因を言うとあなたのせいだし。ちゃんと責任取りなさい」

ドーン！

『……もう華琳お姉ちゃん、ご飯誘わない』

ドーン！

「なっ！冗談に決まってるでしょ！？ほんとに拗ねないで頂戴！春蘭、秋蘭！今直ぐあの二人を止めなさい！！」

「「はっ！！」」

ドーン！！

・・・

・・

・

拠点フェイズ5　流琉黙（後書き）

・
・
・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7403w/

黙々・恋姫†無双

2011年11月20日19時48分発行